



第33回

青少年指導者育成セミナー報告書

RYLA

Rotary Youth Leadership Awards

Seminar

*“ Building Communities
Bridging Continents ”*

地域を育み、大陸をつなぐ

2011年3月24日～27日

主催
国際ロータリー第2670・2680地区
RYLA運営委員会



到着



ようこそ余島へ

目次

RYLAセミナーの方針・ねらい	3
スケジュール	3

■ 1日目 ■

● 開講式

オリエンテーション

ディーン	徳梅 明彦	4
副ディーン	深見 邦芳	

東日本大震災犠牲者の方へ黙とう

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2680地区 ガバナー	柴田 整宏	5
国際ロータリー第2670地区 ガバナー	亀井 義弘	7

ごあいさつ

元RI青少年奉仕支援グループアジア担当エリアコーディネーター	海沼 美智子	10
元国際ロータリー理事・パストガバナー(2680地区) RYLAセミナー顧問	今井 鎮雄	12

来賓紹介

● オリエンテーション

講話「ロータリーがRYLAに期待するもの」

パストガバナー(2680地区) RYLAセミナー顧問	深川 純一	15
-------------------------------	-------	----

注意事項の説明	21
---------	----

● オープニングパーティー

RYLA小劇場「どのようにしてロータリーは生まれ、発展したか」	25
---------------------------------	----

● ロータリアンの夕べ

パストガバナー(2680地区) RYLAセミナー顧問	深川 純一	35
-------------------------------	-------	----

■ 2日目 ■

● 講義1「リーダーシップ」

(財)神戸都市問題研究所理事長・神戸ロータリークラブ会員 新野 幸次郎氏	48
---	----

- 講義2 「リーダーシップの心理学」
 関西学院大学名誉教授
 関西福祉科学大学教授 武田 建氏 69

- ロータリアンの夕べ「雑誌月間にちなんで」
 パストガバナー(2680地区)
 RYLAセミナー顧問 安平 和彦 83

■ 3日目 ■

- フォーラム「あなたはとなりの人を大事にしていますか？」
 — 私たちは、私たちの周りの人たちと
 どういう社会を創りあげようとしているのか? —
 フォーラムリーダー 深川 純一・安行 英文 89
- バズセッション報告 91
- フォーラムディスカッション 102
- カウンシルファイアー
 元国際ロータリー理事・パストガバナー(2680地区)
 RYLAセミナー顧問 今井 鎮雄 127

■ 4日目 ■

- 講義3 「未来を見つめよう」
 元国際ロータリー理事・パストガバナー(2680地区)
 RYLAセミナー顧問 今井 鎮雄 134
- 閉講式
 閉講のあいさつ
 パストガバナー(2670地区) 飯 忠悟 143
 パストガバナー(2680地区) 橋本 一豊 144

参加者感想文 146

受講生名簿 172

第33回RYLAセミナー運営委員会 174

RYLAセミナーの方針・ねらい

RYLAセミナーのねらいは、受講生の皆様に次のような5つの特色を味わってもらうことにあります。

- ① 高いレベルの講義と討論
- ② キャビンタイム（親睦の熟成）
- ③ 自由と自律
- ④ 余島の自然
- ⑤ カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれた余島で、今回のテーマである“リーダーシップ”を、講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

スケジュール

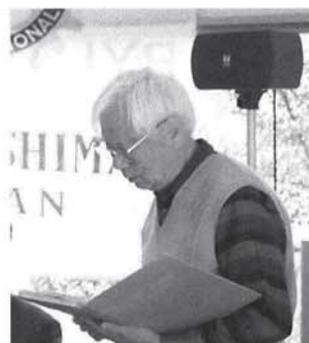
3月24日(木)			集合 (14:00)	開講式 オリエン テーション (15:00)	オープニング パーティー	キャビンタイム ロータリアンの夕べ												
3月25日(金)	朝食 (7:30)	講義-1 講師 新野 幸次郎氏 (9:30)	昼食	講義-2 講師 武田 建氏 (13:00)	レクリエーション ヨット、テニス、 ソフトボール、 アーチェリー、 カヌー、 自然観察など	夕食 バズセッション (Part 1) キャビンタイム ロータリアンの夕べ												
3月26日(土)	朝食 (7:30)	思索の時間 バスセッション (Part 2)	昼食	バス集約	フォーラム	夕食 カウンセラー ファイアー キャビンタイム												
3月27日(日)	朝食 (7:30)	講義 講師 今井 鎮雄氏 (9:00)	閉講式 (11:30) 昼食 離島															
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24

13:00

オリエンテーション

ディーン 徳梅 明彦 (あわじ中央RC)

副ディーン 深見 邦芳 (松山RC)



3時を過ぎましたので、ただ今から開会いたしたいと思います。きょうは徳梅ディーンが所要で遅れますので、私、副ディーンの深見がこの開会式の司会をさせていただきたいと思います。開会に先立ちまして、東北の震災の亡くなられた方のご冥福と、今、避難をされている方々のできるだけ早いお立ち直りを祈念いたしまして、1分間黙とうをしたいと思います。ご起立ください。黙とうをお願いいたします。

(一同黙とう)



どうもありがとうございました。ご着席ください。

では、ただ今から第33回2680地区、2670地区合同のRYLAセミナーを開会いたしたいと思います。今も黙とういたしましたように、この大変な中を受講生の方々44名、カウンセラーの方4名、あとスタッフロータリアンが54名ほどで合計100名の方にお集まりいただきまして、RYLAセミナーを開会することができました。

ただ、最初をお願いしておきますけれども、RYLAセミナーは研修会でございます。特に3日目ですか、夜のミーティングがございます。そのミーティングをスムーズに行うための懇親は結構だと思いますけれども、皆さん大人でございますので、こういう時期だということをよくお考えいただき、3日間、3晩4日を過ごしていただけたらと思います。お願いいたします。じゃあ、まずごあいさつをいただきたいと思います。

まず2680地区の柴田ガバナー、お願いします。



ガバナー挨拶

国際ロータリー第2680地区ガバナー

柴田 整宏 (西宮夙川IRC)



皆さま、こんにちは。2680地区、兵庫県の今年度のガバナーを務めております柴田整宏と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。私は今までこのRYLAには絶対参加しないと頑張っていたんですが、とうとう連れてこられてしまいました。当たり前で紹介をしたらあまり面白くないので、私になぜロータリークラブに入ったかということの説明したいと思います。

東日本のほうで今、放射能が騒がれております。私、実は放射能を浴び過ぎて白血病になりました、それでロータリークラブに入ったんです。医学部を出まして、インターンを過ぎて自分が好きな医局に入局するわけなんですけど、そこでそのころ最新の放射線治療、それと血管造影、今は心臓カテーテルをどんどんやっていますけど、あのはしりをやっておりました。

午前中は病院で、放射線科ですから胃の透視とか大腸の透視、これは全部レントゲンを使ってやるんです。それも今みたいにテレビを使いません。暗室の中で蛍光板というのがありまして、それを通して検査します。ですから、午前中に10人から15人、昼からは入院されている患者さんの回診をして、そのあとはまた大学に帰りまして、研究室で今度は医師と血管造影。私に与えられた仕事は、肝臓の血管撮影のデータを集めなさいということでした。実験用でワンちゃんを、数えているだけでも150匹ぐらい気の毒なことをいたしました。ですけど、私は器用貧乏というんですか、何か細かいことをするのが大好きなんです。だから肝臓の解剖学も全

部覚えて、カテーテルをどういう具合に曲げたらの血管に入るか、そればかりやっていた。

ある日突然、急に体が非常にしんどくなりまして、医者の不養生という言葉があります。それまで検査をやったことがなかったんです。どれぐらいレントゲンを浴びるかというのを知るために、いつもフィルムガラスというのを胸に付けております。それがたいてい要注意、ほとんど真っ黒になっていますと警告が来ました。血液を測ってもらったら、白血球が1,300になってしまった。この中にもドクターがたくさんおられますが、放射線の二日酔いを経験されたドクターはあまりないと思います。非常につらいものです。お酒の二日酔いはしょっちゅうでしたが、お酒の二日酔いどころか放射線の二日酔いも大変です。

それで大学に相談しましたら、あなた、もう死ぬよと言われました。ちょっと田舎の方の病院に行ってゆっくりしていらっしゃいと。この中にも神崎ロータリークラブの秋山委員がおられますが、神崎の近くに1つ病院がありました。ちょうど兵庫県の生野銀山の南側の麓にある病院なんです。小さな病院でした。そこに行かされて、血管造影はしなくてよかったんですけど、胃の透視から腸の透視はやっていました。

まだそのころは若かったので、ゴルフはやっていませんでしたけど、魚釣りが大好きで、いつも日本海に魚釣りに行っていました。土曜日の昼から香住とか浜坂、鎧かいわい、その辺に行きまして、船頭さんに沖の磯に渡してもら

んです。たいてい日曜日に迎えに来てもらう。今から考えたら非常に恐ろしいことです。時々仲間が行方不明になっていたんです。それは今から考えたら北朝鮮に拉致されていた。ですから私は放射線で死にかかって、下手したら北朝鮮へ連れて行かれたかも分かりません。ですから、今度の原子力発電の爆発も、とても人ごとには思えない。だけど、非常に政府は神経質になり過ぎているのと違うかなと。私、これだけ

浴びていてもまだびんびんしているんです。放射線の二日酔いを治すためにはビール飲めと言われまして、それでしっかりビールを飲みまして、まだ非常にびんびんしております。だけど白血球はまだ2,500ぐらいのものです。だから非常に危険な状態です。こういう経験をやりました。変なあいさつになりましたが、あいさつに代えさせていただきます。



ガバナー挨拶

国際ロータリー第2670地区ガバナー

亀井 義弘 (松山RC)



皆さん、こんにちは。2670地区といっても、みんな分かってでしょう。四国の地区を2670地区といいます。私は、『坂の上の雲』の松山から参りました亀井ですと言う。今日、いろいろな人がいらっしやる。こちらの前にいらっしやる方はロータリーの神様みたいな、立派な方がずっと並んでおります。私はまだ勉強中の者ですが、ロータリーって何をするとところだろうということを皆さん、考えたことはないでしょう。ロータリーが最初、始まったのは、106年前の2月23日です。ポール・ハリスという方がシカゴで始めました。シカゴの街は荒れておりましたから、だます人、いろんな悪い人がたくさんいました。そういう中で、心を許せる友達をつくりたいということで始まったのがロータリーの始まりです。ですから、ロータリーってなんだろうというのは、ここで考えるときは友達をつくるんだということを覚えておいてもらったらいいと思います。

国際ロータリーの会長というのは年に1回、代わっております。

今までに106年かかっていろいろな会長さんが出ておりますが、この中で1995年にビル・ハントレーさんというイギリスのRI会長さん、この方がロータリーのテーマ「Be a Friend」というテーマを私たちに与えてくれた。これは、友達になろうねということです。いい友達をつくりたい。じゃあ、いい友達って、皆さん、分かります？ この世の中には悪い友達もあるんです。

中国の孔子という偉い人がおっしゃった言葉、

益者三友という。自分も友達にして利益になる友達というのを益者三友といいました。その反対は損ですね。損になる友達ですから損者三友という。この益がなくて、損者三友ということ。じゃあ、どういう方が自分の利益になる友達であるかということ孔子様は皆さんに分かりやすく教えてくれている。1つは直を友達にすれば益なり。2つ目、諒を友達にすれば益なり。多聞を友とすれば益なり。この3つの条件の友達と言っています。ご自分に友達がいるでしょう。あいつ、正直かな、素直かなということ、これは直友達、正直な友達というのは漢字で書くとういうようになります。直ですよ。正直、素直な者、こういう友達は話していることが裏表がないんです。ですから、その友達の言葉をまじめに聞いて、自分の進むべき道を決めると間違いがない、素直な、正直な人の言葉には従うべきだということで、直友達を持ちなさいというのを孔子様はおっしゃった。これは利益になる友達です。

2番目、諒を友とする。諒を友とすべしというのは、諒というのはこのように書きます。漢字を引いてもらおうと分かりますが、諒というのはなんであるかということ誠実をいいます。誠実な人、皆さん、いらっしやるでしょう。私の友達は立派だな、誠実だななど。そういう人とお付き合いしていると、自分の心まで清らかになる。それで自然に自分の性格が誠実な人間に変わっているということです。

3番目、多聞を友とすべし。多聞というのは「多

く聞く」と書いているように、何事でもよく知っている、博学をいいます。博学、学問のある人、勉強をしている人、こういう人は自分の友達に「なさいよ」と。なぜかという、勉強しているから世の中のことをよく知っています。それでいろいろなことを教えてくれます。知識の幅があるよ、情報の幅があるよ。それでどうなるかという、これからどうしようかな、ああしようかなという迷いがなくなって正しい判断ができる。こういう友達を持つと自分のためには利益になります。

どこにそんな友達がいるんや、といわれそうですが実際いるんです。ここの前に座っていらっしゃる方々。私はロータリーに40年前に入会しました。みなさん年齢は違います。こちらにいらっしゃる今井先生は90歳、私からすれば、私のおやじやないかなと思うぐらいの方。そういう方が非常に親しく、友達になってくれます。私は人生の達人からいろんなことを教わり、人間学を教わることができた。ロータリーって素晴らしいと思った。

私は40年前にロータリーに入会して人生が豊かになった。それで、しかも幸せになっていた。ロータリーって素晴らしいところだなという。皆さん、ロータリーってなんだろうというときに、それをまず頭に思い浮かべてください。ポー

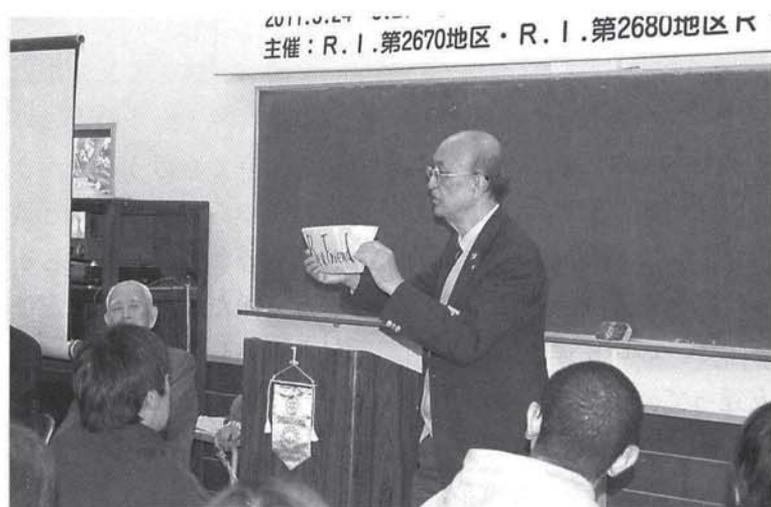
ル・ハリスは寂しくて寂しくてしょうがないときに、友達、心を許して話せる友達をつくった。だから皆さんの中でも意地悪の友達、無理難題を押し付ける友達、うそっぱちをいう友達、これは損者、損になる友達ですから近寄らないほうがいいですよ。先ほど言いましたように正直な友達、誠実な友達、博学のある友達、こういう友人をつくりなさいという東洋の博士、偉い方、孔子様はそのようにおっしゃったわけです。

それで、皆さん、そういう立派な方とお付き合いするとなぜいいかという、日本にも道元禅師という偉いお坊さんがいます。この方がこういうことを言いました。霧の中を歩くと自然に衣がぬれているというんです。よき人の中に入っていくと、自然に自分がよき人間に変わってくるということをいっています。

ですから、本物と付き合いなさい、立派な人と付き合いなさい、これがロータリーの世界でございます。ロータリーには、年齢は関係ない。

私には宇和島に102歳の友達がいます。私は73歳です。徳島へ行くと88歳の友達がいます。私から友達といったら失礼かもしれませんが、先ほど言ったように非常に博学な立派な方ですから、私をいつも導いてくれます。

私の字の下手なことを見て、「おお、亀井君は字が下手だな。それはいいものを持っている。



皆さんに手紙を書きなさい」「えっ、私、下手くそな字で手紙を書いていいんですか」といったら、「ええ、あなたはいいものを持っている。その手紙で受け取った人がこう見て、ありゃ、わしより下手くそがおるわ、世の中にもこんな下手くそがおる」、もらった人は優越感を抱く。おお、亀井君というのは親しみの持てるやつじゃと、それで友達がどんどん増えていきます。学校では教えません、こんなことは。学校で僕が教わったのは、字は上手になりなさいということ。いつもしかられた。しかられるんじゃない、字が下手なことが素晴らしいことだ。いまだに私は皆さんに手紙を書いておりますが、なぜ書いているか。もらった人が喜んでくれるからです。人を喜ばせる、人にサービスをする、これがロータリーの奉仕の精神です。

今、隣を見ても友達じゃないよね。友達と一緒に来ました？今は友達でないと思うんだけど、ああ、この人は正直で誠実で博学な人やな、ああ、こんな人とRYLAセミナーに行ってお知り合いになった、自分はなんと幸せだろうということ、私が先程、話したことを思い出してください。私は小豆島へ来て53年ぶりに友達に会いました。その記事を『ロータリーの友』が掲載

してくれました。あとでそのコピーをお渡ししますので読んで下さい。

最後にいいことを言っておきましょうか。世の中でお金で買えないものが4つほどあるんですけど分かります？品格、人格、人物というものはいくらお金を出しても買えない。ロータリーへ入って、私はそれを身に付けることができました。入った若い時は、礼儀知らずで、生意気で、非常に言葉遣いの悪い人間でありましたが、ここにいらっしゃる今井先生や深川先生のように神様みたいな方とお付き合いすると、自然にそれに近づいていく。道元禅師じゃないけど、立派な方と、本物とお付き合いすると自分が本物になるんだということです。ロータリーではそういうことができる。お金を出してもそれができない。いい友達を得ることが一義である。

そして、命です。お金を出すから命を売ってくださいとは誰もできない、命は買えません。それから信用も買えません。お金を出すから信用をください言ったって、これは買うことはできない。

最後に言っておきましょう。友達もです。お金を出すから友達になってくれ、これは買うことができない。分かった？ 以上で終わります。

ごあいさつ

元RI青少年奉仕支援グループ
アジア担当エリアコーディネーター

海沼 美智子 (東京恵比寿RC)



皆さま、あらためて、こんにちは。余震で、また、水道水の汚染でいろいろ騒がれている東京から今朝参りました。

まずRI、RIというのはロータリーインターナショナル、国際ロータリーのことですが、本部はシカゴの郊外のエバンストンというところにあります。そちらでは地球上をだいたい大陸で分けて、エリアといいます。アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南米、北米、オセアニアというふうにエリアを分けておまして、そのエリアの中にゾーンというのがあります。そしてそのゾーンの中に地区というのがあります。このRYLAは2670・2680という2つの地区が合同で行っておられます。

青少年のプログラムですが、新世代のプログラムには国際ロータリーで奨励する、皆さんぜひやってくださいというものが4つあります。このプログラムの5ページに用語が出ていますので、あとでご覧になると分かると思いますが、インターアクト、これは12歳から18歳の中高生を対象とするものです。ローターアクト、これは18歳から30歳の青年たちを対象としたものです。それと青少年交換、これは高校生の1年間ホームステイの交換学生を海外といたします。それとこちらのRYLA (Rotary Youth Leadership Awards)。このタイトルの中にリーダーシップというのが入っている通り、RYLAセミナーというのはリーダーを育成するプログラムです。あなた方はその素質を持っている資質の高い若者たちということで、選ばれてきよ

うここに参加なさっているわけです。

RYLAというのは世界的レベルでは14歳から30歳までを対象としておりますが、3つぐらいの年齢に分けてカリキュラムを考えております。もちろん高校生のキャンプ、そういうものは例えば南米とかメキシコ、フィリピンなどでは300名ぐらいの高校生が屋外でキャンプをしてやるRYLAというものもあります。そして、きょうあなた方のようにアカデミックなセミナー形式を採っているRYLAもございます。

国際ロータリーとしては、未来のリーダーをということをあなた方に期待をしていること、そして、もしできましたら将来ロータリークラブのメンバー、ロータリアンになっていただけたらという気持ちもあります。今日、こちらには素晴らしい先輩ロータリアンの方たちがたくさんおみえです。こちらのRYLAは33回目を迎えますが、非常に伝統的で特色のあるこの余島RYLAは日本でも一番有名なRYLAなんです。そこにあなたたちが今回参加されたということは非常にラッキーなんです。

そして、なぜ有名かという理由の1つは、RYLA研修を終わると、あなた方はライタリアンという称号をいただきまして、ロータリーのファミリーになることができます。そして、私が今付けているこのバッジを、これは世界的に共通のバッジなんです。RYLAに参加した方はみんなこれをいただけるんです。これを付けて世界中のロータリークラブを訪ねると、ファミリーですから、ああ、よく来た、よく来た、

ウエルカムということで非常に歓迎してくれます。

そのファミリーになったあなた方が将来ロータリアンになる、この地区で実際あったんです。ライラリアンからロータリアンになられて、そして地区のガバナー、地区のトップですよ、ガバナーになられた方が4人いるんです。RYLAのプログラムを行っている地区でそういう地区は今までありません。この余島のRYLAはそういう意味で非常に素晴らしいということで、私もこの数年間勉強させていただきに毎年来ております。

そして、実は東京でもRYLAはだいぶ遅れてスタートしました。その際、元RI理事の今井鎮雄先生がいろいろご指導くださいますので、東京でも20歳から30歳の若者を対象に、年間30名ぐらいでございますけれども、RYLAセミナーを行っております。そして、もうその若者たちが世界中で活躍をしてくれております。

日本にはロータリアンが今90,000人いるんです。昔はもうちょっと多くて、120,000人ぐら

いたんですが、今はちょっと少なくなりました。今井先生は、その中で世界の国際ロータリーの理事会のメンバーとして一本釣りされた方なんです。素晴らしい方です。そして、RYLA委員会というのがやはり国際ロータリーの中にありまして、その日本人第1号の委員になられた方です。

第2番目になられた方は米谷さん、あちらの一番左の方でいらっしゃいます。それで、私事でございますが、3番目にRIのRYLAの委員をさせていただいたのは私です。その1、2、3人がこのRYLAに今日来ているということは素晴らしいこと。まあ、自分で言うのもおかしいんですけど、あなた方は素晴らしい環境で今日、RYLAを受講できるということを誇りに思っていていただいて結構です。どうぞ3日間、積極的にお友達をつくって、積極的にディスカッションにも加わって一回りも二回りも大きくなってお帰りいただきたいと思います。では、よろしく願いいたします。

思い出



余島の碑

ごあいさつ

元国際ロータリー理事・パストガバナー(2680地区)
RYLAセミナー顧問

今井 鎮雄 (神戸西RC)



大変なときにRYLAをやりますね。東日本であんなに大きな災害があり、みんながうちがなくなる、食べるものがなくなる、そういう時代のこのときに私たちはここに今、集まっているんですね。さっき黙とうをいたしました。今私たちの国のずいぶん大きなエリアが地震に見舞われました。実は16年前に阪神・淡路の地震がありました。多くの方々が大変な目に遭っているときにRYLAをやめようか、ロータリーもいろいろな集まりがあるけれどもやめようかといったときに、ほかのいくつかはやめたんです、こんなときに集まるのはやめようと。ただRYLAだけはどうしてもやろうとみんなが言って16年前の地震のときにもRYLAをいたしました。

今回もそうですが、今度は非常に時間が短かった。RYLAを準備しているときに、急に、RYLAのたった2週間ほど前にああいう災害があった。じゃあ、RYLAはどうしようかと。世界のことを考えるときに、この3日間であなた方と一緒に何を考えるか、何が本当に世界のために大事なのか、私たちは他の人たちにどんなことをできるのか、できないのか。人間が傲慢にあらゆる科学技術を進めて、私たちは月の世界はおろか、もうどこへでも行くことができる、宇宙ステーションを造る、何ができるかという片一方においては、大きな私たちの知恵が私たちの世界を変えてきたにもかかわらず、地震をどうすることもできない、津波をどうすることもできない。人間が造って、それこそこれから

の私たちの年代に一番役に立つもの、あのいわゆる原子力発電所、それがむしろ逆に非常に大きな災害を及ぼしているというようなときに、いったい本当に大事なものは何だろうか。知恵なんだろうか、あるいは謙虚さなんだろうか、そういうことを静かに考えながら過ごしていきたいと思っています。

実はRYLAも33回目なんですけど、どなたに講師をお願いしようかと悩み、2人の講師をお願いしました。一番最初のころ、第1回だったか2回だったか、そのころは現役の神戸大学の学長をしておりました三村先生をお願いをしました。それはなぜかというと、三村先生が経済学部長として、世界の経済はどんなふうになるだろうかと考えておられるか。私たちは経済を考えると、人間の全体の幸福を考えながら経済を考えなきゃいけない。そういう意味で、予言者といったらおかしいですけども、若者が責任を持つときに、どんなふうなことを考えておかなければならないのかという話をいただきました。

もう1人、今回講師をお願いした武田先生でありました。この武田先生は関西学院の社会福祉の部長さんをされたり、学長をされたり、あるいは関西学院の理事長をされたり、お2人もがあの16年前からそれぞれリタイアされて、そして自分たちの新しい仕事を今も一生懸命やっています。その方々に振り返ってもらって、人と人とかかわり合うということはどういうことなんだろうか。東日本の災害がもう少しした

ら落ち着いてくるでしょう。大人達が、自分の家を造り直さなきゃならんときに、私は出て行って、子どもたちと一緒に遊んであげるといふふうなボランティアもできるかもしれない、

実は私は震災のあった金曜日にこのRYLAの準備のこともあり、私のクラブに出向きました。そして再来週からRYLAが始まるんだ、またみんな若い人に会えるんだと思いながら、うちへ帰ったのが、ちょうど2時半ぐらいで、なんとなくテレビのチャンネルをつけたときに地震のことを知りました。そして、その次の土曜日に私の地区では地区大会があったんです。地区全体のロータリアンが集まって、そして今までの活動内容等を報告し合い、どういう奉仕ができるのか、どうしたらお互いが大事な力を持ち合えるのかと考える大会です。それが土曜日、日曜日と続きました。そのような中、ラジオは状況を刻々に知らせてきます。どうも原子力発電所が危ない、いろんなこともあり放射能が漏れているのではないだろうか、私は気が気ではありませんでした。もしもチェルノブイリのような事故になったら。日本人の知恵と知識とあらゆるものを導入して造った原子力発電所にもしものことがあれば大変だと。どれだけ日本人の知恵があって、そしてそれを謙虚に学んできたかということがこれで分かるだろう。だからあれから私はずっと見えています。

ご存じのように、初めは地震の報告でした。その後、津波で多くの人たちが被害者として報告され、行方不明者が何千人と出る中、福島原子力発電所についても、だんだんだんだん追って明らかになってきました。初めはなんとか収まりそうな雰囲気の話をしておりましたが、だんだんそうではない。そばにおれなくなった。決死の覚悟で自衛隊の人やら消防隊の人やらが向かった。そしてすべての人たちがなんとかして支えようとして努力している。それを見たときに、これはただごとではないと。私のところにもあちこちからメールが届きました。と

ころが世界の端の人たちは福島と神戸がどのぐらい離れているか分からないんです。地球儀を見て、神戸はどこや、福島はどこにもないけれども東京はここやと。お前、大丈夫かという手紙がたくさん来ました。みんなが気にかけてくれます。あらゆる国、ニューヨークの真ん中も、スリランカでも、あるいはインドネシアでも、どこでも今の日本の人たちは大丈夫か、私たちの時代と一緒に支える日本の人は大丈夫かということをお心配してくれました。実は私はまだ手紙を書いて送らなきゃならんところがたくさんあるんですけれども。「ごめん、RYLAに行ってた」と言う事で後で勘弁してもらおうと思っています。

私にとってはそんな大切な時間であります。皆さんと一緒に過ごす時間の一番最後の締めくくりに、私も少しお話をさせてもらうことを許されていますから、またそのときに話しをしたい。けれど、どうぞお願いしますけれども、あなた方がここにきたのは遊びではない。時間というそれだけの犠牲を払って、もっと大勢の人たちが助け合わなければならない今、この時を使ってRYLAにいる私たちはここでしっかり考え、こんなときにできることは何かを分かって帰ってもらえればありがたいと思います。

ここはキャンプサイトですから、子どもたち、青年たちが泊まるキャビンがあちこちにありません。それから食堂があります。ところがここには教室がなかった。この教室の建物はRYLAをやろうとしたときに、こうして集まる場所が必要だということで作られ、第2回RYLAから使用されました。

だから第1回目は大変でした。第2回目までに慌てて造りました。あまりYMCAはお金がないものですから、ひっくりかえってきたら大変なんですけれども。それはあなた方のために、これからの多くの受講生のために、皆さんがこの3日間、集って講義を聞くために大勢の人が教室を造ろうではないかといって造ったこれも

記念なんです。どうぞ、皆さん、そういうことがあり、今、このようなときにこのRYLAが行われているということを思いながら、ここでしばらく研修をしてください。帰るときはみんな友達になりたい。

私が皆さんの名前を覚えるというのはこのごろなかなかできなくなった。昔は180人ぐらいの子どもが来たら1日か2日のうちに全部の子どもの名前を覚えめました。そういう手品みたいなことができていたのに、だんだんほけてきて、年々名前を忘れるので、君、君というようなことを言わなきゃならない。これも許していただ

きながら、お互い同士がためになる話し合いをし、そして新しい21世紀はどの方向に向けていくのか考えてほしい。21世紀になって始まったのは金融資本主義という新しいタイプの経済である。これは明日、新野先生がまたお話をされるかもしれない。だけでもそれまでと違った経済の仕組みとかタイプができて、小切手を1枚書いたら国が買えるといいますからね、今は。世の中はそれだけ変わっているということをもう一度真剣に思い返せるように、この3日間の時間を大事に扱ってくださいね。どうぞよろしくお願いします。ありがとう。

思い出



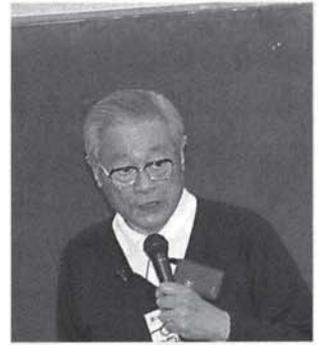
第33回RYLAセミナー開講式

講話

「ロータリーがRYLAに期待するもの」

RYLAセミナー顧問・パストガバナー(2680地区)

深川 純一 (伊丹RC)



受講生の皆さん、ようこそRYLAにいらっしゃいました。これからの3泊4日ゆっくりとこのRYLAを楽しんでいただきたいと思います。

ただ、先日、東日本大震災が起こり大変な被害をもたらしました。皆さんの親戚や友人知人にも被災者が居られるかも知れません。私達の友人にも沢山の被災者が出ました。将に未曾有の大震災であります。

そこで、このようなときに何故RYLAをするのか、という声があるかも知れません。実は、今から16年前の阪神淡路大震災の時にも、この非常時にRYLAをすることに対して激しい非難の声がありました。

事実、阪神間のロータリークラブやロータリアンは殆ど壊滅的な被害を受けました。クラブの例会場も事務局も、会員の住居も事業所も壊滅したところが沢山ありました。そこで、その年は、兵庫のロータリーは、年に一度の地区大会も、各地のミーティングも、クラブの周年行事も、地区内の全ての行事を中止しました。

しかし、このRYLAだけは中止しませんでした。予定どおり震災後2ヶ月後に実施したのであります。それは一体何故か。今井先生はじめ私達RYLA委員としては、このような非常事態だからこそ、RYLAは実施すべきだと考えました。そして、若いRYLAの皆さん達に奮起して欲しい、世のため人のために役だって欲しいと願ったからであります。

果たして、震災後、RYLAの若い皆さん達が

被災者の救済のために活動してくれました。この震災の時ほど人々の暖かい善意の心を感じたことはありません。

今でも、私は、この時の人々の善意について、或る物語を思い出します。それは文豪トルストイの話であります。

昔々、地球に大変な日照りがやってきました。木も草も枯れ、人も獣も飢え、井戸も川も涸れ果てて、一滴の水もなくなりました。飢えて死んでゆく人も獣も多く、この世の終わりのような荒れ果てた情景でありました。

その中を一人の少女が水を求めて彷徨います。家にいる病気の母親に与えようと柄杓を持っていますが、見渡す限り死の荒野には求める水はありません。

探し疲れて枯れ草の上に倒れた少女は、何時しか深い眠りに落ちました。

やがて飢えに目を覚まされた少女は、自分の枕元においた柄杓が水で満たされ、月の光に輝いているのを見て、思わず口元へ柄杓を持って行きました。その時、

「あっ、いけない。お母様が待っていらっしゃると思い、飛ぶように家に帰ろうとしたとき、足下に気がつかず、子犬を踏みつけてころんで転んでしまいました。柄杓は飛んで地面に落ちました。

さあ大変。柄杓は空っぽだろうと近寄ると、不思議にも柄杓の水はそのままでした。子犬が鼻を鳴らして近寄って来ましたので水を与えると、木の柄杓は銀の柄杓に変わりました。

家に戻った少女は「お母さん、お水」と言って、柄杓を母親に渡そうとすると、「お母さんはいいから、お前お飲みなさい」と母親は優しく少女に答えました。この時、銀の柄杓は金の柄杓に変わりました。

少女は喜んで柄杓の水を飲もうとした時、戸口に貧しい身なりの旅人が現れ、「済みませんが、お水を一杯いただけませんか」と言いました。

少女は黙って柄杓を旅人に渡しました。柄杓からこぼれた一滴、一滴の水は、光り輝くダイヤモンドとなって、静かに静かに天に昇っていきました。今、大空に輝く北斗七星はこの七つのダイヤモンドなのです。

という物語であります。

これは、干魘という異常事態の苦しい時にも、自分のことはさておいて、何時も人のことを思いやる人間の善意を説いた物語であります。

今、東北地方は大震災で壊滅的な状況にあります。このような時にこそ、人間の善意が如何に大事かということを心に留めて、私達は、出来得る限りの救済の手を差し伸べなければならないと思うのであります。

さて、枕を振るのが少し長くなりましたが、RYLAの話に入って行きたいと思います。

皆さん方の中には、ライオンズクラブのことは知っている人も多いかと思いますが、ロータリークラブという言葉聞いたことがない人も居られるかも知れません。そこで、先ず最初に、ロータリーのことをごく簡単に触れておきます。

ロータリークラブというのは、社交クラブの一つでありまして、世のため人のために何かをしようという人達の集まったクラブであります。

今、世界中に約3万4千位あります。戦争の絶えないアフリカや中近東にもあれば、共産主義のロシアにもあります。クラブのメンバーは、

今約120万人位であります。この世界中のクラブの連合体を国際ロータリー、英語で Rotary International 略してRIと謂っています。

世界中の各クラブはそれぞれ独立した自治団体であります。その連合体である国際ロータリーも自治団体であります。したがって、理事会も事務局もあります。ここに居られる今井先生は、国際ロータリーの元理事の1人です。

この世界中のロータリークラブを、50～70クラブずつにグルーピングして「地区」と称し、1地区ごとに国際ロータリーの役員であるガバナーを一人ずつおいてクラブの連絡調整と監督指導に当たらせているのであります。そしてこの「地区」は、現在、全世界に530地区あります。

この530地区の一つである第2670地区は、四国四県をもって1地区とするものであり、第2680地区は、兵庫県全体を1地区とするものであります。

ガバナーは、任期1年の無給の国際ロータリーの役員であります。

また、次年度に就任する次期のガバナーをガバナーエレクトと呼び、そして、ガバナーの任期を終えた人をパストガバナーと呼ぶのであります。

ところで、ロータリーは一体どのような活動をしているのかと言いますと、20世紀の初頭は、誠に素朴な奉仕活動をしておりました。

例えば、冬の街角で新聞売り子の少年が、新聞が一枚も売れないで困っているのを見たロータリアンが、その少年をクラブに連れて行って、『この子が困っているから、助けてやってくれよ』と言います。すると、ロータリアン達が、新聞を買ってやったり、ジャンパーなどを着せかけたりしました。少年は本当に嬉しそうに『おじさん達有り難う』と言って帰って行った。皆は、それを見て、世のため人のための奉仕をしたんだな、と納得し合ったのであります。

また、苦学生に奨学金を出したり、身体障害者の養護学校を設立する運動に資金を出して参加したり、災害が起きたときには、その救援活動をしたりしていたのであります。このような活動をロータリーは社会奉仕と謂っています。

やがて、このような困っている人を助ける弱者救済活動だけではなく、ロータリアンは、みな職業を持っていますから、自分の職業を通じて世のため人のために奉仕をするようになりました。これをロータリーは職業奉仕と謂っています。

例えば、職業人として自分の業界を清潔なものにするために、賄賂を贈ってはならないとか、全ての取引を公正にしなければならないとか、職業人としてしなければならないことや、してはならないことをお互いに誓い合う所謂倫理の提唱をすとかしています。このため、ロータリーは職業人の倫理運動だと言われるのであります。

では、この倫理運動というのは具体的には一体どういうことなのか。

例えば、街角にゴミが落ちていたとします。ロータリアンとしては、町を美しくするためにそれを避けて通ることはできません。必ずそのゴミを拾うでしょう。しかし、ロータリーは、そこにロータリーの本願はないよ、と言います。ゴ

ミを拾うことは避けて通ることができないにも拘らず、それを拾うところにロータリーの本願はない、と言うと、一体どこにロータリーの本願があるのか。

ロータリーは、そもそもゴミを捨てない人を育てるところにロータリーの本願があるというのであります。人を育てること、道徳を守る人間を作ること、その事によって世のため人のために動いて行こうとロータリーは言うのであります。見方を変えれば、それがまさにロータリーが倫理運動だと言うことを意味するのであります。

このように、ロータリークラブは、元来、本質的には寄付団体ではありません。慈善団体でもボランティア団体でもありません。ロータリアンに奉仕の心を授け、倫理を提唱していく団体なのであります。

ただ、実際にはロータリークラブやロータリアンは、世のため人のために沢山の寄付金を出し、災害救援の義捐金も出し、ボランティア活動もしています。

しかし、これはロータリーの本願ではなく、副次的なことなのであります。

ロータリーの第一義は、先ず、ロータリアンに奉仕の心を育てることであり、その心の現れとして寄付をしたり、義捐金を出したり、ボラン



ティア活動もしているのです。

ところで、ロータリーは、職業奉仕の分野だけでなく、社会奉仕、国際奉仕の分野でも青少年の心を育てる奉仕活動をしています。

例えば、高校生年代の生徒をもって組織するインターアクトクラブを作ったり、18歳以上30歳までの青年男女をもって組織するローターアクトクラブを作ったりしています。実は、このRYLAも、このような青少年育成のプログラムの一つなのであります。

それから、ロータリーの特殊な国際的活動の一つにロータリー財団があります。これは元来、1917年にロータリアンの寄付金をもって作られたものでありますが、この財団の活動は、非常に多岐にわたっています。例えば、世界の若者達に国際感覚を育てるためにロータリー財団奨学生を育成したり、各地で地震や災害が起ると救援資金を出したり、全世界的なポリオの撲滅運動を実施したりしています。

以上のように、ロータリーの活動分野は非常に広く、このRYLAもロータリーの開発したプログラムの一つなのであります。

そこで、RYLAというのは、Rotary Youth Leadership Awardsの頭文字をとったもので、日本語では、**青少年指導者養成計画**と訳されています。青少年のリーダーとして青少年を指導する立場にある人達を養成するプログラムがこのRYLAセミナーであります。

RYLAの発祥は、1959年であります。オーストラリアにクイーンズランド州と言う州がありますが、その州の創設100周年記念式典に、ブリスベンロータリークラブが、イギリス王女と同年代の青年男女を集めて、社会教育プログラムを実施したのがその発端でありました。

実は、その後、このRYLAは、全く泣かず飛ばずの状態でありましたが、1974年に、アメリカ・ワシントン州のタコマで開催されてから、

まさに草原の野火のように全世界に広がって行ったのであります。

そして、その4年後の1978年、ここに居られる元国際ロータリー理事の今井鎮雄先生が独自の発想で企画されて、このRYLAが始まったのであります。

したがって、このRYLAは、アメリカで始まったオリジナルなRYLAとは若干趣を異にしています。というのは、オリジナルなRYLAは、18歳から24歳までの青年男女を対象として青少年の指導者を養成しますが、このRYLAが対象としているのは、**20歳以上**の青年男女でありまして、上限はありません。過去には、60歳近い人も受講生として参加しています。

それは一体何故か。我が国の現状を考えますと、青少年の指導者として育てるには、18歳から24歳という年齢ではあまりに低すぎて、指導者としては適当でないと謂う点にあります。

一般に青少年の指導者の養成ということになりますと、既にボーイスカウトやYMCAや青年団等でそれぞれ独自にリーダーを養成しています。したがって、ロータリーがそれと同じようなものを実施することは屋上屋を重ねることになって意味がありません。そこで、ロータリーが企画・立案・実施する以上は、一般のリーダー養成計画より遙かにレベルの高い、ひと味違ったものを実施しようとする事になりました。つまり一般の青少年リーダーを指導するもの、謂わば、リーダーのリーダーを養成しようとする事になります。

そこで、今井先生の構想によって、アメリカのオリジナルなRYLAを日本の実情に合わせてアレンジしたものが、この余島のRYLAなのであります。したがって、このRYLAは、受講生の皆さんが技術的なことは既に修得されたものとして、更に高い精神的境地へ導くことを狙いとしています。したがって、非常にハイレベルなものとして企画されています。

したがって、**セミナー**の講義も一流大学の先

生によるものであり、50人ばかりの受講生のために遙々一流の先生達に来て頂くという意味では大変豪華なプログラムであります。したがって、ハイレベルな講義を消化する能力を考えて、受講者の年齢を20歳以上、即ち、大学の教養課程修了以上としているわけであります。

ここで一つお断りしておかなければならないことは、講義というものは、話し手と聞き手との共同作業によって成り立ちます。したがって、講義中の部屋の出入りは、講義の雰囲気壊すことになり、聴衆の皆様迷惑をかけるのみならず、講師の先生に対しても大変失礼なことになります。また、講義を真面目に聴いている人達に対しても失礼であります。したがって、講義中の部屋の出入りは、絶対に止めていただきたいのであります。

私達は、お互いに絶対的信頼の世界に生きているのでありますから、皆さんも自分の良心に従って自律していただきたいと思えます。

このRYLAは、皆さん方の自律を前提としています。したがって、ここでは何をすることも基本的には自由であります。ただ、皆で何かをしようとする時、例えば、講義が始まるときは、その時間を絶対的に守って下さい。

時間は、万人の共有物であります。一人が時間に遅れますと、皆が迷惑を被ることになるのであります。実は、時間を守るということは、昔から日本ロータリーの精神伝統になっているのであります。

時間を守ることのほかに、このRYLAでは色々はプログラムがあります。キャビンタイムがあり、キャンプファイヤーがあり、ディスカッションがあり、レクリエーションがあります。

そこで大事なことは、何故このようなことをするのかということをよく考えて自分自身を規律して下さい。皆さん方は、青少年のリーダーのリーダーでありますから、自らの人格に恥じないように自分の行動を規律して頂きたいのであります。

このこととの関連においても一つお願いがあります。それは、このRYLAは、4グループに分かれてそれぞれのキャビンに入りますが、この4日間は各班ごとに纏まって行動して下さい。他の班に友達がいるからと謂って、勝手に自分の班から離れないで下さい。それは、ロータリーがクラブごとに自治権を持って纏まっているのと同じ論理なのであります。

それは一体どういうことか。

ロータリーでは、クラブの会員がお互いに顔と顔を合わせて話し合うことを何よりも大切にしています。その話し合いの中から、色々な悩みを解決したり、色々な原理を開発したり、世のため人のために行動する智恵を生み出したりしています。それがクラブというものの原点なのであります。そこからやがてロータリーは世界的な巨大な組織に育って行ったのであります。

このようにロータリーは、会員同士がクラブの中に入って話し合うことを一番大事に考えています。したがって、このRYLAでも皆さん方がキャビンの中で纏まって話し合うことを大切に考えています。だからこそ、このRYLAにいる間は、各キャビンごとに纏まって話し合ってくださいなのであります。これが自分のためでもあり、キャビンの仲間のためでもあるのであります。

そして、お互いの悩みを話し合ったり、色々なアイデアを話し合う、それを聞いてくれるのがカウンセラーであります。

そこで、このRYLAの類い希なる顕著な特徴がカウンセラーシステムを採っていることでもあります。カウンセラーは、このRYLAの3泊4日、皆さんと寝食を共にし、皆さんの話や悩みを聞く相談相手であります。お互いに心を開いて話し合ってください。そこで、カウンセラーとはどのような人達かと謂いますと、ロータリアンとロータリアンの奥様であります。

また、カウンセラーは、RYLAが終わった

後も、同窓会その他で後々皆さんの面倒を見ていただく人達であります。仲良くお付き合いいただきたいと思います。

それから、このRYLAには、**思索の時間**というプログラムがあります。

最近の世の中は、科学技術の発達により物質的には益々便利になり、豊かにはなりましたが、それと同時に、効率一辺倒の社会となってしまって、私達は仕事に追われて自分というものを見失い、精神的には非常に貧しくなりました。

そこで、このRYLAでは、平素は皆がキャビンごとに一緒に過ごしますが、思索の時間の1時間だけは、皆がそれぞれただ一人になって、自分自身を見つめ直す時間なのであります。瞑想に耽るのも結構であります。この玉の如き時間を大切にしていきたいと思います。

次に、このRYLAの最も大切なプログラムの一つとして、**バズセッションとフォーラム**があります。

バズセッションというのは、4、5人ずつの小グループに分かれて約4時間位ディスカッ

ションをするのでありますが、そのあと、バズセッションで話し合った色々な意見を受講生全体のフォーラムに持ち寄って、更に3時間のディスカッションをするのであります。このようにして、すべての人達がそれぞれ何らかの意見を述べるようにしているのであります。

最後に、この余島には、**素晴らしい自然環境**があります。これは、今井先生が、今から約60年前、この島に来られて、まさに手作りで築き上げられた自然環境豊かな施設であります。したがって、皆でこの自然環境を守らなければならないと思います。この島での生活を皆で大事にしたいものであります。

このRYLAの3泊4日間、一番大事なことは、皆さんがお互いに仲良くなることであります。心を開いて存分に話し合ってください。

そして、この3泊4日で、皆さんの心に何か火が灯ることがあれば、と願いながら私の話を終えたいと思います。

以上

注意事項の説明

ディーン 徳梅 明彦 (あわじ中央RC)

余島野外センター所長 松田 康之



○徳梅 深川先生、どうもありがとうございました。只今から説明に入らせて頂きます。改めましてこんにちは。はじめまして。私、この第33回RYLAセミナーのディーンを務めさせていただきます2680地区のRYLA委員長をさせて頂いております徳梅明彦と申します。本日、公務のため午前中どうしても抜けられず到着が今になってしまいました。皆様がたにご迷惑をかけたこととお詫び致します。

これから日曜日の閉校式まで、皆さんと一緒に進んで行きたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それではプログラムのスケジュールに沿ってお話をさせていただきます。

皆さんのお手元にRYLAセミナーの冊子があると思います。1ページをご覧ください。この4日間の大まかなスケジュールが書いてあります。一つひとつの内容に着きましては、先程、深川先生からこんなことをやっているんだというお話があったと思いますが、それを全体の流れとして説明させていただきます。

今、開講式、オリエンテーションの真っ最中ですが、この後、皆さん方には4つのグループに分かれて頂きます。班別の発表、そして各班につくカウンセラーの発表をさせて頂きまして、一旦キャビンへ戻っていただきます。そして6時からこの大会議室のとなりにあります食堂でオープニングパーティを開催します。時間は約90分から120分程度です。本日はロータリアンが内容を盛りだくさんに考えているよ

うですので楽しみにしてして下さい。食事後は各班ごとにキャビンに戻っていただき、キャビンタイムをしていただきます。各班でそれぞれ自己紹介などをしていただき仲良くなる第1歩を踏み出していただきたいと思っております。下に書いてありますロータリアンの夕べというのは受講生には関係がありません、これはロータリアンの勉強会です。

朝食ですが、明日以降、日曜日まで7時半から食堂でとっていただけます。

明日の講義は午前中が9時30分のスタートになっております。それまでの準備時間を含めて、それぞれの班ごとに時間を調整していただき、なるべく早く朝食をとっていただき、講義開始の10分前にはここに着席している状態を心がけてください。9時半から約2時間の予定で新野幸次郎先生の講義がございます。昼食は11時30分から1時まで90分です。午後からの講義は1時からスタートの武田建先生で、これも同じく3時頃まで約2時間を予定しております。その後、16時から夕食の時間までレクリエーションとなっております。基本的には各班ごとでこの余島の自然散策、又余島の施設を使ったスポーツ等でレクリエーションを楽しんでいただけたらと考えております。

今日を含め2日目、3日目とも、夕食はすべて6時です。夕食の時に3日目に行われますフォーラムのテーマの発表がございます。フォーラムのテーマに関しましては、受講生の方は毎回、勘違いされますが、今回の33回

RYLAセミナーのテーマは「リーダーシップ」となっておりますが、どうしてもフォーラムのテーマをこの延長線上に結び付け、フォーラムのテーマを期待されているようですが、これはトレーニングの一環ですのでフォーラムのテーマはセミナーのテーマ「リーダーシップ」とは全くかけ離れたものになる可能性が大きいのです。私もまだどんなテーマになるか知りませんが、そのようにテーマが与えられます。そして夕食後、キャビンタイムと混同してしまうようになると思いますがバズセッションということで、先程深川先生からもお話がありました少人数で分かれて意見を出し合っていたかく、それを始めて頂きます。3日目朝食後、思索の時間を取ります。一度頭をクールダウンして下さい。ゆっくり一人で色々と考えてみて、そしてその後、バスセッションパート2、ここでいよいよですね、班全体の意見にまとめてもらいまして、3日目のお昼を挟んで2時ごろまでには、各班でバズを集約して頂いてフォーラムで発表できるような態勢を作ってください。摸造紙など準備いたしますので、与えられたテーマについて各班ごとに発表できるようにしておいて下さい。フォーラムは2時スタートで夕食まで最低4時間を予定しております。例年3時間は軽くオーバーしますので、ちょうどいい時間だと考えております。3日目の夕食は6時ですが、フォーラムの進行具合によっては遅れる可能性もあります。3日目の夜はカウンスルファイヤーを行います。キャンプファイヤーは皆さん、良くご存じだと思いますが…火を囲み輪になってにぎやかにキャンプソング等を歌ったり、ゲームをしたりしますが、このカウンスルファイヤーというのは火を見つめて、皆さん方で静かに物事を考えて頂く、その中には今井先生のご講話等も入りますが、今回このRYLAセミナーに参加した意味などを自分自身で最終的に見つめ直していただくという主旨となっております。そして3日目の夜、カウンスルファイヤー

が終わりましたら最後のキャビンタイムと言うことで、皆さんなるべく仲良くなって帰って下さい。最終日は朝食後、この日だけ閉校式の関係があり、講義のスタート時間が9時となっております。今井先生の総括の講義を約2時間から2時間半予定しております。その後、引き続き閉校式を行いまして、植樹、記念撮影等を行い、最後に皆さん方への唯一の宿題であります、感想文を書いていただきます。感想文を書き終わった方から順に昼食をして頂いて、離島となります。ですからあえて離島の時間は決めておりませんが、大体12時半から1時半の間に皆さんこの島を離れる予定となろうかと思えます。大まかな流れは以上です。また詳しいことにつきましては各班ごとのカウンセラーの指示に従って頂きたいと思えます。最初の開講式にも若干の注意事項はあったと思えますが、この4日間、皆様がた、カウンセラー、そして私たちロータリアンが楽しくいい思い出が作れるようなRYLAセミナーにしたいということで、冊子7ページをあけていただけますか、「RYLA受講生の皆様へ」というページがあると思えます。当たり前のことをかいてありますが。当地区のRYLAは20歳以上と言う年齢制限を設けております。未成年はおりません。それは我々の考え方の原点でございます。順番に読み上げますとまず、「出会いを大切に」さきほどから色々な話があったと思えますが、こういう所で初めて知り合ってますね、どうか仲良くなって帰っていただきたい、またセミナー終了後も同窓会、また学友会組織等もありますので長い長いお付き合いをお願いしたいと考えています。2番目に「自由を大切に」ということですが、皆さん20歳以上の大人ですから、自主自立を前提にしたスケジュール、要するに細かい事は書いてありません。何をすべきなのか何をしてはいけないのか、それは当り前のこととして分かっているものと考えております。非常識な事はないとそのように信じておりますので、自分

を律してこの4日間取り組んで頂きたいと思えます。ただ、例年そうは申しましたが、私もカウンセラーをやらせていただいたことがあるのですが、最近の携帯電話の普及とともに、身近にそういう電子機器があるために、皆さんが話し合いをしている時にでもメール等はこちらの都合もお構いなしに入ってきます。それに思わず返信してしまうといった受講生も見受けられました。できるだけ班の皆さんと一緒にいる時間を大切にしたい。メールを送ってくる友達とはまた帰ってからゆっくりと話が出ると思うので、できるだけみんなといる時間を大切にしてください。時間は万物の共有なので、班のみんなとの共有時間だと思って大切にしてください。3番目にも「時間を大切に」と書いてありますけど。それから「自然を大切に」ということですが、これは後で余島の所長から色々な注意事項があると思えます。素晴らしい自然に囲まれた余島でございます、ちょっとした不注意で火など出したら、ここには消防車はございません。バケツリレーで火を消さなくてはなりません。十分に気をつけて頂き、自然を大切にしてください。最後に今回RYLAセミナーに申し込まれた皆さん、出身を見させていただくと1か所の施設から数名の方が参加されていたりします。班を越えて、友達だからとお話したいこ

ともあろうとは思いますが、余島での基本は班単位でございます。ですから班別の行動を原則守っていただきたいと思えます。やむを得ない場合は別にして、むやみやたらに夜のキャビンタイムの時間に他の班のキャビンへ行ったりしないでください。その班は非常に重要な事を話し合っている最中かもしれませんし、それを壊さないためにも基本的なマナーを守っていただきたいと思えます。

私の方からは以上です。細かい注意事項につきましてはカウンセラーから説明があらうかと思えますので聞いていただきたいと思えます。

それではこの余島の施設紹介、また注意事項につきまして神戸YMCA余島野外活動センター施設長の松田康之さんより説明して頂きたいと思えます。

○松田所長 皆さんこんにちは。外はすごくいいお天気でポカポカとして春の陽気となっています。ようこそ余島へおいでくださいました。今紹介していただきました神戸YMCA余島野外活動センターの所長をしております松田と申します、よろしくお願ひします。

一番大事な事ですね、余島にこられた皆さんに願ひする一番大事な事は、先程、おっしゃられましたが火事なんですね。消防車は来れな



いし、消化栓もないですから火事が起きますと、もう燃え尽きるのを待つだけということになってしまいます。タバコは食堂の入り口と最初に皆さんが受付した事務所の前に灰皿が置いてありますのでそこで吸うようにして下さい。今、一番燃えやすい時期となっておりますので、決して歩きたばこやポイ捨てなどしないようお願いいたします。

もうひとつ、これは燃えてしまわないのでこちらはいいのですが、皆さんが困ることがあります。この施設は34年目に入ります。全体が昔のままの作りですから、キャビンで電気を点けて、エアコンをつけ、複数ドライヤーをかけるのとブレーカーが落ちてしまいます。皆さんの家ではそんなことはないと思いますが、余島は電気の容量が小さいので毎年、落ちています。なるべく落ちないようにして頂きたいというのと、ブレーカーが落ちた経験のない方が多くて夜中に電話がかかってくる、慌てずに玄関入ったところにブレーカーがありますのでレバーを上げれば復旧します。できるだけ自力で解決して頂きたいと思います。

皆さんのお手持ちの小冊子8ページに余島マップがあります。散策の際、見て頂けたらと思います。その地図の下の方にある妻恋峠って見えますか。この妻恋峠と言うのは非常に景色が良くて、上がる道もあるのですがその道がいま崩れやすくなっています。崩れると30メートル下まで落ちてしまいますのであまり近寄らない方がいいかなと思います。そこが一番危険かと思いますが、自然がいっぱいです。そろそろ動物も動き出しますのでむやみやたらに茂みに入らないようにして下さい。色々な小鳥とか、幻の白いたぬきとかいますから自然とも仲良く過ごしていただきたいと思います。世の中が暗くなってしまう時期にそれでもRYLAをするということで、ここにロータリ

アンの方も集っていますし、皆さんも参加されています。共感して寄り添う、東日本大震災の被災者の方の気持ちを思う、共感する心も大事だと思いますし、逆に皆さんの若いパワーで勇気を伝えて行くということも大切なことだと思いますから、是非この3泊4日あまり暗くなることなく元気いっぱい過ごしていただきたら余島の自然が受け止めてくれると思いますので、それぞれ120パーセントの力で過ごしていただきたいと思います。4日間どうぞよろしく申し上げます。

○司会 ありがとうございます。

それではお待ちかね、カウンセラーの発表をしたいと思います。

A班のカウンセラーをしていただきます。男性カウンセラー 2680地区赤穂ロータリークラブ、井本学明さんでございます。どうぞ前の方へ。そして女性カウンセラー 2670地区高松北ロータリークラブのご夫人でございます平井英津子さん、前の方へ。

続きまして、B班。男性カウンセラー 2670地区美馬ロータリークラブ、森 廣一さん、女性カウンセラー 2680地区西宮恵美寿ロータリークラブ 大江与喜子さん、どうぞ前の方へ。

C班。男性カウンセラー 2680地区柏原ロータリークラブ、坂東隆弘さん、女性カウンセラー 2670地区高松北ロータリークラブ、荻田智子さんです、どうぞ前へ。

最後にD班ですが、2670地区松山ロータリークラブ、米山徹太さんと2680地区伊丹ロータリークラブのご夫人、吉岡喜久子さんです。

この8名の方々が今回皆さんのカウンセラーとして寝食を共にして皆さんのお世話をさせて頂き、相談にものっていただく方々です。それでは各班の受講生を発表致します。

オープニングパーティー (1日目)

RYLA 小劇場 「どのようにしてロータリーは生まれ、発展したか」

制作：パストガバナー (2680地区) 安平 和彦

出演：2670・2680地区ガバナー、パストガバナー、
ガバナーエレクト、ガバナーノミニ、地区委員他

RYLA 小劇場

「どのようにしてロータリーは
生まれ、発展したか」

製作 RI D2680PDG 安平和彦
出演 RI D2670・2680 DG・PDG
両地区委員 ほか

(一部スライド引用 RI2680 田中毅PDGより)

第1幕 「ロータリーの発生」

19世紀末のシカゴ。それは成功を夢見た人
たちが集まった無法と腐敗の街でした。

成功を夢見た人たちが集まった無法と腐敗の街

19世紀末のシカゴ



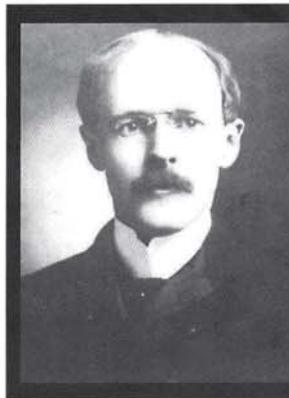
すべての人はライバル。みんな疑心暗鬼の中
で、孤独感と疎外感に加えて、食うか食われる
かという過酷な自由競争に敗北するかもしれな
いという恐怖感がつきまといっていました。



すべての人はライ
バル

孤独感と疎外感に
加えて、過酷な自
由競争に敗北する
かもしれないという
恐怖感がつきま
とっていた。

そんな中で、ロータリーの創設者である弁護
士のポール・ハリスは、1896年2月にシカゴの
街で弁護士事務所を開きました。しかし、シカ
ゴの街に地縁も血縁も持たないポールにとっ
て、大都市シカゴでの生活は、孤独感と疎外感
にさいなまれる毎日でした。



■ ロータリーの創設者
ポール・ハリス

■ 1896年2月27日
シカゴ、ループ地区
で弁護士事務所を
開設

■ 孤独感と疎外感

■ 1900年夏 地域住
民と親しく付き合う
友人の姿から、ロー
タリー創立のヒント
を得る

そんなとき、1900年の夏に、シカゴ郊外にあ
る友人弁護士の別荘に招かれたポールは、友人
が親しく地域住民と付き合う様子を見て、ロー
タリー創設のヒントを得たのでした。

(シーン) 友人の別荘地

(出演者)

ポール・ハリス／友人の弁護士／住民A／
住民B (女性)

友人弁 「やあ、トム、元気かい？ 景気はど
うかね？」

住民A 「やあ、先生。お久しぶりです。お見
かけどおり元気にはしていますが、景気
の方はもう一つですわ」

友人弁 「そうかね。まあ気張ってやってよ」

住民A 「有り難う、先生。先生もお達者で」

友人弁 「有り難う」

友人弁 「はい、ジーン。元気そうだね。亭
主は達者かね？」

住民B 「あら。先生、お久しぶり。それが、
うちの亭主ときたら、毎日毎日お酒
ばかり飲んで、さっぱり仕事をしな
いの。また今度、離婚の相談に乗っ
てよ。」

友人弁 「あはは、そうかね。でも夫婦げんか
は犬も食わないと言うからね。まあ、
ご亭主の人の良いことはみんなの認め
るところだから、少しぐらいは大目
に見てあげて、仲良くすることだね」

住民B 「有り難う、先生。ほんとにうちの主
人はお人好しなんだから。それじゃあ、
もう少し仲良くしていることにしま
すわ」

友人弁 「そうだね、それがいいよ。それじゃあ、
またね。」

友人弁 「ポール、みんないい人ばかりだろう。
みんな、それぞれ違う商売をしている
から、互いに疑心暗鬼もないし、競争
もないし、仲良く生活している人ば
かりだよ。」

ポール 「なるほど、本当だね。まるで目から
うろこだ。異業種なら争いもないし、
仲良くできる筈だね」

友人弁 「そうだろう。異業種の人たちなら、
互いに助け合うことさえできるん
だよ。」

ポール 「なるほど、なるほど。大変よいヒ
ントをもらったよ。有り難う」

第2幕 「ロータリー・クラブの結成」 その1

1905年2月23日、マダム・ガリの店で夕食を
とったポールとシルベスター・シールは、ユニ
ティ・ビルの711号室にあるガスターバス・ロ
アの事務所に向かいました。

1905年2月23日、マダム・ガリの店で夕食をとったポール
とシルベスターは、ユニティビル711号室にあったガスター
バス・ロアの事務所に向かいました



ポール・ハリス



シルベスター・シール

そこには、ハイラム・ショーレーとガスター
バス・ロアが待ち受けていました。

(シーン) ガスターバス・ロアの事務所

(出演者)

ポール・ハリス／シルベスター・シール／

ガスターバス・ロア／ハイラム・ショーレー

ポール 「やあ、ロアとショーレー、お待たせ
した。彼が、シルベスター・シールだ。」

シール 「初めまして、石炭商を営んでいるシ
ルベスター・シールです。よろしくお
願ひします」

ショーレー 「ハイラム・ショーレーです。洋

服屋です。よろしくお願いします」

ロア 「鉱山技師のガスターバス・ロアです。よろしく。」

ポール 「この4人が志を同じくするチャーターメンバーだ。この4人を中心に、もう少し同士を募ろうよ。」

全員 「それがいい。」

ポール 「それでは、2週間後に私の事務所で、第2回の会合を開こう」

全員 「了解！」



シルベスター シール (石炭商) ポール ハリス (弁護士) ガスターバス ロア (鉱山技師) ハイラム ショーレー (洋服屋)

第3幕 「ロータリー・クラブの結成」その2

こうして、彼らは同志を募りました。その結果、2週間後の3月9日にポールの事務所で開かれた第2回会合では、2人の参加者があり、さらに2週間後の3月23日にシルベスター・

シールの事務所で開かれた第3回会合では、新たに3人の参加があり、合計9人に達しました。

(シーン) シルベスター・シールの事務所
(出演者)

ポール・ハリス (弁護士)

シルベスター・シール (石炭商)

ガスターバス・ロア (鉱山技師)

ハイラム・ショーレー (洋服屋)

ハリー・ラグルス (印刷屋)

ウィリアム・ジェンソン (不動産屋)

アーサー・アーウィン (洗濯屋)

アル・ホワイト (オルガン製造業者)

チャールズ・A・ニュートン (保険業者)

ポール 「みんな、今日で同士が9人になった。いよいよ機は熟したと思う。規約を定めて役員を選ぼう」

全員 「賛成！」

ポール 「私は、まず二つの大原則を決めておきたいと思う。ひとつは、一業一会員制の原則で、もう一つは、例会出席強制の原則だ。まず一業一会員制の原則だが、この厳しい資本主義の嵐が吹き荒れているシカゴの町で、われわれは、食うか食われるかの過酷な自由競争に明け暮れている。同業者がいると、なんとなく疑心暗鬼になって、お互いに気



持ちが落ち着かない。そうだろう。だから同業者を排除して、異なる職種から一人だけを選ぶことにしたい。」

シール 「それはいい考えだ。賛成するよ」

全員 「われわれも賛成だ」

ポール 「ありがとう。それじゃそのように決定しよう。」

「次に、例会出席強制の原則だが、わたしは、連続4回例会を欠席した者は、自動的に会員資格を失うことにしたい。われわれは、このシカゴの町の弱小な実業人や専門職業人だ。お互いに心を通わせ、助け合って行こうと誓い合った仲間だ。その誓い合った仲間が2週間に1回の例会に連続4回も出てこなければ、2ヶ月間も顔を合わせないことになる。そのような者は仲間の資格がないと考えるのだ。どうかな？」

ロア 「なるほど。少し厳しいルールだが、ポールの言うとおриだと思う」

ラグルス 「おれも賛成だ。われわれは、お互いに仲良くまた助け合ってやっというて誓い合った仲間だ。当然だろう」

全員 「そうだ。我々も賛成するよ」

ポール 「それじゃあ、決まった。」

「さて、次は役員を選任だ。わたしは、このシールの事務所で開かれた今日の会合にちなんで、シールに会長に就任してもらいたいと希望する。」

シール 「とんでもない。このクラブを作ろうと計画したのはポール、君ではないか。君が初代の会長に就任すべきだよ。」

ポール 「シール。君も僕と一緒にアイデアを考えた仲間じゃないか。君がやれよ。みんなもいいね？」

全員 「それでいいよ」

シール 「ありがとう、みんな。それではみんなの友情に感謝して初代の会長にならせてもらおうよ。ついては、記録担当幹

事にはショーレー君に、通信担当幹事にはジェンスン君に、会計にはラグルス君にお願いしたいが、よいかね？」

ショーレー／ジェンスン／ラグルス

「分かりました」

シール 「みんなもいいね？」

全員 「賛成」

ポール 「ありがとうみんな。さて最後に残ったのが、クラブの名称だ。何がよいかね？」

ラグルス 「ブースター・クラブはどうかな」

アーウイン 「コンスピレーターズ・クラブはどうかな」

ジェンスン 「それよりシカゴサークルはどうだい」

ニュートン 「いやいや、ザ・ラウンド・テーブル・クラブが良いよ」

みんな 「わいわい、がやがや・・・」

誰か（シール） 「みんな、聞いてよ。われわれは、例会を回り持ち、ローテーションでやっているから、ロータリー・クラブっていうのはどうかな。」

ポール 「それはいいな。みんなもどうだい？」

全員 「わかった。それにしよう。」

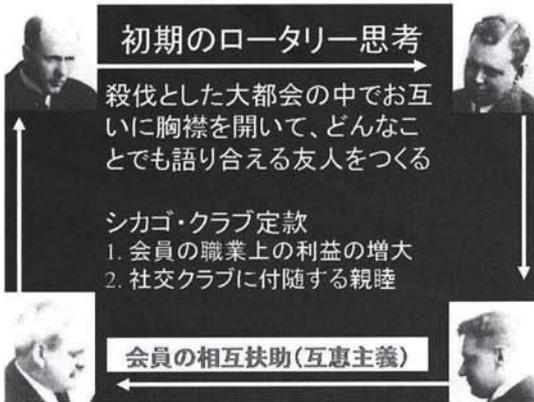
ポール 「これですべて決まった。それでは、シール。イニシエーション・スピーチをやれよ」

シール 「それじゃ、石炭業界の展望と題して、卓話をしよう」

第4幕 「奉仕理念のめざめ」

こうして、9人の仲間は、2週間に1回の会合でお互いの親睦を深めながら、会員を増やし、互いに原価の取引をしたり、互いの職業上の知恵の交換をして、助け合いました。その結果、会員達は、次第に豊かになっていきました。そんなとき、第2代目の会長となったアル・ホ

ホワイトが、弁理士のドナルド・カーターに入会を誘いました。



(シーン) カーターの事務所

(出演者)

アル・ホワイト

ドナルド・カーター (弁理士)

ホワイト 「カーター君、どうかね、ロータリー・クラブに入会しないかね。同業者を排除しているから、お互いに腹を割った裸の付き合いが出来るし、なによりも原価の取引を始めとするお互いの助け合いによってみんな隆々と栄えていけるんだ」

カーター 「趣旨は分かったよ。だけど、君たちは隆々と栄えていいだろう。だけど、入会できない者はどうするんだ。それに、そのような会員同士の単なる互恵主義は、クラブ内部の利益の交換に過ぎず、社会に対する意義を欠いている。そんな利己的なことに終始するクラブには、将来性も入会の意義も認められない。まっぴらご免だね」

ホワイト 「そうか、君の考えはよくわかった。ポールに相談してみるよ」

(シーン) ポールの事務所

(出演者)

ポール／アル・ホワイト

ホワイト 「ポール。カーターに入会を勧めた

ところ、そんなことを言われて断られてしまったよ」

ポール 「ふーむ。だけど、カーターの言うとおりだ。わかった、それじゃ定款を変えよう」

このようにしてシカゴ・クラブは、1906年12月に定款を改正して、第3条に「シカゴ市の利益を推進し、市民のなかに市に対する誇りと忠誠の精神を普及すること」を追加しました。

■ 1906年12月シカゴ・クラブ定款を改正

第3条

「シカゴ市の利益を推進し、市民のなかに市に対する誇りと忠誠の精神を普及すること」

これにより、ドナルド・カーターも喜んで入会し、初期ロータリーの伝統形成に大きな役割を果たした

これによって、ドナルド・カーターも喜んで入会し、初期ロータリーの伝統形成に大きな役割を果たしました。

以来、ポールは、「クラブの親睦で培ったエネルギーを、挙げて世のため人のために放流しよう。」と言って、奉仕とロータリー・クラブの拡大を提唱しました。

一方、ロータリー・クラブは職業人の集まりですから、職業人の倫理運動という側面で奉仕の理念を高めていきました。

■ 以来、ポール・ハリスは、
「クラブの親睦で培ったエネルギーを、挙げて世のため人のために放流しよう」
→ 奉仕とロータリーの拡大を提唱

■ 一方、ロータリーは職業人の集まり
→ 職業人の倫理運動という側面で奉仕の理念を深めていった

第5幕 「奉仕理念の深化」

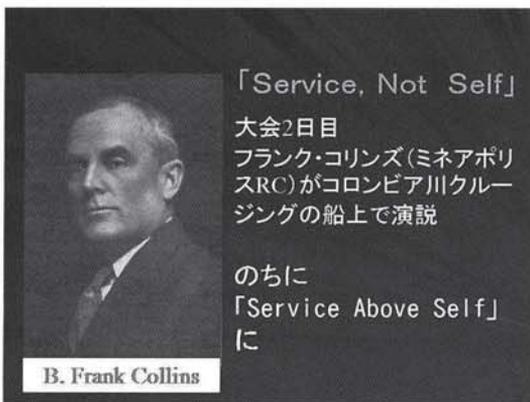
1911年8月にポートランドで全米ロータリー・クラブ連合会の第2回大会が開催されました。

全米ロータリークラブ連合会第2回大会

1911年8月21-23日 於 ポートランド



このとき、フランク・コリンズが、「Service, Not Self」ということを発表しました。これが後に「Service above Self」(超我の奉仕)として、ロータリーのモットーになりました。



また、同じ大会の3日目には、アーサー・フレデリック・シェルドンが、「20世紀における経営の科学は、奉仕の哲学である。すなわち、他人に最もよく奉仕する者が、最も多く報いられる」(He profits most Who serves best)と発表し、満場一致で大会宣言に採択され、のちにこの標語もロータリーのモットーとして採用されました。

決議23-34 第1条

ロータリーはひとつの人生哲学

(Fundamentally, Rotary is a philosophy of life)

利己的な欲求
(The desire to profit for
one's self)

他人への奉仕感情
(the duty and consequent impulse to
serve others)

相反する二つの心の葛藤を調和

(Undertakes to reconcile the ever present conflict)

「利己と利他の調和」の哲学

第6幕 「ロータリーとは何か」

その後、ロータリーのあり方については、さまざまな意見があり、意見の対立によりロータリー分裂の危機をも生みましたが、1923年に至って、これらの対立を止揚・解消する大切な決議がなされました。

その決議(決議23-34)の第1条には、「ロータリーは一つの人生哲学である。それは、利己的な欲求と、義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。



そして、この利己と利他の調和の哲学は、「Service Above Self」(超我の奉仕)の哲学であり、「He profits most Who serves best」(最もよく奉仕する者、最も多く報いられる)の実践倫理原則に基づくものである」としているのです。

すなわち、ロータリーは、私たちの生き方を教えてくれる人生哲学であり、それは、「利己と利他の調和」の哲学なのです。

「利己と利他の調和」の哲学

この利己と利他の調和の哲学が、

「The philosophy of life」に外ならない。

この哲学は

「Service Above Self」の哲学であり、

「He profits most Who serves best」の実践倫理原則に基づく

この「四つのテスト」は、1931年に、シカゴ・クラブのハーバート・テイラーが、倒産寸前のアルミ食器会社の再建を引き受けたときに考え、実践したスローガンです。

これがその「四つのテスト」です。

■ The Four-Way Test

Of the things we think, say or do

- 1) Is it the TRUTH?
- 2) Is it Fair to all concerned?
- 3) Will it build GOODWILL and BETTER FRIENDSHIPS?
- 4) Will it be BENEFICIAL to all concerned?

■ 四つのテスト

言行はこれに照らしてから

1. 真実か どうか
 2. みんなに公平か
 3. 好意と友情を深めるか
 4. みんなのためになるか どうか
- (文献委員会の翻訳)

第7幕 「四つのテスト」

最後に、全世界のロータリアンが、その行動原則にしている「四つのテスト」についても紹介しておきましょう。

四つのテスト



1931年、倒産寸前のアルミ食器会社の再建のために考え、実践したスローガン

ハーバート・テイラー

ちょうどその頃、印刷物を発注するために競争入札をしたところ、ある業者が他の業者より格段に安い価格で落札しましたが、落札の後でその業者は見積計算に500ドルの誤りを発見しました。

印刷業者 「あいたた！ えらい間違いをしてもうた。500ドルも計算間違いをしてもうたがな。うちのミスやからしようがないけど、何とかならへんか、会社にお問い合わせしてみよう。」



(シーン) テイラーの会社の取締役会

(出演者)

テイラー (社長) / 取締役A / 取締役B /
その他の取締役約3名

社長 (テイラー) 「こんなことを言ってきたの
だが、みんなはどう考えるかね」

取締役A 「こんなもん、業者のミスやから、
業者に責任をとってもらいよう
がないと思います。ただでさえ、うち
の会社だって、大変苦しい状態じゃな
いですか。社長、放っときましょうや。」

取締役B 「それはそうだが、それでは、我が
社の社是となった「四つのテスト」の
第2に反することにならないかね」

取締役A 「なるほど、そうだったね。私とし
た者が大きな失言をしてしまった。社
長、私の発言を取り消して、500ド
ルを業者に増額してやることを提案し
ます。」

社長 「皆さん、こういう意見が出ていま
すが、どうですか」

他の全取締役 「賛成です！」

社長 「私も大賛成です。では、そう決ま
しょう。」(全取締役 拍手)

このことがまもなく社の内外に伝わり、高い
評価を受けることになりました。

(シーン) 街で

(出演者)

取引先A / 従業員B / 消費者 (女性)

取引先A 「君んとこの会社はたいしたもんだ
ねえ。ほれほれしたよ。これからはよ
り一層、支援させてもらうよ。頑張っ
てくれたまえ。」

従業員B 「有り難うございます。私たち従業
員も本当にうれしいです。こんなすば
らしい経営陣の下で働く我々は幸せで
す。ますます頑張って力を合わせて懸

命に働きます。見ていてください。」

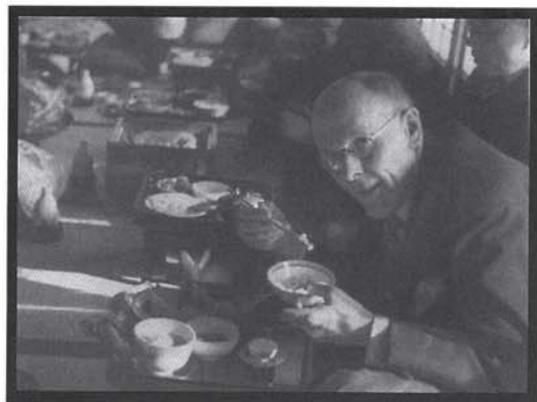
消費者 「本当に感激したわ。こんなすばらし
い決断をする会社だから、きっと製品
の品質もすばらしいに違いないわ。今
後もこの会社の製品を愛用するわ」

このようにして、この会社は、5年後には40
万ドル以上に及ぶすべての借金を返済し、15年
後には100万ドルの配当金を株主に対して支払
うことができるようになったのです。

第8幕 「ボールの回想」

このようにして、ロータリーは、大恐慌や世
界大戦を経ながら、全世界で拡大・発展を遂げ
ました。

ボールは、1935年にマニラで開催された第3回
太平洋地域会議に出席するために日本に立ち寄
り、列車で京都にも立ち寄りました。



(シーン) 京都の料亭

(出演者)

晩年のボール / 日本人ロータリアン

ボール 「おお、芸者ガール、ナイスね。京料
理もベリーグッドね」

日本人 「ボールさん。あなたの創ったロータ
リー・クラブは、アメリカやヨーロッ
パだけでなく、アジアの各地にも日本
にもクラブができて、すばらしい発展

をしています。」

ポール 「ええ、わたしも大変うれしいです」

日本人 「それじゃあ、あなたは、最初からロータリーがこのように発展し、大をなすことを予測していたのですか」

ポール 「ノー。まったく予測していませんでした」

日本人 「それでは、なぜあなたはロータリーを創ったのですか？」

ポール 「それは・・・、(沈黙) それは・・・それはね、ただ淋しかっただけなんだよ」

ポールは、太平洋戦争後の1947年に亡くなり

ました。しかしながら、ロータリーは、その後も拡大発展を続け、今日、200以上の国と地域に、3万4000以上のクラブと121万人以上の会員を擁する巨大な組織となりました。

そして、ロータリーでは、会員の職業倫理の向上を呼び掛け、ポリオ撲滅活動を始めとする人道的プログラムや、奨学金の授与などの教育的プログラムを実施し、そして若い人たちを育てるプログラムとして、インターアクト・ローターアクト・RYLAなどのプログラムを提唱しているのです。

これで、RYLA笑劇場を閉幕します。ご笑覧、有り難うございました。



思い出



オープニングパーティー



RYLAでおなじみ「われはふくろう」の合唱

ロータリアンの夕べ

RYLAセミナー顧問・パストガバナー(2680地区)

深川 純一 (伊丹RC)



今回のRYLAは、始まってから丁度33年目です。そこで、33回忌ではありませんが、33年前の第1回RYLAのことを思いだして、強烈な印象として未だに私の心にあることを申し述べたいと思うのであります。

実は、須磨寺の小池弘三和尚が昨年度神戸第2グループのガバナー補佐をされたとき、IMで「わが理想のロータリアン」というテーマで講演をして欲しいとという依頼を受けました。私にとって理想のロータリアンは、沢山おられます。戦前のガバナーでは、日本の初代ガバナー米山梅吉先生、第2代井坂孝さん、第3代村田省蔵さんなど素晴らしい人達が居られますが、いずれも書物とか話を聞くとかして知っているだけでありまして、親しくその警咳ケイガイに接したことはありません。そこで、私が特に親しくお付き合いをしていただいた人といえば、西宮ロータリークラブの執行孝胤シユギヨウタカトモパストガバナーも理想のロータリアンの一人です。

しかも、執行先生は、第1回RYLAの時のガバナーでありました。そこで、そのRYLAのこと等にも触れながら先生の思い出を話したいと思うのであります。

実は、今年は、執行先生の13回忌に当たりますので、先生の思い出を語るには相応フサフサしいと思うのであります。

先ず、一首の都々逸から話に入って行きたいと思います。『お酒飲む人花なら蕾、今日も咲け咲け明日も咲け』実は、執行先生は、こよな

く酒を愛した人でありました。人生の後半は大病を患われたのでありますが、それでも終生酒を愛した人でありました。都々逸をもう一首、『明けの鐘ゴンと鳴るとき、三日月型の櫓が落ちてる四畳半』何時も酔っぱらっていた私には何のことだかよく判りませんが、奥様をこよなく愛しておられた先生も、このような遊びはなさらなかったように思うのであります。ひたすら酒仙の如く酒を愛された人でありました。殊に、執行先生は、ドイツワインを好まれました。

何故、酒の話から入ったのかと言いますと、シンポジウムという言葉がありますが、これは昔、哲学者プラトンが森の中で酒を酌み交わしながら愛を語ったという故事を思い出したからであります。そして、実は、この話は、昔、北の新地で酒を飲みながら執行先生から伺ったことでもありました。

なお、SymposiumのSymというのは「一緒に」という古代ギリシャ語であり、posiumというのは「飲む」と謂うことでもあります。詰まりSymposiumとは、楽しく飲み且つ語る会ということでもあります。ただ一つ約束があります。それは、楽しく酒を酌み交わしながら、お互いに腹藏なく意見を語る会であって、その際、お互いに相手の弱点を突くのではなく、お互いの知識を交換して楽しく切磋琢磨すると謂うことでもあります。

さて、そこで、酒を酌み交わしながら愛を語る、愛という言葉は日本人の一番好きな言葉だと謂われていますが、ロータリーではどうで

しょうか。

1915年のサンフランシスコの国際大会で採択された『全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓』所謂『ロータリー道德律』も、その最後の「纏め」においてこの倫理訓の中心概念は『愛』であると謂っています。

では、愛とは、そもそも何ぞや、と謂うことになる、それには答えられないのであります。何故ならば、愛はロータリーの究極の到達点だからであります。そこから先はないのであります。したがって、わが理想のロータリアンを語る際には愛を抜きにしては語ることは出来ない所以であります。

枕を振るのはこれ位にして本論に入りたいと思います。

ところで、執行先生については、本地区のロータリアンでありましたから、そのお人柄とかロータリー的な業績についてはよくご存じの方も多いと思います。先生は、平成10年10月30日午前2時5分、享年79歳でこの世を去られました。当時まさに巨星落つのが深かったのであります。先生は、1959年西宮ロータリークラブに入会され、1975年度クラブ会長、その3年後の1978年度には58歳の若さで本地区のガバナーに就任されています

私が先生と親しくしていただいたのは勿論ロータリアンになってからでありますから、若いときの先生のごことは存じません。若い頃は剛直な厳しい先生であったというようなことも聞きましたが、私の存じ上げている先生は、いつもニコニコとして人を思いやる優しい心を持った先生、ヒューマニズムに満ち溢れた先生でありました。

先生の印象を一言で集約しますと、「こだわりのない心」を持った人、将に万人平等の思想を持った人でありました。私のような年下の一介のロータリアンに対しても何時も平等・対等にそして謙虚に友達として付き合い合ってくださいま

した。即ち、先生は老若男女、社会的地位の如何に拘わらず、すべての人に対して平等・対等に接して居られました。そこで、この「こだわりのない心」というのは、ロータリアンとして必要欠くべからざるものでありますので、このことについては、少し触れておきたいと思いません。

さて、私達ロータリアンにとって「こだわりの無い心を持つ」とは具体的には一体どのようなことなのでしょう。

まず、私達は、所謂常識というものにこだわらないで、自由なものの考え方を身につけることが大切だと思うのであります。

昔、中国に首山省念シュゼンシヨウネンという禅僧がいました。或る時、修行僧が省念禅師に、「仏とは什麼生？」（仏とは何でしょうか？）と尋ねました。すると省念禅師は、「新婦、驢に騎れば阿家これを牽く」と答えました。

新婦は「嫁」のこと、阿家アケというのは「姑」のこと、驢ロというの「驢馬」のことです。したがって、「新婦、驢に騎れば阿家これを牽く」というのは、嫁が驢馬に乗り、姑が手綱をとっているという情景であります。あたかも、社長が自ら運転して、平社員が後の座席に座っているのと同じ情景であります。

常識的に考えますと、嫁が驢馬に乗り、姑に手綱をとらせるとは怪しからん嫁だということになるのでありましょう。しかし、そのように考えるのは、本来は姑が驢馬に乗り嫁が手綱をとるべきだという常識にとらわれているのであります。即ち、そうでなければならぬ、という常識にとらわれているのであります。

人間は、本来、生まれながらにして自由で平等・対等であるべきであります。

にも拘わらず、世間では「嫁」だとか「姑」だとか、「社長」だとか「平社員」だとか謂うレッテルを貼って窮屈な生き方をしているのであります。

省念禅師は、「嫁が疲れたら嫁が驢馬に乗っ

て姑が歩いてよいではないか、常識にとらわれないで、もっと心を広く、自由に伸び伸びと生きればよいのだ、それが^{ホトケ}仏の教えだよ」と説いているのであります。

ロータリーの世界もこれと全く同じでありまして、今から約8年前の話であります。公式訪問の時、ガバナーの安平先生が自ら運転して、地区幹事の三木先生が助手席にふんぞり返っていたという話を聞いたことがあります。これは如何にも平等対等を旨とするロータリーらしいと思ったことでした。ロータリーでは、このような情景は何ら異とすることではなく至極当然のことなのであります。怪しからんことでもなく、また、微笑ましいことでもない、至極当然のことなのであります。社長が偉くて平社員が偉くないのではありません。同様に、ガバナーが偉くて地区幹事が偉くないのではありません。ロータリーは、ガバナーを特別扱いする傾向があります。ロータリーの世界は、万人平等の世界であります。人間は、本来、自由・平等であるべきでありますから、ガバナーだとか、社長だとか謂う詰まらぬレッテルを剥がして、「こだわりのない心」で自由闊達に伸び伸びと生きる、これがロータリーの心なのであります。そして、執行先生は将にその心を持った理想的なロータリアンでありました。

実は、ロータリーは、このような心を制度的にも保障しているのであります。それは「茶席の論理」を考えれば判りやすいと思います。即ち、茶席には大名も武士も入ります。商人も入ればお百姓さんも入ります。所謂「士農工商」あらゆる社会的地位の人達が茶席に入って参ります。

しかし、大名も武士も茶席に入る時は、みな腰の刀をはずして丸腰で入ります。そして、完全平等対等の立場に立って、一人の人間として静かに茶を喫して去るのであります。これを「喫茶去^{キツサコ}」と謂います。これが茶席の論理であります。

ロータリーもこれと同じように、例会には、地域社会のあらゆる階層の人が入って来ます。大会社の社長も零細企業の経営者も入ってきます。魚屋も八百屋も大病院の院長も個人の開業医も例会に入って来ます。そして、例会では完全平等・対等の立場で心を開いてお付き合いをするのであります。これがロータリーの論理であります。

会員間に上下の関係は一切ありません。したがって、この理は、各クラブの間においても同じであります。親クラブと子クラブとの関係、R Iと各クラブとの関係、クラブ同士の関係、全て平等・対等であり上下の関係は一切ありません。したがってまた、R Iの本部という考え方もないのであります。執行先生は、このR Iの本部という呼び方を非常に嫌っておられました。ロータリーの原理に忠実な先生としては当然のことであります。

ロータリーの本部という考え方は、昔から一切ありませんでした。戦後間もなくのこと、不勉強なロータリアンが不用意にR Iの本部という言葉を使って、帯広畜産大学の宮脇^{アツシ}富先生にこっぴどく叱られたという話が残っています。宮脇先生は定款細則派のオーソリティでありました。

ロータリーには、本部などという上意下達の組織は一切ないのであり、これは中央事務局と呼ばれていたものなのであります。したがって、R Iが上から各クラブを支配するような関係ではないのであります。ところが、今は、本部(Headquarter)と言っています。そして、R I会長のことをHighest officerなどと称しています。執行先生が嘆かれるのも当然であります。

要するに、原理・原則やルールを守る、そしてロータリーの伝統を守りながら「こだわりのない心をもつこと」これは、ロータリアンたるべき者の心構えとして肝に銘ずべきことだと思ふのであります。

ただ一点、注意すべきは、「親しき仲にも礼儀あり」目上の人^は勿論のこと、同僚や後輩であっても礼儀に欠けるような言動は慎むべきであります。これは、人間が社会生活を営むに際して本質的に大切なことであり、目に見える現象的なことではないのであります。礼儀を欠くとその人自身の品位を失ってしまいます。

今、目に見える現象的なことと申しましたが、ロータリーは、現象にこだわらずに本質を見抜く思考であります。このことについてもう少し補足しておきます。

骨隠す皮には誰も迷いけん
美人と謂うも皮のわざなり

これは足利六代将軍に仕えた文武両道の武士、蜷川新左衛門の作品であります。

これに乗って、その師匠である一休禅師(1481年、88歳寂)が詠んだ一首は、

皮にこそ男おんなのへだてあれ
骨には変わる跡形もなし

というのであります。二つとも大した作品ではありませんが、昨今の滔々たるエロティシズム文化に対するレジスタンスとしては意味があるかと思えます。私達は、日常生活では、美人だとか、イケメンだとか、目に見える現象に惑わされて、一皮むいたその奥にある骸骨を想像することは出来ません。更に、目に見えない心の状態を見抜くことは出来ません。

この二首の歌は、この楽しい憂き世も所詮は男と女、現象にとらわれずに本質を見れば、美人だと言っても一皮むけば皆同じ骸骨だよ、このような目で見れば、人間は皆同じく平等対等なもの、火葬場で焼かれれば皆同じ骨に変わってしまう。これが人間の本質であることを心に留めておけ、と謂っているのであります。

要するに、この世の中で生活する以上は、目に見える現象的なことにこだわらずに、いつも本質を見つめながら自由闊達に生きることが大切だと思うのであります。これが真のロータ

リーの中核にある考え方であります。

ただ、誤解しないように注意しなければならないことは、物事にこだわらないということは、何でも自由にしてよい、けじめがないということではありません。

ロータリーは、「組織立てられた親睦」であります。したがって、皆が仲よくなる親睦の世界にあっても、ロータリーの原理・原則や基本的なルールは守らなければなりません。

この点、執行先生は厳しい人ではありました。しかし、だからと謂って決して「教条主義」ではありませんでした。例えば、ロータリーでは一般に時間厳守をやかましく謂います。これは創立以来の精神伝統であります。したがって、私達は、先輩から例会の開始・終了も原則として時間を守るように厳しく教えられてきました。

しかし、先生は、大事な卓話の場合などには時間を延長してもよいと云っておられたのであります。これは、会長の挨拶や報告の時間が長くなって卓話の時間が短くなることは卓話者に失礼だという気持もありましたが、より根源的には、ロータリーでは何が大切なのかという本質を見抜く思考を持って居られたからであります。将にこれは、現象にとらわれない心、こだわりのない心の現れであります。

また、執行先生は、2001年の規定審議会における一業一会員制の原則の廃止というロータリーの大問題についても、あまり悲憤慷慨して議論されるようなことはなかったように思います。恐らくこのような現象の問題は超越しておられたのでありましょうか。常にロータリーの本質を見つめながらロータリーを楽しんで居られたように思うのであります。

この点については、もう少し補足しておきたいと思えます。

実は、先生は、「^{カギユツ}蝸牛」という俳号をもって昔から俳句を嗜んで居られました。

慥か、元阪大医学部教授の中村若沙先生の主宰

する俳句雑誌「いそ菜」に投句して勉強されていたように思います。先生の著書「思い出の雑記帳」にも素晴らしい俳句が沢山収められています。そこで一つの俳句から先生のロータリー観とでも謂うべきものを紹介しておきます。

爛々と昼の星見え菌生え

高浜虚子

これは、司馬遼太郎の「坂の上の雲」に登場する正岡子規と共に、日本の近代俳句を指導した高浜虚子の代表句の一つであります。終戦直後の昭和22年の作品であります。当時、私は未だ17歳でありました。

国破れて山河あり。当時、戦災で何もかも焼き尽くされ、荒涼とした日本の原風景でありました。工場の煤煙もなく澄み切った大空。公害もなく瑞々しい山川草木。そして、国民は、食べるものも着る物も住むところもなく、私達は貧困のドン底にありました。

そのような状況の中で、神経の研ぎ澄まされた高浜虚子が見たものは一体何か。それは真っ昼間の大空に爛々と輝く星、そして、荒れ果てた大地に群がり生えている菌であったというのであります。私は、この一句から、太陽の限らない恵みと、生きとし生けるものの逞しい生命力を感じるのであります。

ところで、この一句の意味は一体何か。真っ昼間の大空に爛々と星が輝いて見える、そして菌が群がり生えている、という将にこの世のものとも思えない異様な情景であります。

しかし、菌は目に見えるものでありますが、真昼の星は目に見えるはずがありません。しかし、虚子はその星が見えるというのであります。一体、彼は何を言わんとしているのでしょうか。

私の解釈は、目に見えている菌は現象の世界の情景であります。一方、目に見えない昼の星は本質の世界の情景であります。現象の世界というのは、有名な般若心経に所謂「色即是空」の「色」の世界、即ち、美人だとか、肌の色が

白いとか黒いとか、背が高いとか低いとか、所謂、私達の目に映っている世界、これが現象の世界であります。

これに対して、本質の世界というのは、例えば、「月落ちて天を離れず」という言葉がありますように、お月様が西の空に沈んでも、月は太極即ちこの宇宙を離れる訳ではありません。したがって、この「月落ちて天を離れず」という言葉は、この宇宙をす統べてある物事の真理を述べたものなのであります。即ち、星というものは真っ昼間は目に見えなくても、厳然として大空に存在し、輝いている、というのであります。これが物事の本質であります。

したがって、虚子は、この世の中には、菌という目に見える現象の世界と、真昼の星という目に見えない本質の世界があるということを感じ取って、その時の感懐を花鳥諷詠詩としての俳句に詠んだのであります。

そこで、私は、ロータリーの思想の世界でも「目に見える現象」に惑わされることなく、何時も「目に見えない本質」を見抜くことを忘れてはならないと思うのであります。実は、執行先生のロータリー観も、こだわりのない心をもって、物事の本質を見つめて居られたものであります。

明治の薄幸の詩人金子みすずの詩に「星とたんぼぼ」というのがあります。

「青いお空の底ふかく、海の小石のそのように、夜が来るまで沈んでる、昼のお星は目に見えぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」この「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」という言葉には全ての存在を見通している金子みすずの愛の心と、隠れているものの大切さを伝える強いものがあります。したがって、私はこの詩に、ロータリー奉仕哲学と共通の境地にあるものを感じるのであります。

このように致しまして、私達ロータリアンは、日常万般のことについても常に現象に拘らずに

本質を見つめるように心がけなければならないと思うのであります。

話は変わりますが、2001年の規定審議会による一業一会員制の原則の廃止は、R Iの理事会の提案であります。物事の本質を見抜くロータリーの原理論の観点からすれば、これは果たして如何なものかと思うのであります。

例えば、昔、ある人が沢庵禅師に、花魁の絵を持ってきて、「和尚さん、この絵に賛を書いて下さい」と頼みました。これは沢庵禅師を困らせてやろうという魂胆でありましたが、沢庵禅師は直ちに賛を書きました。『佛は法を売り、祖師は佛を売り、末世の僧は祖師を売る』詰まり、皆、商売で金のために、一番大切なものを売り物にしているというのであります。

したがって、始祖ポール・ハリスが打ち立てたロータリーの組織上の原点である一業一会員制を廃止したことは、ロータリーの立法機関である規定審議会がロータリーの祖師を売ったことに等しいのであります。

なお、沢庵禅師が花魁の絵に「賛」を書いたことについてもう少し触れておきます。

池水に月は夜な夜な通えども

心もとめず影も宿さず

沢庵

この一首、まるで憂き世のことは超越して悟りきったような調子で「心も留めず影も宿さず」と謂っていますが、よく見ると「夜な夜な通う」というあたりに少し妖しい妖気が漂っています。果たしてこれは「花魁」を詠んだものであります。花魁というのは、昔の高級な芸者でありまして、最高の文化とやらを身につけていたそうであります。そこで、沢庵禅師は「汝四尺の〈体〉真中を売って、一切衆生の煩惱を安んず、色即是空、空即是色、柳は緑、花は紅」と書き、そして先ほどの一首を書いたのであります。

慥かに、花魁は、夜ごとに月を映しても、一向に心をとめず、執着もせず、夜が明けると煩

悩の月を送り出してケロリとしています。それを沢庵禅師が歌うと、花魁は、煩惱即菩提を地でいって、まるで釈迦如来と同じになってしまうのであります。これは全くこだわりのない境地だからであります。

このように考えますと、執行先生も、実に「こだわりのない心をもった人」でありました。例えば、子供を診察するときも同じ目の高さで話しかけるのだとも言っておられました。それとおなじように、全ての人達に対して平等・対等に接しておられたように思います。

そのことの一つの表れとしては、例えばガバナー公式訪問の時、通常は随行者が車を運転して、ガバナーは後の座席で寛いでいるものですが、先生は、公式訪問の時も、随行者に運転させることなく、御自分の車を自ら運転して訪問されていました。

これは、先生が無類の車好きであったためかも知れませんが、しかし、やはり、基本的には、先生が平等対等を旨としておられたことの現れであると思うのであります。執行先生らしい面白い話を一つ紹介しておきます。先生は、何時もドイツ車のアウディ・クーペで走り回っておられましたが、或るクラブに一人で公式訪問に行かれた際、会場に早く着きすぎて未だ誰も来ていませんでした。

そこで、車のボンネットに腰掛けて待っておられたところ、やがて顔見知りの会員がやって来ました。そして、『やあ。執行さん、こんなに早くどうしたんですか。今日はガバナーの公式訪問なんです。未だ、ガバナーは来ていないようですから、まあ、中へ入ってお休み下さい』と。

先生は、「これは面白いなあ、私がガバナーだと謂うことを知らないようだ」と思いながら、早速部屋の中に入れて貰って雑談を楽しまれたそうであります。この会員は後で先生がガバナーだと知って仰天したことでしょう。何はと

もあれ、このクラブは実に大らかな、微笑ましい、のどかなクラブではありました。私は、このようなロータリークラブが好きであります。

要するに、色々申し上げましたが、一言で言えば、先生は、実に「こだわりのない心の人」でありました。これはロータリアンとして大切なことでもあります。

ところで、先生は、昭和53年「思いでの整理帳」というエッセイを出されましたが、その「序に代えて」という挨拶文の冒頭に次のように述べておられます。

「今日午後3時、三女三香の新婚旅行の出発を大阪空港に見送る。『三人の娘をすべて結婚させるまで、生きていたい』と願ってから16年の歳月を無事に過ごし得た事をこの世のすべてに感謝したい。

16年前、即ち昭和36年1月11日、8回目の開腹手術を受けた日、病床にある私はこのような事を願ったのであった、その当時は恐らく今日の日を迎え得るとは思ってもいなかったであろう。これからの人生は通俗的な言い方では「拾った命だ」今までお世話になったこの世の中に私なりに出来る奉仕をつづけて行ければ良いが、また一方、来し方を振り返り思い出の整理もしてみたい…後略…」

と述べておられるように、この時、初めて御自分の心境の一端を洩らしておられますが、この簡潔な文章に秘められた先生の思いは強く私の胸を打つものがありました。

この文章にもあるように、先生の人生の後半は、将に病魔との戦いでもあったのであります。このことについて、「思いでの整理帳」の続編の「まえがき」で甲南大学の名誉教授の衣笠茂先生は、

「彼は執拗に再発する持病のために開腹手術を十回も繰り返しました。喜寿が済んでからの手術のあと『今度は参った』と言いながら、暫くすると診察を再開し、更に愛車を駆って西宮の北辺部の集団検診に出かけました。この精神力、奉仕の心には誰もが驚嘆しています」と述べておられるのであります。

このような持病に悩まされながらも先生は、不屈の精神力を持って実に屈託なく、こだわりのない心で明るく人生を楽しんで居られたように思うのであります。

また、甲南大学文学部教授であった増田光吉先生は、先程の「思いでの整理帳」の刊行の挨拶において、「ふだん、私が尊敬もし、且つ、羨ましく思っているのは、先生の、飾り気のない人間味、自己への厳しさと他人への愛情、積極的な行動力、それにスマートな服装の着こな



しなど、数えてみるときりが無い。若い頃からスポーツ万能で、スポーツマンシップをそのまま体現された若さの持ち主である。それは、そのまま先生のご家庭の温かさに現れている。」と述べておられるのであります。

この先生ご自身の家庭のことについては、先生は、私が常日頃、奥様のことを口に出せなかったほどに入院中の奥様を生涯こよなく愛しておられました。最愛の奥様が不治の病で入院されて以来、足繁く病院に見舞われて奥様の身の回りに気を配っておられました。お嬢さんが同居して居られたのに御自分の下着は毎日御自分で洗濯していると仰っていました。今も、あれこれ思い出は尽きませんが、本当に心の温かかった先生でありました。私が理想のロータリアンとして尊敬している所以であります。

また、先生は、若い頃からスポーツ万能で、スポーツマンシップに満ち溢れた若さの持ち主でありましたが、晩年になってボルシェに乗りたいたいと思って買いに行かれたところ、ディーラーに『先生のお年ではやめておかれた方がいいですよ』と言われてしまったと言って笑っておられたことがありました。

しかし、70歳を過ぎても尚ボルシェに乗りたいたいという若々しい心は、本当に羨ましいと思います。先生は何時までも若々しい心の持ち主でありました。

サミュエル・ウルマンの「青春」の一節、「青春とは人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。

優れた創造力、逞しき意志、燃ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春というのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。

歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。…中略…

人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。大地より、神より、人より、美と喜び、勇気と壮大、そして偉力の靈感を受ける限り、人の若さは失うなわれない。…後略…」

先生は、将にこの詩のように、何時までも若さを失わず、高々と理想を掲げた理想的なロータリアンでありました。

先程の話に戻りますが、結局、愛車はボルシェを諦め、アウディにされたそうであります。そして、何時も愛車の中には、聴診器と非常時の救急薬の入った鞆がありました。先生は職業奉仕の権化のような人でありましたから誠にさもありません。ありなと思ったものであります。

心の若さということについては、先生は若者達が大好きでありました。

先生は、33年前、ガバナーになられるとき、地区委員会の構成について、従来の社会奉仕委員会の中の小委員会であった青少年奉仕委員会を四大奉仕委員会から独立した委員会として、青少年奉仕委員会を立ちあげられたのであります。そして、私を最初の委員長に任命されました。そして、その年、当地区で最初のローターアクト海外研修を実施され、自ら若者達の世話をしながら韓国、台湾、香港のローターアクト達とのディスカッションを実施されました。

そして、この海外研修の後すぐに当地区が実施した第1回RYLAセミナーにも参加されました。その時の見事なリーダーシップは、昨日のこのように鮮烈な印象として私の記憶に焼きついています。今、その二、三の事例を紹介しますと、

先生は、ガバナーとして素晴らしいリーダーシップを発揮されましたが、殊に感動的であったのは、3日目の昼食後から夕食まで午後一杯かけて行われた各キャビン毎のバズセッションの後、その結果を夕食後に発表するフォーラムが食堂で開かれました。

この時最初に「Around the corner」という映画が上映されました。この映画は世界の国々

をテーマとした素晴らしいものでありましたが、その映画が終わったその直後、突然、執行ガバナーが、『皆さん、灯を消して真っ暗にしましょう』と言って真っ暗なホールの中央に立たれました。そして、マッチを擦って一本のマッチを灯されました。先生の顔だけが明るく照らし出されました。そして話し始められたのであります。『皆さん、今、このマッチの火は私の顔しか照らしていません。さあ、皆でマッチを灯して下さい。もっと明るくなるでしょう』

皆が一斉にマッチを擦りました。皆のマッチの火で皆の顔が明るく照らし出され、ホール全体が明るくなりました。そして言われたことは、『一本のマッチの火はそれぞれ小さいけれども、それが沢山集まれば皆が明るくなります。これが私達の仕事なんです。私達が灯すのは、大きな松明でも何でもありません。本当に小さな小さなマッチの様な火であるかも知れませんが、そのことによって私達は、この世の中を明るくして行こうとしているのです。』と。

誠に感動的な一場面でありました。

後日、このことについて先生に聞きしましたところ、『映画のあとの暗がりにはダニー・ケイの演出を思い出し、咄嗟にそれにならったまでだよ』と謙遜しておられましたが、それにしても映画のあとの感動がまださめやらぬ内に、その感動を更に印象づけるために、咄嗟の機転でこのような行動に出て、ロータリーの原理を説かれた先生を素晴らしいと思い、マッチの火に照らし出された先生の姿に真の理想的なロータリアン像を見る思いがしたのであります。

私は、この感動的な場面に居合わせて、その年度のRI会長クレム・レヌーフのことを思い出していました。クレム・レヌーフは、その年、世界で初めて3日プログラムを立ち上げました。それは良かったのでありますが、何故そのプログラムを提唱したか、の理由付けが振るっていません。即ち、「全世界のロータリアンが、個人奉仕で鉄砲をポンポン撃つような奉仕では

大したことは出来ない。したがって、例えば、百人のロータリアンが持っている百丁の鉄砲を国際ロータリーが一門の大砲に煮詰めてズドンと撃てば、より大きな奉仕が出来るだろう。だから全世界のロータリアンの皆さん、国際ロータリーに寄付をして下さい」

と謂うのであります。

これは、一見、真^{マコト}に説得力があるかに見えます。しかし、ロータリーの根本原理に反すること著しいものなのであります。それは一体何故か。

先ず、個人奉仕を鉄砲に例えること自体が間違っていますが、仮に個人奉仕が鉄砲だと仮定しても、そもそもロータリーは、未だ曾て百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるという発想を持ったことがないのであります。これは将にライオンズクラブの団体奉仕の発想であります。

ロータリーの発想は、百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるのではなく、百丁の鉄砲のそれぞれ一丁ずつの鉄砲を一門の大砲に育てると謂うのであります。すると、百門の大砲が出来上がります。これが個人奉仕を標榜するロータリーの中核にある考え方なのであります。したがって、執行先生の示されたマッチの火の譬えは、一見、団体奉仕の提唱の如く見えますが、その根底には、若者達のそれぞれ一本ずつのマッチの火をRYLAやロータリーを通して、やがて地域を動かし、世界を動かしていく大きな奉仕の火に育てて行こうという個人奉仕の心があるのであります。

ただ、大事なことは、ライオンズの発想を責めてはなりません。ロータリーを良しとし、ライオンズを排斥するのは「こだわり」であります。世の中にとってはロータリーもライオンズもどちらも大切なのであります。

何はともあれ、執行先生にはカリスマ性がありました。それは単に先生の風貌だけから来るものではないと思います。先生は、生涯に10回以上も腸の手術をされました。にも拘わらず、

診察に、そしてロータリーにと元気に走り回っておられました。その強靱な精神力と生命力、殊に手術後の日常の肉体的な痛みを一切態度に出されずに平静を装っておられたその凄まじいまでの精神力、そして、いつも相手のことを思う温かい心、そのようなものが渾然一体となった魅力から来る、そのようなカリスマ性であったと思うのであります。

カリスマ性とリーダーシップということを考えますときに、ロータリアンは、何時も自分一人ではないということを忘れてはならないと思います。自分のことだけ、自分を磨くことだけ、自分を向上させることだけを考えているようでは、真のロータリアンとは謂えません。非常に難しいことではありますが、何時も自分と共にいる人のために役立つかということを考えなければならぬと思うのであります。自分のことはさておいて、他人を立ててやる心、即ち、道元禪師の謂った「老婆心」の公案が大切であります。(道元禪師が愛弟子義介禪師に「汝未だ老婆心非ず」と論じた訓戒参照)

ロータリーの第一義は親睦であります。ロータリーの世界には、お互いに心の通じ合う仲間がいます。ロータリアンというものは、自分一人ではありません。したがって、自分だけが自己研鑽で立派になるのはエゴイストであります。他人のお陰で自分がある。他人も立派になって貰うように心がけなければなりません。これが個人奉仕の本来の在り方であります。したがって、切磋琢磨が大切なのであります。自己研鑽だけでは駄目であります。皆と共に立派になろうという意識を忘れてはならないのであります。ここにクラブというものの存在意義があります。共に磨き合うのが個人奉仕であり、個人主義は利己主義とは異なるのであります。

少し古い話ではありますが、今から5年前の2008年3月27日、NHKテレビで放映された「にっぽん紀行」“春”～安城・芸妓達の門出～を観ました。その要旨を抜粋しますと、安城の

芸妓を育てる置屋の女将「佐藤かすみ」の話であります。この女将は「かすみ寮」という置屋の経営者であります。

自分が育てた「駒子」という芸妓を一流の芸者に育て上げましたが、その駒子がいよいよ置屋の女将として独立するときに駒子に論じた言葉があります。

「自分だけが芸を磨いて一流になっても駄目です。それでは置屋の女将は務まりません。これからは、お前一人の身体ではありません。芸妓達を育て上げる義務と責任があります。芸妓が在って初めてお前が在る、ということをおぼえてはなりません。そのためには、先ず芸妓達にとって居心地の良い置屋にしなければなりません。したがって、芸妓達に優しく、何時も「思いやりのある心」をもって育てなさい。それが結局、自分を育て、自分を大きくすることになり、芸妓も自分も立派になるのです。」

正に、人間とはそういうものであります。人間とは間柄の関係であります。人と人との間の関係がなければ人間とは謂えないのであります。

最近の自殺、子殺し、親殺し。これは間柄の関係が無くなったことを示しています。このことは、芸の世界にも通じることであります。

例えば、歌舞伎役者坂田藤十郎の芸談があります。彼は、弟子の舞台を観て、「自分だけが光っているようでは駄目だ。そこには本当の芸はない。自分だけが光り輝こうとする自分だけがある。これでは芝居全体が駄目になる。」といて厳しく弟子を戒めています。

自分だけが立派になるのは利己主義であって個人主義ではありません。常に、全体があつてその中の自分であることを忘れてはならないのであります。

「駒子」の話に戻ります。駒子が最初の新弟子を迎えたとき、その子は、駒子の前に座りましたが、最後まで駒子に話し掛けることはあり

ませんでした。駒子の絶対的な存在感、完璧さ、カリスマ性に圧倒されて、何も言うことが出来なかったのであります。

駒子としては、その子が話し掛けるのを待っていたと謂いますが、それは無理であります。新弟子は、何をすべきかも判らなかったのであります。

駒子は、この場合、自分のカリスマ性とか、雇い主であるとか、大先輩であるとか、新弟子が先ず自分に挨拶をするのが当然だとかいうような全てのプライドを捨てて、一人の人間として、一人の女性として、新弟子と対等の立場に立って駒子の方から話かけてやるべきでありました。このような「こだわりのない心」が、置屋の女将として新弟子を育てていく要諦であります。

「こだわりのない心」をもって、詰まらぬプライドを捨て、一人の生身の人間として新弟子とつき合う心がなければ、新弟子も心を開かないし、仲良くもなれません。したがって、置屋の「親睦」も育ちません。新弟子を育てることも先ず親睦からなのであります。

先ずは、置屋の雰囲気を変えて、新入りが心を開いて稽古に打ち込めるような雰囲気を作らなければなりません。これは、ロータリアンにも、ロータリークラブにも、国際ロータリーにも謂えることであります。ここにも、親睦を第一義とするロータリーの思想があるのであります。

初期ロータリーのことを考えてみましょう。もともと、ロータリーにプライドなどありませんでした。ロータリアンにもありませんでした。彼らは、零細業者の集まりでしたから 何のプライドもなかったのは当然でありました。そこには、皆で仲良くしようと謂う親睦の心と助け合いの心、そして、他人から何かを学ぼうという謙虚な心だけがありました。これが将に純度の高い親睦なのであります。そしてこれが、

社交クラブとしてのロータリークラブの原点でありました。

初期ロータリーには、人を批判したり、人を評価したり、自分はロータリーについては詳しいとか、自分は皆より偉いとかいうような変なプライドは一切ありませんでした。

ロータリーは、そのような難しい理論、理屈から出発したものではありません。誰にでも判る常識から出発した庶民のものであります。そして、目指すところは、自分を少しでも高める、向上させるということだけでありました。そのことが、1908年以降、やがて世の中を明るくする、世のため人のためになると考えていたのであります。このことが、今日、巨大な組織に成長した原因であります。出発は親睦であって理論ではないのであります。

ただ、最近は、常識から出発したロータリーのその常識が少し可笑しくなってきました。執行先生は、晩年、「最近、ロータリーの話が通じないロータリアンが増えてきた」と言って嘆いておられたことがありました。恐らく先生は、最近の一部の若いロータリアンがロータリーを学ぼうとせず、ロータリーの心を弁えないことに失望しておられたのかも知れません。

一例を挙げますと、ある時、若いロータリアンが紀元節のことを「キモトブシって何や」と言って居ることを聞いて愕然としたそうであります。これは、もうロータリー以前の問題であります。

私は、先生とロータリーを語るとき、汲めども尽きぬ味わいがありました。その意味ではロータリーは貴重なご意見番を失ったと思います。

また、先生は、時にはウイットも出て何時もユーモアに富んだ人でありました。

昔、私がロータリーに入会して間もない頃、初めて聴いた先生のスピーチは、未だに心に残っています。それは「曾て西宮クラブの今田恵バ

ストガバナーが説かれたロータリアンの条件、第1. 成人の男子であること。第2. ユーモアを解すること。」という話を引用され、親睦と奉仕を核とするロータリーにとってユーモアが如何に大切かということ説かれたことであります。

また、先生は、何時も理想を高々と掲げてそれに燃えて行動する人でありました。将に真の理想主義者であり、何時もロータリーの伝統を説き続けられました。

私が理想的なロータリアンとして尊敬する所以はここにあるのであります。

したがって、理想的なロータリアンであることの大切な要素の一つとしては、先程のサミュエル・ウルマンの詩にもありましたように、心に高き理想を持つということでもあります。

1850年にこの世に生を享け1906年に突如としてこの世を去ったイギリス法制史学界の権威フレデリック・ウイリアム・メイトランド教授は、中世イギリスの三人の国王の名を挙げ、彼らが高々と理想を掲げ、その理想に燃えて行動したるが故に素晴らしい天下国家を創り出したとしてその功績を称えています。即ち、先ず、1066年から1087年に至る21年間のノルマンジー公ウイリアム I 世の時代、次に、その67年後、1154年から1189年に至る35年間のヘンリー II 世の時代、そして、その369年後の1558年から1605年に至る45年間のエドワード I 世の時代であります。

この3人の名君は、高々と理想を掲げ、その理想に燃えて行動したるが故に、素晴らしい国家統治を成し遂げることが出来たと謂うのであります。

これは一体何を物語るかと言いますと、世の指導者＝リーダーたるものは、^{スベカラ}須く高々と理想を掲げなければならない。そして、その理想に燃えて行動しなければならないということの意味するのであります。したがって、ロータリーのリーダーであるガバナーやクラブの会長・幹

事そして各委員会の委員長、そして業界や地域社会のリーダーであるロータリアン達はすべて心に高き理想を持ち、その理想に燃えて行動することが望まれているのであります。

この意味で、執行先生は、誠に高き理想に燃えた誇り高きロータリアンであられたの思うのであります。

したがって、執行語録とでも謂うべき名言もまた数多いのであります。例えば『ロタキチでなく、ロタスキであれ』とか『ロータリアンとは、何時も他人のことを考える習慣を持っている人』、『人の悲しみの判る人、即ち、人生を語る資格を持っている人』、『自分が例え100%でなくても、他人を100%にしてやりたいと思っている人』等々であります。

要するに、先生の一挙手一投足が将にロータリーでありました。私は、日常の何気ない先生の行動や態度にロータリーを教えられることが多かったと思います。先生は、誠にロータリーをこよなく愛した真のロータリアン、所謂「The Rotarian」と謂うべき人でありました。

先ほど申し上げましたように、33年前の我が地区のRYLAの直前、ローターアクトの第1回海外研修では、ガバナーとして若者達を指導され、若者達から慕われていた先生。また、愛車アウディでの北海道旅行でキタキツネに出遇って感激されたという先生。

旅行に行く先々で郵便局に千円預金をしてそのスタンプを集めて楽しんでおられた先生。何時も人生意気に感じ、ワインをこよなく愛した先生。

俳人として何時も自然を愛し、「蝸牛」と号して俳句を嗜まれた先生。

^{コモゴモ}交々心に残るエピソードは、語り尽くすべくもありません。

或る時、北の新地で、私のロータリアンでない親友2人と共に酒を飲んでいた時、^{タマタマ}談偶々ゴルフのことに及び、四人でゴルフに行こうということになり、先生がメンバーである鳴尾ゴル

フ倶楽部に行くことになりました。

当日、9時スタート。そこで8時20分にゴルフ場へ行くと、先生はもう着替えて玄関で私達を待っていて下さいました。こんなに早く着替えて一体どうしたのですか、と聞くと、先生は、メンバーが自分の客を招待したときは、こうするのが当たり前だと謂われました。私は、元来、友達と遊ぶときには兵隊勘定、所謂割り勘というものを致しませんが、この時ばかりは驚きました。クラブというものの在り方を身を以て教えられた思いでありました。ロータリークラブもやはりクラブである以上、この心は大切にしなければならぬと思います。

したがって、メイクアップに来られたビジターについても、その応接の仕方をはじめビジターフィーその他心しなければならぬことが多々あります。これはロータリークラブというものの在り方についての貴重な教示でもありました。

相手に対する思いやりの心。ロータリアンは親睦親睦とは言いますが、本当の親睦とは一体何かを考えなければならぬと思うのであります。問題は金を出すとか出さないとかの問題でなく、その心配りであります。先生ほどその接する人に対する思いやりの心、細やかな心遣いをする人は少なかったと思うのであります。

ところで、先程の「続 思いでの整理帳」の「は

しがき」の冒頭に次のように記しておられます。

小きざみに命いただき喜寿暮る、 蝸牛

「昨年末（平成八年十二月）、生来十度目の開腹手術を何とか乗り切った後、静養中に右の様な俳句らしきものが出来た。将に私の人生はこの様だった。

この度は死への恐怖はそんなに感じなかったが、親しい人々や物と別れるかも知れない一抹の寂しさは強く感じた。絶望感の様なものをいだけ事は事実であるが、自分だけが知っているし、又外に頼るものがないという気持ちの方が強かった様だ。又病床にある妻への想いも強かった様だ。しかし今は曲がりなりにも生を得ている、働かねばならない。

今一度来し方を振り返るために、まとめてみた。

平成九年七月十五日 七十七歳十ヶ月」

これは亡くなられる1年前の先生の心境であります。何となく御自分の死期を予知しておられたようにも思われるのであります。

何はともあれ、ロータリーは貴重な人材を失ったと思うのであります。先生は、私にとって終生忘れ得ぬ人でありました。御静聴有り難うございました。

以上

「リーダーシップ」

(財)神戸都市問題研究所理事長
神戸ロータリークラブ会員

新野 幸次郎 氏



プロフィール

● 略歴

1963年4月 神戸大学経済学部教授に就任
1976年11月～78年11月
神戸大学経済学部長
1985年2月～91年2月
神戸大学学長
神戸大学医療技術短期大学部学長
1991年2月 神戸大学名誉教授
1991年3月 財団法人神戸都市問題研究所長

2000年4月 財団法人神戸都市問題研究所理事長に就任
2002年1月 財団法人こうべ市民福祉振興協会会長に就任

● 公職

(財)神戸大学六甲台後援会理事長、
(財)関西生産性本部顧問、等を務める。

○徳梅 皆さん、おはようございます。

昨夜はどうだったでしょうか。楽しめましたでしょうか。楽しむところは十分楽しんで、しっかり学ぶところは学ぶ。このけじめをしっかりつけていっていただきたいと思います。本日は、午後と午前につづつ講義がありますが、まず午前中の講義から入りたいと思います。皆さんのお手元の冊子10ページに講師を紹介させていただいております。新野幸次郎先生と申します。プロフィールにつきましては、そちらのほうに書いてございますが、神戸大学において、教授学部長、学長までを歴任されまして、現在は、財団法人神戸都市問題研究所の所長等をされておられます。新野先生はご経歴の職以外に公職も本当にいろいろございます。先生のご人格であらゆる地域社会において貢献されておられて、素晴らしいリーダーシップを発揮されている方でございます。本日のテーマも、ずばり「リーダーシップ」ということでお話をさせていただくことになっております。新野先生、そ

れではよろしくお願い申し上げます。

○新野 おはようございます。

ご紹介いただきました新野でございます。きょうは午後、武田先生がお話しになりますので、その前座を、しばらくだけ務めさせていただきます。軽く聞いていただけるとありがたいと思います。

先ほどご紹介いただきましたけれども、私自身は決してリーダーとしての仕事をしているわけではなく、せいぜい小遣い走りくらいのことしかやっております。にもかかわらず、こんな大それた題の会に招かれ、お話をする機会を甘んじて引き受けさせていただいたのは、実は今井先生のせいでございます。その点で、もしまずい点があったら、全部、今井先生の責任だというふうにお考えいただいたらいいのかと思っております。というのが、今井先生には大変若いときからご指導いただいております。余島のRYLAの2回目くらいから呼び出されて話を

しろということで、今までに2回か3回かお話ししたことがあると思うんですが、何年ぶりかにこうして皆さんの前でお話をする機会を与えられて、大変光栄に思っております。ただ最初にも申しましたように、本当にリーダーについて話す能力は全然ございません。その点、あとでお話をさせていただく武田先生とはまったく違いますので、気持ちを軽くして、前座の話をちょっとしばらく聞いてやろうということでお聞きいただけるとありがたいと思っております。

で、きょう、演題が本当に私にとっては不幸な題でございますけれども、「リーダーシップ」という題になっております。ただ最近、リーダーシップの問題がどれだけ大切かを考えさせられることが、日本で頻繁に起こるようになってきておまして、そのことからお話を始めてみたいと思います。かばんに入れたつもりなのに本日、忘れてきて申し訳ないんですが、皆さんは『エコノミスト』というロンドンで出版されている雑誌をご存じですか？1週間ごとに出版される雑誌です。これの今年の6月5日から11日号のトップ記事が、この論説が載る表題がですね、「Leaderless Japan」というものでした。で、表紙はどういう具合かといいますと、全体の表紙のこの辺に「Leaderless Japan」という題があって、ここに日の丸が掲げられているのです。ただ、日の丸の赤いところが全部下に落ちて、白い旗だけ残ってる。何を取り上げてるかという、「日本は、大変不幸なことに、5年間に5人も総理大臣が変わっており、今、世界全体では非常にたくさん問題が累積しているにもかかわらず、日本はそういう状態で混迷をしている」ということが、書いてあるのです。これは本当にショッキングで、こんな表紙が出ると、どこの国でもすぐ反論が出るんですが、不幸なことに、わが国では国旗についての尊敬の念が確立されていません。ですから、こういう表紙になっていても、誰も文句は言いませんでした。

それからもう1つは、菅さんは本当にやれるのかという、そういうまた別なページがあって、そこでいろいろな問題が論ぜられているわけです。

これとは別に、この4月、『PRESIDENT』という雑誌にリーダーシップの問題の特集をやっておりました。その中で確か奈良さんという人が、「迷走民主党『菅、鳩山、小沢』の心理鑑定」という表題の結構長い論文を書いています。これがなかなかショッキングな内容でして、彼はリーダーの条件として3つのことを取り上げていました。1つは「不確実な未来について判断をする能力がないといけない」。第2番目には「説明力がなくてはいけない」。第3番目には「誠実さがなくてはいけない」、英語でいうとIntegrityですね。そして、そういうことと関連して、この総理というのはいくつもの大きな力を持ってなくちゃいけない。政策形成能力と、それからその政策を実現する力がないといけないというのです。ところが残念なことに、最近の日本の総理にはその能力が欠けているといえます。

鳩山さんについて、この奈良さんは、「人間形成においてあまりにもいい家で育ち、なんの苦勞もなしに育ったものだから、自分が言ったこと、考えたことはなんでもやれるんだというような幼稚性があるという。その幼稚性のために、本当に考えてこれがいいか悪いかを判断できる能力もなくなってしまっている。そういう人が、総理を務めるという大変な失敗が、日本全体が世界に迷惑をかける形の行動になってしまった」と批判をしているのです。それに対して、「菅さんは、同じような面も持っているが、何よりも自己決定能力がない、自分でどうするかを決める力が不足しているように思う」と述べています。

一国の総理大臣を、こういうふうには批評して済むものなのかどうか。こういうのも大きな問題だと思いますが、そういう言い方をして、「あ

の方は、権威のあるものに出会うと、それにすつと従う傾向があって、そういう意味では服従性がある。立派な人、権威のある発言があると、それを受け入れて、それに服従していくという能力を持った、そういう人だ」と言っています。従って、こういう人が総理として働くということについては、問題があるのではないかというような取り上げ方をしているわけです。

そこで、そういうことと関連して、現実がどんなものかというのを考えてみますと、来年は世界の代表をする人々が大きく変化をする年になります。アメリカでも大統領選挙がありますし、中国でも今の総書記に変わりますし、習さんが新しく総書記になるだろうというように予定をされてますし、それからフランスでも大統領選挙がある。世界全体でリーダーシップをとるだろう国々の代表が変化をする可能性がある。そういう意味では大変重要な時期です。

さらに何よりも、中近東で例のチュニジアから始まって、民主権化しようという新しい民主主義の運動が広がりを見せており、留まるところを知らない形で展開している。それだけではなく、あの国々がリビアもいい例ですけども、石油の産地であって、世界経済に非常に大きな影響を与えることになる。この間から問題になっておりましたように、政治的な影響の面では、中国などは経済リードをするような国になったわけですが、その動きに反応して、社会全体の一党独裁の政治体制を変えようという、下からの不満による動きが非常に強くなる傾向が見えている。それを抑圧するために、コンピューターを、全部押さえてしまうような動きをとらなくてはならない。その意味では、緊張態勢ができあがっている。

そういうときに、従来なら、世界で第2番目の国民所得を持つ国であった日本が、政治的になんらの働きもできないようなリーダーシップのない国に陥ってしまうのは、大変問題ではないか、という問題意識が取り上げられているわ

けです。ところがそこへ、ご承知のように、東日本大地震が起こり、これは我々の経験しました阪神・淡路大震災に比べると、非常に厳しい形の津波がありました。そこへ、原子力発電所の事故が重なりましたから、被災の影響が永続しているという状態で、復旧・復興の仕事がほとんど手をつけられないような状態になっております。

この時期に、先ほど最初に述べた奈良さんがおっしゃってる、リーダーの条件、不確実な未来について、明確なビジョンを示している、そして、それをみんなにきちんと説明でき、そして何よりも、それを述べているリーダーの人々に対する国民の信頼が、誠実である人の言うことなら間違いはないという確信を持たれているか、というように考えますと、先ほどの表紙の絵ではございませんが、残念ながらまことに情けない状態に陥っております。

そこへ同じ『ロンドン・エコノミスト』が、これとはまた違った表紙で、原子力発電所の崩壊事故で困ってる状態を取り上げています。坂道に大きな日の丸が転げ落ちそうになっていて、それを4人の人が小さく支えるような、そんな表紙になってるのです。表紙は「Fallout」と書いてある。「死の灰」というわけです。ほんとに日本は駄目になって危ない状態です、という表紙になってます。その中で、この『ロンドン・エコノミスト』は、こういう言い方をします。すなわち、「自然災害の中には、歴史を変える可能性のあるものもある」。今度の日本の津波はその代表的なものではないかということです。

そして自然災害がその国の歴史を変えてしまう、あるいは世界の歴史を変えてしまうきっかけになるという、具体的な1つの例として、1923年の関東大震災の例があげられます。関東大震災のとき、日本はうまく処理しようとしてできなかったから、結局、軍国主義に走ってしまった。それから、この第二次世界大戦最後の広島・長崎の原子力爆弾、原爆で日本は軍国主

義をあきらめて、平和で経済成長だけを考える国民に変わっていったと述べられています。

神戸地震についても書いてあるんですけども、神戸の地震のときは内向きにだけ処理をしておしまおうとしたと述べています。あのとき外国からの援助等を断ったことも、1つ頭に入っているのではないかと思います。

そして、日本は今、‘The stakes are high’ という言い方で、機能不全な政治体制を持つ、失望してしまった国になってしまっている。このままでは日本はどうなるのか、心配であると。しかし、日本人の中には、単に津波を受けた現在の状態を、死と、それから悲しみと哀悼の時として受け取るだけではなくて、同時に、再生の時機だと受け止めようとしているところがあり、われわれはそれに期待したいというような趣旨の結びになっているわけです。

この『ロンドン・エコノミスト』というのは今、世界のトップクラスの人々の中で、一番よく読まれている雑誌の1つであるというようにいわれております。私もずっと前にこの国連大使でいらっしゃった黒田さんという人から、「大使になるようになってから、『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン』と、それから『エコノミスト』だけは欠かさず読んでおります」と伺いました。大体、世界中で一番よく読まれている雑誌の1つだとお考えいただいていると思います。そういう形で世界が日本を見つめている。そんなときに、残念ながら、政治はまだ混迷をしたままで、その政治的な混迷を克服していこうというような、そういうリーダーシップを持った人が登場していないということは、受け止めておかなければならないと思います。そういう意味では、国全体のリーダーシップだけではなく、いろんな組織のリーダーシップの問題が、今ほど、国を挙げて問われているときにはないと考えていいのではないかと思います。

そういうときに、この第33回RYLAで、リー

ダーシップをテーマにして皆さんにお考えいただくというのは、大変有意義なことではないかと思えます。最初にも申し上げましたように、私はリーダーシップについて、今まで勉強してきたことを、ちょっとお話をさせていただきたいと思っております。

リーダーシップについては、2つの勉強の仕方と申しますか、アプローチの仕方があろうかと思えます。1つは、よく言われることですが、このリーダーシップの問題についての「暗黙知」的なアプローチです。もう1つが、これに対立する言葉でして、「形式知」という言い方がございますが、「形式知」的なアプローチです。

で、私自身も比較的若いときから、第1の「暗黙知」的な勉強は、割にしたつもりではいるのですが、この代表的な会に、師友会というのがあります。全国にもいくつかあり、関西師友会というのもございます。その元をやられたのが安岡正篤さんでございます。皆さんは陽明学というのをお聞きになったことがあると思うんですけども、論語などを中心にして、人間の生き方、政治のあり方、社会のあり方について議論をしていく学問です。その分野で、安岡さんはいろんな本を書かれました。本当に読めたかどうか分かりませんが、一応、私自身も十数冊は持っております。そのお弟子さんで、私の友人と大学が一緒だった伊藤肇さんという方がいらっしゃいます。この人の本も随分、私も読ませていただきました。そういう本に、偉い人が何かのときにこういう具合に対応しました、で、みんなが感心をしてそれについていきましたとか、ある問題が解決できましたという、いろんな例が書いてあるんですね。それを読みながら、自分が今直面している課題、あるいは問題を頭に浮かべて、「ああいうときにはこういうふうにやったらいいのかな」と自分で考えていく。ただ、暗黙的なのはですね、真の名工、素晴らしい仕事をしている大工さんだとか芸術家

ですとか、そういう名工と呼ばれる人たち、こういう人の本当の才能、あるいは能力というのは、本当に身につけないと分からないですね。目の前で見て訓練をされて、あつというこゝで感じを会得しないと、本当に自分の身につかないんです。そういう意味で、言葉でちゃんと教えてもらっても、本当に身につけていくことはできない。

私なんかも軍隊に行く前までは、本当にまだか弱い体でございました。それでも訓練はしてたつもりなんですけれども。高等学校時代に19歳で入隊をさせられまして、ある日、軍隊で米俵を運ばなくちゃならなくなりましたが、担ごうとしたら担げないんです。それで、「何をしとるか！」って殴られ、悔しかったことを何回も経験しました。それが何かの機会にふっと担げるようになって、それからあとはずっと担いで作業できるようになったんですね。そういうコツみたいなものが、いろんな分野の仕事にあると思うんです。それは、言葉で読むものではなくて、身につけていかななくちゃいけないものなんです。多くの立派な人になるというようなことは、言葉でいくら勉強したって駄目です。徳川家康なり豊臣秀吉なり福沢諭吉なり、いろんな人々が、こういうときにこういうふうにやりましたっていうのが頭にあって、その危機に直面したときに、なんかの拍子に自分にもふっとできることがある。そういう意味では、ちゃんと言葉で教わるんじゃなくて、体験で、暗黙知で、ふっと身につけるようになる。こういう性質のもの、安岡さんの本だとか伊藤肇さんとか、そして、そのあとを守っている師友会というようなたくさんの方々のグループがありますが、こういう人々の勉強の仕方っていうのは、そういう形になっているとこう思っていると思います。そうでなければ座禅を組んでみるとか、宗教のある行事に浸ってみるとか、伝記を読むだとか、それからいろんな人々の経験を聞きに行くとか、現場に行つてその人のやり方を見てみ

るとか、そういう形の勉強の仕方が1つあると思うんですね。こういうことは私がまだ大学におりましたときに、ゼミの学生等に本当の意味でちゃんと教えていなかったかもしれません。大学で、学長を辞めましてから20年近くなりますが、幸い元気なものですから、ゼミ生を集めて、3カ月に一遍いろんな本を読む読書会をやっております。そのときにこういう話もしますと、「今回読んでみてほんとに勉強になりました」と、50近くや40いくつの卒業生、あるいは定年になったような卒業生が言うものですから、これは大失敗だったと反省をしてるのです。もう少し若いとき、大学生の皆さんの年齢の頃に、この本を読んで考えてみるように、というような指導をやつてなかったと感じたことがございます。

そういう意味で、こういう暗黙知の伝記を読む、偉い人の話を聞く、あるいは仏教の本、例えば、道元の『正法眼蔵』や、あれなかなか分かりにくいですけど、親鸞の本を読んだりして、何かのヒントを得ていくという勉強の仕方、そのことによって人間を鍛えていく、リーダーシップを身につけていける可能性があります。

神戸大学の金井教授という方が、人事研修やなんかでリーダー論、あるいはリーダーシップ論の本を毎年、そうですね、5、6冊は出されており、いつも送ってくれるものですから、一所懸命読んでおります。彼は、文化庁長官をされて心理学の先生だったあの河合隼雄さんの講義を京大の教育学部の頃に聞き、神戸大学に来て経営学を大学院で勉強し、神戸大学で経営人事論の教授になられて、今、全国的に非常に有名な活動をされています。彼がいろんな本を送ってくれるので、私もそれなりに勉強してみました。経営心理学という領域がありましてね、これのやり方は、暗黙知ではなくて形式知で、論理がちゃんと学問的な体系になっています。こういう状況のときはこういう人間心理が働いて、こういう具合に導いていくとその状況を克服で

きるいった、いろんな例を取り上げて、実験をしたり、その成果をまとめた形で展開しています。こういう分野のことは、後で講義される武田さんがご専門でして、私も武田先生の本は何冊か読ませていただきました。ことに、比較的最近では、2007年に創元社から出された、『武田健のコーチングの心理学』という本がございます。これは経営とは違って、スポーツを中心に心理学の展開をして、こうすればこうやれると具体的に、学問的に論理づけていく。その点、暗黙知のほうはそうじゃなくて、誰がどうしたかということが書かれてあるだけで、自分がそれを判断して体験をしていかないと身につかない。その点、こちらのほうは全部、論理になっていまして、こういう現象があってこういう具合に形式的に整理ができて、こういう条件があればこういうことが実現できるという、そういう具体的な形になっています。

つい最近もですね、金井さんが分厚い本を送ってくれました。本の帯のところに、「金井壽宏教授、大絶賛」、大推奨でしたかね、大きく出てましたが、バーバラ・フレドリクソンという若い女性の方の本でした。本のタイトルが外国映画の題名のように変わって、『ポジティブな人だけがうまくいく3:1の法則』という長い題名でした。原著の題名を見たら、『Positivity』というだけなのですが、それが今申し上げたような長い題名になっている。要するに、ポジティブな人間になれば、あなたはちゃんと成功できます、立派に生きていけます、ということを取り上げている本です。皆さんも時間があったら、日本実業出版社というところから去年2010年に出た本です。これは今の形式知の1つの典型的なケースだと思うんです。

そして、このポジティブティというのは、今、日本の教育、人間形成の中で一番大事なものの1つではないかと思えます。逃げるのではなく、しんどいから、これやめておこうという形じゃなくて、なんでもやってみよう、そして必ずや

り遂げてみようという気持ちを持つか持たないかで、大きな差が出てきます。そのポジティブな姿勢を持ってたら、いろんなものを新しく身につけて、必ず事態を克服することができるように導けるのではないかと確信します。そういう意味では、さっきの本なんかは、非常に重要な示唆を与えてくれます。私はよく子どもの教育に、「子どものことをよく聞いてやって、そして大人の気持ちを押し付けないように」といわれるのを聞きます。それから「思いやりがなくちゃいけない」とかというような指導の仕方がありますが、神戸市の教育委員会などにもなんとかしてポジティブティという問題を、子どもの教育の1つの基本に置いて、そしてリードしていけるような教育体系をつくってもらわないといけないのではないかと思います。貧乏ですと、何があっても親が苦労しているのを見てると、なんとか早く豊かになって、親の補佐ができる立場になりたいという気持ちがあって努力をしたもんです。近頃は親も結構、苦しい苦しいと言いながらも、子どもが少しでも苦労すると、親がそれをかばう姿勢になってしまって、「嫌だったらいつでもやめていいよ」とか、「遠く行ってもいつでも帰ってこいよ」というように、子どもは甘やかされてしまっている。そういう状態を克服するには、ポジティブティというのは本当に大事な生き方のポイントではないかと思うのです。そういう点が、我々のこれからの非常に大事なポイントの1つになっているんじゃないか。

先ほど総理が、5年間に5人変わってしまったという話を取り上げましたが、考えてみると、日本の最近の総理は、本当にみんないい家のお坊ちゃんとして育った人で、ポジティブティが全然ない人たちだったのではないかという気もしないではありません。そういう意味では、フレドリクソンのこの本というのは、私は非常に考えさせられました。金井さんも、こういうリーダーシップの問題をたくさん書いておられ

ます。日経文庫の『リーダーシップ入門』は、経営心理学のいろんな立場の人たちの学説をずうっと紹介してあり、なかなか立派な本なんです。今ちょうど神戸大学の経営学研究科、昔の経営学部の学部長をやってらっしゃるんで、今こそ自分で学問的にやってたリーダーシップ論を、実際に自分で体で示していく時期ではないかと金井さんに申し上げています。そうすると、いかに難しいかがよく分かって、彼も一生懸命言うんですが、学問の論理の展開だけでは済まないということが分かる。

そこで、そういう問題で、勉強のアプローチの仕方としては、暗黙知と形式知の両方を一所懸命その都度読んで考え、そして身につける努力をしていくというのが、リーダーシップを考えたときの一番の基本で、そのときにフレドリクソンさんのおっしゃってるポジティブティというのを抜かしたら、その目的達成はできないんじゃないかと考えざるを得ないわけです。私は勉強をしてるだけですので、リーダーの能力はないんですけれども、リーダーとかリーダーシップが問題になるときに、リードをしようとする組織、あるいは対象がなんであるかによって、リーダーシップの内容が多少変わってくるんじゃないかと思いつきまして、いくつかの例を挙げてみたいと思います。

その1つは、スポーツ選手の場合のリーダーシップの例で、先ほど申し上げました武田建先生の、『コーチングの心理学』は、大学・高校のアメリカンフットボールのコーチをされた時の経験をもとに、豊富にいろんな材料が出ておりますが、これを読ませていただきますと、いかにコーチングの中で、気構えがどういうものでなくちゃならないかということ、見事に描き出された立派な形式知的に整った本になっていると思います。そのほうは恐らくあとでご本人が詳しくお話しになりますから、楽しんでお聞きいただくことにしまして、私は、プロ選手のコーチングの問題、あるいはリードの問題に

ついて、ちょっとだけ触れさせていただきたいと思います。

このきっかけは、2004年のオリンピックのサッカー日本代表選手の監督をされました、山本昌邦さんという方がいらっしゃいますが、この人のお話を少人数で聞く機会がございました。僕はサッカーについても詳しくないんですが、そのとき非常に感心したことがあるんです。その人の本を何冊か読んでみまして、考えさせられました。それは、このプロの選手、これはあとで申します大学の先生もみんなそういう性格を持ってるんですけども、自分の能力を人が評価してくれたら、所属っていうのはあまり問題にならないですね。プロ野球の選手でもそうですけれど、どこのチームで働くかは、収入の大きさと何かのきっかけの違いだけで、何よりも自分自身が能力を高めて、誰からも評価されて引っ張ってもらえる、そういう選手になりたいとだけ一所懸命やってる。組織集団は問題じゃなくて、どこでも働け、ただ、自分の能力をフルに活かす、そういう選手活動をやっていきたいというような人たちです。優れた選手であればあるほど、その自分の能力について自信を持ってる、そういう人々がプロの選手になってるわけですが、山本さんは、そのサッカーのプロの選手には4つの条件がいるんじゃないかというのをおっしゃるんです。

1つは、体力がないといけない。第2番目に、技能がないといけない。サッカーの、ボールを蹴る技能がないと絶対駄目だ。それから走る、体力と関係ありますけど、能力がないといけない。第3番目にね、戦略がないといけない。走りながら、誰がどこにいつてどうなって、どこに蹴ったらいいかっていうのがぱっと判断できる人でないといけない。で、最後に、それだけでは駄目なんで、努力の天才みたいに、もう誰にもついていけない格別な能力が要ると。しかも大切なことは、その4つのものが足し算ではないとおっしゃるんです、全部、掛け算です。

ですから、一番最後の努力の天才みたいな、その能力、みんなを引っ張っていくような何かを持って、あの人にはかなわない、あの人と言うんなら仕方ないと思わせるような、そういうポイント、それが、最初の3つ、体力、技能、戦略がいくら高くても、最後のものがゼロだったら、全部ゼロになってしまう。サッカーのプロ選手の監督をやろうと思ったら、その最後のものをいかに活かしていけるか、そういう能力を持てるかどうかで、監督の力が決まってくるというわけです。

そこで私はそこから、どの職業でもどの商売でもいいですが、それをうまくやっとうと思ったら、それぞれの商売、職業ごとに、体力、技能、戦略みたいな、これだけではなくちゃいけないというものが考えられると思うんです。それを全部、掛け算で考えて、この商売やろうと思ったら、これがないといけないというのを第4のものとして考える。そこに何を選出すかで、その組織、あるいはその職業で成功するかどうかが決まってくるのではないかと思います。その第4のものをなんに見出していかかが問題ですが。それをつくれる人間になってたら、どの職業に入っても、どの組織に入っても、リーダーシップを持てる人間になるんじゃないかというように思ったわけです。

そこで、この山本さんがいろんな監督、コーチ、選手たちを見てて考えられたことは、ことに選手との自信を持って、もう監督の言うことなんか聞くもんかというような有能な選手がずらりとそろっている中で、きょうはあの監督のことを聞いてやろうというような監督になるためにはどうしたらいいかというのが、プロのそういう世界の監督の苦勞の1つようです。ですから、極端な話、選手のほうが上座に座って、自分が監督に対してじゃなくて、自分がやりたいと思うことを本当にやろうという気になるようにさせていく、そのリーダーになるための条件を一所懸命、苦勞しながら勉強した過程をお話しになったわけです。

その点で、今はやめましたけれども、サッカーの中田選手なんて若いときから非常に頑張っていた選手のように思いました。彼は文句の言いようのない第4の能力を持った人だったようです。12、3のときから目標を立て、イタリア語の勉強を始めて、休みや時間があるとイタリア語の本を読んで、一所懸命やるだけでなく、選手相互の間の世話も結構みる男で、苦しい試合で得点をする、その点を頭に入れた選手が中田選手に走り寄って抱きついて、みんな喜びを分かち合うようにしたようです。そういう人間を3人か4人持ったら、サッカーの日本代表選手

主催：R.I.第2670地区・R.I.第2680地区RYLA運営委員会



団も完全にまとまっていくようになります。山本さんの本は『山本昌邦指南塾』とか、『指南録』とか、5冊ぐらいあります。私は3冊ぐらいしか読んでないのですが、私自身にとってはほんとに考えさせられる本でした。学問的っていうんじゃなくて、こういう話がある、こういう話があると、ケースをずーっと書いてあるだけなんですけども、しかし、リーダーシップの問題で考えさせられることは、フルに盛り込まれております。

そういう点で、プロ野球、あるいはプロのサッカー選手だとか、要するにスポーツ選手のリーダーシップというのはどういう問題を抱えるのかなっていうのを反省をさせられ、考えさせられました。その点、私が過ごしてまいりました大学でのリーダーシップっていうのは、またまったく別な形になっていることを率直にお話ししておかなければなりません。大学の先生方っていうのも、割にプロのスポーツ選手に似ておりまして、能力さえあればね、どこでも引っ張られる可能性がございます。いい仕事を注目されるようになると、いろんなところから声がかかってくる。別に出身のところでは仕事をしなくちゃならないという義理はないですから、割に自由に動ける立場になっています。そういう意味でも、私も、ただ母校で居座る形になりましたけれども、他の大学からお話いただいたことがあります。アメリカの大学の場合は、卒業した大学ですぐ助手に残ったり、助教授に残るっていうのは認めておりませんから、必ず外に出なくちゃいけない。そして、仕事をして母校に呼び戻されるという形になるのですが、日本では私もそうでしたけれども、大学を卒業してすぐ助手になって、講師になり助教授になって、教授になっていくっていうのがかなり多かったです。そういう形になっておりますから、私がいかに話しかける立場ではないのですが、教授会を運営していくことになることになると、どこにでも行きますよとい

う能力さえあればっていうような人の集まりですから、企業と違いまして、いくつかの部があって、その下に部長がいて課長がいて係長がいて平がいて、平からずっと上へ上がっていくといった、そういう形では全然ないので、助手になったときから教授会に出席させられたり、平気で専門の全然違う教授の発言に、それおかしいじゃないですかって食ってかかったりすることもあります。それでそ別にクビになるわけでもありませんから。こういう組織のリーダーシップがどんだけ難しいかっていうのはよく分かります。

ですから、学長になって本当によく分かりましたのは、学長のほうが学部長より楽なんです。なぜかっていうと、学長になって評議会とか学部長会議などをやりましたら、みなさんそれぞれの学部代表として出席しておられますので、発言が非常に慎重になっておられるのです。学部では、若くて助手に残った連中でも平気で発言しますから、もうバラバラの体制で、これを整理をしてまとめていくっていうのは非常に難しいってことがよく分かりました。

こういうのは一番いい例でございますけれども、これは組織の性格にもよるのです。さっきのスポーツ選手のように自分が偉いんだという人たちの集まりだけではないんで、ほんとに勝手気ままに言うことができるような、言い方ができるようなそういう組織になってますと、ノーベル賞のような皆が一目おいて、認めるようになっていないと、なかなか運営が難しくなります。だからもし大学で、本当にリーダーシップをとれる教授がいるとしたら、すごいことだというように考えなくてはなりません。大学でリーダーシップをとろうと思ったら、せいぜいその専門の中で、ある程度のポジションだけは確保して評価を得ておかななくちゃならないと思います。あとはもう本当に誠実だということだけぐらいでしょうか。それぐらいが大学でのリーダーシップだろうと思います。

ただ、最近のように国立大学も、国立大学法人という経営体になってまいりましたから、私などでは、とてもリードできないような大学に変わってまいりました。今、国立大学では、教授はみな、なんとか大学大学院教授といってるんですね。ちょっと時間とって悪いですが、どうしてそんな具合になったかといいますと、もともと国立大学には講座制とか学科目制というのがありました。講座制には今、修士講座制と博士講座制とあります。学科目制は教員の数も決まっておりますし、それから予算も一番少なくなってます。講座制になりますと、学科目制よりも教員当たりの費用とかいろんな旅費で全部ちょっと上になるんです。博士講座制になると余計多くなる。予算を増やしていくことで、かつての文部省にいろんな要求をしますと、文部省の予算の枠で増やすことが簡単でないものですから、従来の博士講座制の中でも、もう少し予算を増やそうと思ったら、大学院大学ということにして、博士講座よりももうちょっと格の上な資格にして、予算の配分をしなくてはいけません。そこで、旧帝大と私どもの神戸大学では、経済・経営・法学部というように戦前からあったような大学の学部、そこだけ大学院大学のところにしたのです。

そうするとどういう形になるかといいますと、今までは学部が基礎で、その上に大学院がついてたのですが、今度は大学院が基礎で、その下に学部がついているような形に変わってきたのです。従って、正式な名前も、なんとか大学大学院っていうのが中心になりまして、そして学部はそれに付属した形になる。今までの学部長というのが研究科長、大学院なんとか研究科長というようになって、それが正式な名前になった。それをやってるうちに、この意味の大学院大学でない大学でも、そのうち大学を法人化して自由に名前をつけられるようになると、他の大学も予算は全然増えてないのに、全部大学院という言い方をするようになりました。日

本以外に、こんなことやってる国は他にはありません。今は私学でも、予算は関係ないのに全部こうなってます。慶應義塾大学大学院教授っていうような言い方になってまいりました。

そこで、こういう大学でのリーダーシップの問題というのは、プロのスポーツの選手の世界とはまったく違った形になっているといわなくてはなりません。その点、企業の場合はリーダーシップにまた違いが出てまいります。ただし日本の企業とアメリカの企業とは大きな差がございまして、日本の企業は、アメリカ流に考えたらアマチュアリズムだといわれます。アメリカを中心に企業の体制というのは、本当にプロの形になってまして、その職場によってそれぞれどういう仕事をするかが決まっております。その職業、職場についたら一生それをやってるわけです。経理なら経理、入ったらその仕事を退社するまでやってる。その点、日本の場合は、新入社員になって、人事部に入って、経理部に回って、営業に回って、それらを支障なくうまく運営するような人が上にちょっとずつ上がっていき、ついに社長になるというような形になっております。

その点、アメリカでは、自分の配属された場所で一生を終わる人が多いわけです。ちょうど官僚でいいますと、キャリアとノンキャリアみたいなものです。キャリアのコースはMBAとか、そういう資格を持った人たちが占めています。MBAで優秀な人たちは、卒業して28、9ぐらいで大学院を出て、すぐ副社長、部長として入社するわけです。で、高い給料で働くようになり、その下で何十年勤めている専門職の人たちが、その部下として働くようになってます。日本でそういうやり方したら、会社経営がうまくいかないといわれています。なんだあの若造、新入社員がなんで副社長なんだというように受けとめられるわけで、その点、アメリカのMBAコースの人々は、例えば金融工学でもなんでもいいですが、他の普通の社員では身につけ

てないような技能を大学院で教わって、それで専門職につけていく、というような形になってます。こういう形でそこでのリーダーシップのとり方と、日本のようにいろんなことを経験して、アマチュアで仕事してこなしていくときのリーダーシップのとり方とでは全然違った形になります。そうすると、同じリーダーシップでも日本型でやろうと思ったら、人格が高潔である人か、ある仕事につき、この面でも有能な力を、人がびっくりするような能力を発揮したというようなケースとして示せることが必要だと。

そういうケースとして、反対の人もないわけじゃないんですけども、伊那食品工業という会社がございます、この会社の社長、塚越

寛さんが書いてらっしゃる、『リストラなしの「年輪経営」』という本があります。この人は、この二宮尊徳を尊敬をしてらっしゃいまして、二宮尊徳の「近くをはかる者は貧し、遠くをはかる者は富む」という有名な言葉をいつも引き合いに出しながら、この50年間、一度も首切りをしたことがありません。会社経営を急に大きくすることは考えず、ちょうど木の年輪みたいにくっきりと、この年輪のこの幅が狭いほどしっかりした木になってるんですね、で、急成長の木は年輪の幅が間があくようになっています。年輪のこの間を詰めた形にして、しっかりした企業に成長させていこうと考えてこられました。一番大事なのは人間、働く人たちだということで、で、立派な金庫の奥には全社員のアルバムが全部置いてあるのです。そして、結婚式とか子どもが生まれたとかの際は、社長がちゃんと呼び出して、お祝いのお金を渡し、お祝いの言葉を述べる。社員はもう本当に、この会社のためなら全力を挙げて働こう、頑張ろうという気になっている。この50年間、一度もクビを切っていないだけではなく、借金もなしです。そして利益がある需要が増えても、ゴルフのときの追い風のような形の利益の上がり方なのか、それとも本当に商品が評価されて着実

に増えてるのか、または臨時の機会でたまたま増えてるのか、というようなことを考えて、必ず自分の商品に対する購買者の顧客の評価が高まり商品が売れてる場合でないと、いくら儲け仕事があっても投資をしないという形でやっておられる。私はその話を聞いて感心をしておりましたら、ある鉄鋼会社に勤めているゼミの卒業生が、実際にその会社に行ってみて、写真その他を持ってきてくれました。会社の周りに自分で公園を造って、そして、その中で働くようにしておられます。この方の生き方というのは、日本型の会社経営の1つのタイプだと思います。

それと同じようなことですが、昔の財閥の住友の総理事の伊庭貞剛さんのお話があります。伊庭さんのことを、たまたま私が知ったのは、私の大学の先輩の奥さんの曾祖父に当たられる方だったからです。その関係で、伊庭貞剛さんの本をいただき、読んだことがあります。彼は『幽翁』という名前と呼ばれておりますが、本当にこんな人が経営者にいらっしゃるのかと思うほど立派な経営をなさっております。これは例の四国の別子銅山、あそこが銅の精錬のときに大変な量の硫酸が撒き散らされ、付近の住民に大変な悪影響を与え、有名な田中正造という人が反対運動をやりました。あれも岩波文庫から1冊の本になって出ておりますけれども、この公害問題を大問題にして、会社に詰め掛けてくるようになってきた。そのときに、別子銅山の担当者として、住友本社から希望者がいないところを彼が名乗り出て、別子に行きます。非難されるいろんな会合がありましたが、彼は黙って座ってそれを聞いて、密かに腹をくくるのです。向かい側に四阪島というのがあるんですが、今の金にしたら数千億の金にあたる当時の170万円というお金、別子銅山の2年間の純益に当たる金だったらしいですが、自分の独断で黙ってその金で四阪島を買って、そこに全部工場を移したのです。ところが、元の別子銅山

のほうは公害がなくなったんですが、移した四
阪島でやっぱり硫酸が出るようになる。そこで、
ドイツからの当時発明されたばかりの脱硫の装
置をつけて、見事に四阪島の旧別子銅山を繁栄
をさせるようにさせてる。それだけではないの
です、その別子銅山の跡にですね、この人は思
い切って毎年100万本から、多い年は250万本近
く木を植えていかれたんです。そして、見事な
緑の山に復旧させた。それでもう多くの人々が、
田中正造さんら反対運動をしていた人たちも
みんな感心して、尊敬をするようになった。伊
庭さんは琵琶湖の近くに別荘をお持ちになっ
て、当時の住友の社員たちは、汽車から見
えるほうの窓に身を寄せ、あれが伊庭さんの別
荘だというので、そこにお辞儀をして感謝を
したというような経歴の人なんです。57歳で
その仕事を終わって身を引くと、後継者を決
めて、そのあとはもっぱら、禅宗の勉強をし
たりして、一生を送られたようでございま
す。

こういうことをやれることを、文学者の中
野好夫さんが『中野好夫全集』の、『高風の財
界人』の中で伊庭さんのことも取り上げてい
らっしゃって、こんな素晴らしい人が財界に
いらっしゃるといのは考えてもみなかったと、
絶賛の文章を書いておられます。

ある人が紹介をしているんですけれども、
バブル崩壊の中で金を無茶に使い、今の三井
住友の前身を非常に危殆に陥れしめた、名前
は特に申しませんがある会長さんのことなど
は、会社でいかにいいことを言っても、人が
問題なんだということの象徴として取り上げ
、今の伊庭さんのお話にもふれています。こ
ういうリーダーができますと、みんな心から
尊敬して、その言葉に従っていこうという、
そういう生き方を示すようになってくる。こ
の伊庭さんは、臨済宗の勉強を一生懸命や
られたみたいで、『臨済録』は愛読の書であ
ったようですね。「君子財を愛す。之を取
るに道あり」とお話しになって、それを本
当に実践をされたケースです。

ついこの間、ある会合で、安藤忠雄さん
にお会いしました。隣り合わせて食事を一緒
にして、この伊庭さんの話をしたら、安藤
さんも、空港を作る際、土を削った淡路の
跡地になんとかして緑を戻そうと努力をさ
れ、今日、世界的にも非常に注目されてお
られ、また、大きな山火事があった直島
でも注目されている。直島だけでも、去
年90万人の人が世界から、日本からも外
国からも集まってこられたようですが、こ
れは緑を復活させて、なんか特殊な装置
を造っていくということで注目をされてい
ます。伊庭さんはその大先輩ににあたります
。十数年にわたって100万本ずつ木を植
えたっていうんですからすごいんです。こ
ういう努力をなさる財界人っていうのが
いらっしゃって、これが本当に当時の住
友の人たちの敬愛をうけたリーダーにな
られた、というのが分かりまして、私も大
変勉強させられました。こういう活動とい
うのは、ただ言葉で示すだけではいけない
、本当に身を持って示していかれるよう
な力がないといけないと思います。

その点、政治におけるリーダーシップ
というの、最初に申しましたように、菅
さんなり麻生さんなり、鳩山さんなり、
みんな残念なことに実は人を本当に引
張っていくような力にならなかったとい
うことを考えざるを得ません。政治にお
けるリーダーシップというのは本当に
難しいというのはよく分かります。

ボールディングという有名な経済学者
がおります。神戸にもまいりまして、私
も対談させられたんですが、このボー
ルディングは、社会が存立するには3つ
の条件があるといいました。1つは交
換、それからもう1つが統合、Integr
ation、もう1つが脅迫、こういう3つ
の領域があるというのがそれです。交
換というのは経済の領域です。人間、
生きていくためにはすべてのものを自
分で作り供給しているわけではありま
せん。従って、自分で得た収入で自
分の必要なものを手に入れていく必要
がある。

そのためには交換をしていかななくてはなりません。それで経済の領域っていうのが成立してる。それでうまくいかない、統合しかありません。統合というのは、人と人との関係を調整をしていく形、お互いの役割を認め合うか認め合わないかっていうことで、統合のテーマが決まってまいります。ですから、家族ですと、親と子の間、あるいは夫婦なら夫婦の間でお互いの役割を認め合うと、統合が100%近くうまくいってますし、その間が断絶しておりますと、統合ができなくなっているといえます。これは、人と人との関係を表す社会の領域の問題。この2つでうまく成立しているとよいのですが、この2つともうまくいかないときには、脅迫しかございません。で、それをやるのは政治の領域ですというふうに言っている。しかし、脅迫で保たれている組織というのは、いつ破壊されるか分からない。日本でも戦時中の時代はそういう形でしたし、現在でも、北朝鮮という国の場合は、完全にこれだけで持っている。これが強く働くものだから、やむを得ずここでなんとなく我慢をしている。反対すると、殺されるとか、刑務所に入れられるとか、怖いからやめとこうっていうんで、なんとなく統合が図られている形になっている。

そこで、この政治の世界ということについて、私はよく最近いろんなものを書いてるんですけども、アメリカの補完性原理ということ、一度考え直してみる必要があると思わざるを得ません。その補完性原理っていうのはどういうことかといいますと、アメリカにはイギリスからプロテスタントの人々が渡ってきた。イギリスの国教はカソリックに近いものでしたから、プロテスタントの人たちは信仰ができなくなってくる。そこで自分たちの宗教を自由に追求できる、そういう新天地を手に入れようじゃないかと、メイフラワー号でアメリカ大陸に渡るわけです。渡ったアメリカ大陸には、昔から住んでいた現地人がいますが、政府も何もなし。

へ何人かの人々が生活を始める。そうすると、生きていくために各人が自分の努力で能力に応じて働くしかない。得た収入は全部自分たちのものとして各人が努力をしていくのですが、いくら各人が努力をしましても、みんなで協力をしないと確立できないものがある。例えば、保安官の問題だとか、消防の問題だとか、それからみんなでちょっと楽に過ごせるような公園のようなものを造ろうとか、河川をなんとかしようとか、そういうことについては、自分だけではできない。そこで、そういうのを公共のものとするわけなんです。公共の施設なり、公共の役割を持った仕事というように考え、この公共のものの目的を達成するためにどうしたらいいかという、税を出すか、あるいは寄付金を出すしかない。税というのは、例えば、村全体をうまく運営するため役所のようなものをつくるのに必要なお金をみんなで出して、そこの人々に使い方を考えてもらうというやり方になる。それから、それでは頼りないので、自分たちが直接お金を出して、そして公共の事業を果たすように金の使い方を考えましょう、というのが寄付金ということになります。アメリカの場合は、多くのものに寄付をいたしますと税控除になります。この寄付した分だけ税金が減るということです。それを別な形で考えますと、所得を持つて人々が、公共のあり方を自分で決めてくか、それとも誰かに任せて決めてもらうか。その比率の中で決定するのはこちらになっていく。そういう社会が作りあげられていって、十分でなくなってきた公共のものをさらに拡充しようと思うと、最初は村から始まる。村だけでは駄目で、いくつか村ができると調整のためにこの村を統合するための郡が、Countyがいます。Countyがまたいくつかできますと、もうちょっと違う形の州、Stateにしていこう。Stateがいくつかできると、他の国との関係もあって、いわゆる合衆国、United Statesが成立しないといけなくなります。

一番大切なのは、各人の自分達の生活で、自分たちだけではできないものを補完するために、この公共の団体である村ができてくる。その村の不十分なところを補うために、郡というまた別の組織ができ、その不足を補うために州ができて、そして国全体の統合ができます。こういう形になっているのが、補完性原理の働き方で、基本は各人の生活についての、収入についての考え方、生活のあり方についての考え方が基本になります。で、こういう格好でできあがっている政治の場合が典型的であります。この考え方は非常に多様になってくる。みんな多様で、各人多様で、どれに決めるかは多数決で決まる。いわゆる民主主義で決まる。というようになっています。従って、一時的に間違ふ民主的な決定もあり得ますが、しかしながら、あれはおかしいということで、またそれに対する反対がおこり、もう一度多数決の決裁を行っていく。その点、一党独裁のシステムとは根本的に違うということが分かります。一党独裁の場合は、こういう変更を許さない、民主主義ではないわけですから、そういう政治の体制でのリーダーシップはもう、まったく違った形になります。民主主義的な社会のリーダーシップの問題と、一党独裁の中でのリーダーシップの問題とでは、根本的に違うということです。

今、世界の政治はその2つの体制の争いで、以前のソ連対アメリカ、あるいは資本主義対共産主義、あるいは社会主義という対立はなくなりましたけれども、しかしながら民主主義と、それから一党独裁と、中国も一つの例ですが、中近東のいくつかで起こっているようなこともそれと関係ありますけれど、そのリーダーシップの問題が、世界的に大きな問題になっている。そのどちらを私どもが選ぼうとするかで、リーダーシップのあり方が根本的に変わるような、そういう事態に立ち至っている。

私どもは幸いにして今、この民主主義のシステムの中に入っているわけですね。そして、今

までは日本の民主主義は、補完性原理ではなかった。しかし、割にしっかりしてたものでした。たとえば、徳川時代は、封建制度だといわれていますが、ああいう封建社会というのは外国にはない社会でしたと言ってよい。内村鑑三さん著の『代表的日本人』の中で内村さんは上杉鷹山を代表的日本人としてあげ、キリストに匹敵するような活動を封建領主がやっていたと書いています。だから封建領主というヨーロッパ的な比較で位置付けるわけにいかないというように、あの中で取り上げています。すなわち、藩民の生活を豊かにするために、藩主自身が身を削って節儉をして、そして全体の利益のために活動しておる。岩波文庫から本が出ていますが、別の恩田木工さんという松代藩の家老がいるんですけど、彼の場合は、藩を立て直すために、本当に一汁一菜で生活をする、あるときは塩だけでご飯を食べるというような生活をして、立て直しています。恩田木工さんの本を見ると、そのために彼は、奥さんに離婚を迫り、私はどうせいろいろ批判を受ける、そのときにあなたたちに迷惑をかけたらいけないと、本当に1人になって塩だけでご飯を食べて節約をして、みんなをリードしていくという生活をされた。

それ式でいえば今度の震災の復興についても、菅さんや国会議員が本当に身を削って、このような生活を始めます、従って全国民で東北地区、それから関東の一部の地域の被災された方達の生活を確立するため、この機会を日本のRebirthのチャンスにしましょうというようなアピールができる。そういうリーダーシップをとれるかどうか、本当に体を張って示さなくちゃいけない時期になってる。ところが残念ながら、そういう体制にはならなくて、総理がわざわざ東京電力に怒鳴り込みについて文句を言うようなことしか報道されないようでは、本当は困るんじゃないかならうかと思えます。

そう考えてみると、プラトンの『国家』って

いう本がございますが、プラトンのあの時期の議論は、いわゆる討論ではなく、対話の重要性を言ってることになります。討論というのは議論をして勝ち負けを決めていく、そういう議論の仕方です。ところが、プラトンの時代のギリシア哲学の展開というのは、対話の世界なんです。自分の言うこともしっかり言うけれども、相手の言うことも聞く。そして自分の主張の限界も自覚しながら、相手に説得をしていこうとしている。そして、お互いの欠陥とお互いのいいところを見出して、より新しいものをつくりあげていく努力をしようという議論の仕方になるのが、対話の世界だということになると思うんですが、こういう対話が今こそ日本の中でも必要になってきているのではないかと思います。

日本のこの困難な時期の新しいリーダーシップは、こういう対話を十二分にやれるようにし、そして何よりもそのためにも先ほど申し上げました、ポジティブティというのをみんなで確立し、最後まで頑張ってやり抜くという、前向きに姿勢を改めていくことが必要なんではないかと思います。私自身はそういう先頭に立っていく人間にはなれないと思いますけれども、しかし本当に小さな試みは、私、いくつかの団体の長として、努力はしているつもりです。それで本当にリーダーシップがとれているかどうかは自信ございませぬけれども、すべての人々がそういう具合になっていくと、新しい日本づくりに大きな役割を果たせるようになるのではないかと考えます。

ところで、私どもは評論家になってはいけません。本当にこういうふうにやれば前へ進めるということを提案でき、そしてそれを身を持って活動できるようにならなくてはならないんじゃないかと思います。ロータリー、ついこの間も淡路で会議がありまして、安藤忠雄氏、南部さん、パソナの社長等と一緒に食事をしました。この南部さんも、彼は今淡路で農業経営をされ

ているんですが、この機会に東北から200人ほどの青年に来てもらって、そこで働き、新しい農業のあり方を考えていくようにしよう、それから職種の見出し方をしていこうと思っている。そのためには今持っている土地だけでは少ないので、なんとかしたいと言われました。そしたらその隣に、サンヨーの前社長の井植さんがいらっしゃって、淡路には井植さんがたくさん土地を持っているので、差し当たり6000坪なら使ってもらえるというような話をされた。それはもう借ります、すぐ行動を起こしますとこの間もお話しになってました。安藤さん自身はその隣で、このさい、阪神・淡路の大震災を経験した兵庫から、自分たちで新しい国民運動を進めようというので、今度の震災の結果、津波でああいう大惨事になりましたが、子どもたちは学校行ってた子が多いもんですから、小学校・中学校の子どもたちは結構助かってる。ところが、親たちは、あるいはおばあさん・おじいさんは津波に流されてる。そうするときと、震災、津波遺児というのが猛烈に増えるんじゃないかと思えます。この人たちを皆で支えてあげられなくてはおかしいんじゃないかといわれ、その場ではみんな合意して、これから本気で考えるようにしようということで決まりました。

こういう試みもいい例ですが、本当にそう思った人々が動くようにしていかなければいけないんじゃないか、政治が動くのを待ち、期待をしてたのではいけないんじゃないかという気がします。新しい時代を私どもがつくらなくちゃいけない、大震災というのは、そういう非常に大きな教訓を私どもに与えているんだと思えます。

大変つまらない前座のお話を長々として参りましたが、私の話はこれで終わらせていただきます。ご清聴まことにありがとうございました。

○徳梅 新野先生、どうもありがとうございます

ました。せっかくの機会でございます。何かご質問等ないでしょうか？ こういう機会で、ぜひ聞いておきたいことございませんか。分からないことでもなんでも結構です。

○受講生 先生のお話で、安岡さんの本ですが、これだけは皆さん読んでおいたほうがいいですよという本のご紹介をお願いします。

○新野 たくさんありますね。どれが一番いいというのは、ちょっとなんともいいようがないですけども。そうですね。お弟子さんで伊藤肇っていう方がいらっしゃるのです。一冊といえば、あの方の『現代の帝王学』などはよいと思います。建国大学で勉強してて、私の友人の知り合いだったもんですから紹介してもらいました。

○徳梅 他にございませんか。はい、どうぞ。

○受講生 日本では短い間に5人のリーダーが代わって、民間の中に素晴らしいリーダーシップを発揮できる方がきつとたくさんいらっしゃると思うんですね。そういう方々が民間にいっぱいいても、国のトップっていうのはかわることができるもんなんでしょうか。民間の力で。

○新野 それを私はすぐに大丈夫です、というようには言えないと思うんですが、例えば、この前の大震災を契機にいたしまして、私どもはこういう問題を本気で考えるようになっている。ご承知のように、新憲法というのは、2つの大きなことをキーワードにしていた。1つは平和憲法、平和を守っていきましょう。で、もう1つがですね、この地域主権です。アメリカ流に地域主権を確立しましょう。あるいは地方自治といってもいいですけども。こうは言っていましたけど、こちらは原爆問題もあって、憲

法を守ろうといったら平和憲法を中心にみんな考えてしまいますですね。で、ちょっと戦争の危険性があるような活動が始まりますと、この憲法に精神に反するって言うてくる。地域主権のほうはね、知事・市長を選挙で決めるということだけでした。これが地域主権の象徴みたいに考えられてきた。それで、先ほど言いましたように、それ以外の本当の税を、どういう具合に使うかを地方公共団体、しかも補完性原理に従って、生活の身近なところに任せていこうというような心がけがなかったわけですね。全部、中央が権限を持ち、地方交付税だとか補助金だとかいう格好で、中央が税の中から分けてあげましょう。地方出身の代議士たちが、その金をどんで獲得できるかを身を張って頑張って地元を持って帰る。それが代議士の役割になった。地方にどれだけ貢献したかを示して、代議士の評価を得るような形になった。ところが本当は、もともとの金は住民が払った金なんです。従って、住民がその使い方を根本的に考えていこうとすると、さっきの税か寄付か、どちらかの考え方を、しかも寄付っていうのも、自分たちの収入を自分たちが本当に使いたいってところに使えるように。それから、税ってというのは、そのお金の中で、誰かに任せて使ってもらうようにするというやり方ですから、基本は個人にある、住民のほうにあるんです。そういう体制を改めて考え直したらどうですかというふうに、大震災を経験して変わってきました。それが、いわゆるこのボランティアの活動になってきます。

ちょっと遠回りみたいですけど、震災時、ボランティアに私も引っ張り出されました。あの年に「関西財界セミナー」というのをやるように予定してたんです。ところが、1月の17日にああして大地震が起きましたから、今年は「関西財界セミナー」はやめようということになり、その代わりに「21世紀の関西を考える会」をつくって、震災にどう対応するかをみんなで

研究しましょうということになりました。それで、私、引っ張り出されて、「安全・安心な街づくりを考えるチーム」の委員長をやらされました。最初の日は大阪に行けませんでしたから、ヘリコプターで神戸から大阪の新しく開拓したところまで飛び、それからホテルまで行って、会合もったことがあります。

そういう形で会を始めるようになりますが、こういうボランティアの活動が、実は、今までも、日本でもなかったことはない。ことに今井先生などを中心にして、いろんなボランティア活動があったんですが、震災の前と後とでどんな変わり方をしたか。今、私も西宮に拠点を置くNPO法人のN V N A Dというボランティア団体の理事をやらされています。今、阪大の教授になっている渥美さんが理事長をやっておりますけれども、彼が「関西財界セミナー」の代わりやった「21世紀の関西を考える会」の研究会でうまいこと言ったことがあるんです。それは、今までのボランティア活動っていうのは、組織で呼びかけます。例えばYMCAならYMCA、どっかの宗教団体だと、曹洞宗のどっかの組織、あるいは創価学会に呼びかけて、こういう活動をやってほしいと呼びかける。ところが、今度の大地震のときは個人主義的になっている。ボランティアに行く人が、若い学生諸

君が中心になって、なんとか行ってあげよう。誰かから組織が命令を受けて集まったんじゃない。個人個人の集まりなんです。そのためにですね、今まで組織に呼びかけているときは、どこそこのボランティア活動やっていただいたら旅費はこちらで負担しましょう。現場で1日いくらかの最低の保障はしましょう、というような形で現金を渡していた。それがね、この非貨幣、難しい言い方ですけども、収入のあるなしとは関係なしにボランティア活動をするようになった。

第3番目にですね、組織でやっているときは、団体の代表がボランティアの必要なところと前もって話をして、何を派遣する、何をすればいいかという打ち合わせをしていくので、着いたらすぐ何の仕事をしたらいいか分かってたんですが、今度は自分の費用で、個人個人が突然飛んでいくってことになりましたから、どこへ行って何をしたらいいかも分からないまま、現場に飛んでいくことになる。そうやって何が起こったかという、ボランティアに来ていただいても、何をしたらいいか分からないという話になる。YMCAさんなんかはいい例なんですけれども、今までいろんな活動をやってらっしゃる人々が、皆をリードして、あんたはこれやりなさい、あんたはこれやりなさい、っていうよ



うに活動をリードするようになった。これが、例のNPOが出来上がる非常に大きなきっかけになっている。それがきっかけで、全国に無数のNPO法人ができあがりましたね。こういう力がもし本当に累積されることになると、その力が増えてきますと、補完性原理を本当につくりあげないといけないんじゃないか、いう気持ち広がってきます。そうすると、テレビやネット上で、政治家の活動に対するものすごい批評がわーっと出てきて、政治家もそれを反映しないと、生きていけなくなってくる、政権を取れなくなってくる、という体制ができあがる。ということは、先ほどおっしゃったような、トップが駄目でもね、新しいものが生まれてくる可能性がないことはない事態が始まりつつある、というように私ども考えています。ただし、非常に心配なのは、こういう体制を放っておきますと、いわゆる世俗、世論に動かされて、世の中全体が右往左往するようになってしまう危険性もあります。ウォルター・リップマン著『世論』（岩波文庫）という本の中でリップマンが言ってるのは、それを避けるために非常に大事なポイントでして、新聞記者の人たちも、自分が前もって考えていることを中心に記事を書いたり、あるいは、主張をするようになってくる。それに引っ張られては、本当の世論というのはできあがらない。みんなは、言われている議論がどういう立場でどういう偏りを持っているかということを理解し、考える能力を培っていかなくてはならない。新聞やテレビのいうとおり、それに従うような世論の形成になってたらいけないということをリップマンは警告しているんです。それを私どもは本当は、これから克服して身につけていかなくちゃいけない。

ところが最近ちょっとした事件がありますと、新聞社がすぐ世論調査をやり、それで総理大臣まで変わるようになりました。これがいいか悪いか。これ2つの意味を持っていますね。先ほどおっしゃった、政治家が駄目だったら下が

頑張っても駄目なんじゃないかという問題は克服できる可能性は出てきました。みんながしっかり発言するようになったら、総理さえも変わらざるを得なくなってくる。ところが同時に、そんな世論というのは、例えばみのもんたがテレビでこう言ってるからという世論では本当の世論ではなく、そういう声が世論として出てきて政治を変えるようになると、これは本当にちゃんとした対応にならないですね。それを避けるためには、国民1人1人が本当に自分で考えて、そして本当にボランティアとしての活動をその形で確立をしていくことが必要になってくる。それを同じように補完性原理に基づいて、私どもは自分たちの所得を誰かに預けて公のために使ってもらうか、それとも、自分たちが直接大事だと思うものに直接つぎ込んで、そして、世の中をちゃんとしていくようにすると。単なる寄付っていう考えではいかんですね。自分自身がどういう立場であるか、何を求めているかと思ってるか、ということをはっきり表せるようなシステムをつくりあげていかなくちゃいけない。その今ちょうど端境期にきてるんじゃないかという気がします。

そして今ご指摘のようなことは、私どもが本当にしっかりしてたら、やれる可能性はあるんじゃないかと思います。さっきのエコノミストの言い方でいうと、今回の大震災を、津波および原子力発電所の事故を日本人がRebirthの、A Time Of Rebirth、再生の時間、時期とできるかどうかがかかっているのは今だと思いますから、みんなで、きょう参加していただいている若い人たちも、もちろんでございますが、私のような年寄りも一緒になって、そういう雰囲気をつくりあげるように努力しないといけないというふうに考えています。ですから、絶望ではないと思いますね。

○徳梅　ありがとうございます。他にございませんか？　はい、どうぞ。

○**受講生** 失礼します。先生、朝からどうもありがとうございました。関係ない問題なんですけど、今回の東日本大震災で、防災ということをすごく考えるんですが、例えば避難場所など、早めに考えていたら、もっと多くの方が助かっていたらと思うんです。想定外想定外いいんですが、想定外ではないと思うんです。平成の大合併というのがありましたけど、今、村や町が当然この東北でも合併したことによって、あとの対処が大変今回違ってきていると思うんです。そういう中で、今はもう合併は落ち着いていますけど、効率化を図ったこの合併だと思うんですが、その辺のところ、町が小さかったらリーダーもまた変わるし、町が大きくなったらまたきょうの問題のリーダーも変わってくると思うんです。そんなところからこれからの災害によってこれからの日本の流れが変わって、合併に対することもまた変わってくると。五年後われわれがこれから理想とする、先生が理想とする村とか町というのは、これからの時代どう変わっていくか、ちょっと教えてほしいんです。

○**新野** ちゃんとしたお答えになるかどうか分かりませんが、1995年の阪神・淡路大震災で、私どもは都市のあり方、町のあり方、村のあり方について根本的な反省を迫られたとよくいわれております。その根本は、今おっしゃったようなお言葉との関連があるんですが、すべてを効率性やあるいは成長性を基準にして、こういうことを1つの基軸にして考えていきたいと思います。町づくりやなんかについてもね。ということで、道州制の1つの説明にもなっておりますが、この二重行政があるとか、それから各町や村が、隣の町にホールができた、運動場ができたからうちも造ろうというふうに競争的に、誰が来てどういう費用が生じ、どういう成果があるのかを十分に反省、あるいは吟味せずに造られていく。こういうのは無駄なこと、効率的にやろうということを考えてい

たり、1つの町が大きくなるほうが、今の制度のもとでいろんな権限をもらえる可能性があります。従って、かつて政令指定都市というのは、人口が大体100万となることを規定にしてつくられてましたが、最近は大体60万ぐらいからになっておりますね。その点で、例えばドイツのように州が独立した形になっている、連邦のような形をとっているところでは、ルール地方でも大体が50万が1つの都市の基準になってますね。それがずっと並んでいるわけで、合併して、100万の都市にしようとか、150万にしようとか、そういう動きはないですね。そういうことによるメリットを法的に保障しないようにしているんです。そのことが、国のあり方を根本的に変えて、町のあり方についても考え方を決めてくるようになってる、と。

日本は、こういうやり方で都市を運営しようとして、いろんなところを努力してたんですけども、都市について一番大事な基本は、安全・安心な街づくりだと考え直して、あれを契機に変えたはずなんです。今度のこの震災では、その意識を余計徹底して、みんなが持たなくちゃいけないんじゃないかというように思います。

しかしながら、今の政府は必ずしもそうではなくて、アメリカの代議士の制度をご承知のように、Lawmakerなんです。法律をつくる人たちが代議士になっているわけです。日本の代議士は、出身地域の利益を保障する、手に入れるために働くことを基本にしておりまして、法令は官僚がつくるようになったんです。もともとがね。ところが、今の政府、あるいは自民党のときもでしたけれども、政治主導にしよう。官僚の発言を抑えていこうというような形になりましたから、本当の政治のあり方についての基本が勘で押さえられている形になってないと思いますね。

ですから、この阪神・淡路大震災でみんなが考えたことを、今度の東日本大震災を契機にし

て、もう一度考え直さなくちゃいけないようになってるんじゃないかと。ただし、今度の被害はちょっと激しすぎますから、もう一度安心・安全の町にしようというのには時間がかかると思いますね。阪神・淡路のときは、私も県の国際検証ですとか、それから10周年のときの全体の検証だとかの座長をずっとやらされまして、それで痛感しましたのは、これだけ真剣に震災への取り組み方・対応の仕方を検証していこうという試みは、外国にはないですね。それだけ真剣な反省を私どもやってまいりましたけれども、これを本当にこれから成果を上げるようにしていこうとしますと、もう一度、政治のあり方を根本的に考え直さなきゃいけないんじゃないかというように思います。今度、東北の場合でも、ついこの間も貝原さんたちとお話をしたのですが、これなんだか早く声明を出そうかと言っておりますのは、政府は復興庁をつくらうかというような試みも考えてらっしゃるみたいですね。政府の中に復興庁という役所をつくって、そして東日本大震災の復興を考えていきましょう。これをやろうと思ったら、政治主導ではとてもやれませんから、官僚を本当にうまく使っていかなきゃいけない。それから学者なり、そういう経験者をうまく使っていかなきゃならないんです。貝原さんの阪神・淡路大震災のときは、1月17日に大災害があったのですが、2月4日には、都市戦略策定懇話会っていうのをつくられました。私、座長をやらされましたけれども、下河辺さんとか、今、大相撲の八百長問題でやっています伊藤さんとかね、そういう日本中の専門家を集めて始められたんです。そして、国がやることを地元の利益と、利害得失と十分反映できるように、地元で考えようとか案をつくっていきまして、その中の何人かが全国の復興本部の委員に選ばれました。復興本部は、兵庫県で考えている復興のあり方に全面的、財政的にバックアップするということを起用したんです。それをもとにして今日の復興計画が

つくられました。

ところが、この復興庁の考え方というのは、あの関東大震災のときに東京は大被害でしたから、国で復興委員というのができたんですね。その計画で、関東をつくり直していったんですが、今回の地震では、東北から青森、岩手、それから福島、宮城とこう続いて、しかも茨城までかなり影響が広がっています。利害得失をちゃんと自分たちで十分受けるようにして、調整をしながら出す案でないと、被災地の人たちの復興はなかなか簡単に調整できないんじゃないかと思います。こういうものを考えるときに一番大事なものは、これを基本に考えるときにですね、阪神・淡路大震災の時はインフラストラクチャーの復旧は割に簡単だった、神戸港にしてもなんとかして1年ちょっとで元に戻りました。鉄道も、それから阪神高速も、自動車道も、約2年がかりで直りました。ですから、復旧はできると、元に戻すことはできるけれども、復興はなかなか難しくなります。

ところが、今度の大地震は津波もありましたので、復旧ができない。元に戻すことができない。例えば土地でも、塩があれだけ畑に入り込みますと、そこをもう一度米作、あるいは野菜を作るのに適した土地にするには、もうとてもじゃないけれども時間がかかる。何年もかかる。ということで復旧ができない。それから港にたくさんの自動車やいろんなものが入り込んで、漁業の回復が非常に難しい。ここへ行くというのにとっても時間がかかるみたい。そうすると、東北・関東の被災者の皆さんが、満足できる復興の仕方を考えようと思ったら、国で上からこういう具合にしなさい、というような形ではいかんだろうと思います。兵庫県がやったようなやり方を、この5つの県が一緒になって、議論して、これから国はバックアップしてくださいという言い方をしなくてはいけない。

それから何よりもですね、これからの問題点は、ある意味ではリーダーシップの問題とも関

係するんですが、今までのこの復興計画とは違
いまして、誰がリーダーシップをとるのかとい
う点で、いろんな考え方があると思いますが、
今の政治家よりも、それぞれの地域の代表の
人々の意見を本当に汲み取れるような形にしな
くてはいけません。兵庫県の阪神・淡路大震災の
ときには、救援の特別な会をつくりました。市
や県がこれですまくいくだろうと自分たちの思
い込みで行政やりましたら、政策評価をしよう
という気持ちがどうしても残りますけれども、
実際にやられている政策には、いろんな不満が
出てくる。それを兵庫県の場合には被災者支援
会議をつくって吸収しようと思いました。しかし
今回の震災では、いくつかの県にまたがって、
やらなくてはならない。そうすると、大変な困
難が累積してると思うんです。それに比べられ
る体制は、こんな形じゃなくて、やっぱり4県、
5つの県になりますかね、みんなでほんとに下
から盛り上がる形でまとめなくちゃいけないん
じゃないかと思います。

その一つのケースとして、つい最近今度の大震
災で、非常に多くうまれることになる震災孤児
を救援するために、安藤氏を議長という格好に
して、近いうちにみんなで考えようかってこと
になっております。また、先ほどもふれました
が、震災遺児の皆さん方の、今後の教育だとか
成長だとかをバックアップするために、ロータ

リーでも、被災地のロータリーが中心になって、
安藤さんたちの呼びかけに答えていただけるよ
うな体制づくりをしていただくと大変ありがた
いという意見もあります。この間、安藤氏とも
話してたのは、ユニセフがやってるような形ま
で考えて、10年間ぐらいは、毎年1人が1万円
ずつは寄付をしていくという形で確保していく
体制までいるのではないかと、今回はね。遺児の
数がどれだけになるかまだ分からないんです
ね。そういうことに対応できる体制づくりもし
なければいけないと言っております。東日本の
被害、地域の復興っていうのは、阪神・淡路大
震災の類ではないと思います。ですから、それ
に合うような政治システムをつくりあげていか
なくちゃいけないと思います。

それで、先ほどの「エコノミスト誌」ではご
ざいませんけれども、失望した政治システムで
はこれはとてもやれないと。希望を持てる政治
システムをつくりあげて対応していかなくては
ならないというように思います。

○受講生 ありがとうございました。

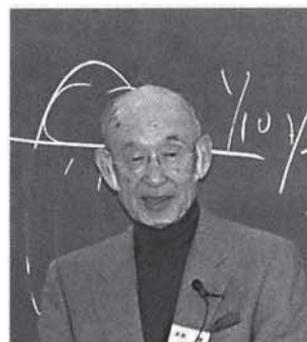
○徳梅 ありがとうございました。はい、そ
れでは、定刻になりました。新野先生、ありが
とうございました。皆さん、もう一度大きな拍
手で・・・

講義
2

「リーダーシップの心理学」

関西学院大学名誉教授
関西福祉科学大学教授

武田 建氏



プロフィール

● 略歴

- 1956年 関西学院大学大学院教育心理学専攻修了
- 1958年 トロント大学大学院社会福祉学専攻修了
- 1962年 ミシガン州立大学大学院カウンセリング心理学専攻終了(Ph. D.)
- 1962年 関西学院大学社会学部専任講師に就任
その後、助教授、教授、学部長、部長を経て

- 1985年 関西学院大学学長に就任
- 1992年 学校法人関西学院理事長に就任

- 関西学院大学アメリカンフットボール部総監督として全国優勝に7回、関学高等部監督として全国優勝に6回導く。

○**徳梅** 本日午後の講義はお手元のパンフレット12ページにご紹介があります、関西学院大学の名誉教授であり、また、関西福祉科学大学の教授でもあられます武田 建先生です。プロフィールは略歴に書かせて頂いておりますが関西学院大学の理事長までされた立派な方です。特に私、個人的には学生時代の頃から、関西学院大学のアメリカンフットボール部、KGファイターズの監督として全国制覇を何回もされて凄い人だなとずっと存じておりました。私自身も本日、武田先生の講演と言うことで大変楽しみにしております。それでは武田先生よろしく申し上げます。

○**武田** 大学の教員は自分の専攻領域を研究し、授業で教えるのが仕事です。しかし、私はフットボールという熱病に冒されて、やがては中毒症状になってしまいました。しかし、そうした経験を通じて青少年の指導の理論と方法を学ぶ機会があたえられました。

強いチームをつくるには：良い選手、よいコー

チ、良い設備が必要であるといわれています。残念ながら、関西学院大学には、当時良い設備はありませんでした。でも熱心な選手とコーチがいました。そして、アメリカのコーチたちが助けにきてくれました。そのことに感謝しています。

この講義は、フットボールでのコーチングの題材にしますが、その理論と方法は、会社の上司と部下、青少年団体のリーダーとメンバー、学校の先生と生徒の間にも通用する原理だと思います。ですから、私がコーチと申し上げたら、皆様は上司、教師、リーダーと、選手と申し上げたら、部下、メンバー、生徒と、チームと申し上げたら、企業 学校、貴方の属する組織、そして家族とっていただきたいと思ひます。

1. WHO これは選手のことです。人事(管理)です。

学生スポーツの最大の苦しみと辛さは、最上級生の卒業です。大学スポーツは4年間、高校スポーツ3年間で卒業がきます。よほど大量

のスポーツ推薦でもない限り、連続優勝ということは難しいものです。優勝するには、最上級生の役割は大きいと思います。最上級生が良いリーダーシップを発揮するか、しないかが大事なポイントです。そうした卓越したリーダーの4年生が卒業することは、チームにとって大きな痛手です。しかし、卒業してしまった選手のことを嘆いても仕方がない。企業でもどんな組織でも「良い部下が、良いメンバーが辞めてしまった」と愚痴りませんか？

そんなときには、チームのなかで、誰が何ができるか？一人ひとりの力を吟味し、適材適所に配置しましょう。部員が退部しないのも監督やコーチの腕前です。スポーツ推薦のない大学・高校では、入学した学生を勧誘し、入部しても、まだ当分は「お客様」です。1年生はまだお客様です。好きなポジションをさせて。チームの一員になったら、本人の能力と適性とチームの状況に応じてポジションを決めましょう。

企業やいろいろな組織では、学生のチームのように、控えの選手やポジションはないかもしれませんが。どうすればいいか、対策を皆さんと考えてみましょう。

新人選手を大切にしましょう。掃除は1年生だけではなく、1年から4年まで平等にしましょう。学年毎では反対されたので、ポジションごとに掃除をすることにしました。新入社員・部員、あるいは新入生と彼らの未来を語りあいましょう。グラウンドに1年生が最後まで残っていたら、監督も最後まで残って、一緒に部室に帰りましょう。

2. HOW これは指導すなわちコーチングです。

監督の最大の役目は、選手に「やろう」「学ぼう」という意欲を持たすことです。

- 1) 達成可能な目標を与える：目標が高すぎると→セリグマンの「学習された無力感」に陥ってしまいます。
- 2) 悪い点ばかり見ないで、良いところ、進歩したところも見ましょう。
- 3) コーチは口で言うだけです。でも、選手は身体でそれをやらなくてはなりません。コーチはもう試合に出ません、自分がミスをしないとすると、選手に不可能を要求するようになります。私は下手くその選手でした。自分が果たせなかった夢を選手に託していたのでしょう。この願望達成は上司、教師、親に共通のもので。自分自身を見つめましょう。選手の悪いところばかりを見ないで、良いところを見よう。
- 4) 知識の伝達：コーチがどんなに沢山のことを知っていても、それを選手に伝え、それを選手がやれるようにならなくては、コーチの知識はなんの価値もありません。
- 5) 教えるときには（コミュニケーション）具体的に、簡単に、誰にでもわかる言葉で。
- 6) 小さいことを大切に：手取り足取り やらせてみて、feedback、さらに確認する。安全第一。1回「やれたから」ではなく、何遍もやれるまで練習しましょう。「もしこれが駄目だったら」次の手だて、次の手だてを考えましょう。

3. WHY 説明責任です。

上から命令するだけではなく、よく説明してあげましょう。何故、こうやって攻めるのか、何故こうやって守るのか、選手にその理由を理解させましょう。

選手は「なぜか」を納得したらやります。納得しなければ、なかなか100%を投入してくれません。何故基本が大事なのか、何故このプレーが大事かを理解させましょう。

「何故ボールから目を離してはいけないか」

を知らせるために、プロ選手がボールを落としているシーンをビデオで見せました。何故プロの大選手がボールを落としたか？その理由を見つけよう！「やっぱり、ボールから目が離れている！」

ファインプレー集を見せましょう。モデリング=お手本になります。でも、選手の悪いプレーは一度だけ見せるだけで十分です。でも、ファインプレーは何度も何度も見せましょう。

4. WHAT これは作戦です。

作戦とは、選手の体力、能力、適性と、コーチの持っているフィロソフィーの組み合わせです。

昔、関学は甲子園ボウルで10連敗していました。日大に勝てませんでした。大きくて強い日大に勝つには、短いパスを早いタイミングでなげました。

5. 受容

カウンセリングでは「受容」と言います。しかし、グラウンドの上でやる毎日の練習と、週に1回45分のカウンセリングルームでの面接とは違います。でも、カウンセリングの技法は選手とのコミュニケーションの上でとても役立ちます。

阪急ブレーブス・近鉄バッファローズの西本監督からこんな話を伺いました。「自分は、野球以外になんの趣味もない。選手の趣味を聞いていた」こうして信頼関係を築いていらしたのですね！

1) 暖かさ、親しさ、信頼 vs 厳しさ、統制、掌：両方が必要

両方を兼ね備えることの難しさ、皆さんには皆さんのやり方があるでしょう

昔の私は叱ってばかりいました。しかし、今では「悪いところを指摘し（叱って）、

改善されたらそれを誉める」ようになってきました。

厳しさは必要、叱ることも必要、しかし、それだけでは選手はついてきません。ついてきても、不平と不満のチームになってしまいます。「言い過ぎた」と思ったら、それを正直に認める。自らに、相手に。

2) 個性の尊重

個々の選手は、異なった家庭、違った性格、持ち味。同じ親から生まれ育った子どもでも性格が違う。第一子、第二子では環境が違う

個性の尊重 vs 平等・公平

フットボールは瞬発力のゲーム、相撲と似てる。

10ヤード 20ヤードのダッシュを沢山

20ヤードダッシュ=1プレー

40ヤードのタイム コーチになったら直ぐにストップウォッチを買った

全力疾走を怠った選手：その選手の性格、育ち方

3) 感情の重視 → 傾聴、共感（ふんふんと聞く、内容の反射、要約、感情の反射） ポジションの変更、規則（チーム内のルール）の変更

4) 秘密を守る（守秘義務）

6. 教師、コーチ、上司、親の「願望達成」を自覚しましょう。

私は下手くその選手でしたら、かつての自分のポジションに、良い素質の選手をもってゆき、自分の夢を選手に託していたのだと思います。それ自体、悪いとは言いません。しかし、夢を託しているということ、自覚しておきたいものです。

7. 米国では監督のことをヘッドコーチとよぶ。
私はすぐに「頭にくる」のでヘッドコーチと
からわれていました。

8. 人は「育てられたように、子どもを育て」
「自分が教えられたように、子どもを教える」
私は、太平洋戦争直後の高校生時代に入部し
ました。大学生の部員は復員さんでした。そう
いう昔の体質を見習って、私を「怒鳴るコーチ」
にしたのかもしれませんが。

怒鳴って叱って、また叱って → 選手は叱
られるのがいやだから、一所懸命練習しました。
これは回避学習と同じです。

相手と良い人間関係を築きたければ、まず自
分の方から、相手に暖かい態度で接すること
です。挨拶をする、笑顔、目と目を合わせる、にっ
こりする、話かけることです。

9. 人間関係では、与えたものが自分に返って
くる。

+を与えれば+が、-を与えれば-が返って
くる。(しかし、返ってくる確率は+を与えて
+が返ってくるよりも、-を与えたら-が返っ
てくる確率の方が高い！)

10. 「悪いプレーを減らそう」としていた私。

怒鳴って、叱ってばかり。日本一になり、胴
上げされても、チームは暗い。発想の転換をし
ました。「良いプレーを増やせば、悪いプレー
は減る」という簡単な事実気づきました。悪
いプレーを叱ることは大切です。しかし、叱っ
てばかりいると選手はくさりませす。

11. まず、自分がどんなコーチングをしている
か、チェックして貰いました。

案の定、怒鳴っている回数が、誉める回数よ
り、遙かに多かったのです。

12. 選手が悪いプレーをしたら 「怒鳴っても
よい」「叱っても良い」「悪いところは指摘
しないとイケない」でも、具体的にどうし
て欲しいかを指示して、選手がちょっとで
も出来たら、良くなったら、それを直ぐに
誉める、良くなったと指摘してあげましょ

う。スキナーのネズミの実験 オペラント条件付
け(正の強化、負の強化、正の罰、負の罰)高
校の監督になったときに、本格的にオペラント
条件づけを導入。誉めるのが苦手ならば、良
くなってきていることを、何らかの方法でフィ
ードバックしましょう。ランニングならば、スト
ップウォッチで何秒かかったかを測って、言
ってあげましょう。パーベル何キロ上がった
かを張り出しましょう。出席表やシール(プ
ライズマーク)も有効です。

13. 選手のレベルに応じて、要求水準を
変える。それを選手に伝える。最初の目標
に到達したら、要求水準を上げる。

14. 誉めるとき、フィードバックする
ときには、随伴性「すぐに、毎回、一貫性
をもって、ちょっとでも」が大切です。

時間が経つと、誉める効果が減る。すぐ
に誉めないと、悪いプレーが起こり、誉
める機会を失います。

結果も大切ですが、その過程(途中)で
も誉めましょう、フィードバックです。

選手(部下)に話しかけ、注意するとき
には、「具体的に」「本人が出来るレ
ベルから」「相手に体を向け、顔を
向け、目を見て話しましょう。

「われわれは日本一のチームだ。やっ
て当たり前」という考えは捨てること
です。昨年は日本一だったかもしれ
ない。でも今年はまだはじめから
やり直し!

最初のうちは「すぐに、毎回、一貫性
をもって、ちょっとでも出来たら、
すぐに誉めましょう」

本人のレベルに合わせて、ちょっとずつ (small step) やらせましょう。失敗が続くと、選手はやる気をなくします。ちょっとしたことでよいから成功の体験を味わわせましょう！

ファインプレーとか特別目立ったことをしたときに誉めるだけではなく、普段の普通のプレー、「一所懸命に走る」「ボールを受ける」「ボールを相手の望むところへ投げる」といった、普通のプレーをちゃんとやれた時に、誉めましょう。「ちゃんとやれている」ということを、コーチが見ていることを伝えましょう。

- ・ただ「よくやった」というのではなく、「何をよくやれたのか」をはっきりと言って誉めることです。
- ・コーチ、上司、親は、自分が感心した、感激した、嬉しかった気持ちを伝えましょう。
- ・完璧でなくても、完璧にほんの少しでも近づいたら誉めましょう。
- ・子どもの場合、スキンシップで親の、先生の暖かさを伝えましょう。
- ・注目、関心、賞賛は大きなご褒美です。
- ・指示を出すときには、「どうしてほしいか」を具体的に言いましょ。
- ・だから、長々ではなく、簡潔に、具体的に、わかりやすく。

15. 難しいことからではなく、簡単なことから。難しいことは、分解して、またスローモーションでやらせましょう。step by step, one at a time がスローガンです。

16. 分解してやれば、難しいことも簡単にやれる。

- 1) じっとしている構え (スタンス) だけならば、誰にもやれます。
- 2) 「高いボールは親指仲良し」「低いボールは小指仲良し」やさしいドリルから。
- 3) 「ボールを見て!」「手の中に入るまで!」「脇にかかえて!」「前に走って!」
「手がかり刺激」の重要性。
- 4) スローモーションのすすめ (やさしい・正しく・不安や恐怖の除く)。
- 5) リラクゼーション法の効果とイメージ法の効果。

17. 選手が出来るようになってきたら、少しずつ要求水準を上げてゆきましょう。

18. 出来るようになってきたら、毎回ほめなくてもいいのです。

ときどき誉めるようにしましょう。つまり、連続強化から間欠強化にうつしましょう。自動



販売機とパチンコの原理です。

19. でも、ときどきは「誉めてあげましょう」

20. ノートルダム大学パーシージャン監督の言葉に戻りましょう

- 1) 有望新人：新人は可能性 可能性は戦力ではない
- 2) 個人の好き嫌いで起用してはならない。嫌いなヤツでも力があれば、試合に出せ。
- 3) 身長、体重、スピード 肉体的な要素だけではない ファイト 犠牲的精神 判断力 リーダーシップ 目に見えないものをも) 大切に
- 4) 人間として嫌いな選手でも、能力があれば試合に出せ(個人的な好き・嫌いで選手を起用してはならない
- 5) 1回の失敗で見切りをつけてはいけない

21. スーパービジョン (コーチのミーティング、部下の指導のためのカンファレンス)

- ・週に1回 時間を決めて1対1、1対数人 一種の指導的カンファレンス 打ち合わせ コーチのミーティング
- ・教室での講義 → ロールプレー → 実際の場で → スーパービジョン
- ・1人のインターンに3人 週に2回のスーパービジョン
- ・普通は 1対1 1対3でもよい
- ・スーパービジョンはカウンセリングではない。しかし、似ている部分もある
- ・「クライアントの今の状態を受け入れ、そこから出発」
- ・「学生(インターンやコーチ)のレベルから出発」
- ・両者の間に良い(人間)関係。仮に「好き」でなくても working relationship
- ・相互的な「尊重」少なくとも「傷つけない」配慮

・スーパーバイザーによってやり方はかなり違う

・実習生(部下)のスタイルを尊重、本人のレベルに合わせて。

・部下の考えていることを、話すことを、熱心に聴くことが大切

・やれることもあれば、やれないこともある、しかし、聴くことはできる

・耳を傾けて貰うと → 「尊重して貰えた」という喜びと誇り

・選手や部下は「イエスマン」ではない、自分の意見を持っている。

・人間は誰しも、他者に(上司に)認めてもらいたい

・尊重されて → 自己尊重が生まれる。ちょっとした気配り「お礼を言う」「メモを残す」「誉める」etc.

・我々上司、教師、コーチ、親はせっかち → いっぺんに、すぐに、沢山

・ローマは一日にしてならず

・仕事(スポーツ)の性質を理解して、どうすれば、やりやすくなるか?

・「尻上がりが出来なかった私」跳び箱を鉄棒の下に持ってきて教える先生

22. 行動理論(オペラント条件付け) 雑感

「何かをやって、その結果どうなるか」

AとBのレストランに行きました。Aは沢山あって、美味しく、安いレストランでした。Bは一寸しかなくて、不味くて、高いレストランでした。次に、レストランに行くときに、皆さんは「どちらに行かれますか?」

「看護師さんの詰め所に、すぐ入ってくる患者がいます。看護師さんが「駄目だめと押し戻して、ロビーまで手を引いて連れて行きます。でも、また来ます。『駄目、駄目』ということ、『押し戻す』ことがこの患者さんにとっては、関心注目になっているのでしょうか。ですから、またやってきます。この患者がロビーでTVを静か

に見たり、病室で本を読んでいるときに、誰も誉めません。「当たり前」のことだと無視しているのです。

「やって当たり前」 v s 「当たり前」のことをしたら喜ぶ 誉める

私たちの文化では「お前たち給料もらっているのだらう！」それなら「やって当たり前」の文化です。今まで、やれなかった人を、やれるようにするには、ちょっとでもやれたら、すぐに誉め、認め、喜んであげましょう。これは結構難しいことです。監督になったら、部下をもったら、それをする努力が必要です。

誉めても、その「ついで」に叱ったり、欠点を指摘してしまうと、誉めた効果は減ってしまいます。

誉めるときのルールは「すぐに、毎回、一貫性、一寸でもできたら」です。

心理学に「プリマックの原理」という法則があります。「減多にやらない行動の後に、よくやる行動をもってくると、減多にやらない行動が増える」というものです。「テレビばかり見て、宿題をやらない子ども」ならば、テレビをみるのはよくやる行動です。宿題をするのは減多にやらない行動です。この場合、「宿題をしたら、テレビをみてよろしい」と順番を組み替えてみましょう。

今日の講演のテーマの一つは「少しずつ」です、いっぺんに上手にはなりません。いっぺんに上達はしません。どうすればよいかを示し(手がかり刺激)、最終目標までを幾つにも区切って、ステップ・バイ・ステップ(ちょっとずつ)やらせましょう。

連鎖化の応用です。最終行動へのご褒美(誉めた)効果が、その前のステップにも、その前にも、だんだんと及んでゆきます。

学習理論は、オペラント条件づけだけではあ

りません。模倣学習(モデリング)もあります。昔から「見ることは信じることなり」と言います。いろいろな人が良いお手本を見せるとことは大切です。そして、やさしいことから、少しずつ難しいものへとお手本をみせながら、すすんでゆきましょう。そして、やれる毎に、各段階ごとに誉めましょう。

実際には両者(オペラントとモデリング)を組み合わせです。「お手本を見せ、やらせてみて、やれたら誉める」といったやり方です。

ときには、手とり足とり、教えることも大切なことです。

23. 話し方 (聴き方の次に大切なもの)

話し手(人)の持ち味を使いましょう。話し方には個性があります。私はユーモアを利用した話かたをします。しかし、しんみり語り合うことが出来る人は、それを生かして話すことが大切です。

上手になるには、

- 1) その人の持ち味
- 2) 自己理解の大切さ
- 3) 自分に合ったモデルを見つけましょう。

・具体的に、わかりやすく、正確に、伝えるまえに名前を呼んで、言葉だけでなく非言語的なコミュニケーションにも気をくばって、手取り足とり教えましょう。「もう、大人だから」「資格があるのだから」「一度言ったからわかっているだろう」と思って安心していると落とし穴に落ちこちます。常に練習です。

24. 聞き上手

相手の立場に立って聞きましょう。(これはとても難しいことですが)

「聴いていますよ」「わかりました」と相手に伝える努力をしましょう。

伝え方には非言語的なものが多いと思います。つまり、顔の表情、姿勢、動作などです。

また、相手の話すことを要約するとか、相手

の気持ちを言葉で言って返すことも大切です。

暖かさを伝えることが出来れば最高ですね。暖かさとは相手が悪いことをしていても、「よしよし」と言うことではありません。悪い点は指摘しても、叱ることも大切です。同時に、暖かさを伝えることは出来ないのでしょうか？

相手を無闇に押さえつけない、自分のために利用しない、相手の成長と向上を願う気持ちが必要です。

25. 思いやり

思いやりは、言わず語らずの間に相手に伝わるものが多いようです。

ゴマをするのではなく、自然に伝われば最高です。しかし、そうは問屋が下ろしません。

だから意識的に努力してみましょう。

「人間関係では相手に与えたものが自分に返ってくる」のでしたね？

電車のなかで、前にすわった恋人同士がどうやっているか観察してみましょう！

選手を、部下を、大切にしていることをどうやって、相手に伝えればいいのでしょうか？

遠征の時に、「俺は試合に出ないから」と言って、選手が全て座るまで監督が座らないのも一つの気配りです。監督が、自分の荷物は自分で持つのも一つのあらわし方でしょう。プロセスを見て指摘（現在の状態、選手のやっていることを言葉に出して言う）するのもいいでしょう。そして、良くやれていたなら、「良くなった、良くやった」努力していたら「努力しているのはわかるよ！」と言ってあげましょう。

悪かったら、悪いところを指摘 原因がわかればそれを指摘 → 良くなったら、それを言うことを忘れずに

26. 集団の力学

個人の関係「相手に与えたモノが、自分に返っ

てくる」。だから、信頼、気持ちをくみ、進歩を指摘し、励ますことが重要なのです。叱るばかりではなく、進歩を誉め、（誉めないならば）指摘し、フィードバックしましょう。しかし、組織という集団のなかには、「個人と個人」といった人間関係の外に、グループという組織が、個人を誉めたり、罰したりする力を持っています。集団は常にその構成員にグループ（多くの場合フォーマルでなくインフォーマル）の基準や規範(norm)に一致させ(conform)ようとする傾向があります。

指導者はその組織というグループに働きかけなくてはなりません。ところが、集団の力学というのはとても大きな力で、これに勝つのはとても難しい時があります。リーダーは徐々に集団の尊敬を勝ち取るしかありません。

集団の価値観や考え方と、リーダーの価値観や考え方を一致させる努力が必要です。スポーツのチームのように「日本一」「リーグ優勝」といったはっきりした目標があり、それを目指すときは比較的やさしいと思います。しかし、職場、家庭、学校ではそう簡単なことではないでしょう。目標の明確化、共有化、幹部（リーダー）と部下（メンバー）が共通の認識と目標を持つことが不可欠になってきます。

27. 上司のレベル部下のレベル

コーチであれ上司であれ、選手や部下を指導するためには、その領域での豊富な経験、知識、技術を持ってはなりません。しかし、自分が豊富な経験と知識をもっていると、つい「はじめから」相手にもその高いレベルを要求してしまいがちです。かつての名選手であればあるほど、コーチになると、「自分が自然にやれたことを、選手がやれないことに、腹を立てる」ことがあります。「なぜ自分がやれたことを、選手がやれない」のか理解できないようです。

でも、選手には 選手の言い分があるのです。「自分にとっては、無理と思う方法」「自分には、適していないと思う方法」「自分に適していないと思うポジション」と思うことがあります。そして、あまりにも不平と不満が大きくなると、やる気を無くしてしまいます。

すると、不平と不満がバイ菌のようにはびこってきます。少々バイ菌が体内に入っても、抵抗力があれば、バイ菌に負けることはありません。不満だって同じことです。チームのなかの結束力が強いときには（全てがうまく行っているときには）バイ菌を退治できるのです。

ただ、そのためには 選手の思っていることを 感じていることを ざっくばらんに話してもらうことが大切です。このことは、コーチの選手に対する信頼と尊重を示す機会です。仮に選手の話すことのすべてを実行に移すことが出来なくても、選手は「自分の気持ちをわかってもらえた！」という気持ちを持つことができます。しかし、選手の話したことを実行出来ない場合には、何故できないのか、何故出来なかったのかを説明し、「出来なかったこと」へ「すまない」という気持ちを伝えることが大切です。

今から質問の時間です。6人のグループごとにどうぞ質問して下さい。

最初のグループどうぞ。

○受講生 すみません、2つ質問させて下さい。1つ目は人の輪から外れる人を、また輪に入れてやる方法を教えて下さい。

○武田 これは難しいですよ、なぜ難しいかと言うと、輪から外れて行く人をよく見ていただきたいと思います。今、その人に声をかけるのがいいのか、もうちょっと待つべきかを考えなくてははいけません。これは子供のレベルの話ですけど、昔、この余島に神戸から子供たち

を送ってくる時にこんな経験したんです。関西汽船がまだ運行していた頃です。10人の子供が1つのキャビンに入りますから、リーダーともう一人のリーダーが2人で、キャビンのグループとゲームしたり歌うたったりしていました。するとその中の一人の子が、とことこと這って向こうに行ってしまいました。サブリーダーが行って「何々君、帰ってこいよ」と抱いて連れてきました。しばらくすると、また逃げて行きます。また追いかけて行きます。何遍も何遍も行ったり来たりしていました。そこで私が耳打ちして「行っても向こうは行き止まりで心配ないから、リーダーはここへずっといて、私が老眼をかけて見ておくから」そして、しばらく放っておいたんです。そうしたら、その子は戻ってきました。とことこと子供が出て行ったのは、ひょっとすると、それでリーダーの注目・関心を引きたかったのかもしれませんが、ですからリーダーが追いかけて行ったら、うまいこと落とし穴に入ったみたいなものですよ。だからまた行くわけですよ。ですから離れた時、どういう状況でどうなったかをよく見ていただいて、ひょっとしたらしばらく待って、彼か彼女が帰ってくるのを待つべきか、それともそんなこと言わないで、一緒にやろうよと言うべきか、そこらへんを見極めて下さい。うっかり、もしもしとやったら、悪い行動に注目・関心を示しているという可能性もあります。

○受講生 もう一つですけど、さっきチューリップの絵を描く話をされてましたが、それは描いた時に最終的に親はさりげなく注意を促しているのか、もう見過ごしているのか、どちらでしょうか。

○武田 この10分ないし20分間は、お母さんは全てのことを忘れて、子供に注目して下さい。幼稚園のお母さんと子供さんですから、お母さんとても忙しい時期じゃないですか。まだ

結婚されてないから分からないでしょうが。結婚しても子供がいなときは割と楽です。子供ができたら一生懸命世話をしなくてはなりません。男性も覚えておいて下さいよ、手伝って下さいよ、奥さんの。共働きだと家事が忙しいじゃないですか。それでつい子供と遊ぶ時間がなくなります。毎日一回ですから、一日一回10分間から20分間、集中して遊んで下さい。その間は全てのことを忘れて子供に集中して下さい。ですが、ああしろ、こうしろというのではなくて子供のやっていることを見守って下さい。子供が何かを言ったらそれを繰り返すとか、話を聞くとか、気持ちを「それは辛いね」「残念やったね」と言ってあげて下さい。そして、子供のやっていることをよく見て下さい。注目・関心を子供に与えて下さい。子供にとってお母さんの注目・関心を独占できるというのはものすごく嬉しいことです。お母さん方も、それをやらなくてはいけないと思ながらも忙しくて、なかなかできないですから、10分間から20分間、日に一回やって下さいと、そういうプログラムなんです。

皆さん、これ覚えておいて子供さんができたらやって下さいよ。

もちろん、子供さんはめちゃくちゃ描きます。チューリップの花が根っこから出てきたりします。その時には「花は上からでしょ、根っこから出ないでしょ」とは言わないで、その10分間から20分間は根っこから出ても、「あ、チューリップの花が下で咲いてる」とか言って下さい。でもその10分間から20分間が終わったら、普通の生活に戻って下さい。これを幼稚園のお母さんをお願いしていますが、正直言って、なかなかやっていただけません。15名くらいのお母さんがいらしたら、最初3、4人はやってくれます。その方に「どうでした？」と聞いたら子供との関係がものすごく良くなりました。そして、お母さんが褒める効果がものすごく大きくなったと報告して下さいました。よそのお母

さんがやって、良いとなれば「ああ、じいも嘘は言ってない。99パーセント嘘やったけど、今回は本当みだいだ」ということで実行されます。これはご主人と奥様の間でも大事なことですよ。デートするときは相手のことに一生懸命ですが、結婚したらこっちのもんやと思って…ね？後ろの方そうですね？告白の時間ですよ。

10分間だけ相手の言うことを出来るだけ一生懸命聞こうとして下さい。こんなことは、ずっとは出来ませんよ。家事・洗濯色々あるし、ご主人も仕事がある。後片付けもしなくてははいけません。10分間だけです。それでもものすごく違うと思います。

○受講生 ありがとうございます。

○武田 後ろは何かありますか？

○受講生 高校で教員をしているんですが、同じ高校で強い部活の指導をされている先生が、昔は打たれて打たれて指導しても、這いあがってきたが、今は打ってしまうと卒業までに這いあがってこない生徒が多いから、褒めて伸ばすように変えているという先生がいました。武田先生も、生徒とか選手の変化を感じることはありますか？

○武田 そうですね、私の場合は大学でコーチして、高校へ移りました。大学生の時のように怒鳴って叱っては、高校生はもたないんじゃないかなと思いました。それに、私自身、年を取ってきたんだと思います。それから、心理学の行動理論を、コーチングに本格的に導入しないといけないなと思いました。大学のコーチ時代は悪いプレーを減らそうと思っていたのを、良いプレーを増やそうと方針を変えたのです。その先生と同じことをやったと思います。ただ、最初のうちは、なかなか褒められません

でした。私は、歯を食いしばって怒る気持ちを抑えて、一生懸命褒めてました。そのうち、だんだんと自然に褒められるようになりました。やっぱり要求水準が高かったのだと思います。ファインプレーをしたら褒めようと。そんなファインプレーなんか、うちのチームで起こる訳ないじゃないですか。1番最初のうちは、「お前、右足の次は左足が出たな、お前すごいな」と言うぐらいのつもりでレベルを落とさないと、なかなか褒められませんでした。

○受講生 ありがとうございます。

○武田 後ろはどうなってますか？一緒ですか？

○受講生 相手に「あなたはダメだ」と言ってしまった後のフォローがあれば教えて下さい。

○武田 正直に「ひどいこと言ったね、ごめんなさい」と謝るしかないですね。「あなたダメなことないと思う。わたしがダメだった」と言って、率直に謝らないとしようがないですね。私は、怒鳴って雷を落とした後で、よく謝ってました。それで若いコーチが言いました。反省というのは悪いことをした後、謝って2度としないことを反省という。武田のは怒鳴って、謝って、また怒鳴っている。それは後悔だと。それがあつたので高校に行ったら行動理論を使って褒めるようになったんじゃないかと思います。お答えになったかどうか分かりませんが。

○受講生 ありがとうございます。

○武田 では、その後ろの方は？

○受講生 冊子に「笑いの効果」とあつたんですが、これについてお伺いしていいですか。

○武田 緊張をしているときに、笑うことは緊張を緩和します。ウォルピー先生は色々な方法を使われましたが、筋肉をリラックスさせるのは、緊張しているときにはいいと思います。身体全体の緊張をほぐすために、手を5秒間ギュと握っておいて、それからリラックスさせるのです。皆さん、ノートも何もおいてリラックスしていただけますか？目をつぶって下さい。楽にして下さい。いいですか、リラックスして、楽にしてらして下さい。両方の手をギュと握って下さい。1.2.3.4…はい緩めて下さい。リラックスして、楽にして下さい。もう一度手をギュと握って下さい。はい、ゆったりと手を開いて下さい。力入れずにそのまま楽にして下さい。今度は両方の目をギュとつむって下さい。はい、もとに戻して楽にして下さい。今度は上の歯と下の歯をギュと噛み合わせて下さい。はいどうぞ楽にして下さい。では皆さんが病院に言ってレントゲンの写真を撮っていたく時のように、胸一杯空気を吸い込んで下さい。はい、止めて下さい。1.2.3.4…はいどうぞ吐き出して下さい。……私が3つ勘定しますからゆっくり目をあけて下さい。3.2.1…はい目をあけて下さい。何か楽になった感じしませんか？緊張がどっか行ったような感じありませんか。もうちょっとやればよかったですかね。

ご質問は「笑いの効果」ですけれど、笑うというのもリラックスできます。今やった身体的な緊張、リラックスだけでちょっと楽になったような効果を笑いをもたらします。

こんなことがあつたんです。ある年、リーグ戦で京都大学がどんどん強くなって、我々が危なくなってきました。そこで、関西学院で合宿して、西宮球技場へ試合に行く時です。阪急観光のバスを予約してたんです。なのに観光バスが来ません。試合はどんどん近づきます。それで、学校の前まで来ている阪急の路線バスに「お宅のバスをチャーターしたけど来ないから、こ

の路線バスを回してよ」と言いましたら、フットボールのファンだったんでしょうね、その運転手さん。路線バスで私と選手を球技場まで運んでくれました。

そんなことがあったので、甲子園ボウル行く時には、観光バスはやけに早く来ました。

キックオフまでまだ時間があるのに、バスが来てるので、私は何気なく乗ってしまったんです。監督が乗ったらみんな乗るじゃないですか。甲子園ついたら、キックオフまでに延々と時間がある訳です。甲子園のロッカールームというのは、コンクリートむき出しです。コンクリートを見てたら、だんだんと緊張してきました。チームがとても固い冷たい雰囲気です。私を1年生の時、困らせた選手がいるのに気がつきました。なんで困らせたかというと、この選手は、「先生、僕、フットボールを辞めたい」「藪から棒にどうしたの？嫌なのか」「いや僕は、フットボールもチームも好きですけど、将来、落語家になりたいんです」。落語家になるためにチームを辞めたいと。落語部に入るといふのならまだしも、落語家になって吉本の社員になるというのです。すったもんだした揚句、彼は吉本に行くのを諦めてチームに残りました。

灰色の壁を見ていた時、目に入ったのは、あいつ吉本行くと言って、俺にえらい迷惑かけた。

こういう時に彼を使おう。「おい、〇〇、今から3分間やるから、みんなが笑うような落語をやれ」と言ったんです。そしたら彼は、しばらく目をつむってました。そして、「やります」と前に出て来て、天国か地獄で、赤鬼と青鬼が喧嘩している。青鬼は今日の試合は、青の関学が絶対に勝つと。赤鬼はいやいや、赤の日大が勝つと言って、落語をしてくれました。選手たちは大笑いをして、笑いながらグラウンドへ行き、勝ってしまいました。リラックスの効果だと思います。お答えになったかどうかわかりませんが。

○受講生 ありがとうございます。

○武田 よろしいですか、何かごまかしたようになりましたが、これ本当の話なんですよ。

○受講生 最近の若者はという言葉をよく聞くんですが、その共通した特徴はなんですか？

○武田 それは皆様だけではなくて、永遠に共通してます。私の若い頃も、最近の若者はと言われてました。大人というのは昔も今も、「今の若者は…」と言っていると思います。いつも自分の時が基準になりますねん。



私の選手時代は太平洋戦争が終わった頃ですから、食べるものがなくて、いつもお腹減らしてました。「今の若者はいいもの食べてるのに走らない」とよく年寄りは言います。でも、そんなことはないですよ。ストップウォッチでタイム測ったら、我々の現役時代よりも早いですよ。年寄りはそう言うんですよ。

○受講生 先程の質問と重なるんですが、私はローターアクトの会長をしております、授業とか活動とかどういう事をやろうかと話し合う時に、なかなか皆が自己主張しなかったり、同調する傾向にあります。もっと各々が自分の意見を言い合うと、活動が活発になると思うんですが、今のメンバーはそういう傾向なのか、なかなか、あまり意見を言わない。やる気がないわけではないと思いますが、やる気をおこさせるにはどのようにしたらいいんでしょうか。

○武田 日本とカナダとアメリカで学生生活を送りましたけれども、私自身もですが、日本の学生というのは、あまり質問をしませんよね。アメリカの学生は良く質問します。アメリカは質問しすぎて、先生が授業を最後までできません。後は本を読んでおけとなります。日本は質問がないから、ずっと講義がいくんです。どっちがいいかわかりませんがね。我々日本人は質問しない民族だと思います。ですから私は今日、質問を書いて頂いたんです。そうしたら皆さん質問されました。質問のもう1ラウンド、2ラウンドいけるんじゃないですか？そういうふうにする手もあると思います。ですから、言葉で言えなかったら、字で言わせる。騙されたと思って、それやってみてください。書いておいて、それを読んでもらうのです。フットボールと同じで、最初はちょっとずつ、ちょっとずつです。一遍にいきなり意見を言わせたら言いにくいので。ちょっと書いてそれを読むとか、書

いておいて言ってもらおうと。そのうちにもういい加減、質問やめてよというようになるかもしれません。

○受講生 先程、褒める学習ということを言われてましたが、褒めると調子に乗って失敗するタイプの人はどうしたらいいですか？

○武田 褒めて調子に乗るとするのはどんなことがあります？

○受講生 野球のスイングをして、だいぶまともに打てたとします。ホームラン1発打ったと。それで褒められるんですけど、その後からは全然ダメになるんです。

○武田 そうですね。ホームランなんか打ったら、その為に大振りになるかもしれませんね。そうしたら、今度は大振りしてたら「おいおい、大振りになってるで。ミートすることが大事やで」と言ってあげないといけませんね。私は叱ったらいけない、注意してはいけないと言っているのではなく、よかったら褒めてあげて、悪かったらどこが悪いか言って、こういうふうにやってと言ってあげる。私は野球はわかりませんが、大振りになって当たらないなら、簡単にしてもう一度やりなおす。例えば、バントするとか、フリーバッティングとか、トスバッティングのようなことからやるようにする。パスだったら、コントロールが悪くなった選手には短い距離を投げさせます。アメリカンフットボールで、キャッチボールさせるとき、投げる役はクォーターバックですが、必ず的を作らせるんです。何もなしに放っていると、どこへ行っても相手は取りますね。ここへくれば、ストライク。野球のキャッチャーは、ミット構えてここへ来いとやります。キャッチャーは、ボールだったら黙って知らん顔して放り返します。そういうふうなやり方が必要ではないかなと思う

のです。ちょっとずつ、ちょっとずつ、もう一度やり直す。

○**受講生** 選手の能力を吟味し、適性を判断するというお話がありましたが、その中でキャプテンを選ぶ選考基準とありますか、そのようなものがあれば教えていただきたいのと、キャプテンに対してどのような指導をされていたか、お教えいただければと思います。

○**武田** うちのチームは伝統的に選手が選ぶんです。ひょっとすると今は立候補でやっているのではないかと思います。それは高校でもそうしてました。だからコーチが選ぶのではなくて選手が選ぶわけです。ですから、私が選ぶという経験はないんです。ただ今日ここで申し上げたようなことは、キャプテンとか4年生には時々言ってます。何でもちょっとずつ、ちょっ

とずつだと。練習するときに全部初めから終わりまでやるのではなくて、小さく区切ってやろうと。高校のチームの場合は大学生のコーチがそれぞれのポジションにいますから、あんまり高校生には直接言わなかったですが、コーチに言っていました。大学生の場合は、4年生が各ポジションのプログラム作る時には、練習は部分部分に区切ってやってとは言っていました。ボール受けに行く最初の3歩は、大股に出てビッグスリー毎日やって。ストップの練習もやってよと、部分部分で区切るようにやって。そのほうがきっちりしたことが出来るんじゃないかと。そして同時に2つのことをやるのは、1つのことをやるよりも難しいと思います。

○**徳梅** 武田先生、長時間に亘り講義ありがとうございました。

思い出



みんなで質問を考え中

「雑誌月間にちなんで」

パストガバナー(2680地区)

安平 和彦 (姫路RC)



○徳梅 それでは定刻になりましたので「ロータリアンの夕べ 2日目」を開催したいと思います。本日は2680地区のパストガバナーで、またRYLA小委員でもある安平パストガバナーから、テーマは「雑誌月間にちなんで」です。現在ロータリーの友編集委員会の委員長もされておりまして、そのへんの裏話等も含めて、いろいろと逸話を聞かせていただけると期待しております。それでは安平先生よろしくお願いたします。

○安平 そんなに長い話ではないので、気軽に聞いていただいて、キャビンでまたロータリー談義を侃々諤々していただきたいと思ます。

4月は「雑誌月間」でございます。ロータリーの友編集委員会の委員長というのを去年からやらされておりまして、その前、副委員長を2年間。副委員長を2年やって、そのあと2年間委員長をやるというのが不文律になっているようであります。東京に神崎正陳先生という色々と教えを受けた弁護士の先輩がおり、その方が前の前の委員会の委員長でありまして、神崎先生から「君！」ということで声がかかりました。私は「そんな、友の委員会の委員長っていうのは関東近辺の方と決まっていますやん、何かあったらすぐに行かないといけないし」と言いましたら、「いやいや月に1回来てくれたらいいんだよ」というような事で。迂闊に受けてしまいました。ずっと昔は、関西からも友の委員長が

でておったんですが、最近では関東圏ばかりで、箱根の山も逢坂の関も飛び越して、兵庫県の西の播州の姫路というところ、田舎から出た委員長と笑ってるんですが。

後ほど話しますが、もともと任意団体として友誌を発行していたんですが、それではいけないということで、一般社団法人に去年なりまして、一般社団法人ロータリーの友事務所の代表理事長ということでございます。皆さん、知っておられますか？友の最初の部分には、ロータリーの友編集委員会ということで、地区の代表委員も含めて、ずっと名前が出ている。これは編集委員会の名簿でありまして、編集委員会と一般社団法人ロータリーの友事務所というのがあるわけですし、こっちのほうに一般社団法人ロータリーの友事務所の社員、黒田正宏、近藤雅臣というように理事とガバナー会議長、それから理事会を構成する理事がずっとおりまして、こんなふうにてしておりますので、見ておいていただきたいと思ます。

今日は雑誌月間にちなみまして「ザ・ロータリアン」の歴史とか「友」の歴史とか少しお話しさせていただきたいと思ます。ロータリーの雑誌というのがあり、これを「Rotary World Magazine Press」と呼んでおりましてR Iの機関雑誌の「ザ・ロータリアン」と、それから「ロータリーの友」を含めたような地域雑誌、これを含めてRotary World Magazine Pressと呼んでおります。「ザ・ロータリアン」はもともとR Iの公式雑誌でありまして、エバンス

トンのR I本部が発行し、約50万部。その他にご承知のように地域雑誌というのがありまして、これは地域雑誌として、R Iの要件を満たした指定雑誌がありまして「ロータリーの友」を含めて30誌、実は31誌あったんですが、最近どこか、指定が取り消されたということで、今現在30誌、25カ国語、130カ国で、約78万部発行されていると言われていています。「ザ・ロータリアン」と地域雑誌を含めて、ロータリーの公式雑誌、Rotary World Magazine Pressとよんでいるわけです。

「ザ・ロータリアン」の歴史ですが、ご承知のようにもともと1910年にポールハリスが「Rational Rotarianism」、日本語にしますと「合理的ロータリー主義」と訳されますが、「Rational Rotarianism」という論文を書きました。時の事務総長のチェスレーペリーがそれを読んで、ああ、いいものを書いてくれたということで、それを1911年の1月に8ページからなるタブロイド版の「ザ・ナショナルロータリアン」という名前の雑誌で発行しました。それが随分、評判がよかったということで、1911年のポートランド大会への出席勧誘記事を載せた第2号を発行いたしました。それももちろん評判が良かったので、ポートランドの全米ロータリークラブ連合会第2回大会において「ザ・ナショナルロータリアン」をロータリーの公式機関誌にしようと決議されたわけでございます。翌年には、もうアメリカだけではなくなりましたから、ナショナルというのを外しまして、「ザ・ロータリアン」と改名いたしまして、以後毎月発行しました。これが「ザ・ロータリアン」の歴史でございます。それが現在までずっと発行されているわけでありまして。

地域雑誌につきましては、意外に早くあちこちで発行されているんです。1番最初は、1915年にイギリスのアイランドで発行されました。1920年には、今もオーストラリアで「ロータリー・ダウンアンダー」という地域雑誌があ

りますけれども、この前身の地域雑誌が創刊されました。そして1920年から30年代にはヨーロッパでいくつかの地域雑誌が創刊されまして、1924年にはイタリア、ブラジル、1926年にはスイス、南アフリカ、1927年にはオランダ、チリ、それから1929年にはドイツ、エジプト、えっというようなところでも地域雑誌が発行されました。むしろ、南アフリカとかチリ、エジプトなどは、地域性があるから余計に早くに発行になったのかもしれませんが。まあ、そんなことで、結構早く地域雑誌というのは発行されています。その後も世界各国で地域雑誌が創刊されました。

日本の「ロータリーの友」は結構新しくてというか、遅くて1953年の1月に発刊をされました。

ご承知のように標準ロータリークラブ定款第14条に「雑誌の購読義務」というのを定めています。3大義務の一つと言われてまして、人頭分担金の支払い義務、出席義務、それから雑誌の購読義務ということでロータリアンの3大義務ということになってます。

これは内容的には、アメリカ、カナダ以外のクラブの各会員は、R Iの機関雑誌「ザ・ロータリアン」またはR Iの理事会が承認し、当該クラブに対して指定した地域雑誌の有料購読者にならなければならない。本人が会員になっている限り、ずっとその購読を続けなければならないということでありまして、ちょっと分かりにくいんですが、アメリカとカナダは「ザ・ロータリアン」だけでっせと。アメリカとカナダ以外は「ザ・ロータリアン」を購読してもいいし、その地域の地域雑誌を購読してもいいという選択が与えられるということでありまして。

「ロータリーの友」の歴史ですが、1950年、昭和27年の4月25日に、大阪で日本では1地区としては最後の地区大会が開かれました。翌年から、東西2つの地区に分割されるということになりましたが、その時に来年からは東西2つ

の地区に分かれるけれど、分かれてもお互いに情報交換をしていこうという相談がありまして、共通の機関誌の発行を決定したということでもあります。第1回の準備会が大阪でありまして、第2回の準備会は岐阜の長良川に面した旅館でされたということです。

決まったことは、編集委員は東西2つの地区の合議制でやろうと、実際の作業は東京で発行しよう。名称は「ロータリーの友」とする。最初は横書き、創刊は1953年の1月号とするということが第2回の準備会で決まりました。

「ロータリーの友」の名称ですけれども、投票によって遠藤健三さん、この方が岐阜の長良川の旅館をやっていたんだと思うんですが、その方の提案を採用したということです。例の柏原孫左衛門が「ロータリーの友」、その当時、ビールのつまみで「ビールの友」というのがあったそうで、「お前ら、ビールの友から取ったんじゃないか？」と言ったという話があるんですが、実際は遠藤さんは、昔からある、今もあります、「主婦の友」という雑誌からヒントを得て提案したそうです。それが採用になったというようなことです。

ロータリーの友はその後、最初、定価100円、これは昔から言うと高かったかもしれませんね。それから1972年の1月から、縦組みと横組みに分かれました。そして1974年12月号まで定価110円で、翌75年1月号から現在まで定価200円、消費税がついていますから210円ということで、何と35年間、頑張って定価を維持しているということでもあります。広告収入で定価を維持しているということですが、これが縦組み、横組みに分かれた最初の友でございます。1972年の1月号、覚えていらっしゃる方もおられると思いますが、きれいな横組みの表紙、縦組みの表紙。これはやっぱり日本だからできるというか、日本語は縦、横両方できるからこんなことができたんだと思います。韓国なんか、こんな形を見て、ひっくり返してみるとい

う半々ずつ使ったものがあります。縦組み、横組みに分かれているのは日本だけあります。

今の友はどういう風にやっているかという、横組みはR Iからの指定記事、それから特別月間の特集などのロータリーの地域雑誌としての公式的な記事が中心です。縦組みは、日本のロータリアンのコミュニケーションの懸け橋となるような投稿記事を中心にしているということでもあります。

ロータリーの友が、公式地域雑誌として認定されたというのは結構新しく、先程もありましたけれども、もともと1977年の規定審議会で米国とカナダ以外のクラブの会員は公式雑誌「ザ・ロータリアン」、または規定された公式雑誌のいずれかを購読すればいいと、これが1977年に決まりまして、その後1980年の7月号から「ロータリーの友」が公式地域雑誌としてR Iから承認を受けたのでありまして、昨年2010年の7月号で「ロータリーの友」が公式地域雑誌として認定を受けてから、満30年だったという記念の年でありました。

地域雑誌の認定の主な要件と言うのがありまして、編集委員会の直接監督を受ける。この編集委員会のことは後で言いますが、それからR Iの方針に沿った編集方針、50パーセントは、ロータリー関連の記事であるという要件があります。それからその延長上で、地元の記事と共に、R Iの要請する記事を掲載すること。友の中にも、欄外にR Iの指定記事というようなことが書いているのがあると思いますけれども、それは必ずR Iが指定してきて、載せないといけないということになっています。それから、R Iに負担をかけずに経営しうだけの資金を持っていないということでもあります。それから、2地区もしくは2カ国以上の地域を対象に発行していること。年に6回以上発行していること。こういう要件がありまして、その要件を満たしているかということ、R Iのほうで4年ごとに認定をします。満たし

ていなければ、そこで認定が取り消されるというような結構シビアなチェックが入ります。

先程、編集委員会の直接監督と言いましたけれども、編集委員会というのはこういう形ですね。地域雑誌は認定を受ける為に、現職のガバナーまたはその指名人、次期地区ガバナーまたはその指名人、雑誌の編集長、もとR I役員3名、パストガバナー、パスト理事でもいいんですけれども、そういう3名を含む少なくとも6名によって構成される編集委員会から、あらゆる面において直接の監督を受けなければならないというふうにロータリー章典でなっております。そのロータリー章典の中の編集委員会というのが、日本においては、「ロータリーの友編集委員会」ということであります。そして、R I理事会のもとにR Iコミュニケーション委員会というのがありまして、それがロータリーの友編集委員会を監督しております。その免許認定をするということになっております。

「ロータリーの友」の財務状況ですけれども、会員減が財政を直撃しております。1997年から1998年頃は14万部も発行していたようです。それが今年の4月号は、98,400部と激減です。そういう中で、友としては徹底的合理化を実現してきたということでありまして、自ら、友の編集室でコンピューター編集をするというふうなこと、それからA4変型版への変更、昔は糊か何かだったと思いますが、経費節減のため綴じ方もホッチキスで綴じています。それから出版費、人件費等を削減いたしました。給与賃金もバサッと削ったように聞いています。また、広告を募集する。こういうふうに徹底的に合理化を実現しながら、現在、すべてのページをカラー印刷化して1部210円という体制を維持してきているということでございます。それから今回、大きな地震が起きましたけど、いずれは東京でも大震災が起こるかもしれない。その時に、すぐにバックアップで発行が継続できるような、そういう危機管理のことも考えておか

なくてはならないということも、課題として挙げられます。

その中で、より親しまれる「ロータリーの友」へと書いてありますが、最近の「ロータリーの友」は投稿中心から編集企画に。前は投稿を受けてそれを載せていただけというような状態だったんですが、友のほうから積極的に取材に行って、それを編集するという企画記事というのが増えてきたと思います。それから、ゾーンごとに編集会議をやります。地区代表委員というのがありまして、これまで地区委員さんと呼んでおりましたけど、去年7月から地区代表委員というような形で、各地区からガバナーの代理というような形で来て頂いております。ガバナーの代理という立場ではありますけれども、地区代表委員さんに色々な情報とか意見を言ってもらって、それを元に友誌を発行していく。それから、ゾーンごとに地区代表委員の会議、合同の会議をやりまして、そこでも色々な意見や情報を交換するというようなことをやっております。

それと、友事務所の法人化をやりました。それは、友自身の透明性、信頼性の向上、それから財務基盤の向上、色々他にもあったんですけど、法人化をいたしました。ロータリーの友というのは、これまで任意団体、権利能力なき社団として友誌を発行して参りまして、みなし法人という事でずっと法人税を支払ってきた。ところが、年間の売り上げが2008年度で3億1500万円、すごいですよね、そのうち、出版物の収入が2億7200万円、これは友誌の売り上げとか、手帳の売り上げとか歌集の売り上げとかそんなものを含めて2億7200万。広告料の収入が3200万。その他の収入が1100万ということになります。そういう中でR Iのほうはですね、何かの時に「R Iに助けて」と言われたら困りますから、とにかく自立できる財政基盤を整えろということをやっております。ずっと過去からその年、その年の手続きで、利益の

中から積み上げてきまして、それが基金として4億円。普段の発行運営資金とあわせて今、6億7000万円位資金を持ってるわけですね。それで「友はむちゃくちゃ金持っとるやないか」ということでガバナー会、金が足りないものだから「何とか」と言ってガバナー会から取りに来られたりする。そんなこともあって、それを防御するためにも、法人化しないといけないという理論もあったんですけど。法人化につきましては、今言いましたように、6億何千万円もの多額の資金がある。任意団体では非常に危険ですよ、預貯金が友の渡辺所長個人名義、もしくは前の上野委員長の名義で預貯金を作っているわけですから、ポコッと死んだりしますと誰のものか分からなくなるというようなことで、大変危ないと。それからまあ、法人化して権利義務を明確化しましょうと。それから経営の透明性、法人にして公益法人財務と言うんですかそういう決算、そんな形で今やり始めています。法人化すると財政基盤もより安定化するだろうと、もしかの時には、金融機関の融資も受けれるだろうというふうなこととか、職員の身分の安定化とか、何よりも一つ大きなことは、記事で名誉棄損とか色んなことがあると、損害賠償請求がある。R Iは青少年交換でもそうですけど、とにかく自分に火の粉がかからないように保険、保険、とにかく保険はつけてくれと言うわけですね。ところが任意団体としては、付保のほうが困難だということで、これまでは賠償責任保険に入れなかったものですから、そうすると「ロータリーの友」は一応、R Iの指定は認められておりましたが、まあ仮免許みたいなもんですね。ずっと仮免許で来てて、賠償保険を付保しないとダメだということだったんですけど、そのためには法人化をしないと難しいということがありました。

ところが法人化の実現ですけれども、結構もともとハードルが高かったですね。民法上の公益社団、公益財団、これはかなり難しかったで

すし、かといって株式会社にするとなると、誰が株主になるんだということで結構難しかったです。しかし、2008年の12月に一般社団法人および一般財団法人に関する法律というのできまして、この法律では社員が、剰余金並びに残余財産の分配を受ける権利を有しない代わりに、法に従って定款を作成し、公証人の認証を受けて登記をすれば、一般社団法人を設立できることになったということでもあります。今、この法律に従って、一般社団法人とか一般財団法人とか色々作っていると思いますけれども、こういう法律ができたので、それじゃあこれに従って作ろうという事になりました。法人化にあたって留意したことというのは、基本的にはそれまでの任意団体としてのロータリーの友事務所をそのまま法人化する。特に、多額の6億何千万ものお金を贈与税とかそういったものを払わずに、新法人に移す、これが絶対条件でありました。それからさっき言いました、R Iの求めている地域雑誌の認定と出版の要件をクリアできること。R Iの求めている編集委員会と、一般社団法人との関係を明確にする。そして、一般社団法人に対する外部的牽制と内部的牽制が十分に働くように機関の設計を行うこと。一般社団法人の社員、理事、幹事は交通費等の実費弁償を除き、剰余金の分配請求権も残余財産の分配請求権も有せず、ボランティアであるということを確認する。ということで、定款にも分配請求権がないということをはっきりと謳って作りました。手続きとしてはこういうことで、税務署と折衝して無税で資金移動を認められ、去年の3月25日に定款認証、そしてその日に登記を完了しまして、4月12日に設立の社員総会、7月1日から新しい社員と新編集委員が就任いたしました。で、私が委員長になったということでありまして、編集委員会の委員の任期と理事会の任期が、会社の取締役と同じように決算期後、初めて開かれる理事会の時まで理事の任期があつて、そのとき新しい理事を選任

すると。ちょっとずれますけれども、9月に新しい理事会が決まりまして、そこで代表理事に就任させていただいたということでもあります。その後に今年になってから損害保険の付保ができて、RIの求める条件をすべてクリアしてOKになったということでございます。

法人化後の組織図というのはこのようになっております。まず国際ロータリーがあって、それがロータリーの友編集委員会を、指導監督するということになっております。ロータリーの友編集委員会は、ここにありますように委員長とか副委員長とか、それからRI理事、RI理事エレクトのうち2名、それから特別顧問が若干名、直前ガバナー3名、ガバナーエレクト2名という顧問、それからここにありますように、地区代表委員34名、ガバナーの代理ということで来てもらってます。それから編集長。この委員会が今度は一般社団法人ロータリーの友事務

所を監督するという、これが一つの外部的牽制。今度は一般社団法人ロータリーの友事務所の体制としては社員、これがRI理事、RI理事エレクト、ガバナー会議長、ガバナー会副議長、これが3名ですから全部で6名。理事会の構成メンバーの方は、先程の編集委員会の委員長や委員が、一部兼任しているわけですけど、そんなかたちで、結局社員総会と理事会ということで内部牽制をきちんとしようという組織にしております。

そのように、現在ロータリーの友をやっているのでありまして、よりよい友のためにご協力をお願いしたいということでもあります。ご静聴ありがとうございました。

○徳梅　ありがとうございました。2日目の「ロータリアンの夕べ」は散会したいと思います。



「あなたはとなりの人を大事にしていますか？」

— 私たちは、私たちの周りの人たちと

— どういう社会を創りあげようとしているのか? —

フォーラムリーダー

RYLAセミナー顧問・パストガバナー(2680地区) **深川 純一** (伊丹RC)

新世代委員会 委員長(2680地区)

安行 英文 (三田RC)

○徳梅 全員いますね。それではただ今から今回のセミナーの、1番のおもなプログラム、フォーラムを始めたいと思います。フォーラムに先立ちまして、深川RYLA顧問のほうから一言。

○深川 皆さん、こんにちは。ゆっくりお休みになられて大丈夫だと思いますが、今から4時間、このライラで一番大事なプログラムであります。自由におくつろぎをいただいて意見を言っていたきたい。最初に1つだけ注意しておきますが、今から始まるフォーラムというのはだいたい40人くらいおられますが、今までバズで、皆さんいろんな意見を言っていたと思います。そういういろんな意見を乗り越えて1つの全体の集約した意見を作ることを決

議といひまして、ここはそういう決議をするところではありません。決議をするのは国会とか県議会で、ここは決議はしません。皆さん、いろんな意見を持っておられます。それをそれぞれバズで発表していただいた。それをグループごとに、うちの班はこの話があったというのを全部発表していただいて、ほかの班の人のものを全部聞いて、そして、あんな意見があるんだな、あれは参考になるな、これは参考にならないとか、いろんな意見を自分なりに、参考になった意見は取り入れる。あまり分からないものは捨てていくという形で、自分自身の意見というものを、ここでまた人の意見を聞きながら作り上げていく。そして、いろいろな意見をこの場で交換しながら話し合いながら、そして、お互いが学び合うというか自分を少しでも高め合っ



ていこうというのがこのフォーラムの意味であります。だから、決してある意見について、これは間違っていると攻撃したり非難したりする場ではございません。みんなが仲良くいろんな意見を聞きながら、「ああいう意見もあるな」「私はこう思う」という形で素直におっしゃってください。

今から、各班ごとに一つひとつ発表していただきます。それを発表していただき皆さんが聞いて、壁にも貼るんですね。貼っていきますから、「あんな意見もあるんだ」「勉強になったな」というふうに学び合っていて、そして4つの班が全部報告が終わると、1時間くらい掛かりますから、そのあとでいろんな意見の交換、ディスカッションをしていただく。これがフォーラムですね。そういう形でやっていきたいと思えます。

順番はじゃんけんで決めたいと思えます。各班の代表の人出てきてください。誰でもいいですよ。各班1人ずつ。順番を決めるだけですから。

○深川 一番勝ったのが先にやるのかビリにやるのかどっち？ 勝ったものからいく？ 1番どこ？ はい、選んで。1番でいく？ 何班ですか。

○一一 C班。

○深川 2番目は？

○一一 A班。

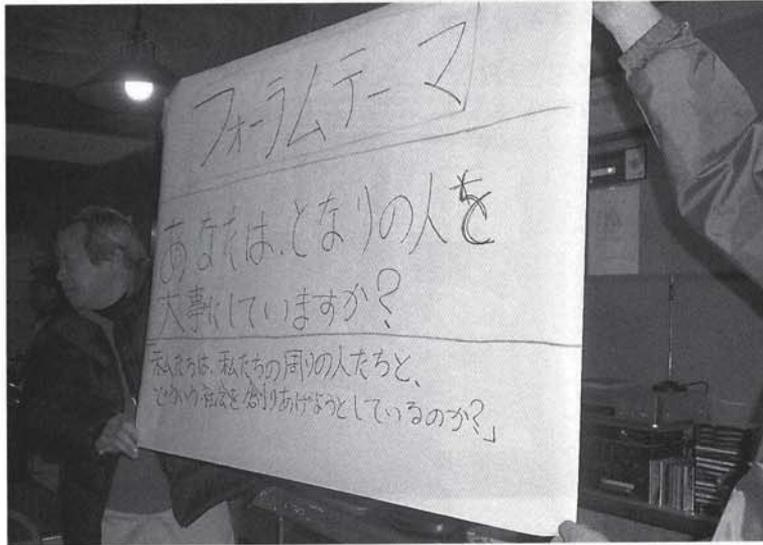
○深川 3番目は？

○一一 D班。

○深川 Bは？ 4番目、大トリね。それからもう一つ言っておきます。順番に発表していただきますね。そこですぐ議論が始まるわけではありません。発表された意見について、ほかの班の方が「これはどういう意味ですか」と分からないところがあったら聞いてください。それについてすぐに「私はこう思う」というのは議論でありますから、それはあとでやります。取りあえず発表した意見について分からないところがあれば聞いてください。発表された意見がそれぞれ理解できればそれで結構です。それではC班、前に出てきて意見を発表してください。

○徳梅 ではC班お願いします。模造紙をもし貼るのでしたらセロテープ等も準備していますので使ってください。



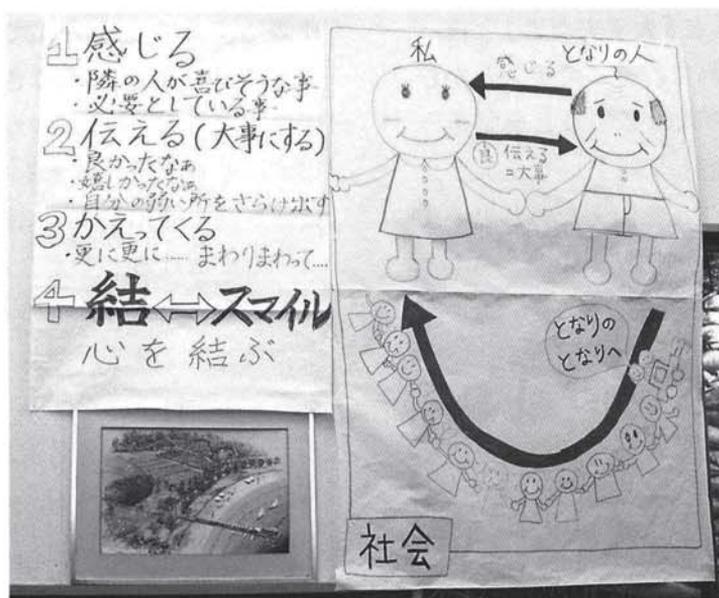


■■ バズセッション報告 C班 ■■

それではC班の発表を始めさせていただきます。「あなたは隣の人を大切にしていますか。私たちは、私たちの周りの人とどうい社会を作り上げようとしていますか」ということで、私たちは作りたい社会というものを考えまして、つながりのある社会を作ろうと思っています。それについての図をこれから説明いたします。まず、私が隣の人のことを感じ取ります。この感じ取るというのは。

まず、隣の人が喜びそうなことを感じ取ることが大事だと思います。例えば、この先にいらっしゃるめがねのお兄さん、この方は鼻炎です。いつも鼻水を垂らしてとても困っています。そのときに、くしゃみをしたときにすかさずティッシュを差し出して「どうぞ」というのも喜びそうなことの1つだと思います。

次は必要としていることです。これは相手が





望んでいること、思っていることを相手の言葉だけに着目するのではなく、相手の表情や言動、ちょっとした仕草などを見てこちらが感じ取って手を差し伸べることが大切だということです。

次に、その感じ取ったものを私が相手に伝えるというところに移っていきます。

伝えるということですね。されてよかったなと思ったことなのですが、例えば今の鼻炎の話、私が鼻炎で鼻がむずむずしていましたと。でも、そこに初めての人ばかりがいる場所で、なかなか鼻をかみたいとティッシュがないと言えませんが、隣の人がそっと「大丈夫だよ」と言ってぱっと差し出してくれて、そこでチンとかむことができる、「この人は私のことを気遣ってくれて、とてもいい感じで嬉しいなあ」と思いますよね。そういうことを伝えたいと思います。

次に嬉しかったなということを伝えるということなのですが、例えば僕が彼によかれと思っていたことが、彼が「ありがとう」と言ってくれたこと、それがよかったなと思ったことを、また隣の彼に伝えることです。

次ですが、自分の弱いところをさらけ出すということで、「僕も鼻炎なんです。だからティッシュを持っているんです」ということを伝えることによって、もしかしたら自分が困っているときに、また誰かが自分にティッシュを貸してくれるかもしれないということで、自分の弱いところをさらけ出すことによって私とのつながりが深まっていくのではないかと思います。

はい。そして、この伝えてもらったことを、3番目に、この隣の人がさらに隣の人へ伝えていく。

返ってくるとあるんですが、さっきティッシュの話が何度も出てきたんですが、やはり困っている人、悩んでいる人がいるときに差し出す。それを目に見えるものか見えないものかは分かりませんが、人に渡す、与える、もしくは貸してあげると考えると、それを渡された人、してもらった人は、次のまた困っている人に渡す、貸してあげる。それをまた次の人に貸してもらうということをずっと繰り返していくうちに、めぐりめぐって最後自分のところにその貸したものが返ってくる、そういう意味で返ってくると書きました。

そして最後4番目に「結(ゆい)」、スマイル。

今回のテーマで私たちが学んだことを、自分の会社や自宅に戻ったときに、何か1つがぱっと思い浮かんで、また今日のようにみんなで討論したことを思い出せるようにということで、最終的な1つシンボルとして「結(ゆい)」という漢字を選びました。「結(ゆい)」という漢字はスマイルと同じような意味で、「結(ゆい)」がスマイルを運んでくれるというか、スマイルがまた「結(ゆい)」を運んでくれるという形で、心を結ぶという意味でそういうシンボルタイトルをつけました。まずは、いい社会を作っていくというときに、相手が本当に何を必要としているのかというのを感じ取ることがもっとも大事で、それを感じ取るにはやはり自分というものをどんどん出していって、自分のことも理解することも大事だし、相手のこともしっかり理解してあげることが、まず第一のステップであって、そこからじゃあ、僕だったらその相手に何ができているんだろうかというのも真剣に一緒になって考えてあげて、それを解決してあげることが大事なことかなと。そういうプラスのポジティブな流れがぐるぐる回ってきて、どんどんいろんな人につながって行って、結局は自分に返ってきたりして、そういういい輪がどんどん周りに広がっていけば、僕たちが効率

を優先させることだけじゃなくて、安心・安全でつながりのあるような世界を築いていけて、みんなが幸せになっていくんじゃないかなと考えました。以上です。

(拍手)

じゃあ最後に、この「結(ゆい)」というのを僕たちなりの形で示させていただきたいと思います。

○C班全員 スマイル！(全員で手をつなぎ、腕を上にあげる)

(拍手)

○深川 C班の皆さん、ご苦労さまでした。今発表していただきましたが、発表されたことについて分からない点があったら、そのことだけ質問をしてください。なければ次の班に移りますから。議論をするんじゃないから、分からないところがあれば「これはどういう意味ですか」と聞いてください。

○徳梅 内容についての質問等はありませんか。ないようですね。では、C班の皆さんご苦労さまでした。それではA班、準備をお願いいたします。



■■ バズセッション報告 A班 ■■

皆さんこんにちは。A班の発表を行う前に自己紹介をさせていただいてから説明のほうをさせていただきたいと思います。私は徳島県から参りました森 一雄と申します。家族の中ではモリニイと呼ばれています。よろしくお願いします。

神戸から来ました玉越亜由美です。家族の中ではたまちゃんと呼ばれています。

高知県から来ました中村早甫です。家族の中ではさっちゃんと呼ばれています。よろしくお願いします。

神戸から来ました池田依利子と申します。3班に分かれたときはアプローチの仕方は違っていたのですが、1つになって話し合ったときに答えが一緒になったので、すごく今回のことでも固まってチームワークにつながったと思います。

兵庫県の明石市から参りました荻野紗奈です。家族の中ではスズちゃんと呼ばれています。よろしくお願いします。

兵庫県淡路島から来ました徳梅雅子です。家族の中ではウメちゃんと呼ばれています。よろ

しくお願いします。

兵庫県篠山市から来ました薦野彩と申します。みんなにはトモちゃんと呼ばれています。よろしくお願いします。

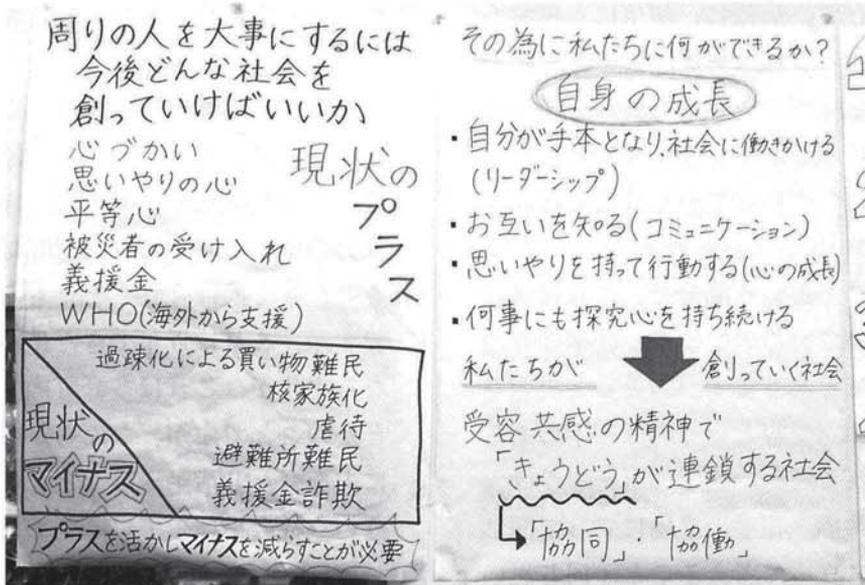
兵庫県淡路島から来ました植松義文です。家族の中ではウエリンと呼ばれています。よろしくお願いします。

愛媛県今治市から来ました田中良明です。みんなにはよっちゃんと呼ばれています。よろしくお願いします。

兵庫県赤穂市から来ました目木 基喜です。一応予定ではメッキャンと呼ばれる予定だったのですがなかなか呼んでもらえず、メッキーやらメキさんやらと呼ばれています。またぜひ覚えてください。よろしくお願いします。

それでは発表のほうに移りたいと思います。お題のほうが「あなたは隣の人を大事にしていますか」、副題といたしまして「私たちは私たちの周りの人たちとどういふ社会を作り上げようとしているのか」というお題の中で話し合い





をしたところ、周りの人を大事にするには今後どんな社会を作っていけばいいのかということで、家族のみんなと話をしました。その中で現状に置き換えたときのプラスとマイナスに分けてまず出していきましたので、現状のプラスのほうからの説明をしたいと思います。

現状のプラスは、心遣い、人の心を思う気持ち、思いやる心は人にさりげなくする心、平等は、みんなが平等である心、災害者を受け入れは、今、東北で地震が起きている被害者を受け入れる心です。義援はこちらから支援をして助ける心、WHOは海外からの支援、海外から多くの人から支援をしてもらえる心です。以上です。

現状のマイナスとしては、年々問題になっている過疎化になっていることによる買い物難民のことで、お年寄りが昼間車の運転をするのが難しいことになって、それならどこに買い物へ行くか、お隣さんが声を掛けられるかという話も出ました。それによって、核家族化が起って少子化問題という話もしました。で、虐待の問題ですが、去年もいっぱいあって、テレビで声は聞こえていたけど何もできなかったという

こともたくさんあると思います。そして、この前あった地震で、避難所難民。避難所であるとしても物資が届かない、物資が届いても問題も起こって、毛布などが来ないから人のものを取ってしまうという問題も。義援金詐欺。プラスにもありましたが義援金詐欺を働くという問題もマイナスの点であると思います。そして、このプラスを生かしマイナスを減らすことが必要だと僕たちは考えました。

で、私たちは、このプラスを生かしマイナスを減らすためには何ができるのかということを具体的に考えてみました。そのことで共通していえることは自身の成長だといえます。具体的には自分が手本となり社会に働きかける、すなわちリーダーシップを身につけるということです。そのリーダーシップというのは、リーダーだけが身につけるのではなく、それぞれがリーダーシップを持つことによって、本当のリーダーのサポートもできるという意味で、リーダーシップをみんなに身につけてほしいと考えました。

次に、先ほどC班の発表にもあったように、コミュニケーションを通じてお互いを知ること。次に思いやりを持って行動することが心の

成長といえます。で、最後に、何事にも探究心を持ち続けること。これは何歳になっても勉強し続けるという意味で、何事にも興味を持って探究心を持ち続けることがすごく大切なことだと思います。私たちが作っていく社会とは。

受容共感の精神でという部分で、これは僕は老人ホームで働いているのですが、仕事の専門用語で需要と共感とあります。ちょっと説明させていただきます。受容というのは相手のあるがままを受け入れること。相手の訴えを受け入れること。で、共感。相手の立場に立って同じ思いでその立場に立って考えること。同じ思いをすること。受容共感の精神。これが一番大事で、まず人が人を見れる社会を作ったほうがいいのじゃないかなと。そして、人が人を気にする社会。人が見れる社会というのは、見れるだけではなくて観察、脳で観るとい部分で観察の観で観ると言わせてもらいます。人が人を観る、人が人を気に掛ける、人の意見を聴く、傾聴する。聴くというのも門構えに耳ではなく、耳へんに徳というのの右側みたいなので聴く。脳で聴く。やはりお互いを知らないといけないので、支援者と被災者ではない。あくまでも人と人。その精神があって平等な立場で同じように考えていける社会ができたかなという部分で受容共感の部分をおさせてもらいまし

た。で、次最後をお願いします。

私たちの家族で、最終的にどういう社会を作っていけたらというので、協同が連鎖する社会。この協同というのは下に書いていますが、協力の協に同じ。これの意味は、互いに心や力を合わせて助け合うこと。もう一つの協働なのですが、これは近年できた造語なんです、異なる主体が、これは多分町内会、市役所とか国とかのことですが、なんらかの目標を共有し共に力を合わせ活動することという意味です。こういう社会を作っていくために、私たちの家族では、まず自分自身の成長が始めにできること、していかなければいけないことということで一応皆さんの中で話し合いました。これを目標にこれからも頑張っていきたいと思います。

一番最初にバスセッション、3組で話をしたと言っていました、一応3組まとめた最終のテーマを統一しまして、「和」という一文字。これ、連鎖もそうなんです、「和」ということで家族で・・・。

ここで助けるのが今言ったリーダー。みんながリーダーであれば助け合いができるという部分で、多分わざとこうやって見られていると思うのですが。



多分締めという言葉が見つからないのかなと。

そのとおり。本当、「和」です。チームワークでもあるし、さっきの絵のとおり「和」で自分に返ってくる。チェックは盗ませてもらったのですが、締めとしまして、「和」を大事に、お互いに認め合って和を大事にいきいたいなということを私たち家族は話し合いました。以上で終わらせていただきます。

○徳梅 A班の皆さん、ご苦労さまでした。ちょっとだけ待っていてください。今の内容についての質問、内容がよく分からないとかそういった例での質問はございませんか。意見はまた後ほどということでもよろしいですか。発表内容等について理解はしていただけたでしょうか。では、A班の皆さんご苦労さまでした。それではD班、スタンバイをお願いします。

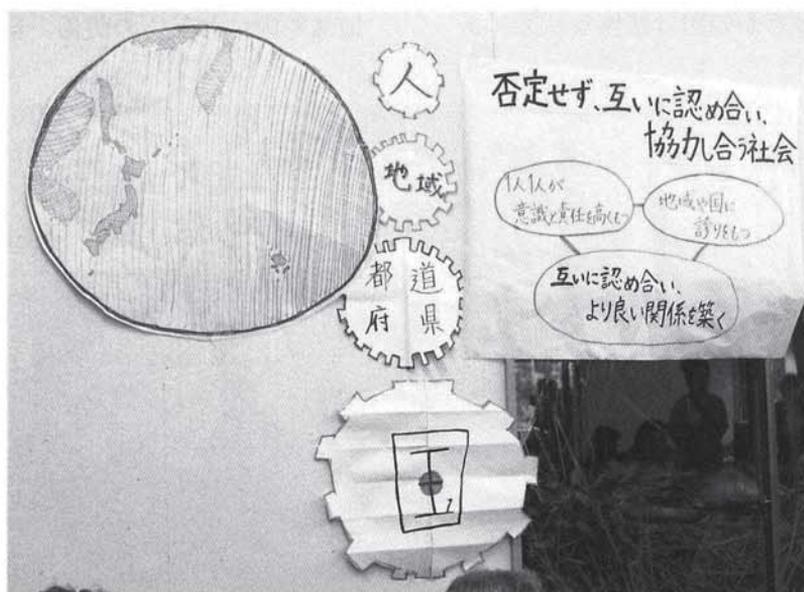
■■ バズセッション報告 D班 ■■

○徳梅 それではD班、よろしくお祈いします。

○D班 それではD班が発表させていただきます。今回のタイトルが「あなたは隣の人を大事にしていますか」それはもちろん「はい」という結果になっています。サブタイトルは「私は私たちの周りの人たちとどういう社会を作り上げようとしているか」。私たちの出した結論は「否定せず、互いに認め合い協力し合う社会」という結論になりました。どうしてその結論に至ったかというのをこれから説明させていただきます。

今回、初めて私たちはこのテーマを聞いたのですが、あまり抽象的で始めのほうはみんな意見がまとまらなかったのですが、1つ例を例えて考えると非常に分かりやすくうまく話が回るのではないかというものがありません。それは歯車です。

歯車を例にとりて例えてみると、歯車が回ります。人同士が影響し合って回っていきます。人が集まっていくと地域になっていきます。地域もどンドン回っていきます。地域が集まると次は都道府県になります。都道府県も集まっていくと次は国になります。で、国が集まってい





くと地球、これが私たちは社会というふうを考えています。そこで、例えば1人が手を抜くと、歯車なんて1人がぐんぐん回っても全くこっちは回れません。例えば今回の震災で東北地方がダメージを受けているわけですが、この東北地方が回らなくなってしまうと社会全体が回りません。社会全体が回ると人も回ってお給料ももらえるわけですから生活ができます。だから、今回の東北地方に関して、私たちは他人事と思わず、社会全体を回すために、どうしても人が集まってぐいぐい回して、回して、すると地域が修復していきますので、都道府県も回る、国も回る、地球も回るというふうになります。私たちは日本のことだけを考えているのですが、やはりアフリカとかの国は悲惨な状態にあ

りますので、そういうことも考えて地球全体を回していかなければいけないんじゃないかと考えています。

それでやはり人は歯車でありますから、今回のリーダーシップというテーマがあるのですが、人、一人ひとりがリーダーで、本当のリーダーがいるんじゃなくて一人ひとりがリーダーとして動いていくのが、本当は難しいのですがそれが理想的じゃないか。それが社会全体をうまく回していけるんじゃないかと考えています。それで、やはり私たちは一人ひとりが意思と責任を持って、みんなが歯車で一人ひとりが力を出し合わないで社会が回っていかないと。地域や国、お互いの関係、自分は相手に影響を



与えているんだということを自覚する、これが重要ではないかと思います。そして、互いに国や、あそこが嫌いだとかあんなところはいやだとかを考えるのではなくて、お互い認め合った上でよい関係を築いていって社会を回していくのが重要じゃないかと考えました。以上です。

○徳梅 ありがとうございます。今の説明で分からないこと、理解できなかったことありませんか。よろしいですね、受講生の皆さん。はい、ではD班の皆さんご苦労さまでした。ありがとうございます。それではラストですね。B班スタンバイをお願いします。

■ ■ バズセッション報告 B班 ■ ■

それでは今からB班の発表を始めさせていただきます。まず、私たちは「隣の人を大事にしているか」ということを考えるときに、私たちにとっての隣人は誰かということを考えました。ここで出たのが、私たちに近い存在と遠い存在がいるということでした。それをまとめたのがこちらの図になります。自分の周りの家族とか友達とか、そういった近い存在という人に対しては大事にするということは多分当然で、普通にできていることだと思うのですが、この円の外側の存在に対しては内側にいる人ほど大事にはできていないのじゃないかという意見が出ました。

私たちの社会には、遠くのほうへ行くほど価値観や考え方の違う人というのが増えてくると思います。そこで、日本へ来て異文化の違いを

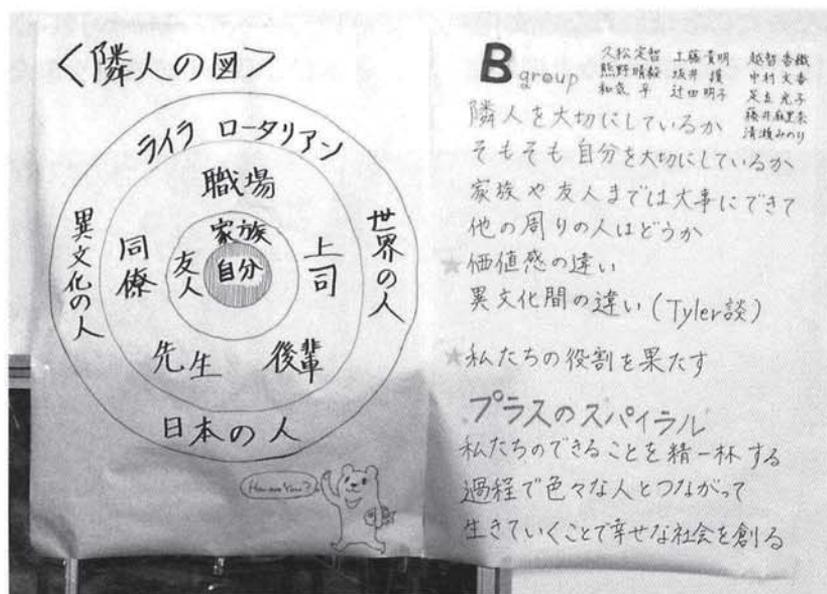
身近で感じたタイラーの話聞いてもらいたいと思います。

皆さん、タイラーと申します。英語で話してあとで訳していただきますから、よろしくお願ひします。

(英語で発言)

ありがとうございます。タイラーさん、アメリカのカリフォルニア州から来た彼の、先ほどの話を私が理解した範囲で、あと、彼と話した中で少し補足をしながら要約させていただきますと思います。

彼は、健全な社会のためには相互理解が不可欠であると考えました。彼の経験の1つの例として、アメリカで和歌山県の太地という場所で



イルカが殺されているということを知った。それを、それに対して反対活動をしているシーシェパードのことを知った。アメリカではシーシェパードの活動をほとんどの人がとてもよいものとして捉えているが、日本ではその活動というのがとても怖いもの、悪いものとして捉えられているという違いを知って、本当のところはどうなのだろうということを実際に見てみたいと考え、シーシェパードの活動に参加するために日本にやって来たそうです。

その中で、実際に太地の人、イルカを殺すことが行われている地域の人たちと接している中で、その場所に住んでいる人であってもイルカを殺しているという伝統があるということを知らない、イルカを食べたことがないという人もいることを知った。一方で、遠く離れたアメリカで、日本でそういうことがあるということを知らない人はほとんどいない。そういう違いを感じて、メディアで伝えられていること、その1つの視点だけをお互い、日本人もアメリカ人も、その1つの視点から伝えられているということを受け止めて、1つの見方でしかものを見ていないが、いろいろの見方でものを見ることが重要なのではないかということを経験したということです。

彼と話をしている私が思ったことなのですが、とても印象的だったことは、異なる文化、相互理解のために何が一番重要ですかと聞いた

ら、to stay time with thereという答えが返ってきました。その場所でそこにいる人と一緒に時間を過ごすこと。それが文化の相互理解に不可欠なことだと思えば、彼は彼の経験からそういうふうに学んだと言っていました。それから、最後なのですが、彼は『ザ・コーブ』というイルカの活動がインターネットで検索すると出てくる。日本人のサイト、日本語のサイトでは無料でそれを見ることはできる。でも、きょういらしている皆さんの中でインターネットが得意ではないが、このDVDの映像を観てみたいという方がいらっしゃれば、1つDVDを持っているのでぜひ声を掛けてくださいということです。

(英語で発言)

彼の補足なのですが、2人、シーシェパードのとても重要なポジションにいる人の紹介をしたい。その人たちはシーシェパードの一員として、日本人のそういう活動に反対するべく日本にやって来たが、実際に日本人と接してみても日本で過ごすことの面白さや日本人のことをよく知ったあとでは、日本にぜひ住んでもっと日本のことを知りたい、もっと日本人と分かり合いたいと考えているという、そういう人もシーシェパードの中にいるという紹介です。

次に、私たちの役割を果たすということにつ



いて、みんなで話し合ったものを発表したいと思います。自分が真ん中であって、社会貢献をしたいと思ったとき、今でいうと大震災が起こったのでそれのことについて募金をしたり救援に行ったりとか、そういうことをしようと思ったときに、なかなか限度があるので感情とか思いだけではどうにもできないと感ずることが割と多いと思うのですが、何か行動を起こすためには、まず、自分たちが自分自身を磨いてその職業のプロフェッショナルになって、その中で、世界の中で自分たちの役割を精一杯果たすことが大切だなということで結論が出ました。

例えてお話をさせていただきます。皆さんマンガでワンピースというマンガがあるんですが、ご存知ですか。多分私たちと同世代の人には人気のコミックスなので知っておられると思うのですが、海賊の話で、航海をして仲間と一緒に世界中の宝を探しに出る話なんです。主人公がいて、その主人公がキャプテンで、そのキャプテンを会社でいう社長と置き換えてもらって、あとのメンバーというのは医者であったり航海士だったり音楽家だったり料理人だったり、そういう仲間がいっぱい1つの船に乗ってずっと世界中を旅するんですが、そこでそれぞれの得意、不得意があるから、それぞれ、自分が戦うのが得意なら目いっぱい戦うし、でもほかのメンバーも全力で戦うし、そうした担当

を担って最終的に自分たちの夢を叶えようとする。そこに行き着くには大変なこととか楽しいこともたくさんあると思うのですが、そういうずっと航海していくことを人生に置き換えてもらったら分かりやすいと思うんですが、そういう感じで、自分たちに足りないところは誰かが補ってくれる、自分が得意なことは自分がするよ、みたいな感じでしていくことが大切なんじゃないかと、みんなで話し合いました。最後にまとめです。

ではまとめの言葉ですが、キーワードとしては、自分らがそれぞれここに来ていらっしゃる皆さんも専門分野というのがあると思われませんが、その自分のできることにいったらそれぞれ専門分野でやっていくという、少しの実でもやっていくということと、それがプラスのスパイラルになってくるということです。今日はロータリアン、このライラでもたくさんの仲間ができました。この仲間をこれからまた、仲間を増やせていけば、日本とかを見てほかの人もまたプラスのスパイラルとなつてつながりが増えていくと考えています。それぞれの専門分野を生かして少しずつでもいいので、そういうつながりを増やしていければ、みんなが幸せを感じられる社会ができるのではないかと結論に至りました。以上で発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。



○徳梅 B班の皆さんありがとうございます。ただ今のB班の説明に対して何か質問、発表の内容が分からない、意味が分からない、ございませんか。理解できましたか。英語は大丈夫でしたか。

○タイラー すみません。

○徳梅 いえいえ。はい、ありがとうございました。

■ ■ フォーラムディスカッション ■ ■

○安行 では、ちょうど1時間くらいになりましたので、これからみんなのいろんな思いとかも足りないと思いますし、いろんなところを尋ねていきたいと思います。尋ねていくということは、われわれがもう少し説明してほしいなあということとか、いいこと言っているから聞きたいなと思うこともあるし、われわれはもう少しその中で説明ができれば補足をしたりということをやりたいと思います。ランダムに当てていきます。われわれが少し強く印象に残ったことなどを聞きます。全員にしゃべっていただきたいのですが、それはおそらくできないので、いろんなピックアップをランダムにしていきます。それはご了解いただきたいと思います。

皆さんにいろんなことを考えていただきました。みんなの思いの答えはこれで正解だから、これで100%だから、われわれはそれを修正しようとかそんなつもりは全くなくて、みんな考えていただいた答えなので、これはもう100%の正解です。それについて優劣とか、それについてわれわれが判断をするということは何もありません。これで発表はあなたたちには全て終えてもらいましたから、われわれがそれに優劣をつけることはしません。これがあなたたちが考えていただいた答えということで、われわれには大変勉強になるということをおいてください。

今からは、私たちがもう少し説明してほしいとか、こういうことはわれわれはこう考えてい

るのですがどう思うという話を何うのと、みんなでもっと説明してほしいといったことをやっていこうと思います。今はみんなに考えてもらっている中で、もうちょっと考えてほしいことは、みんなは社会があるということを前提にやっていた。社会がね。なぜ社会がいるのかなというところ。もう少し説明をしてもらいたいと思うのです。みんなは社会というものを前提に考えて全部これを作った。なぜ社会が必要なんですか。少し誰か言っていただけるかな。

○中川 C班で中川雄一と申します。なぜ、社会が必要なのかというところで、人はお互い人を認め合うために社会が必要なのじゃないかなと、僕は思います。

○安行 人が人と認め合うためには社会が必要だと。ほかには。なぜ、社会というのは。個人だけだったら。

○長田 D班の長田です。生活をしていく中で、自由に人それぞれが何も考えないで行動しては、秩序が守れなく、最低限の規律は必要になるので、そういった意味で社会は必ず必要になるのだと思います。

○安行 個人で行動すると全くそういう規律が取れないじゃないかということもあるだろう。ほかにはないですか。みんなに書いてもらったまとめは、全て社会というものを前提に作っ

ている。まず社会ありきで。なぜ社会というのが必要か。もっといろいろな意見があると思う。協力し合う社会は必要なんです。なぜ社会がいるのかということも含めましてこれからずっと考えて生きていきます。

1つ、哲学者のカントという人は個人だけ、個人の生きるというのは何かを問うだけでいいと言った。個人の道徳が一番大事ですよと言った。でもヘーゲルという人はそうじゃないでしょうと。あなたの言うことは分かるが、基礎になるのは、人間なんて絶対、社会の中で生きていないか。だからあなたの言うことも一理あるし、でも、社会という中で人間がいるのが一番大事なのではとって、両方が大事だと言いだめたんです。個人の道徳も絶対必要だし社会ということも避けて通れないじゃないか、だから両方考えていかないといけないというのをヘーゲルという哲学者が言い始めたのです。そこで社会ってなんだろう、そこでどうやって生活していけばいいんだろう、人間はやっていかなければならないのかということを使い始めて、社会というものをもう一回考えてみようということをしつと言い始めたということなのです。それを前提にしているのだから、みんなはまず社会というのがありきで、そこからわれわれは何をするべきなのかというのをやっていたのですが、その根底になるものがものすごく大事だということを考えながら、今もう少しやっていきたいと思います。先生何か。

○深川 今非常に原理的なお話だったと思いますが、分かりやすいところでロビンソンクルーソーという1人で無人島で生きていく、だから、やはり2人以上の人間が協力し合う。そしてお互いに助け合って。先ほど喜び合うとかいう話が出て。C班でしたか、お互いに隣の人が喜びそうなことをやったらいいと。なぜ、そうするのか、そこも問題だろうと思っています。それについてはいろんな話があるので、できた

ら皆さんの意見を聞きたい。隣の人が喜びそうなことをする、それが感じるということの1つの内容だとおっしゃった。なぜ、その喜びそうなことをするのか、ご意見はありますか。

○谷村 C班の谷村昌俊と申します。やはり人が生きていくために1人では生きていけないので大勢の人の力を必要とします。そのときに、周りの人に助けてほしい、ご飯がないとか服がほしいと言ってもその人はくれないと思うんです。その人にももらうためには自分も何かをしないといけないから、その人は、してもらうために(相手の)喜ぶことをしたり感じ取ったりするのだと思います。

○深川 ありがとうございます。今の話、ほかに意見があったらおっしゃって。恥ずかしいこともなんでもない。とんでもない意見が出てきたら、「ああ、あんな意見もあった」と勉強になるんですからなんでもいいです。おっしゃってください。

○安行 では、各班の代表の方。喜びそうなことをなぜするのですか。A班。別に恥ずかしくもなんでもないからおっしゃってください。

○深川 思い切ってなんでもおっしゃってくださったほうが、ほかの人が聞いて、「ああ、あんな考え方がある」と思って勉強になりますから。

○荻野 A班の荻野紗奈です。すごく単純なことですが、相手が喜びそうなことをすると、相手が喜んでくれると私自身が嬉しいから、私自身が喜ばしいからです。

○今井 ありがとうございます。

○松田 B班。

○久松 B班の久松定智と申します。やはり他人というか、人に、相手に与えたものがやはり返ってくると思いますので、よいものを与えるとよいものが返ってきて、悪いものを与えると自分にも悪いものが返ってくると思っています。

○深川 ありがとうございます。

○安行 D班。

○長田 D班の長田です。相手が喜びそうなことをして相手が喜んでくれて、自分に対して好意を持ってくれればよい関係を築くことができるからだと思います。

○深川 ありがとうございます。だいたい皆さんいろんな意見をおっしゃった。一言で言いますと、結局自分がかわいいんですね、そういうことでしょうか？ですから、人をかわいがるとか人の喜びそうなことをするというのは、まず自分がかわいいからそうするんだということから出発するだろうと思います。

ですから、昔、こんな話がありましたよね。インドの王さまが最愛の奥さまと生活していました。そして、あるとき王さまが、「自分はよく考えてみると、最愛のお前よりも自分自身が一番かわいいような気がする」とおっしゃった。すると、それを聞いていた奥さまが、「私もよく考えてみたらあなたよりも私自身が一番かわいいように思う」と。すると王さまが「それではこの世の中、社会というのはなっていない。自分だけが一番かわいいんだったらバラバラになってしまうじゃないか」と。「じゃあ、お釈迦さまのところへ聞きに行こう」と言って2人でお釈迦さまのところへ行った。するとお釈迦さまが「それでいいのですよ」と。「みんな、誰でも自分が一番かわいいのですよ。だけど、自分が一番かわいいように、相手も自分が

一番かわいいと思っていることを忘れてはだめですよ」というお諭をなさったのです。

やはり、その辺のところから、相手に対する思いやりとか相手に対する愛とかが出てくるんだろうと思います。その辺の根幹のところをD班の方は感じ取っておられたと思いますが、感じ合っておっしゃったという意味に私は理解いたしました。

○安行 あとまた少し飛びますが、D班の方で、お話をいただきました。規定せず互いに認め合い協力し合う社会を作るためには、お互いが認めよりよい環境を築いていったらよい社会ができるだろうと。それには一人ひとりが意識、責任を高く持つこともあって、地域や国にも誇りを持ちましょうということがありました。よりよい関係というのはなぜ必要で、どんな関係なのでしょう。もう少し詳しくお聞かせいただければと思います。D班の方、どうでしょう。

○丹生 はい、D班の丹生と申します。あそこの中に、否定せずお互いに認め合い協力し合う社会。その下を見ていただいたら、3つ丸で囲まれている中があって、その下にお互いが認め合い、よりよい環境を築くとあります。その上にあるものが、一人ひとりが意識、責任を高く持つ。地域や国に誇りを持つ。これ、よりよい関係を築くとありますが、簡単に、自分自身がという部分があったり、各一人ひとりがよりよい関係というものを見つけ出していただいて導いていくためには、自分の国に誇りを持ち、また、一人ひとりが高い意識を持つというところで、よりよい関係というのは、まず一人ひとりが自分の国や意識に責任を持って考えること。一人ひとりがそれができることによって相手も影響され、また、菌車で説明したのですが、一人ひとりが成していくことで、一人ひとりが自分を大切にすることで、さっきも言われていたように、自分を大切にするためには相手

も大切にしなければいけないと。そういうふう
に相乗効果で広がって行って歯車が回って地球
も回っていくという形で例えていますので、よ
りよい関係とは、簡単にいえば一人ひとりが本
当に意識を持って。あと、その一人ひとりがど
ういうふうに描けたかというのはそれぞれの判
断なのでそこはお任せします。そういう形で、
よりよい関係という形でまとめて書いています
ので、よろしくをお願いします。

○安行 ありがとうございます。A班の、「そ
のために私たちが作っていく社会」というのは、
今のD班のお話とは共通する話が出てくるので
す。A班も共通して、その中の根底にはあると
思うのですが、A班、もう少し説明をしていた
だきたいと思うのですが。私たちが作っていく
社会、やはり「きょうどう」というのがひらが
なで出ていますが。D班と共通点があると思う
のですが。もう少し説明をしていただきたい。
なぜ「きょうどう」というものが出るのでしょ
う。

○森 A班の森一雄と申します。「きょうど
う」という言葉なのですが、説明のときに2つ
の文字の説明をさせていただいたのですが、協
力の協に同。この説明が連鎖していったらいい
かなということで、一応協同の連鎖という社会
という形で書かせていただいているのですが、
もう一度説明したほうがよろしいでしょうか。

○安行 はい、お願いします。

○森 はい、協力の協に同じの「協同」ですが、
互いに心や力を合わせて助け合うこと。そして、
もう一つの「協働」、協力の協に働くと書くの
ですが、これは、異なる主体がなんらかの目標
を共有し、共に力を合わせて活動すること。こ
れは辞典とかには載っておらず、近年の情報と
いうことで私は認識しているのですが、その単

語の意味によって「きょうどう」ということで
書かせていただきました。

○安行 はい、ありがとうございます。ほか
に何か説明がいらいますか？ そして、C班。「心
を結ぶ」ということをもう少し説明をしてくだ
さい。心を結ぶということは、今実践ですぐで
できるのでしょうか。それをどうやって作ってい
こうか、感じて伝えて返ってくるというのを、
今どうやってやっていこうと。その方法論は何
かお持ちかお聞かせ願いたいなあと思います。
誰かいい案があるでしょうか。われわれも迷っ
ているところなのです。

○石田 C班の石田です。「結ぶ」というこ
とを最後に書かせていただいたのですが、私た
ちがそれを感情を添えて選んだという経緯なの
ですが、今回、C班でいろいろ講義を聞きまし
たが、帰ってすぐに家族だったり会社の同僚
だったり、また近所の方だったり、一歩少し踏
み出せるように、心に軽く残してみんな帰りたい
なと考えまして、そこがすごくうちの班で難
しかったところなのですが、それで、なるべく
シンプルに簡単なものを考えようということで
「愛」という言葉が出てきたんですが、「愛」と
いう言葉はすごく大きすぎて崇高な言葉なの
で、自分自身もちょっと気恥ずかしいような気
持ちで「愛」というものを持って帰るのは恥ず
かしいというのがありましたので、その目の前
の人と自分自身の心の中で心を結ぶとふうに考
えようと。それで一歩前に出ようということで
シンプルにああいうことを。本当は「笑顔を見
せる」ということを考えていたのですが、漢字
で1つ決めようということで、ああいう形にさ
せていただきました。

○安行 なるほど、ありがとうございます。
ほかはないでしょうか。ではまた少し進みま
しょう。もう一回ぐるっと回ってきましょう。

B班でタイラーさんがいい説明もしていただき、D班ではいろいろ問題点を挙げていただきました。本来、われわれはずっと明治の時代からコルプスクリスチャヌムというキリスト教共同体みたいな形、それは文明と形を変えてもいいですが、そこにはギリシャの哲学とかローマ法とか、あるいはキリスト教の思想とかが入っていったのですが、ここで日本は少し2つほど抜いてしまった。ローマ法だけを取って行ってしまっただけでずっとやっていると、世界ではそれが発展していたのですが、二分法、ダイゴトミーという、どっちかというほうに分けて行ってしまった。いいか悪いか二分をしてしまう。正誤とか正悪とかつけて行って、それでだんだん、それがはっきり資本社会を作っていくって素晴らしい世界になっていったのですが、どうもそこには、われわれ違うものをやっていったんじゃないかと。

実はそういうわけ方じゃなくて、仏教的にいう、合掌すると、手を合わすとどちらの力が勝っているかは、調和してしまう、ハーモニーになる、これは。すると、どちらにも取れない。そういう方法だってあるんだと。実はそこには二分法には分かりきれない、理解できない文化というものもあるだろうし、いろんなものがあるだろう。それをもう一度考え直すことも必要か

もしれない。そういうこともあるだろうと思います。

そして、もう一つB班について。私たちのできることを精一杯する。素晴らしいプラスの思考。プラスのスパイラルを回していくというのは、すごくいいなと思います。それを回していったらなんとか世界が回っていきだろうと思うのもある。私ができる精一杯のこととはなんでしょう。具体的にちょっと教えてほしい。上にもあるんだらうけど、もう少し具体的に。B班の方、できれば。

○足立 B班の足立です。具体的にいえば、まず、私は写真館で働いているんですが、写真館にはたくさんの方が来て、毎日いらっしまして写真をスタッフが撮ったりプリントしたものをお渡ししたり、子どもさんも来たりとかいろいろな仕事があるのですが、そうやって写真を撮らせてもらってそれをお渡しするまでその人と関わるし、渡してからも、その人がこんな写真を撮ってもらったよというふうに関わりの人に見せてもらったら、その見た人は「ああ、いい写真だなあ」とか見て、かわいいとかきれいとか幸せな気持ちになると思うのです。そういうのを、実は見えない、自分たちはここまで仕事をしたからいいだろうと思っていて、あとか



ら聞いた話で、写真を今回撮らせてもらって商品をもたらってすごく嬉しかったんだという話を聞くと、私たちも幸せな気持ちになるし、お客さんにも喜んでもらえたというふうに分かるし、そうしたことが、私たちが精一杯仕事をして得た宝物みたいなものなので、そういうふうには精一杯、仕事だけしたらいいというわけではないですが、仕事をしたり周りの人と関わっていくときに、分け隔てなくいろんなことに一生懸命やっていくということが、少しのことでもすごい、ほかの人から見たら勇気づけられたり力になっていくと思うので、相乗効果でどんどんいいふうになっていくんじゃないかなと思います。

○安行 ありがとうございます。つまり、目に見えない心の問題だと。心の持ち方のあり方なんだということですね。ほかにもそんなものがいっぱいあるのですが、みんなはどう思うでしょう。C班も、1番、2番をもって3番に戻ってきて4番というものになるのだから、やはりそこには心というものがあるのだろうし、A班では、やはり最初のプラスという部分には心も問題、あるいは自分の成長にはそういうものが必要だろうと少し書いておられるし、D班でも、やはり意識の問題というのがあったり、よい関係を築くには、歯車のところへいくと、最初に人というものがきているだろうし、B班の人で今説明があったように、やはり心の問題なのだろうと。少し、そういうところについて、みんなの、心というものを元にしていいのかどうかを聞きたいと思います。A班からちょっと聞いてみたいのです。心というものを、やはり問題に、意識にあげていただいていたのでしょうか。

○目木 A班の目木です。意識、心というのは自分の持ち方、気持ちの持ち方というのは常に意識して考えていきました。やはり、自分の気持ち一つで答えは大きく変わってくると思う

ので、心・・・、思いやりの心と書いていますが、自分の気持ち全てが自分の気持ち。席を譲る、譲らないも自分の気持ち、別にしないからといってばちが当たるわけでもないし。でも、したほうが喜びの部分、最初にあったように自分の気持ちもいいから多分やるのかなと思って、心、本当に今B班の方が言われたとおりで、本当に自分の心の持ち方というのは常に気にしてやっていました。以上です。

○安行 そしたらC班の方ですが。誰でもいいです。いろんな思っていることで、やはりそういうお話があったのでしょうか。

○C班 そうですね・・・。

○安行 なんでもいいです。そういう心の問題についてのお話はやはりなされました？

○C班 しました。はい。

○安行 補足、誰かしてあげて。

○佐藤 C班の佐藤佑樹です。心という部分というか、内面的なもの、人間性とか内面性とか、そういったものが重要なのかなと思います。感じるというのは、心で感じるというのは、やはり冷たかったらそういうふうにつまえてしまうし、高い気持ちでいればそういうふうには受け取れるし、伝えるほうもそういう気持ちで伝えないと伝わらない。という意味で、やはり心、内面というのが必要なのかなと思います。

○安行 ありがとうございます。では、D班。

○大石 D班の大石寛子と申します。私たちD班の中では、社会において人が基盤となるというところにおいて、心というのは、人というのは心を持っているということで、特に心とい

うことについては深く話は出なかったのですが、心の面として、人の考え方や感じ方、あと、どういうふうにはほかの人に接していくかという意識については多く話し合いをしました。心というと、結構感情的な部分も多いのかなと思うのですが、今回D班の中で話し合った中では、感情で動くとはやはり社会がうまくいかなくなってしまおうとかがあるので、ちょっとクールダウンした状態というか、もっと自分を規制しながら社会にどう貢献していけるかというリーダーの視点での話し合いのほうに多く話がいっていたように思います。

○安行 なるほど。ありがとうございます。やはりそういうのは根底に問題意識を持っていたということでしょうね。中世のスコラ哲学に、ビューリダンのロバという物語があるんです。それは何かというと、同じ大きさのわらを積んだ山に、ロバを前に置いておくとロバはどうなるかという問題なんです。結局、餓死しますという。スコラ哲学ではそういうことを言っています。なぜ餓死をするのか。同じものだと思うとロバは食べられない。どっちに行こうかと迷う。しかし、われわれは実は置いている位置が違ふとか、置いている格好が違ふとかどこかで差異を求めていくんです。違いを求めていくから比較をするわけですね。これがいいのか、これが悪いのか。しかし、ロバは困っちゃうんですよ、どっちに行こうかなと思って。それで餓死する。つまり、われわれは、そこから何を求めていくかということと差異を求めていくんです。小さな、小さな違いを求めていってしまう。しかし、実はそこには全くわれわれが忘れていたものがある。本質を忘れていってしまうんですね。共通するものがなんなんだろうということやロバは分からない。そこで迷ってしまうロバのほうの方が正しいのかもしれない。差異を見つめていくというのは大変な作業になっていきます。そこはしないほうがいいのかもし

れない。ロバというのは、それをしながら死んでいくのがいいのかという、難問のようなスコラ哲学にあります。実は、われわれはどこかで人生を選択する、生活の場所では選択をしているのです。どこかで何かと。しかし、それは本質を忘れないでもらった上での選択であってほしいというのはその主旨です。

○深川 今、難しい話に入っていくそうなんです。本質を忘れるなというの、私たちは目に見える世界がありますね。例えば美人だとかイケメンだとか、それからあの人は肌の色が白いか背が高いとか低いとか。そういう目に映っているのは現象の世界なんですね。これは時々刻々移っていきます。だけど、そういう現象の世界に惑わされず、物事の本質はいかにあるべきかということやいつも考えて、それを見つめる努力が人間として必要じゃないかなと、そういうことを安行さんはおっしゃっているんだろうと思います。したがって、どんなことでもいろいろあります。

今、大震災でたくさん人の命が失われ、洪水で家が流され、全部目に映っている現象の世界なんですね。そういういろんな目に映っている現象の世界の中で、今私たちは一体何をすべきかという、これは本質の問題なんですね。本質の問題で、その心が分かたら、どういう行動に移していくのか。どういう救済の手を差し伸べるか。それは結局行動を見て、あの人が何を考えているか、心の問題を検証、分かってくわいでしょう。ですから、心の問題を取り上げられたのはそのことであって、心自体がどういうふうではないんです。心なんて目に見えないですね。レントゲンにかけたって人間の心は映りませんし心臓も映らない。ですから、心の中をかつきり開いて手術したって愛は出てきませんよ。それは目に見えないものなんだけど、その心が、なんらかの人を見ていろんな行動を起こしますから、その行動を見て「ああ、

あの人は何を考えているのか」ということになってくる。ですから、そこが一番元にある心の中の本質の問題、それをいつも考えて。いろんな現象が出てくる。震災があれば飢えに苦しむ人もあるし、それからロバがどっちか迷って飢え死にしていける。それも、結局欲があって現象の世界に惑わされるからそういうことになるんですよ。そういうことに惑わされないで、いつも物事とはどうあるべきか。そして、もっと突き詰めると、人間とはいかに生きるべきかということもいつも考えろとおっしゃっている。それは心の問題だろうと思います。

○安行 実は今、みんなで見てもらった中には、そういう意識づけがあって心というものを大事にしていくというのが、やはり準備をしていただく中ではあったのだろうと思います。では、少し明日につながると思うのですが、今井先生が明日お話をされると思います。では、実は、われわれはもう少し先のほう、もう少し将来の未来のことを考えていきたいと思う、それで皆さんの提言を受けた。

もう少し具体化したいのは、実は、ホブズボームという人は20世紀を短い20世紀だと言った。それは1914年から1991年までの世界を20世紀だと言った。第一次世界大戦が始まってソ連が崩壊するまでの間を20世紀だと言った。それを短い20世紀だと言った。それで20世紀、近代は終わってしまったと言った人がいます。そして、それは近代の完結だと言っている。それで全ての幕は閉じてしまったと。実はそこからあとの世界というのは分からない。

今、私たちは、もうだいぶ21世紀になって経ってしまったけど、これから進むべき道というのは、一体何をわれわれは元にして、今挙げただいたもので、今のわれわれの世界とか社会を、本当に心とか思いやりとか、それだけでもいいのか。もっと何かプラスでいるのか。実は、その原点というのはどこに置きましょう？ 実

際にみんなに挙げてもらった心、成長するためにはお互いを知ってとか、一人ひとりが意識を持って責任感を高めようとか、もっとプラスのスパイラルで私たちの役割を果たそうじゃないとか、人というのは大事だし地域というのは大事だしと思っている。それ以外に何かあると思いますか。何がしかをしなければならぬというのが少しありますか。そういうところを少し思いつくままに言っていただいたら嬉しいです。われわれの勉強にしたいと思うんです。もっともう少し未来においてもらいたいと思うのが1つ。

そして、A、B、Cの言っていただいたこと、もちろん僕らはとても勉強になっています。今、こんなことも考えているんだなあとと思って、改めて、きょう僕はいろいろ勉強して書いて帰ろうかなと思っているのですが、実は、われわれは、本当にあれだけで本当にそれがいい世の中が来るのかということにもものすごく不安を感じています。これだけやったらいいんじゃないかとかないかもしれないけど、もっと何かこれが必要だというものがありますか。太陽光発電しようとかなんでもいいですが、そんなものがあれば。

これ以外に何かみんな話し合った中で、こういうのが必要じゃないのというのがありましたか。もちろん、これも僕らのすごくプラスになるんですが、ほかにこんな意見がありましたよというのがありましたら言ってほしいんですが。僕ら、参考にしたいんです。こういうのも必要だと思っていたというのがありましたか。何か話題に挙がっていました？ それを全て挙げましたといえばそれまでなんですが、こういうちょっとした意見なんかもありましたよというのを教えていただいたら嬉しいのですが。

いや、別になんでもいいですよ、電気を節約しようでもなんでもいいですよ。そんなことがあっても。思いつくままなんでもいい。本当にわれわれ、何かを行動に移すときには何か

いるかなあと。自転車乗ろうとか。明日からスナックを1つ食べるの止めますとか。

○工藤 B班の工藤です。話し合いの途中で出てきたものの1つで、みんなが自分のことばかり考えていたらだめだなということになって、1人が提案したものがあって、それが、1人1日1分でもいいから、誰かのために何かしようみたいな提案が出ていました。

○安行 なんでもいいから少しの時間、他人のためにやること。ほかは。

○田中 A班の田中です。付け加えて身近な人ということで、世代を超えた付き合いをしたいと思って、僕も小さいころ、両親がいないときは隣のおじさん、おばさんにみてもらったりしたので、また僕はこの年になって隣の小さい子を見るとか、すると大きくなったらまた小学校とかでも用事があってPTAのこととか手伝いとかもするとか、その世代を超えていろんな人と付き合いがあればもっといいことができるようになるかと私たちは考えていました。

○安行 素晴らしい。みんなに聞きたいんですが。これを見て、これもいいなと思いました。「みんな世界の人と手をつなごう」と。これもいいなと。発想は自由でやってください。こんなんええやん、世界でやったらええねやって言ってもええねん。そういうことなんやと思うで。ああいうのをやろうよとか。なんかない？
発想。ほかにないですか。

○坂井 B班の坂井です。実際あったことなんですが、ヒーローショーの悪役の声をやっていたことがあったときに……。

○安行 え、やっていたの？

○坂井 やってました。(悪役の声をする)(拍手)で、やっていたんですが、それで戦闘員に子どもを人質に取りに行かせたんですよ。そのときに、女の子の1人を人質に取ろうとしたときに、一緒に友達で来ていた男の子が必死に戦闘員に食い下がって、「だめだ、ちいちゃんを連れて行くな」って言って、しまいには泣きながら殴り始めて、この子すごいなと思いで、結局、「こんな強い子がいたのでは連れて行けない、ほかの子を連れてまいれ」と言って連れて行かしたのですが、俺は、そういう子が増えてほしいと思っています。

○安行 なるほどね。その正義感があるような子どもを作ると。悪役で世界中に行ってもらえませんか？すごいねえ、絶対それはそうだ。正義感を植えつけるというのは。正義ってなんだろう？ということになってくる。ほかにもっと世界でこんなのをやったほうがいいっていうこと。

○ー 今、「table for two(テーブルフォーツー)」という活動があって、それはご飯を食べられない子どもたちがアフリカとかいろんなところにいますよね。そういう人たちのご飯を補ってあげようという活動で、日本で私たちがそういうふうに、なんですかね、ちょっとヘルシーなテーブルフォーツーのメニューを食べるとその料金の中から20円がアフリカの子どものご飯として送られるというのがあったりするんです。

例えば、いろんなそういうしくみがあって、ゴルフでボールを打って何ヤード飛ばしたらその何ヤード分のお金をテーブルフォーツーを通してアフリカの子どものご飯に当てるとかいう活動をやっているところがあるのですが、その方は日本人で、今ニューヨークとかいろんなところに事務所をポンポンと建ててそういう活動をやっているのですが、やはりできる人はでき

ることをやって、助けてあげられる人を助けてあげるとい活動ももっと増えていくといいなと僕は思います。

○安行 だから、できることは、ああいうみんなが挙げてくれたこと以外にもいっぱいあるし、それを元にしてくれたらいろんなことができるということですね。食意地がはっている後ろの人たちとゴルフをたくさんやっている人たちに、後ろに向かって言ってください、あの辺にいますから。その分だけで大概はお金は送れると思うんですが。食意地がはっているから。

ほかにないですか、こういうのをやっているよとか。ほかにないですか。こういうこともできるよと。いろんなアイデア。どんなのでもいいよ。これは実現できないかもしれないけどやってみたら世界は平和になるよとか。あるいは突拍子もないけどこんないいかなとか。つまり、われわれはもう少し未来を考えよう。おそらく明日はそういう講演になると思います。今少し意見をもらえれば。もう、ここから聞いていこう。はい。順番。なんでもいい。アイデアは別にそんなのあるんだと思えば。とにかく聞いてみたい。私だったら。もしもの世界。

○一 田舎なので、最近ガソリンも高く

なっていますし、暖かくなってきたら自転車通勤を少しでも・・・。

○安行 それも考えた。自転車もやろうかなと真剣に考えました。ずっと聞いていきます。いろんなアイデアをもらおうかなと。

○一 うまくしゃべれないんですが、私の会社は木の家を作っていて全部自然素材で作った家を作っています。そこでもっとも大事にしていることは地産地消の考えです。自分が育ったところを愛してその木材を使って家を建てています。そういうことが広がっていくと、余分なトラックとかの配達の、そういうことがガソリンとが少なくなるし、世界が自分のところをまず愛して、うまく回るんじゃないかなと思います。以上です。

○安行 エコですね。それはやはり心の問題でもあるだろうな。はい。

○一 関東とか東北とか電気が足りないと言っているんですが、関西の人もできたら太陽光発電とかの普及も考えたほうがいいと思っています。以上です。



○安行 はい、そりゃそうだね。別に物理的なものじゃなくても心でもなんでもいいですよ。

○一一 知り合いを増やすことで大事な場所が増えると思うので、そういう場所を増やしていくことも大切だと。

○安行 知り合いを増やすと大事な場所が増える。例えば、大阪で知り合った人とか小豆島で知り合った人とか。

○一一 興味がわくから。

○安行 そういうことですね、はい。順番で。

○一一 今、無縁社会とかいわれている社会なので、父とか母がいて自分が生まれているので、父は祖父と祖母がいて生まれて、先祖を大切にすることをしていたらいいなと思います。

○安行 それは世界でも通用するということでしょうね。はい、分かりました。ありがとうございます。次、順番で。

○一一 世界ではというより日本の中のことですが、私自身、青少年活動をしていまして後輩で今大学4年生の子が、なかなか青少年活動で頑張っているけど社会では評価されていなく、すごく就職難の波にあってしまって活動ができない状態が続いているので、少しでも青少年活動を頑張っている子たちを評価していただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○安行 はい、分かりました。それはもちろんですね。世界のためにも日本のためにも。タイラーさんいきます？

○タイラー すみません。僕も話をしたいで

すが。僕はロサンジェルスに住んでいましたから、みんな車がなかったらどこへも行けないって言ったら、行けると思います。1カ月でノードライブセブテンバーというのを作って、僕と友達と1カ月で車を全然使わなかった。自転車とか電車とか公共交通だけ使って、ちょっと難しかったけどあとでめっちゃ気持ちよくていい感じと思って、いろいろな人と関わって嬉しかったし、みんなすごい行けました。すみません。

○安行 いえ、いいです。少し発表はこの辺で止めておいてほかにもグループ聞きますね。少し待ってください。非常にいろんな部分があるんだし、いろんなことができるというのは今説明してもらいました。少しまたことかここがあるので、もう少し待って聞こうと思います。先生、少し問題点を。

○深川 今までいろんな話が出てきて、みんないい意見でいいと思うのですが、どうしても私たちの目に映っている現象的なことに捉われている。もう少し先ほど少し言ったように人間としてぎりぎりの極限状況になったときいかに生きるのかという問題に絞りたいと思いますが、例えば、今大震災の津波でたくさんの家や人が流されていった。あの中で、1人の人間が放り出されて板きれが一枚流れてきた。もう1人の人がそれをつかむと、板きれは沈んで2人とも沈むんです。そのときに、その板きれを相手に与えて自分が沈んで命を終えるのか、あるいは自分はその板きれにつかまって助かるのか。そのどっちを取るかという。生きるか死ぬかの極限状況、こういう大震災などに遭遇したとき皆さんどう考えるか、意見をどんどん出してください。いろんな意見が出てくると思います。

先ほどちょっと言ったように、自分が一番かわいいのであればその板きれは自分が取るで

しょう。だけど自分のことはさておいて世の中の人のためにという考え方の人は、それを相手に与えて自分が沈むでしょう。そこで問題です。どう考えます？ いろんな考え方があります。どんどん言ってください。これは実はロータリークラブでもこういう問題を出して、いろんな職業の人、お坊さんもおれば医者もおれば実業家もおれば、いろんな人の意見が侃々諤々の議論を出して結論はなかなか出ない。そういう問題ですが、こういう大震災のときには皆さんにそれをちょっと考えていきたい。

で、ほかにも、先ほどタイラーさんが出した、異なる文化の中でどのように生きるかという大問題があるのですが、それはまたあとにして、まずは今出したテーマ、なんでも結構です。皆さんおそらく自分はどうでもいいなんて考えている人はクリスチャンを別にしていなと思うけど。その辺のところ忌憚なく意見を出してください。

○中村 B班の中村です。実際に自分がそういう極限の状況にいないときだったら、自分が犠牲になって助けようとかいう考えが私の中にはあると思うのですが、いざその場に居合わせたとしたら、恐怖だとか家族のこととか友人のこととか考えて、やはり自分が生きたいということも思うと思うし、その場にならないと分からないですが、答えは自分の中にもちょっと出ないです。

○深川 ありがとうございます。ほかに何か。そんな難しく考えなくてもいいよ。もうちょっとヒントを出そうか。相手が自分の子どもだったらどうか。奥さんだったらどうか。あいつなら死んだらいいから俺はってそんなのも多かかもしれない、いろいろあると思うんです。それは。相手にもよる。だけど、それはさておいて、自分としてはそういう極限状況、本当にそこに面したらどうするかということを知っているん

です。簡単なこと、イエスカノーかでいいんです。どうぞ。

○安行 どうですか、もう少し後ろのほう。どう、この辺、どうですか。

○松本 D班の松本です。僕は幼稚園からクリスチャンの学校に通って宗教の授業というのがあって、アウシュビッツの強制収容所でコルベ神父という方がガス室に送られる人が、「家族もいるし娘もいるから止めてくれ」と言ったときに、代わりにその人が行ったという話を聞いて、正直全く理解ができなかったのですが、自分の家族とかが近くにいると考えたら、自分の身を投げてでもその人に渡すかもしれないですが、他人やったら正直思います。でも、本当に自分が一番かわいいというのは誰でも絶対そうやと思うので、その現場にならないと分からないですが、生きるか死ぬかになったら生きたいです。

○深川 ありがとうございます。ほかにありますか。なんでもいいですよ。

○毛谷 C班の毛谷です。私は小さいころから大人が嫌いで、大人に絶対なりたくないと思っていたんですが、ちょうど今大人の階段を登っている最中なんですけど、みんないったら大人なんだろうけど、私はまだガキなんですけど、大人の人が私たちみたいなちっちゃい子にちゃんとした未来を作れるような環境を与えてほしいなと思います。親にも言いたいんですが、分かってないわとか政治家も思うんですけど、何か金がどうやこやとか、そんなのを捨ててもっと・・・。

○深川 うん、だから今の板きれはどうしますか。(場内笑) 大人が嫌いなら自分が板きれ取ったらいいじゃない。ほかに何かありますか。

できたら受講生の方に。

○**深川** 時間があまりありません。あと30分しかありませんから、まだ大きな命題もありますから次に移りますが、今の話はね、昔のギリシャのカルメアデスという哲学者がいたのです。大海原で船が難破しまして、板きれが1枚と2人の男が投げ出された。そのときに今の板きれを2人がつかむと沈む、1人だけなら助かる。そういうときに一体どうするのかということなのです。そういう問題を出しまして、カルメアデスは、確かにその板きれを相手に与えて自分が海に沈むのは正しいことかもしれない、しかし、愚かなことだと言ったのです。

こういう例が1つあります。だから、どちらともいえない。私がロータリークラブでフォーラムをやったときいろんな意見が出てきました。さっきの嫁さんの話とかそれどころじゃない、たくさん出てきて、その中にお坊さんがおられて、私はやはり命が惜しいから、私はその板きれをつかむとおっしゃった。私は、立派な人だと思う、正直におっしゃって。そういうことになります。それで実はいろんな実例がございます。現実には板きれを人に与えて海に沈んだ人がいます。昔、洞爺丸といって、北海道の沖で沈んだ、皆さんご存知ですか、だいたい昔で知らない人もあるかもしれませんが、青函連絡船が北海道から帰ってくるときに台風の中で沈没するのです。その中に今井先生のお知り合いのディーン・リーパーという学生YMCAの総主事の方がちょうど船に乗り合わせておられて、その船が沈むときに自分のライフジャケットを、若い人に与えて自分は船とともに沈んだと。ですから、これはカルメアデスと全く違う、自分を犠牲にして人の命を救ったという例なのです。

私はその話を今井先生から聞いて、現にその函館の遭難員のところへ行きましたら、もう1人おられました。ストーンさんという神父さん。

やはりその船に乗り合わせて、ライフジャケットを人に与えて自分は沈んだという、こういう例もございます。ですから、こういう極限状況になったときに自分の命を捨てて他人を助けるという、究極の愛だなと思いますが、そういう人もおられるし、それからそうではなくて自分で板きれをつかんで、自分の幸せを築く人もいます。そして、その人がまた世のため人のために役に立つこともありますからどちらともいえませんが、やはり、この極限状況に達したとき、東日本大震災のような、そういうときに自分としては何をすべきか、人間としていかに生きるべきかということをやはり考えておく必要があると。

皆さん方は直接の被害者じゃないから、東北は遠いことだから、やはりきれいごとになるのは無理ないと思います。そりゃ実感がありませんからね。だけでもあのテレビの状況とかあれを見ていると大変なことだと思いますし、そういうこともこれから真剣に考えていただいて、皆さん方本当に小さな力でいいですから、東北の人たちに与えていただきたいと私は思います。それから、あとはもう、シーシェパードの問題だけちょっと触れて。

○**安行** シーシェパードの問題もいろいろあるので、これは倫理の世界になってくると思うのですが、文化相対主義というのがある。例えば、カラチア人という人が食肉人種だったということで、ギリシャの王さまに報告があると、ギリシャの王はそんな人間は信じられないと言って、かたや、ギリシャの人たちは、動物を食べる。それも信じられない、人々を火葬にするとか言う。信じられない。それは文化によって違いがある。その文化を比較してだめとかどうではなくて、根底にあるものは、どれも死者とか人を大事にするというのが根底に流れているので、基礎を見ないで表面、表層だけを見てしまうといろんな立場の違いで判断してしまう

というのがあって、これは文化相対主義というのがあるのですが、ここでは、やはり文化というものには、それぞれの深い流れがあったりするので、非常にわれわれは判断しにくい。でも、底に流れているものというのは、共通する何かがあるということは絶対忘れられない。忘れないでほしい。

これは人間に常に流れているものは一緒である。そこの本質を見てからの判断を待とうということは、先に走った現象だけで見て判断をすると非常に間違った方向へいくんです。そこには非常に深いいろんな要素、エレメントがあったり、文化的な背景があったりバックグラウンドがあったりするので、そこに流れているもの、しかし、人間というものは実は命を大事にしていたんだということが分かります、そうわれわれは文化が違うから、価値観が違うからそこで違った判断をするというのには、なかなか判断しにくいところがある。しかし、本質に流れている命というものに対しては、常に同じものを人間は持っているものとして、ここにわれわれはどう見つけるか。だから非常にわれわれは難しい問題に迫られていることがあります。そこには判断できないということがあります。

○深川 今、安行さんがおっしゃったように文化の違いってありますね。これは大事なことなので。私たちは今、1つの国だけで生きていくことはできません。たくさんの国との関わり合いの中で生きているわけです。例えばいろんな貿易をしていますね。それから文化交流もあります。そんな中で生きているわけですから、自分と異なった文化を受け入れる度量というのが、やはり私たち日本人は持っていなければならないと思うのです。ですから、このシーシェパードの問題につきましても、アメリカの人の考え方、先ほどタイラーさんがおっしゃっていましたが、それも大事なことだろうと思います。が、日本人として、あなた方一人ひとりはどう

考えているのかということも大事なことであります。だから、その意見も率直に聞きたいと思います。

だけど、時間がありませんから、結論だけちょっと、その今の国際的な問題で、お互いに文化の違った世界に生きる中でどのようにその文化と交わっていくかという問題で、ロータリーではこういうことを言うんです。自分の国の伝統、地域伝統もあるし宗教の伝統もあるし社会伝統もあります。いろんな地域的な伝統、いろんな伝統がありますね。その自分の国の伝統に誇りを持たなければならない。先ほどちょっとどこかの班で出ていましたね。自分の国に誇りを持てと。そういうことだと思います。まず自分の国の文化伝統というものが最高だということに誇りを持ちます。日本人にとって日本の文化伝統が最高だと思ふし、アメリカ人にとってはアメリカの文化伝統が最高だと思ふ。そういうことになりますとたくさんの国がありますから、世界一が並び立ちますね。みんな世界一だと思えば、世界一が並び立ちます。そこでどうしてもほかの国の文化伝統に優越感を持ちがちであります。俺の国はアメリカより優れているんだとか、アメリカ人は日本より優れているんだ、そういう優越感を持つようになります。

だからそこで第2に、お互いに自分の国の伝統に誇りを持つがゆえに、ほかの国の伝統に優越感を持つてはならない。これは第2の原則であります。ですから、日本人は日本の伝統は世界一だと思えばいい。アメリカ人は自分のアメリカの伝統が世界一だと思えばいい。しかし、そうすると日本の伝統のほうがいいんだといってアメリカに対して優越感を持つ。これはいけないよ。優越感を持つてはならない。そこで第3。お互いに謙虚な心を持ってほかの国の伝統に学ぶ心を持ちなさいと。こういうことによって初めて世の中がうまくいくだろうと、こういうことをロータリーは説いております。

それを一つ心に留めておいていただいて、で

きたら、皆さんから先ほどシーシェパードの運動について、私はこう思うんだということがあれば忌憚なくおっしゃってください。そのことは、タイラーさんにとっても参考になるだろうし、それから私たちロータリーにとっても参考になると思いますから、思い切って意見を述べてください。

○安行　では、しばらくもう少し時間がありますが、トイレ休憩と、一旦中断して、もう一度最後の部分に入りたいと思います。今から約10分間トイレ休憩をとりまして、最後のフォーラムを4時20分から開始したいと思います。

○安行　そうしましたら、もう少しの間だけ進めていきたいと思います。発表にはすごく素晴らしいものがあるしたくさんのアイデアをもらいまして、少し僕も利用させていただきたいと思います。まず、始めるにあたりまして、各班素晴らしい発表をしていただいたことに対して、もう一度みんなでみんなを称え合いましょ。拍手で。(拍手)ありがとうございます。

僕はさっきも読み返していて「面白いなあ」と思いました。すごく役に立つことばかりで、いいアイデアをもらいました。ぜひ、これから

の世の中、また近未来でもいいから「こういうことをやっていこう」ということを、これに基づいて思っていたいただければ大変僕らも楽しみにしています。感謝もしています。ぜひみんなと一緒にやっていきたいなと心から、今もすごく強くなりました。もう少しの間だけお付き合いをいただいて、終わってご飯を食べてカウンセルファイヤーで最後の夜を楽しむということに移りたいと思います。

実は、もう少し話をすると、ここに果物があって、その中にメロンとかいちごとかがいっぱいあって名前がついている。でも、本当は果物ってなんだろうというときに、果物自体は何かといたら、あまりみんなだいたいこんなもんだと思ってしまう、果物。概念では分かる。で、そういうのを実念論というんです。だいたい頭で念じていて感じているんですが、だいたい言われたら分かるという。でも、いちごとメロンって一緒と違う、メロンはきゅうりの仲間じゃないのとか、いちごは何かの仲間じゃないのとか分けてしまっていますね。実際は果物っていうけど違う、りんごはりんごで違う種類だし、トマトは果物と違って分けていく、そういうのを唯名論というんです。唯一の名前。でも、そうじゃないと。ただ、そんなものはわれわれが思っているだけのことじゃないか。頭の中で本当は



考えてるんだけど、実際は概念としてはあるんだけどそんなものは存在しないと思う果物。それを概念実在論といいます、難しい言葉で。でも、われわれは実はそれをやっている。

実はこんなことを思って。愛情ってなんだろう。誰かを愛すること、人を好きになること。愛って何？ って言われると、実は、これ、実念論でもないし唯名論でもないし、概念実在論という話になります。難しい言葉でいうと。実は、愛というものなどは、本当にこう、分かっているんだけど表現のしよう、説明のしようがないものだけど実際われわれは知っているんです。ああ、こういうものだと。そういう世界ってやはりあるのです。そこに心の問題があったり、われわれが人と寄り添ったり、そういうところで人を助けていこうという気持ちがある。それは表現のできようがない。そこがわれわれは基礎にあるんだろうなと思います。実は、それをみんなはいろいろな表現でやってくれた。あそこにあるのは、みんながみんなの100%のほんの一部かもしれない。まとめきれなかった、俺はこんなことも言いたかった、私はこういうことも言いたかった、いや、実はもっともって言いたいことがあったけどまとめなければならなかったんだ、でも、あれだけしかできなかった。でもそこには、表現ができない今の愛情というのと一緒に、概念実在論と同じで、実はわれわれは表現はできないけど分かってくれるというのは、みんなの思いからよく分かりました。そういうところが、未来にみんなが何か新しい社会を作ってくれていこうとするものすごいエネルギーになると思います。そこがやはり僕ら、ひしひしと感じてきているというのが、今日の印象でした。

われわれおじさんたち、おばさんたちが、これを聞いてもっと勉強しないといけないというのが、われわれの今日の思いです。そして、あなたたちにもっと期待するのは、これを元にしていろんな、実は愛って表現できないんだけど

深い、自分たちで何かをできたら、人のために何かできて喜びを感じたりしたら「ああ、嬉しかったな」という表現ができたりするようなことが、行為ができてくれたらすごくいい社会ができるだろう。そこを望むし、いや、もっと広く小さな周りからもっと輪を広げて、大きな社会、地域、日本、世界に必ずそれを広めてほしい。小さいことじゃなくてね。そういうことをやってほしいというのが、われわれの望みでもあります。でも、私はこれくらいしかできない。それでいいです。でも、それがやがて、多分、これからの社会、これからの日本を作り変えていくことができるだろうと思いますし。

私たちは、日常なんでもない行為を選択します。朝、歯を磨いて顔を洗うのか、顔を洗ってから歯を磨くのかという小さな選択を迫られるんだけど、それはなんとも思わなくやっちゃう。でも、私はそうじゃなくて、誰かのために何かをやりたいと思うには必ず選択をするんですよ。なんで？　なんでそれをするんですか、奉仕を。手を差し伸べるんですか。私たちは、人生に対する深みを増そうと思うんです。自分たちが歩んでいく人生に対しては、もっと深い自分の生を生きようとするんです。それを僕はいろんな人に言うのですが、「吟味された生」と言いました。吟味された人生なんだ、だから人間性に深みを与えるために、誰か何かのために。やらなくていいんです、やらなくても生きられるんです。でも、やろうとする。なんでそれをするのか。自分の人生に深みを与えるためにしようと思います。それは人のためになろう、自分のためになるのもあろうし。そういうことを選択する。そこが大きな、われわれの行動の基礎になると思います。だから、みんなが一生懸命考えてくれたことはひしひしとわれわれには伝わります。

そこでもう一段ステップアップを望むところ、それは、周りの人たちや自分の近くの人たちからやがて輪を広げていていただいて、地

域や世界や日本の国のためや、大きなことを言うかもしれないですが、実はそこを大きく狙って、元においてほしいということです。そういうことが、このライラでわれわれが望むようなところだと思うのです。そこがよくよく今日はみんなに回答、表現をしていただいた中にいい案をもらいました。実は、それがわれわれが一番望んでいることでわれわれが勉強して帰ることになります。非常に有り難いと思っています。みんなのしていただいたことは、われわれの糧になるということです。これをぜひ僕らは、もう一度考えて若い人たちと一緒にやろうという、今日はもう一回確認になりました。そういうところを、苦勞していただきましたが朝からずっと今まで考えていただいたことは決して無駄にしない。みんな無駄にしないで帰っていただきたいということです。

○深川 シーシェパードの意見を聞いてない。

○安行 あと、タイラーさんの意見で、シーシェパードで何か意見がありましたか。何かこれは言っておきたいということありますか？

○辻田 B班の辻田です。さっき、ワークのときは緊張していて、お昼休みに「どういうことを話すの」と聞いていたときに、2人ともさっきは言わなかったことがあるんですが。

○司会 はい、言ってください。

○辻田 ワークと話をしている、イルカを殺すという、シーシェパードの活動は私もニュースで見るとはいいんですが、最初はうさぎを殺す人たちにそんなこと言われたくないわと思っていたのですが、でも、ワークと話をしているときに、アンダースタンドとアグリーは違うという話を、彼は、実際にイルカを

殺す場面を見て、それは自分は賛成できないと思った。でも、和歌山とその太地の人と一緒に交流していくうちに、そういう伝統なり何かがあるということを理解することは今はできると言っていて、なるほど私のほうは思ったということが1つと、お互いにさっきも話が出たのですが、話を聞かなきゃいけないというので、イルカを殺すのはよくないという意見に対して「うさぎを殺す人に言われたくないわ」と言ったら、それは答えになっていないですよ。なので、イルカを殺す、それはちょっと賛成できないという意見がシーシェパードのほうである。

で、彼が、そのお互いに改善点だと思うと言っていたことは、シーシェパードは自分たちの活動を英語でしかサイトで発表していないけれども、もしも、日本語でも自分たちの活動を出していったら、日本人ももっと反論ができたりとかシーシェパードの活動を見ることができる。で、日本人がシーシェパードの活動に対して「そんなのほっといてくれ」じゃないですが、それが許容できませんと言うにしても、私たち自身がイルカを殺すという地域の何か漁の伝統なりに、日本人全員が理解しているかというところではない。日本の伝統といいながら、ちょっと離れた地域に住む私たちがそれをちゃんと理解しているかというところではないよねというふうに言われて、確かにそうだと2人で話したのですが、それは私たち2人とも緊張していたので、さっきは言うところを確認していたけれども、飛んでしまった話として補足として皆さんにお伝えしたいと思います。

○安行 ありがとうございます。ほかはないですか。

○谷村 C班の谷村です。今イルカと捕鯨の話だったと思うのですが、やはり国によって使うものとか必要なものが違うのですが、日本は、

割と昔から魚を食べたり獲ったりする文化があるので、日本の奥底からいうと、そんなことは言えないのかなというところもあるのですが、なんかこう、妥協点、さっきのうさぎの反論の話も出ていましたが、殺すというか、獲ることがいけないというのも変な話で、大きな動物だと結構そういう対象になりやすい。小さい、例えば蚊であつたり蛾だつたりとか、そういうのは別に殺しても、どこの国の人もそんなに文句を言わないですよ。だから、大きさであつたり存在しているものの数によってそういう議論が出てくるのかなという気が少ししています。結局、どのくらいの数だからこれは獲ってもいいとか、これはいけないとかいうのがよく分からないですけど、そういう気がしております。

○安行　　じゃあ、はい、どうぞ。

○――　　すみません。僕の言いたいことが先ほど直前に言われて、ちょっとがっかりしているんですが、これ、中学校の弁論大会で発表した内容なのですが、確かに鯨とか死んでいたらかわいそうだなと思うんですよ。先ほど言われたように蚊とかを殺したらざまあみろかと思うんですよ。でも、命は同じなんですよ。僕ら人間は命をもらっているのだから、それをどちらが重いとか言う資格があるのかなと思っています。

○安行　　はい、ありがとうございます。ほかにはないですか。これは非常に難しい問題です。人間社会というのは、いろいろ倫理学をやってもそれはものすごく難しくなってきました。命ということについてもいろんなことがあります。あるいは今もっと、その生命倫理についてはもっと広い、われわれが真剣に考えなければならぬことが入ってきます。それはすごくわれわれの判断をすごく迷わすところです。それは、例えば、これだけ高度な医療が発達してい

くとおそらく神の領域まで入ってくる。そこには倫理という問題が絶対出てくるんですよ、命ということを考えて。その辺の判断は、じゃあ人間が下せるのかということ、われわれにとってはすごく難しい問題を選択させられます。それと同じで、さっきも言ったように文化の違いが確かにあります。いろんなところでいろんなものがあります。それは、いろんなわれわれの理不尽と思えることがあるだろうと思います。それは、今一度確かめなければならないのは、命という問題は一人ひとりが考えなければならないということだと思います。一概に悪だということもできないし、一概に善だということもできない。これには非常に難しい問題があります。そこにはわれわれの突きつけられている問題は、命というものだろうと思います。

命はどう考えるのですか。それは人の命もそうだろう。動物の命もそうだろう。全てのあらゆる生命体に対してわれわれはどう考えているんだということ、もう一度考えさせられることです。それについてはわれわれは傍観者であってはならないということでしょう。オブザーバーではだめということです。そういうことを考えたらいい問題提起をされていると感じるだろうと思います。ここでいいか悪いかということは、当然水掛け論になってくると思いますから、われわれとしては、もう一度倫理というものに対しては、命というものの重要性は、もう一度再認識して考えていかねばならないベーシックな問題だと思います。そういうところだと思いますが、先生、どうでしょうか。

○深川　　今安行さんからいろいろな解説をいただきました。ありがとうございます。難しい問題だと思います。これは文化の違いの問題ですからね。今どこだったか、命を奪うというのは、大きなものだったらいけなくて蚊とかのみだったらいいだろうという議論も出ていたが、まさにそのとおりで、どちらも神さまか

らいただいた命を生きている、一所懸命生きていますね。ですから、それで区別はできなからうと思います。それから、大きいものはだめだと言っても、アメリカ人だって牛を殺して食っているじゃないかという問題がありますね。だけどやっぱりアメリカ人は牛を殺して食べなきゃ生きていけない。日本人だって、そういう鯨がどうしても必要だという文化がある。その辺のところは、どちらと決めるわけにいかないだろうし、これは大変難しい問題で、まさに私が先ほど申し上げましたように、自分たちが生きているこの社会の文化伝統や政治伝統、経済伝統や宗教伝統、そういう伝統を大事にして、その中でどのように生きていくのかというのは大変難しい問題だと私は思います。できたらあとで今井先生にもコメントをいただきたいくらいですが(笑)。

ただね、日本人はこういうことを言います。私個人の意見ですよ。日本人はいろんな殺生もします。命をいただいて生きているんです。だってそうしたら菜食主義がいいじゃないかというけど、菜食主義だってお米だって命なんですよ。その命をいただいてわれわれは生きていくわけですね。人間以外の命をいただければ人間というのは生きていけないんですよ。だけど、そのいただいた命、先ほど安行さんが言ったように、いただいたという考え方、これは大事だと思います。したがって、日本人の場合は、例えば山に入って鉄砲でいのししを撃ったり、獣を撃ちますね。それを食べる。そのときに、猟師たちは命を奪うのはいけないことなんだと思いつつも、しかし、自分は猟師として猪を撃たなければ自分が生きていくことができない。だから、その命をいただくのに感謝をしながら命を奪っている。ですから、むやみに殺しません。自分たちが生きていける範囲でしか殺さない。しかも殺したら、あとで、1年に1度は猪供養といって供養をします。

それから、私は鮎釣りをやりますが、鮎釣り

だったら鮎の漁師とかは、鮎を川で釣ります、魚ですね。魚を釣って、それは鮎釣りの漁師にとってはそれがなければ自分が生きていけないから、しょうがなく鮎を獲って食べます。しかし、それでも自分で生きていく以上にむやみな殺生はしません。必ず自分が生活するだけに必要なものを獲ればあとの鮎はおいておきます。鮎が大きくなったらまた獲る。それも自分の生活に必要な分だけしか獲らない。そういう形で、あくまでも鮎の命を、神さまからいただいて生きているんだという考え方が、私たち日本人の中にはあると思います。

ただ、このごろ倫理がやたらすたれてまいりまして、例えば、鮎釣りにしてもそれをスポーツにして1日に何匹獲ったとか、それで競争して商品を出すとか、むやみな殺生をしている状況があります。これは殺生でありまして、命をいただいているという気持ちではない。自分の本意で自分の楽しみのために鮎の命を奪っていつている。こういうことはやはりやってはいけないと思います。ですから、私なんかは鮎釣りに行っても、自分が食べる分だけ釣ったらさっさと引き上げてくるのですが、そういう心遣い、動物に対する、全てのものに対する思いやりというものが日本人の心にあるということも大事なことだと思います。だから、これは仏教の教えですが、この世に生きとし生けるもの、全てのものに命が宿っているというのが仏教の考え方です。人間ももちろんそうだし、鳥も獣も魚も、山に生えている木も草も、一木一草に至るまで神さまからいただいた命を一所懸命みんな生きているんだよという、そういう感覚が日本人の中にあることは確かであります。

ですから、日本人はどちらかというと、この宇宙も全てある、この大なるものを信じて生きているというところがありますから、ある人は、日本人はあまり特定の宗教にこだわっていない。だから、正月になればお宮参りをします。ある秋の日にはお寺参りをします。そして、盆

になったらお寺参りをします。先祖を敬います。そして、クリスマスになったらころっと忘れてクリスマスイブを楽しみます。何がなんだか分からないんだけど、それが日本人の1つの特徴でもあるし、こういう生き方をしている人間もいるということも世界の人たちは理解していただきたいと思うし。そのことを、実は、ドイツのヤスパースという学者が大変褒めているのです。東洋のこの考え方は大変素晴らしいんだと言っている説があることも紹介しておきます。

ですから、先ほど申し上げましたように、お互いに異なった文化の中で住んでいるわけですから、自分の国の文化に誇りを持って、それと同時にほかの国の文化に対して優越感を持たない。あくまでも謙虚に神さまからいただいた命を一所懸命生きているんだと。そういう気持ちを忘れないでこの世の中を過ごす。そうすると、こないだの大震災のようなときにも、いかに生きるべきかということもおのずから私たちの心で決めることができるんじゃないかと考えております。だいたいこんなところですか。あとまた・・・。

○安行 先ほどどの班だったかな。A班ですね、リーダーシップの問題が出ていました。実は、このライラセミナーはリーダーシップを養

成するセミナーなんです。ですから、リーダーシップというのは大変大事だと。皆さん方、最初の開校式のときに申しあげました、リーダーですね。しかも、リーダーを養成するリーダー、究極でありますから、皆さん方はリーダーのリーダーなんです。ですから、リーダーとはいかにあるべきかということについて、やはり一つ意見を整理していただきたいと思いますし、そういうことで、このA班の方、リーダーシップはみんなが身につけること、いい意見だと思うのですが、具体的な例をおっしゃっていただけますか。ほかの人たちに大変参考になると思いますので。

○玉越 A班の玉越です。リーダーシップを全員が身につけるとするのは目標の中でもあったのですが、私たちが今の状態で言ったら、私たちの上の人がリーダーシップをとられる場合が多いですが、その中で、私たち自身もリーダーシップを理解したり持っていたりすると、その人が何を言いたいのか、どういうことを目標に置いているのかということ私たちが理解してその次に伝えることができるという、説明する能力ができるというためにもリーダーシップという。新野先生のお話の中で、リーダーの条件の中に説明力というお話もありましたの



で、そういう中で必要になると思いますし、私たちは「きょうどう」という言葉を大きく使っているんですが、「きょうどう」の中において、これからのチームワーク力の中で、全員がそれぞれの役割の中でリーダーシップを発揮していくという、誰か1人がリーダーとなるのではなくて、その立場、立場、状況ごとにリーダーがそれぞれができていく、リーダーを回していけるということが本当に必要じゃないかということで、自分自身の成長にリーダーシップを挙げさせていただきました。

○深川　ありがとうございます。いい意見だと思います。1人だけがリーダーになってきり回すのではなく、リーダーというのはいろんな人が代わる代わる交代にやっていけということです。ほかにありますか。どんな意見でも結構ですよ。リーダーとかリーダーシップというの一番大事なことです。どうぞ。

○佐藤　C班の佐藤佑樹です。みんながリーダーシップになるという部分で、リーダーシップというの自立するということに近いような気がしていて、自立するというのは、自分の中の怠惰な自分であったりやる気のない自分であったり、さまざまな自分がいると思うんですが、それを引っ張っていくリーダーとしての自分というの自分の中にあると、より自分の成長とかに大きく関わってくるんじゃないかなと。

○深川　ありがとうございます。リーダーの心理的側面を完結におっしゃっていただきましたが、ほかにごさいませんか。いいご意見ですよ。なんでもおっしゃってください。ほかの聞いている人にも「あんな考え方があるんだ」と勉強になりますからおっしゃってください。

例えば、リーダーというのをあまり難しく考えなくても、小学校の先生もリーダーですし、

それから、青年団の人もリーダー、皆さん方もある意味で、地域社会で働いておられれば地域社会のリーダーでもあるわけですから、そのような形で、自分がリーダーの立場に立ったとすればどう考えるかということをおっしゃっていただいたらいいと思いますが。ありませんか。さっきちょっとね、あなただったかな、上からということをおっしゃったね。これでちょっと、リーダーというのはその言葉ならね、上の者が下の人を指導するというニュアンスがありますね。それもリーダーなんです。本来はそうかもしれない。指導するという。指導するという言葉自体、上の者が下の者。ところが、そうじゃなくて、私たちロータリーの世界では、お互いがリーダーなんだという形。先ほどのリーダーを持ち回りでいくというのと似たような考え方なんです。上も下も関係ごさいません。そういう考え方。横社会のリーダーシップをどうするかということ私たちはいつも考えます。縦社会のリーダー。それは会社とか政治の世界でもそうですね。昔さんがリーダーシップがないとかなんとか、あれは上下の関係で考えているんですが、そうではなくて、私たち一人ひとり、横社会の関係でリーダーシップを考えなければならぬ。これは1つ大事なことだろうと思います。

では、横社会のリーダーシップを発揮するためにはどうすればいいのか。その問題なんですね。皆さん方が同輩同士で友達同士で、その中で友達を引っ張っていく、そういうリーダーシップ。はい、どうぞ、谷村くん。

○谷村　はい、ありがとうございます。リーダーは誰か1人がリーダーというんじゃないで、集団全体がリーダーになっているということが必要んじゃないかなと思いました。例えば、今日なんかも作業をしているときに、絵を描くのが得意だとか、運びとか並びを考えるのが得意とか、字を書くのが得意だとか、それぞ

れの得意を生かせるような雰囲気づくりとか組織づくりみたいなものができることがリーダーシップの条件ではないかと思えます。

○深川 なるほどね。ありがとうございます。いいご意見だと思います。ほか何かございますか。なんでもいいですよ、思いついたこと。恥ずかしいと思うこともない。なんでもいい。中川くん、どう。なんでもいいよ。

○中川 リーダーですよ。

○深川 そう、リーダー。なんでもいい。

○中川 うーん・・・。

○ー ー はい。

○深川 ああ、出ました。どうぞ。助かったな（笑）

○ー ー よいリーダーになるためには、たくさんの要素、話術であったり行動力であったり、技術であったり、いろんなものが必要だとはもちろん思うのですが、詰まるところ、リーダーの言動がどれだけ説得力を持つかというのがとても大事だと思うのです。人を率いてという言い方はちょっと違うかもしれませんが、動かすにあたって、どれだけついてきてくれる人が、その人についていこうと納得して来てくれるかというのが集団を力強く動かすためにも必要だと思うので、この説得力をどうやって芽生えさせてつけるかというのは、どれだけ正しい選択、正しい言動を繰り返して模範となる行動ができるかというのに尽きると思うので、そういったことを心掛けて、日々誰かに見られているということを考えながら動くということが大事だと思います。

○深川 模範として動くという心ですね。大事なことだと思います。ほかに何かございますか。

○中川 言っていていいですか。

○深川 はい、どうぞ、どうぞ。思い出したな（笑）

○中川 僕が思うリーダーシップというのはその場をまとめていく力があるということだと思うんですよ。やはり、その場をまとめていく力という中で、いかに自分のことをさらけ出して、だめな部分もあるしいい部分もあるんだけど、そういうところをいかに全部出して行って、それを上手にというか、それをまとめられるというのが本当のリーダーなのか。格好いいイメージがあるんですけど、そういう部分のリーダーもあってもいいし、なんかへっぽこなんだけど「なんかこいつのこと好きやな」と言ってくれてついてきてくれるリーダーが僕は好きなので、そういうのもありなのかと思います。

○深川 ありがとう、いい意見だと思います。格好いいリーダーというのは、光輝いているという意味もあると思うのですが、まことに立派な。でも、ここで注意しなければならないのは、自分だけが一所懸命勉強して自分だけが自分を磨き上げて立派なリーダーになっても、それは本当のリーダーとは言えないです。というのは、誰かおっしゃっていたね、みんながリーダーシップを身につけるといことは、みんなが一緒に支え合ってそのグループをよくしていくことが大事だと思うんです。だから、自分だけが光輝いている、自分だけが一所懸命自分を磨いて立派になる、それは利己主義であって個人主義じゃないんです。そういうのは、自分だけが光輝くというリーダーになってはダメです。自

分のことはさておいて、ほかの人を一人前に育ててやろうと、そういう気持ちがリーダーとして大切だろうと思います。

そのことでちょっと今思い出したのですが、昔むかしの話ですが、藤村藤十郎という歌舞伎の名役者がいたのです。その人が京都である芝居を見に行きまして、その芝居の主演の役者が自他ともに認める名優で素晴らしいんです。それを藤村藤十郎が見ていまして、自宅に帰ったら、その演技をした座長がやってきました、自分は自信に満ちて演技をやったし、さぞ藤村藤十郎が褒めてくれるだろうと思ってお伺いしたところ、「だめだね、下手だな」と言ったんです。なぜだという理由を言わないもんだからすごすご引き上げた。一所懸命練習して、また次の何日かあとで舞台をやって、ぜひ見に来てくれと、藤村藤十郎を呼んで見に行ったんです。で、帰ってきて聞いたらやっぱりだめだと。「なぜでしょうか」と聞いたら、「お前さんの芸は確かに立派で見事だ。しかし、お前さんだけが光っている。脇役のほかの役者がみんなお前さんにひかれてしまって、観客はみんなお前に拍手を送っているけど、脇役に素晴らしい役者がいるのにそれには全然お前は目もくれない。自分だけが光輝いていい気になっている。それでは芝居全体をだめにしてしまうよ。だからお前は下手だと言ったんだ」と。

だから、自分が立派になると同時に芝居に参加している人たち全体が立派になるように引っ張っていく。それが本当のリーダーシップだなとも思うのであります。そんなことも今一つ思い出したので申し上げておきます。いい意見だと思いますね。なんでもいいです、そんなことで、私に対してまたヒントが出てくるかもしれませんからおっしゃってください。ありますか。タイラーさん。

○タイラー　すみません、B班のタイラーです。中川さんも言っていましたが、僕はリーダー

シップといったら誰でもリーダーになれるかもしれないと思います。例えば、僕、英会話で教えて、子どもさんたちは、タイラーさんすごいと思っているから、何も話して「ああ、なるほど」と思っていましたから、僕の妹と弟は、タイラーのことをなんでもできたらいいと思っていたから、みんなは、なんでもどこでもリーダーシップやっているといます。

○深川　ありがとうございます。その自信は大事にしてください。ほかに何かありますか。ないようでしたら、今、もう一つ思い出したので言っておきます。これは今から5年くらい前にNHKのテレビで放映されましたが、岐阜県に、芸者の置屋、芸者を置いて芸子さんの芸を育てる仕事をしているところがあった。その女将さんで、確かサトウカスミさんとおっしゃる、これが置屋の経営者なんです。そしてコマコという芸者を一人前の芸者に育てていくんです、一所懸命。そしてやっとなん年もかけて一人前にコマコを育てあげるんです。そのコマコがいよいよ独立して新しい置屋の経営者になる。そのときにサトウカスミという経営者がコマコに論じた言葉があるんです。それはどういうことかということ、要するに、「お前だけが一所懸命芸を磨いて立派になってはだめですよ。新しく入ってきた新入りの芸子さんのこともいつも気に掛けて思い入れを掛けてやりなさい。お前がそういうことをやることによってお前が立派になって、そして新弟子もいっぱいになるんですよ」ということを論じた。

それで、置屋を始めたんですね。新しい新弟子が入ってきた。ところがその新弟子が、コマコという新しい経営者の前で挨拶をしたんだけど最後まで一言も話しかけることができなかった。どうしてかということ、結局コマコというサトウカスミに育てられた立派な芸者さんは、すごいカリスマ性とか存在感。そういうものに圧倒されて、一言も言葉を発することができな

かった。コマコにすれば、それは新弟子がまず入ってきたんだから、新弟子のほうから私のほうに声を掛けるのが当たり前だという考え方であったんですが、それは無理であります。新弟子のほうは何をしたらいいのか全く分からないのですから、それをやはりコマコのほうから優しく思いやりの心でね、まさにコマコが新弟子と対等な立場に立って、今さっき平等のリーダーシップと言いましたね、対等の。それと同じ、同じ目の高さになって、コマコのほうから新弟子に話しかけてやる、そしてお互いに仲良くなるということが一番大事なことであります。

私は、この開校式の始めに、一番大事なことは、皆さん方がまず仲良くなっていただく。皆さん方はみんな平等、対等な人たちなんだ。そしてこのライラの3泊4日で仲良くなってください。そして、心を開いてなんでも話し合ってくださいと申し上げた。そのことと同じことです。コマコはやはり、新弟子に対して優しく思いやりの心を持って、なんでも話せるような置屋の雰囲気を作り出す。これが大事です。これをロータリーでは親睦といっています。そういうものを、場の雰囲気を作り上げないとだめですよ。それが、コマコ自身も大きくするし、その新弟子も立派な芸子に育っていくだろうということで、これもやはり1つのリーダーシップのあり方だと。ですから、コマコ自身がカリスマ性を発揮して、コマコ1人で光輝いたって新弟子が育たなければだめだし、そういうことです。だから、リーダーシップというのはそういう意味で、立派なリーダーになるために一所懸命勉強する、いろんな知識も入れる、いろんな体験もする、経験もして立派になっていく。そして、立派なカリスマ性を身につけるといいたいことなのですが、それだけではだめだよ。やはり、それと同時に、先ほどのご意見みたいに、みんなと共にリーダーになっていく。そういうことが一つ必要だろうと思います。

あと、リーダー、ちょっと難しく考えてしまった。安行さん、次。

○安行 何もないです。

○深川 何もないと言ったら終わっちゃう。今井先生、なんかコメントちょっとあったら。ありますか。もうなければ終わりますが。簡単なコメントを。

○今井 私は今リーダーシップということを知っていて、本当は、リーダーシップというのは誰でも持っていてほしい。リーダーと聞いたら、今、ずい分たくさん種類があります。例えばお茶のお師匠さんのお茶のリーダーもあるし、何かを勉強するときの、この前の講義のような先生が、自分の専門の見地からあなた方に何かを言う。あの人もやはりリーダーですね。インストラクターという言葉を使えばコーチという言葉もあったり、いろんな言葉がある。その中から、私が誰でも持っていてほしいというのがリーダーシップ。

これは、私の持っているものをシェアして私の持っているものをよりよいものにしていくという、そういうことを考えてくれているような人たちが、自分の持っている心構えとか考え方を発揮していただきたい。だから、ライラをここでやってきているということは、皆さんが持っているリーダーとしての役割をより高いものにするために、いろんなことを学んでほしい。世界のことを学んでほしいし、今、隣の人がどんなに苦しんでいるか。あるいは、東北の人たちが今どんなことで毎日を過ごしているか、考えながら、私たちは何ができるか。遠くにいて何もできないけれど、このことを一つ考えてみたらどうだろうかと、皆さんが持っているグループを指導していただくと。そういう意味でリーダーシップというものを、これからの社会に発展していきたいと思っています。それ

も、皆さんに頼りにしていますからしっかりしてくださいね。そしてそれを發揮してくださいというのがこの会の趣旨ですね。あまりしゃべると、私、今晚また・・・。

○安行 今晚と明日もです。(笑)

○深川 今井先生が90でしょう、僕が80、それで60。

○安行 60違います。60と違うんですけど、僕は、第6回のライラの受講生です。今から27年前の受講生です。じゃあ、そろそろ時間が迫ってまいりました。最後に、僕は、日本人というのは非常に命を大切にしてきたということもお分かりをいただきたいと思います。あらゆる生命に対する言葉を使ってきました。「さようなら」という言葉です。「さようなら」は世界中の言葉と違います。グッバイでもない、アウフディーダーゼンでもないサイチエンでもないフォオエバーでもない。みんなは神とともにとか再び会いましょうでした。「さようなら」だけは違います。この言葉だけ。あらゆる生命体に使います。例えばイルカを殺しても「さようなら」でした。犬が死んでも人間と別れるときも「さようなら」でした。「さようなら」。今、あなたとお別れをしなければならぬ。非常に辛い。あなたの存在というものと、あなたに対する善、意識とここでお別れをしなければならぬ。そういうことならば、そうであるならば、私は大変辛いんですけど、あなたのことを慮って、思いやってあなたとお別れをしましょう。そうであるならば「さようならば」で「さようなら」を使いました。

日本人は犬をペットで飼って別れるときも、牛を飼って別れるときも、イルカでも魚でも人

間と別れるときも今際(いまわ)ということをやった。今際。今。今の際。今際(いまわ)ということ。今このとき、一瞬、この輝き。そのときにあなたの存在を認めて、でも辛いけどお別れをしましょう。そうであるならば、そういうことならば「さようならば」ということを使いました。で、別れようとしています。だから命であるもの限りそれを使いました。最近はいよいよバイバイだけです。日本人はそういうことを使わなくなりました。ものと別れるときには、そういうことならばを使っていたんです。そうならば「さようなら」、世界で日本だけが使っている。お客さまを送り出すときにも、あるいは自分の家族、あるいは自分の友達と別れるときにも「さようなら」ということを言ったんです。世界で一番美しい言葉だった。それを使わなくなってしまった。そうであるならば。あなたの存在を認めてあなたの命を認めて、あなたのことを慮って、じゃあ私はあなたをあえて引き止めることはできない、だから、「さようならば」、そういうふう「さようなら」を使いました。

リーダーである限りは人の気持ちも分かりましょう。人が何を考えて何をしようとしているのかを、やはり考えてあげよう。そういうことを、やはり日本人では考えていた。だから、「さようなら」ということを使った。これは世界で一番美しい言葉です。そうであるならばということ。だから、そういうことを思ってこの最後の夜を、「さようなら」を明日に使っていただくために、きょうの晩を楽しんでいただきたいと思います。時間になりました。あとは、最後の夜の説明と、明日にむけての説明といろいろあります。じゃあ、これで終わります。もう一度みんなで、素晴らしいことを書いていただいた。拍手を。ありがとうございました。

カウンスルファイアー

元国際ロータリー理事・パストガバナー(2680地区)
RYLAセミナー顧問

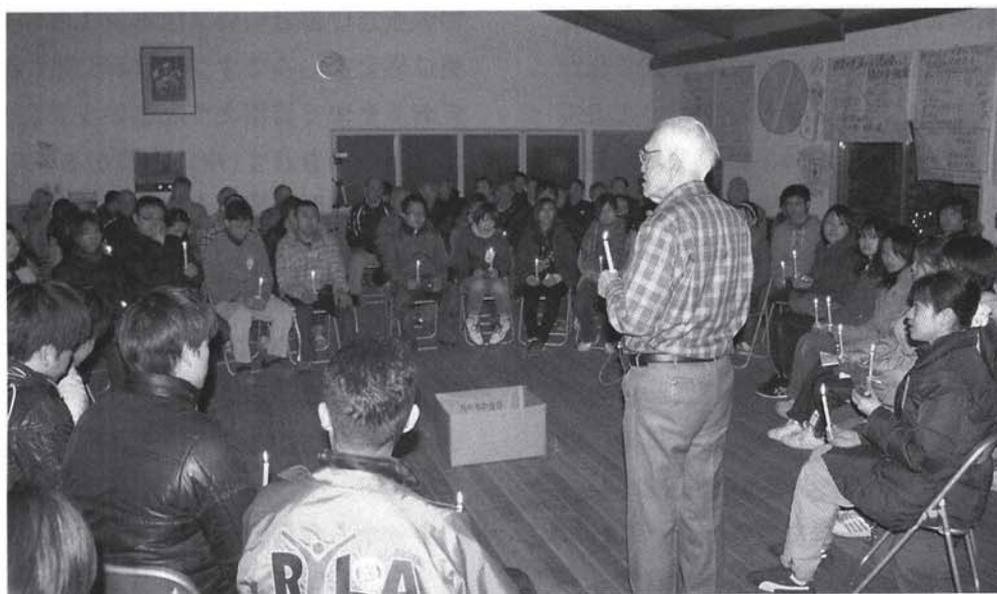
今井 鎮雄 (神戸西RC)

(電気を消した講義室、灯りは足元を照らすろうそくのみ。受講生は外から入場し、講義室入り口でろうそくを受け取る、BGMは「遠き山に日は落ちて」ギター演奏)

雨のために場所を変えました。大変、皆さん方には窮屈だと思えますけれど、しばらくキャンプファイアーを焚いた思いを持って、ここでしばらくの時を持ちたいと思います。このRYLAの33年の歴史の中で、それぞれのキャンプファイアーを焚いてまいりました。そのキャンプファイアーを受け継いだトーチが、今入ってまいります。そのトーチを迎えるために、しばらく静かに注目しておいて下さい。

(トーチが入場、今井先生のろうそくに火を移す)

私たちは今、RYLAの3日目の晩を迎えます。最初の日に、私たちはそれぞれの先輩方から、今の私たちの世界に、どんなリーダーシップが必要なのか、どんなリーダーを育てたいのかということ、講義を通して教えていただきました。そして今日は、朝から皆さんがそれぞれのキャビンの中で、自分が一人になって自分の問題を考えたり、あるいはバズセッションを通して、自分達のこれからの世界の中で、新しく責任を持つ世代の人として、どういう決意をしたらいいのか、何をすれば今の世界の中、最も人間として尊い奉仕ができるのかを考えながら過ごして参りました。そして今、私たちはこのカウンスルファイアーを焚くことになりました。残念ながら、雨でキャンプファイアーをファイアーカウンスルの中で焚くことができません



ので、今日はキャンドルサービスの形に代えさせていただきます。大変、その意味においては、プログラムが不自由になりますけど、そのことをお許しいただきたい。

さて私たちは今、キャンプファイヤーを焚くということがどういうことか、リーダーの皆さん達はもうよくご存じだと思いますけれど、キャンプファイヤーを焚くときに2つの方法があります。1つはボン・ファイヤーといって赤いかがり火をまん中にして、皆がゲームを楽しんだり、歌を楽しんだりしております。ところが、今日のカウンシルファイヤーは、私たちはここでは、カウンシルリングの上まで上がって、火を見ながら私も話をさせていただき、そしてまた皆さんも今日の一日、昨日の講義色々聞きながら、自分がどのような決意を持って、自分の責任を次の時代において果たすかについて考え、出来ればその決意を皆さんの松ぼっくりの中に入れていただきたい。今日は火を焚くことが出来ませんので、リーダーの諸君達が真ん中に箱を置いてあります。その箱の中に投げ入れることによって、後で一緒に焚かせていただきます。皆さんの手元に皆さんがお書きになった決意は、誰もが見るわけではありません。皆さんだけが決心をしてここに入れる。本来ならば、その光によってより一層、火が燃え上がり私たちの顔が目に見え、そういうふうな仕組みになっておりました。そのことを覚えながら、一人ひとりが余島で過ごした意味を考えていただきたい。しばらくの間、私の手元にあるこのろうそくの火を見て下さい。3日間、皆さんと一緒に歩んでその中で、お互いの友情を見つけ、そしてまた、ロータリーの皆さん達が是非、次の時代を担う方として選んだあなた方に、パトタッチをするために費用をかけ、時間をかけ、ここに集まってきて下さいます。見事にその志を継いで、この島を去ることを祈りながら、しばらくお話をさせていただきます。その前に、この火を皆さん方、一人ひとりにお分け致しま

す。こっち側からその火を次々にサークルの中に伝えて下さい。

(今井先生のろうそくから受講生が順番に隣へと火を移していく)

皆さん方が入ってこられたとき、ここは真っ暗でした。足元が分からない程、真っ暗の中に皆さんが入ってこられました。そして、私が一つのろうそくを受け取った時には、私の周りだけが少し明るくなって、皆さんのところは真っ暗でした。しかし、その灯を分かち合っていて、こうして皆が灯を点けた時にはどうでしょう、小さなろうそくではありますが、お互いの顔が分かるように、隣の人の顔が分かるようになってきたじゃないですか。どんな光をどのように分け与えるかによって、小さなろうそくの灯でも、私はこの中にすべての人の顔が見えるようになったということを見つけられました。ただ、こうして灯を点けるときに、ここで本当ならば、キャンプファイヤーのフレームを作らなければなりません。薪を組み重ねているわけです。上のキャンプファイヤーサイトでは、既に薪を井型に組み上げておりましたけれど、雨なのでここにしました。しかし、なぜ井型に組んで火を点けるといいますと、1本の薪だけでは実は燃えないんです。初めは燃えますけど、放っておくとすぐに消えてしまいます。しかしそれが組み合わされて、中に隙間があいて、風も入ってきて、お互い同士がお互い触発されて、赤々と上にキャンプファイヤーの火が燃え上がるんです。1本の薪では燃え上がらない、今日はろうそくですから別です、薪でやる時は1本では燃え上がらない。小さいキャビンだとう頭を三角にした組み方をします。大勢の時は六角形に組んで、その周りに皆が集まります。一つの火を分かち合うという意味です。

今日は今まで講義を聞いて下さった皆さん

が、それをまとめるために一所懸命、苦心をされました。リーダーの安行さんがこれはどういう意味があるかということを考えさせてくれました。私にもいくつかの経験があります。先程、深川リーダーが言われたようにディーン・リーパーという男はアメリカの宣教師ですが、実は私と同じ年で、そして私と同じように彼はアメリカの軍隊に行きました。私は海軍で出征しました。そして最後に日本は戦争に負けて、私は捕虜になる兵隊たちを皆連れて、一緒に九州の大村まで帰ってきました。その後、神戸に来て、もうリタイヤしてしまいましたが、自分のライフワークとして、青少年と一緒に生きるという決心をしながら生きてきました。ディーンは日本の捕虜の人達と出会ったときに、何と捕虜の人達が礼儀正しく、戦争にも真剣に向き合いながら、なお、新しい日本をつくらないといけないという気持ちを持っていることを悟って、この日本を助けたい。今まで敵国であったけれど、今日からはあの人たちと友達になりたい。彼は大学を卒業して軍隊に入ったんですが、この戦争が終わり、アメリカに帰り、日本の人達のために何かをやりたい、戦争をした国の人達と平和を作りたいということで、もう一度勉強し直して、そして、私がちょうど捕虜生活から帰って来た時とほとんど同じ時期に、日本に赴任してきました。片言でした、片言でしたので十分に話が出来ないものですから、彼は来る前に手品を一つ覚えてね、その手品で皆を笑わせながら、他の人達と話し合いをしました。そして何年も何年も一緒に生きて来たのです。先程深川リーダーがお話したように、彼は洞爺丸で亡くなりましたけれど、自分の着ていたライフジャケットを他のライフジャケットを持たない人に渡して、そして「大丈夫だよ、船は沈まないと思うから、皆落ち着こうね」と言っていました。残念ながら亡くなってしまいました。今、そのディーンの子、私が出会ったときはこのくらいの小さな坊やでしたが、広島に行っ

て、原爆のことを考えて、こういう悲劇は世界からなくしたいと言って、広島市の平和研究所の所長になり、理事長になって、そして原爆の廃絶の運動と一緒に頑張っております。でも彼は一生を平和のために捧げようと。私たちは色んなアイデアがあるけども、実は実行するということはかなり難しい。その場になった時、それが実行できるかどうか、そういうふうなことを決心できるかどうかというのは、日頃、私たちが何によって生きるかという夢を持っていないといけないということです。皆さんに持ってもらいたいその夢を、この2日間に渡って語り合い、皆さんの夢は本当は何だろうか。ただ語り合うだけではなくて、それを実行する熱意はどこから出てくるんだろうかということを考えておいてほしいんです。

これも2、3年前のこのキャンプで話したことがあるんですが、日本が戦争に勝っている頃、ちょうどタイからずっとビルマを通して、シンガポールに出て行く、そういう作戦を立てて、日本はどんどんそしてシンガポールを陥落させていました。山下将軍がターシバルと出会ったときに、色んなことを話をして、最後に、有名な話ですが、「それでお前は降参するのか、しないのか」イギリスの向こうの隊長は、戦争はもうしたくないから我慢しろとか色んなことを言ったんでしょう。最後に山下将軍は「あなたは捕虜になりますか、なりませんか、YES or NOで答えろ」。そしたら、「しかし」と言った。彼は大きな声で「YES or NO?!」と聞いた時に、向こうの司令官が「YES」と答えた。そして多くのイギリスの兵隊たちが、日本の軍隊の捕虜になってビルマに送られるんです。もうほとんど、食べるものがない。そんな時、列車が通っていくと、ちょうど途中で日本軍の将兵達を乗せた汽車とすれ違うことになります。すれ違う時に、捕虜になってますが元気なイギリスの兵隊たちが、向こうを見ると勝者だけれど、怪我をした日本人達が乗った汽車とすれ違う。そう

したときに日本の兵隊の「水をくれ、水をくれ」という声が聞こえました。列車が止まっている前には、日本の兵隊がその汽車全体を警護するように、鉄砲を構えて並んでいる。あるイギリスの兵隊が、片手に水筒のふた、片手に水筒を持って、自分の列車から降りてきます。日本の兵隊が水が欲しいと言っているのを聞いて近づいてきます。ところが周りにいた警備の日本兵たちが「動くな、待て」という、日本語なので通じたかどうかわかりませんが、とにかく、そこから動いたら撃つぞと言います。その捕虜は一步步一つずつそばに寄る。手に持っているのは水筒であり、水が欲しいという日本兵に渡そうと思ってコップを持っているということに気が付きません。一歩、一歩、近寄ってきます。それを見た他のイギリス兵が、同じように自分の残り少ない水筒を持って、前に並んでいる日本兵に近づいて行くんです。そしてついに水を注いで日本の兵隊さんに飲ませてあげる。日記を書いている人が、なんて書いたかということ、日本の兵隊さんが「タンキユウ」と言ったと。Thank youですね、はっきりしない日本語のような発音だったけれど、それでもありがとうと言った。それを聞いた時に、自分達は戦争をしていたけれど、人間としてお互い同士が、何とかして相手のことを理解しようとする姿が見えた。彼はそれをイギリスに帰ってから、一つの本の中に書きました。「Over the river Kwai」という本です。その「クワイ川を越えて」という本は翻訳されて、日本のそのころの若い人達、昭和20年少し経ってからの話ですが、多く読まれて、若い人達が大変感激しながらそれを読んだ。どんなにあれしても、憎しみ合わずに、お互い同士が相手を認めあったり、相手の苦しみに何か出来ないかと考えたときに、自分の命を犠牲にするかもしれないけれど、なおかつ、それをして相手と仲良くして行きたい、そして新しい世界が切り開かれることを望もうじゃないかという気持ちがそこには表れていた。昭和20

年、1945年からもう既に60年以上、年が経てます。すっかり平和の時代が続きました。日本は素晴らしい国になってきました。ところが、その間に私たちは戦争という言葉で日本だけは無くしてすんだんです。他のところでは戦争がありました。日本は無くして済んだんです。そういう状態を、私たちは言葉として平和、平和と言いますが、実はそれは何だろうか。今日のテーマはそれでしたね。私たちが本当に平和を求めるのなら、全くの見ず知らずだけれど出会った人に、小さな自分の出来る事を、いかにすれば自分の水筒に入っているその水を分けることによって、お互い同士が、いろんな思いを持って、日本の兵隊も飲んだでしょう、イギリスの兵隊も渡して、飲んで「タンキユウ」と言われた言葉に、感激しながら帰って来たというそのシーンは、戦争に行った私もそのことを思い出した時に、心がジーンとする思いがしました。今、日本は大変難しい時代に入っております。その話は、明日、私が話をする時間に言いますが、みなさんに今日、この会を通じて分かってもらいたいことは、今、皆さんが持っているろうそくは後、何分位持ちますかね？だんだん小さくなって消える。キャンプファイヤーの火も、大きくなってだんだんと小さくなって、終いには灰になって終わっていきます。でもこうして皆の顔が見えるような灯りをともしているろうそく、それはただ、ろうそくを持っているだけではない。さっきろうそくを持っていた時も真っ暗でした。しかし、新しい世界を作って行こうと考えた時に、一つのろうそく、それは皆さんの中にこのRYLAを通してともされた火は、だんだん広がって大勢がこうして持つならば、言い変えたらRYLAの諸君達が、こうして持ってそれぞれ自分の地域の中に帰って行って、何か私にできる事はないかと考えながら、少しの水を子供に、年寄りに、被災者に、あるいは遠いところの知人か、誰か自分の中で、身近に感じる人達に分かち合ったら、私たちは新



しい世界を考えることができるだろう。私たちの願いは何か。その1本のろうそくの火になってくれませんかというということです。ただこれは火を点けておいておけばずっと灯るものではないのです。火を点けるためにろうそく自身は頭からだんだん減っていくんです。言い変えたら、何かろうそくは自分の身を焦がして、何かろうそくは自分を見つめながら、自分の身を削りながらも、私たちに光を与えてくれることを覚えておきたい。私たちがキャンプファイヤーをする時のトーチは、火を灯しますと言って歩いたたいまつのことです。今日はこの後で、リーダーのロータリアンの皆さんが、昨日、おとといから一所懸命にして、実は上でやったトーチのミニチュア版みたいなものを作って、皆さんに1本ずつお渡ししようと。そして皆さんのキャビンには、ここの火を持って帰ってもらって、明日までおいておいてもらおう。そして私たちがここで受けたものは何か？世間を、社会を、世界をあるいは、身近におところの東日本大震災の被害を受けて苦しんでいる人たちに、何とか自分達の小さなものを捧げることができる、そのことによって私たちの時代がどうなったか、これも明日お話しますが、そういう中で、一つのある時代の担い手としての皆様でしたが、そのことを覚えていてくれたらあ

りがたい。

実はこんな派手なシャツを着ているんですが、これは数年前に世界のロータリーが集まってスコットランドで世界大会を致しました。ご存じのようにスコットランドという所は家紋がタータンチェックで模様が決まっています。この模様は何々さんの家族だ、こういう色のチェックは何々さんの家のチェックだと、男の人もスカートをはいてチェックの模様ですが、ただの模様じゃなくて家紋として通じているんです。そのスコットランドでこんなことを考えました。ロータリーは世界中にあって、そのロータリーの人が全部平和を願っている人の先頭に立って、世界の人達が本当に仲良くなるようにしようと、フェロシップという言葉を使っています。親睦と言う言葉を使っています。しかしそのためには私たちが誰かに奉仕をしたり、何かに捧げるということをし合って、皆が家族になろう。それでロータリーファミリーのマークなんです。世界中どこへ行っても、このシャツを着て、このマークを着けていれば、「ああ、あなたはロータリーの家族の一員ですね」役員であろうが、一メンバーであろうと関係ありません、皆が家族の一員です。その時に私も役員をしていたものですから、あなたも着なさいと帽子とチョッキとね、このシャツとね、それか

らマフラーの4点をももらったことを覚えています。身近にそれがあつたんです。あなたがロータリーと共に重なつてくる。一緒にここに来て受講してくれたあなた方の名前はロータリークラブの会長さんから修了書をもつた時に、ロータリアンと並んで、あなたがたはライラリアンという名前と呼ばれます。ロータリーの人達はライラリアンは私の家族です、そういう気持ちを私たちが表すためのシンボルでありました。それはただ単なるシンボルではなくて、これからもみんなと手を繋ぎながら、そういう世界を築いていく、そういう決意をして、これを光らしているということ覚えておいて下さい。

みなさんは先程、松ぼっくりにご自分がどうして生きるか、自分の人生の中の最も大事なものの、その時代を担う時に、何を中心に生きるかということを考えて松ぼっくりに入れた。それを誰にも見せなくていいから、自分が感じたことをここに書いて、光とともに自分自身にそれを捧げて下さいとお願いをしました。どうぞ皆さんが持っている松ぼっくりを出して、皆さんのここにきて暮らしてきて、そしてこれから自分達の人生をどういう方向で進むかという決意がそこに書かれていると思います。私が読むわけではない、他のリーダーが読むわけではない、カウンセラーが読むわけではない、あなたがたがあなたがたの心と一緒に考えたものがそこに書かれている。本当なら火が燃えているんですが、今日は室内なので火がありませんが、そういう思いを込めてそれをこの中に、静かに自分の決意を表して入れて下さい。A班はどこですか。これをファイヤーのフレームにして下さいとリーダーが用意してくれましたのでこの中に入れて下さい。一度にではなく順番に一人ひとり行きましょう。あなたの決意をどうぞ。

(各自、サークル中央のおかれた箱の中に松ぼっくりを静かに入れる)

今、受講生の皆さん達は、自分達のここにおける決意や、これからの気持ちを込めて松ぼっくりを入れていただきました。それをサポートするロータリアンがおられますが、サポートされるリーダーの方で、松ぼっくりをお持ちの方はこちらの端から順番に入れてくれませんか？皆さん方は、皆さん方の時代を築くために努力して下さい。その時代を築くために、このロータリアンの皆さんが、皆さん方の後ろでそれを心から祝福して、拍手をもって送り出し、皆さん方の活躍を期待しながら、応援していくという誓いをしてくれます。そのことを覚えておいていただきたい。

3月の末といえば、ロータリアンの方にとっては、大変大事な時なんです。自分の会社の、1年の最後の決算をしなければいけない時期なんです。それにもかかわらず、皆さんが、本当に新しい時代を築いてくださるために、お願いしますねということを考えながら、ここにその時間をくれました。中にはお仕事の都合で昼間、会社に帰って夕方からまた戻って来てくれている。皆さん方と一緒に過ごしたこうした人たちのことも覚えていて下さい。その人達が心から念じていることも覚えていて下さい。しかし一番大事なことは、あなたがたが、次の時代を担うんですよということです。あなたがたが次の時代を担うときに、あなたがたは何をしますか？自分のために生きてますか？世界のために生きてますか？新しい時代の中で、多くの人と手を繋いで歩いてくれますか？それが私の願いであります。どうぞそのことを覚えながら、離れてまた集まる時に、一緒に歌う歌として「われはふくろう」という歌を教えてもらいました。この「われはふくろう」というのは、実はライラリアンの人達だけが覚えているのではないのです。このキャンプに来る若者が、何か集まった時に一緒に歌って、私は余島でこんな生活をしたということを思い出す時に歌う歌なんです。10年経ったら0歳の子も10歳になります。30歳

の人が10年経たらいつの間にか40歳になります。皆さんもその意味においては、見習わなくてはならないものを持ちながら、歩まなければならぬ時間はそう長くはないのです。

それでは「われはふくろう」、これは私たちの合言葉になりますから、どこに行っても誰か余島のキャンプに来た人がいたら、その人に「われはふくろう」知ってるかと尋ねてみてください。途端に仲良くなるはずですよ。一度一緒に歌いましょう。

われはふくろう たのしきふくろう
つとめはたし こころさやか
こよいうれし ほしあかりに
わがふるすへ かえらなん
ああ、よしまのもり われらがふるすへ
ああ、よしまのもり われらがふるすへ

はい、ちょっと立ってみてください。ろうそくの灯は消していただいて結構です。隣同士の人と両方の手を握り合ってくれますか？手を前で交差して、隣の人と握手をする。わかりますか？この手を前で交差して握手をして作ったサークルはフレンドシップサークルといいます。そして静かに目をつむって下さい。皆さんが点けたろうそくの灯が消えると、お互いの顔が見えなくなります。でも今、お互い同士が作った、フレンドシップサークルの手を目をつむって、ぐっとしっかり握ってみてください。隣の人の血液の動悸が聞こえますか？こうして、私たちは2011年のRYLAを、明日終えようとしています。でも、リーダー達、ロータリアンは、あなた方一人ひとりのことを忘れません。今日、来てくれた12回のRYLAの受講生だった彼は、学校の転勤のことがあって、さっき来て、ご飯だけ食べてすぐに帰りました。それでも、ここに来たことをいつまでも大事にしてくれています。私たちが組んだ、このサークルもどうぞ大事にして下さい。そして、それぞれの場所にお

いて、このような輪になって、お互いが「サンキュ」と言い合えるような、そういう世界をあなたがたが作って下さい。私たちは戦争もしてしまいました。震災などで大きな被害を受けました。そして何とか自分達の住んでいる場所を、何とか保つことができました。しかしあなた方が今また壊れかかっているこの時代と、この場所と、もう一度助けてくれるように力を合わせて下さい。そして私たちはこのサークルの中に大勢の人を包み込むことができるような、そういう支援を私たちが持っているということ覚えておいて下さい。ありがとうございました。どうぞ手を離し、元に戻って下さい。

もう一度、灯を点けますから次々に灯を分け合ってください。今、皆様から集めた松ぼっくりは、皆さんが帰るその道の目の前の広場のところで焼いてもらいますから、その前を通過してそれぞれのキャビンへお帰り下さい。ランタンはどこですか？今から渡すランタンはキャビンに帰られて、キャビンタイムの時に真ん中に置いて、話し合っただけで下さい。よかったね、とか悪かったねとか、あの爺さん、うるさかったねとか、私がそういって、笑っているのはロータリアンだけです、皆さんはそんなこと言いませんよね。

それでは各班から2名ずつ、真ん中に出てくれますか？どなたか決まっていますでしょうか？自分達のろうそくは消していいから、このトーチを持って、トーチの先を集めて合わせて下さい。では、この火をそれぞれキャビンに持って帰っていただきます。

(トーチを先頭に各班静かに講義室を後にして、キャビンへ向かう)

講義 3

「未来をみつめよう」

元国際ロータリー理事・パストガバナー(2680地区)
RYLAセミナー顧問

今井 鎮雄 (神戸西RC)



プロフィール

● 略歴

1980年～81年 RI第2680地区ガバナー
1982年5月、1983年5月
国際協議会グループリーダー
1984年～89年 国際ロータリー青少年委員
1995年～97年 国際ロータリー理事
1999年～2000年 国際ロータリーRYLA委員
2003年～08年 ポリオ・プラス・パートナー
グループ委員長補佐
メジャー・ドナー、米山功労者

● 公職

兵庫県青少年愛護審議会会長
神戸市青少年育成協議会会長
(社福)神戸市社会福祉協議会理事長
(財)兵庫県青少年本部顧問
(財)PHD協会理事長、等を務める。

阪神淡路大震災から東日本大震災を

今回のRYLAは、私にとって重い意味を持っています。つい先日、東北で大きな地震がありました。地震といいますと、16年前の阪神・淡路大震災当時のことを思い出します。1995年1月17日未明に地震が起きましたね。夜が明けるとすぐ、私は御影の自宅から車を出しました。そのときはまだ道路が使えたので、運転しながら、焼け出された人々が布団を被っている街を見て回りました。神戸市役所に寄り、神戸YMCAに着くと、プールに水がそのまま残っていた。飲料用にはできないが、近辺の方に使ってもらえると思いました。そのあと、当時私が責任を持っていた短大を見に行くと、不思議なことにランドピアノが置かれていた同じ場所でひっくり返っていました。あの大きなピアノが飛び上がって逆さまになるなんて考えられますか？これは大変な事態になったと思いがら、自宅周辺を回って家に帰りました。

少しすると日光の近くの鹿沼のロータリーの方から電話がかかってきました。「こちらのロータリーの人たちが炊き出しに行きます。そちらへ着いたら指示を出して下さい」「いまは被災者が自動車の中で寝泊まりしているような状況です。寝る場所も食べるものもないから、もう少し後にしてくれませんか。「そろそろお宅の近くに着く頃です」。やがてうちの前で「こんにちは。どこでやりましょうか?」。炊きだしの場所を探し、御影の駅の前でやろう、あそこは水道が使えるということで、地震の2日目から炊き出しをしました。

炊きたてのご飯でおにぎりを作ると、熱くにぎられなくないませんか。そこで、マイクで「皆さん、関東の鹿沼からロータリーの人が応援に来てくれました。どなたか、おにぎりを作るのに手を貸してくれませんか!」すると、たくさんの方が手伝いに来てくれた。「お宅、どこにお住まいですか」なんて話をしながら、皆でおにぎりを作りました。だんだん仲良くなっ

て、「もう遅いから、お帰り下さい」と言いますと、「家では何もすることがありません」。それはそうですね、家に戻っても水もガスも電気も来ていない、何もすることがない。ここではお腹をすかせている人におにぎりを渡せる、いいことができたと感じられる。いつか思い出会を、と思いつけばよかったんですが、そんな気持ちの余裕はなくて、お礼を言って帰ってもらいました。そんなふうに声をかけたら、一緒になって一つの仕事を自主的にやってくれる大勢の人がそこにいました。

1995年はボランティア元年といわれるように、阪神・淡路大震災の被災地へ大勢の人が被災者に手を貸そうと来てくれました。東京では若者たちが、「ボランティアに行ったか?」「どこへ?」「神戸さ」「まだ行ってない」「遅れてるな」。ある青年から家に電話があって、「神戸で泊まる場所がないから、泊めてください」。何で来たのと尋ねると、「流行に遅れないようボランティアをしに来ました」。ボランティアへの入り口はなんでもいいんです。実際にボランティア活動をして、そこで発見したいろいろな問題が切実に彼の心に響いたようで、4、5日ボランティアをしたあと、この体験で考え方が変わった、と言っていました。

少し人々の様子が落ち着いた頃、新野幸次郎先生一神戸大学の学長をされた方から「何人かの方に集まってもらって、この地震の後、どうするかを考えるので来ていただけませんか」と電話がありました。2月3日、神戸大学の一室に識者や文化人、新聞社の人が集まりました。こんな大地震のあと、地域の人たちのために何をすればよいのか。被災地の復興のために何ができるか考えようじゃないか。震災から2週間後に開かれたこの会議で、兵庫の復興への道筋ができました。まず、大地震に耐える都市づくり、交通網の整備。道路が通れないと支援物資も何も入ってこない。ヘリコプターで運ぶ方法もありましたが、市内の道が通れな

いので、物資を必要としている人たちへ届けられない。大阪へ行くにも住吉か西宮まで歩かないと電車が通っていなかった。一つの仕事をし、これができたら次はこうする、ここができたらこうなると考えて、兵庫の復興を考えようというのがその会議の主旨でした。

その後、私は2月の終わりにアメリカへ行かねばなりません。その年の7月からロータリーの国際理事をすることになっていて、アメリカで研修を受けるためです。東京に95歳になる母がいたんですが、テレビで神戸の震災の様子が映るたびに、孫はどうしているかと心配で食事が喉を通らなくなったんです。見舞いに行き「僕たちは元気だから、心配しないでいいよ。」何度もそう言ったんですが、亡くなりました。私は東京で母の葬儀を終え、熱いお骨を持って関西空港へ飛び、喪服を背広に着替えてアメリカへ行きました。

阪神大震災のあと、いろんな分野の人々が復興策を考えました。新野先生も、復興へ向けてどのようなステップが必要かと考えておられました。不測の事態が起きたとき、目の前の出来事に対処することは誰でも考える。大事なのは、何をどのように復旧させ、その上で復興させていくかを考えることです。今回の大地震、大津波のあった東日本の損害は、神戸どころではないですね。それをどのように次のステップへ持っていくのか。食べることや生活の基盤をどこへ置くかを考えるのは大事な仕事ですが、被災地が広範囲で地域によってそれぞれ状況が違います。どこかにデポジットを作ってそこから情報を送ってもらい、それに一つひとつ対処することなど考えなくてはならない。これが今回のRYLAの始まる前に現れた、私たちへの重い課題です。

地震後2日目に、大津波で福島原子力発電所が被害を受けた、微量の放射能が出ているかもしれない、しかし皆さんは心配しないでください、と報道されました。そのうち、福島原発

から20km圏内の人は避難して下さい、だんだん半径が広がって、いまでは30kmまでの人は気を付けて下さい、と言っていますね。スリーマイル島の事故のレベルを超え、しかもまだ将来の見通しがつかない。もし東京都が避難区域に指定されたらどうなるか。千何百万人の住民が一気に人口二百万人ほどの回りの都市に入ってきたらどうなるか、首都機能をどこに移すのか。日本にとっては非常に大きな問題です。

大地震と大津波は天災ですが、原発事故は人災です。人間が便利さを追求して、知恵に驕ってコントロールの利かないものを生み出してしまった。その結果、地震と津波で被害を受けて、今度はそれが人間に大きな被害を与えようとしている。そういう危険性を抱えているのが現代社会だとすると、これにどう対処するかを考えるのは、次代を担う皆さんの課題だと思います。阪神大震災当時のいろいろな経緯を思い出しながら、私は3月11日以降を過ごしてきました。今も話をしながら、東日本の被災地から発信される情報をどう受け止めるか、微力だけれど私たちに応援できることはないかと考えています。義援金を集めましたよ、被災地へ送りました、さあこれで応援しました、では済まないんですね。今回の東日本のこの状況は、事件です。日本全体が直面している事件です。どう対応するかが大事です。「ボランティアをしたいが、何をすればいいですか」、ではだめなんです。1995年2月3日に私たちが神戸で考えたように、まず地域社会の復旧を考える。救援物資を被災者へ届けるために道路はどうするか、船が着けられるように港を整備しようとか。その次の段階は、たとえば子どもたちを元気にさせるにはどうしたらいいか、震災で孤児になった子どももいるでしょうし、避難所から家に戻る子どももいる。そういう子どもたちのケアをどうするか、どんな対応が必要か。そのために私たちはどんな役割が果たせるか、個人でもグループでもそれぞれが担える役割は何かと考

ながら、一つの大きな社会の将来像へ向けて具体的な計画を立てなくてはならない。一方では現実を見つめ、もう一方では将来への夢を見据えながら、復興への道筋をつけなくてはならない。計画は現実と直面してたびたび崩れるものですが、そのたびごとに、その場限りではない仕事を進めていかななくてはならないのです。

未来を見つめるために

さて、今回のRYLAでは、若い人と一緒に考えるのなら、「未来を見つめよう」と題をつけてもらいました。皆さんに考えてほしいポイントがいくつかありますが、まず歴史を振り返って、昨日、新野先生が、19世紀は第一次世界大戦で終わり、それから20世紀が始まったという人もいると話されました。20世紀は西暦1901年から始まるわけですが、実は19世紀の人々の生活様式、考え方、思想は第一次世界大戦とともに終わり、その後20世紀という、「世界」という大きな枠組みを考える時代に入ったとおっしゃいました。

ところで、その第一次世界大戦はどんな大義名分をつけて戦われたか、知ってますか。「諸戦争を終わらせる戦争」(War to end all wars)。植民地や領土をめぐる多くの小競り合いがあるけれど、それを終わらせるための戦争だ。長く続いた第一次大戦がようやく終わると、国と国との平和を維持するために国際連盟をつくり、一つの時代の区切りをつけました。しかしその後、すぐに第二次世界大戦が起きました。

19世紀後半に開国した日本は、ようやく世界の舞台に出てきたとき、すでに世界は帝国主義の仕組みができあがっていた。産業社会が起こって資本主義経済が発達して、欧米の列強の国々は植民地を持っていた。日本はそれに追いつこうと、強力な近代国家をつくるために資源のある場所を確保したいと考えた。欧米列強が

強大になったのと同じ手法を、日本は一時代遅れてとったのですが、そのやり方は間違っていると欧米の人たちは考えた。帝国主義は人類にとっていいことではない、民主主義の国家を目指そうじゃないか。日本が韓国を併合したり、中国に満洲国という傀儡政権をつくっている。アジアの他の国々を支配しようとしている。やめさせよう。日本が中国で起こした紛争が、やがて太平洋戦争となってアメリカや世界を相手に戦うことになった。なぜそうなったのか。この戦争の意味はなんだろう。第二次世界大戦は何と呼ばれたか。ヨーロッパやアメリカは民主主義国家だけれど、日本は帝国主義の国だ。それで第二次大戦は「民主主義と帝国主義の戦い」と言われました。

江戸末期の日本では、幕府は鎖国を続けることができなくなりました。近代化へ向かおうとした明治維新の前後、日本の次代を担おうとしたのは坂本龍馬、高杉晋作をはじめ、二十代の若者です。彼らが時代の流れの中から先を読んで、新しい時代を切り開き、日本を大きな時代の流れから置き去りにされないように変革したんです。

ヨーロッパでもさほど変わらない時期に、日本とは本質的には異なった形ですが、時代のニーズに応えようと青年たちが活躍しています。例えば、イギリス。産業革命以降、人々は工場で働くために田舎からでてきてその周辺に住み、都市ができました。ヨーロッパで都市化が一番早く進んだのは、恐らくロンドンでしょう。ここ（余島センター）はYMCAのキャンプサイトですが、YMCAという組織は、1844年、ロンドンで生まれました。当時働く若者の多くは、一日の長い仕事が終わると疲れて寮に帰って眠るだけ。なかには無軌道な行動に走るものもありました。ロンドンのある洋服店に、こんな生活でいいのかと考えた12人の青年が集まりました。まず広がっていく社会を勉強しな

くてはと考え、遠くの国へ行った人から話を聞いた。そして、次の時代は私たちが担っていかなくてはならないと決心した。このグループが、Yong Men's、若者の、Christian Association。イギリスでは皆、教会へ行きますが、あちこちの教会のいろんな教派の人が一緒になってYMCAを作った。これは、グループの名前なんです。

同じ時代に、マンチェスターの近く、ロッチデールという町に、協同組合が生まれます。協同組合は、労働者が都市の生活の中で自分たちの生活を守ろうとつくった組織です。国連は2012年を「国際協同組合年」と定め、アジア太平洋地域で「協同組合年」を開催する場所に神戸が選ばれました。協同組合の理念は大事だと言ったのは、賀川豊彦でした。その賀川によって神戸に協同組合ができたのは、1921年、いまから90年ほど前です。神戸は明治に開かれた港町で、田舎から大勢の人が働きにやって来た。日雇いですから仕事のないときは生活が苦しく、スラムと呼ばれる地域に集まって住んでいた。21歳の学生だった賀川豊彦はこのスラムに入って彼らと共に住み、なぜこの人たちはこんな悲惨な生活を送らねばならないのか、職を持つことはできないのかと考え、様々な社会事業のアイデアを生み、実践したんです。その一つが生活協同組合でした。その後、賀川はアメリカから招かれて生活協同組合の話をしていきます。

昔、スリランカへ行った時のことです。サリーを着た女性が一人、電車の駅にお米の袋を持って立っていました。後ろには菌みがきか何か2つ、3つ、それがコープの店なんです。私が、あなたは？と尋ねると、私は生活協同組合の役員です、この辺の村の人が日銭で買えるよう、お米を少しずつ売っているんです。こんなふうには、皆が助け合って生きていこうとする生協運動は世界の平和に繋がると唱えた人が、賀川豊彦です。最初は小さかったグループですが、い

まは世界に広がり、ある意味で社会的責任を担える団体になったことが世界の人々に認められたということですね。

もう一つ、大地震と津波で大きなダメージを受けた日本は、これからどのような社会の仕組みをつくらなければならないか。新野先生は、日本の国が今あらゆる分野で没落しつつあると言われました。そうですか、没落しつつあるんですかと、私の世代はそれで済むかも知れませんが、あなたたちには時代を切り拓いていく責任があります。新しい時代をどう生きるか。未来を見つめるということは、過去と現在の問題から新しい時代への変化を読み取ること。読みとった未来に対してどういう手立てがあるかを必死に考え、勇気を持ってそれを実行することが必要です。未来を生きるということを深く見据えて「私たちはこれからの時代の責任者だ」ということを自覚して下さい。

真の豊かさとは

人間は昔から今のようにいろんな人種・民族に分かれていたわけではありません。動物に近かったころ、お腹がへればその辺にある果物を採り、魚を捕って食べていた。人口が増え、食べものが不足するようになると、食糧を求めて大移動を始めた。人類学者によると、エチオピアあたりで生まれた人間の祖先は、アフリカから北へ移動、いまのトルコあたりから東へ行く。ある人々はそこから南、インダス川のほとりを下りていく。東へ移動した人々をモンゴロイド、スカンジナビアくらいまで北へ移動した人々をコーカソイド、アフリカに残った人々をネグロイドと言います。モンゴロイドはずっと東へ移動して、凍ったベーリング海峡を渡り、カナダ、北アメリカから南アメリカへと移動しました。ですから、もともと人類は同じ祖先を持つんです。

そんな大昔、果物の種を捨てたところから芽が出て来ると気付いた人がいた。食糧を求めて移動してきたけれど、ここにとどまって種を蒔いて収穫して暮らそう。そして農耕が始まりました。人々は一箇所に定住するようになり、農耕文明が生まれ、農耕文明社会が長く続き、世界の各地で異なる文化が芽生えました。

食糧を耕してつくるようになると、人間は知恵を使って新しい欲望を満たすようになる、生活文化を持つようになりました。たとえば大昔は動物の毛皮をまとっていた。それが綿を栽培して、紡いで織った生地で自分の服を作るようになった。アンデスで見かけたんですが、子どもがラマを撫でると毛がたくさんとれる。その毛に重石をつけて回して引っ張りながら糸を撚るんです。その糸を機で織って自分たちの服を作る。ラマから毛をとって、糸にして服を作るなんて本当に大変。

やがてモノとモノの交換が始まります。産業社会が成立し、資本主義文明社会がそれを支えます。アルビン・トフラーの「第三の波」が日本語に訳されたのは1980年、そこに「いまや世界は第三の波—脱工業化社会の波頭を浴びている」とあります。機械が進歩し、情報は即時に地球上のどの地域にも届き、コンピューターによるネットが世界中に張り巡らされる。このような現象を近未来に向かう脱工業化社会と呼んでいます。それから30年ほどで、世界を支配した「情報化社会」。瞬時の情報伝達を利用した経済は金融資本主義ともいわれ、ギリシャの破産を食い止めるためにEU各国が苦勞し、アメリカはリーマン・ショックを境に、強大を誇った金持ち国としての豊かさにかげりが見えました。私たちの世界は次の段階へ移ろうとしています。

新しい文化を担うのは、その時の人々、年齢は関係ありません。でも、その新しい文化をすぐに取り入れることができるのは若者です。新

しいものを取り入れる時、最初はこれまでの延長上で使い始めます。携帯電話もそうです。その携帯が今ではコンピューターと同じような機能をもって使われていますね。

トフラーの「第三の波」で、脱工業化という新しい時代に私たちがどう生きるかが問われました。しかし、科学・技術が先に進んで、コンピューターはどんどん発達するけれど、人間はそれを十分使いこなすことができない。原子力発電所も、あの津波で壊れるという脆弱さを抱えていた。人間の知恵が足りなかったと言わざるを得ない。新しい時代を担う人たちは、新しい能力と考え方をしっかり持ってもらわなくてはと思います。

教育というと、読み・書き・そろばんとすぐに思い浮かびますが、ポール・ティリーヒは、教育には3段階あって、まず、生活するのに必要な読み・書き・そろばん。コンピューターの原理や操作など自分の知識、能力を活かすための勉強で、新しいものを作りだすために必要である。しかし、それだけでは十分ではない。何のために教育をするのかというと、全ての人が共に幸福になることを考え、そのためには、人間とは何かということについて深い理解を持たなくてはならない。これは難しいことです。そのために私たちは他者の持つ価値観や文化を理解しようと、異文化理解や国際交流のプログラムが行います。なぜ私たちが生きていくのに世界の人々と仲良くならなければならないのか。ティリーヒは、それはそれぞれの個性、それぞれに与えられたものが一緒になってもっとよいものになる、そういう段階に達するためには、互いの問題を考えるということを教育に取り込まなくてはならないと言います。これが一番難しいんですね。

五千年の歴史を持つ中国で、皇帝はどうやって選ばれたか。人民の指名ではない。天帝はこれこそ人々のため、国のために必要な人材だという人に命じるんだ。だから皇帝は天の神の声

を聞いて人民を指導するんだ。天の神の声とは、正義と愛を兼ね備えた声なんだ。そう言って長い歴史を紡いできました。

キリスト教、イスラム教では、神とは創造者である。キリストは、神があなた方に愛と正義を命じていますよ、と言って歩いた人なんです。人間は、人間の体ひとつ作ることができない。コンピューターが発達してロボットを作るとはできる。でもロボットの魂を作ることはできない。世界の人々が様々な角度からそういうことを考えたとき、私たちの手の届かない「あるもの」を神と名づける。私たちはどんなにしても神に届くことはできないけれど、神の言葉をこうであるだろうと理解して、伝えることはできる。その伝える人が、お釈迦さまであるのか、キリストであるのか、他の宗教の教祖であるのかはわかりませんが、神の言葉を伝えるのが宗教ですね。どんな宗教であっても、何か私たちが越えた、私たちが創ってくれた、この世界を創ってくれた存在があり、それは私たち人間の力では到達できない。理解することはできる、分解することはできる。けれど、魂を作ることはできない存在としての人間が、どうすれば神の本当の意思を大切にすることができるのか。神の、仏のいう「愛」と「正義」につながる道を探る努力、神の「心」を知ろうとする教育、人間とはなんであるか、何を命ぜられているのかを知ろうとする教育が、第三の教育であるとティリーヒは言っています。

ハーバード大学のマイケル・サンデル教授が、「正義」について対話形式で講義をしています。学生一人ひとりの意見をひき出し、個々の状況や社会、国、世界あるいは将来に対する見通しなどを考えながら、正しいとは、正義とはどういうことかを考えさせようとしています。その正義は常に愛に裏付けられていることが大切なんです。

先に少しふれたように、産業経済がうまれて経済学ができました。「国富論」を書いたアダ

ム・スミス等が、物々交換の時代から貨幣を中心とする経済に動いている、経済ともの動きは人間の生活に密接に関係していると説明しました。昔は物々交換だった、やがて貨幣を使うようになり、コンピューターができて実際にお金を持ち歩かなくても取引が正確にできるようになった。それまでの産業を中心とする経済から金融を中心とする経済に移り、情報化時代に入って経済の仕組みも今までとは違ってきた。金融資本主義という形の経済が始まった。儲ける事だけを考えるのであれば、株を買わないかと呼びかけ、お金を大勢の人から集めて大きな資本にする。今までと違って、自分の身の程を越えた大きな仕事ができる。巨額の電子マネーが瞬時に世界を駆け巡るようになりました。ノーベル経済学賞を受賞したフリードマンは、金融資本主義の中心となる理論を唱えました。金融資本主義経済では資金をたくさん集め、株を買い集めて、株価が上れば儲かるという仕組みです。その考え方をアマルティア・センというインド系のイギリスの経済学者が批判しました。この人も1998年にノーベル経済学賞を受賞しています。フリードマンたちのいう新古典派経済学は、人間と結びつかない。投資が大きければ儲けが大きいのは分かる。その意味では新古典派の経済学者たちは賢い。でもこの経済学はモノの流通を考えるのであって、人間のためにモノが作られ、人間のために経済があるのに、「人間」という視点を忘れてしまっている。大事なことを忘れているから、賢いけれども愚かだと批判したんです。

2008年に起きたリーマン・ブラザーズの破綻をきっかけに、株価が大暴落し、世界的な金融危機が起き、世界経済を心配したフランスのサルコジ大統領、ドイツのメルケル首相、イギリスのブラウン首相が、2009年にパリで話し合いました。フリードマンの言う新自由経済は間違っていないか。たくさん資本を持つほどたくさん儲かることは分かった。だから大企業は儲

かっています。だが、それはおかしいんじゃないか。アメリカから始まった金融危機で世界の経済システムが破綻しようとしているときに、基本的な経済の仕組みを変えなくてはならないのだろうか。アマルティア・センは、新しい経済学を考える必要があるのかと聞かれて、それはしなくていいだろうと言っています。

いま、私たちが考えなくてはならないことは、経済の仕組み、経済の働きが人間にとってどういう意味を持つかということです。経済学者の中にはフリードマンのように考える人もいるだろう、けれどそれが人間にとって一番いい方法かどうか。儲かるとかプラスになるかどうかではなくて、人間を視野に入れてこの配分はどうか、この取引はどのように人間に役に立つのか、あるいはどういうふうにも人間を不幸にするのかと、三角形の経済学を考える必要があるんじゃないか。一橋大学名誉教授の中谷巖さんは、小淵内閣のときの経済ブレーンの一人でした。竹中平蔵さんもそうですが、日本でフリードマン学派の先頭を走っていた経済学者です。その中谷さんが、私が間違っていたと書いて本を書きました。経済学は儲ければいいということを研究する学問ではない。人間が豊かになることを考える学問だ。これは懺悔の本ですと言って『資本主義はなぜ自壊したのか』という本を出しました。あなたたちは今、そんな時代を生きているんです。人間を中心とした経済、正義を中心に、あらゆるものごとにもう一度焦点をあて直そうとするサンデル教授に大勢の若者たちが賛同している。そのような変化の時代を生きているのです。

有名な話なのでご存知の方も多いと思いますが、岩村昇博士というお医者さんは、1962年にネパールへ渡り、18年間、医療奉仕活動に従事されました。彼の専門は公衆衛生、結核です。ネパールでは結核が流行っていて、それをなくそうと村々を巡回した。険しい山越え、谷越え

ですから、歩くしかない。ある村に結核の症状の重いおばあさんがいました。ここには薬もない。このままにしておけないが、病院へは歩いて3日かかる。誰か病院へ連れて行ってくれないだろうか。ちょうど通りがかった青年にわけを話して「この人をタンセンの病院まで連れて行ってくれないか」。青年はタンセンの方から来たのですが、背負いかごにおばあさんを背負って、3日かけて病院まで連れて来てくれた。岩村先生は喜んで、何かお礼をしたいとお金を出すと、その青年は受け取らなかった。往復6日をかけておばあさんを背負ってタンセンまで来たのに、お礼はいらぬと言う。「受け取ってほしい」「いや、いりません」と押し問答していると、青年がこう言いました。「私たちは生きるために互いに助け合うんです。私は若いし時間がたくさんあるので、これからの長い時間のほんの6日間をこのおばあさんに分けただけです」。そして「みんなで生きるために（サンガイ・ジュネ・コラギー共に生きるために）」と言い残して帰って行った。岩村先生は驚きました。私は貧しいこの国を支援するつもりで来たけれど、ネパールにはそういう素晴らしい考えを持つ人たちがいるんだ。この国の人々と一緒に生きていこう、新しい世界を築いていこうと決意しました。しかし、彼は広島で被曝していて、健康状態を心配する日本の友人たちが説得し、1980年に帰国しました。

国際ロータリーは、この岩村先生のネパールでの医療奉仕活動を高く評価して、1981年、国際ロータリー・サンパウロ大会で、第一回国際理解賞を贈りました。それを記念して日本中のロータリアンが支援して神戸にできたのが、PHD協会です。Peace, Health & Human Development の頭文字をとってPHDです。主にアジアの国から草の根の市民の研修生を日本へ招いて、保健衛生や農漁業の研修の場を提供するなど、平和を築くためのプログラムを地道に行っています。ちなみに、ロータリー国際理

解賞の岩村先生の次の受賞者は、ローマ・カソリックの教皇ヨハネ・パウロ2世、日本人では緒方貞子さんも受賞しました。

共に、次代へ向けて

ロータリークラブの話は昨日、少し聞かれましたと思います。1905年、ポール・ハリスを中心にシカゴで生まれました。ポール・ハリスが日本に来た時に、日本人はなぜ？と聞くのが好きですから、「あなたはなぜ、ロータリークラブを創ったのですか」と尋ねました。その答えは「寂しかったから。いい友人を集めて仲良くしたかったから。そこに私の生きがいを感じたから」。

ロータリーが生まれた20世紀初頭は、産業社会が盛んになった頃です。一生懸命に働いて儲けることこそ幸福だと、他人を追い落とすような風潮の中で、人間の幸福は寄り合うことであり、支え合うことであると考えた4人の若い実業家がロータリークラブを創りました。皆で助け合おう、仲間うちでは理想とする公正な取引をして共に支え合おう。最初は親睦と公正な取引を掲げた小さなクラブですが、時代の変化と共に自分たちの哲学をより深め、新しい考えを取り入れて、地域社会のために具体的に頑張っていこうと決めました。そして地球のすべての人々と共に平和な世界を築くことを目指すことで、世界的な奉仕団体へと成長しました。毎年、ニューヨークの国連本部で開かれるロータリー国連デーは、ロータリアンが世界市民としての決意を表明する場です。

ロータリーはいま、ポリオ・プラスという壮大な世界大の運動を続けています。これは、小児まひのウィルスが地球上から撲滅しようとする運動です。世界の98%くらいからウィルスがなくなった。あと2%が4つの国、インド、パキスタン、アフガニスタン、ナイジェリアに残っていて、それを根絶するのは大変困難なこ

とです。これまでの20年間にかけたより、もっと多くの資金が必要です。何とかこの2、3年のうちになくしたいとキャンペーンを続けています。98%で十分じゃないか、これでやめようということになったら、伝染病ですからいつかまた広まってしまう。それではこれまでの努力が元も子もなくなります。

ビル・ゲイツ氏が、ロータリーのポリオ撲滅運動に1億ドル出そうと申し出てくれた。「ただし、あなたがたロータリアンも1億ドル集めてください。120万人のロータリアンが募金した1億ドルと、私が1億ドルを出して、2億ドルにしてポリオをなくしましょう」。私も含めて世界から委員がシカゴの国際ロータリーの本部に集められました。「ゲイツ財団が1億ドル出そうと言ってくれたが、ロータリーも1億ドル集めるようにと言われていた。日本はいくら出せそうか」と聞かれたんです。分担額を計算して、これはやろう。せっかくゲイツ財団がお金を出してくれるというのだから、ロータリーも集めよう。ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ

財団は、すでに総額3億5千万ドルを出してくれました。いま、世界のロータリーがターゲットにしているのが、このポリオ・プラス運動です。

ロータリーは、世界の平和を願っています。人間が国籍ではなく、人と人として心を通い合わせ、友人となる、そんな平和な世界を作りたいと願っています。小さいグループですが、世界中に繋がりを持って、そのために努力しています。

あなた方は、これから様々な問題に直面することでしょう。そのときは日本人だからこうとか、アメリカ人だからこうする、ではなく、人間としてこうすべきだという考え方をして下さい。そして、平和な世界を築くために、次代を担うあなたがたライラリアンが、私たちの仲間に加わってくださることを願っています。

(徳梅) ありがとうございます。
それでは、閉講式に移ります。

思い出



以前RYLAで講師をされた楽団あぶあぶあ主宰者の東野洋子さん

閉講のあいさつ

パストガバナー(2670地区)
新世代アドバイザー

飯 忠悟 (今治RC)



○徳梅 それでは、ただ今から第33回RYLAセミナーの閉講式を行いたいと思います。本当に皆さん、4日間ご苦労さまでございました。いい思い出がきつといっぱいくれたことと思います。それでは閉講に当たりまして、四国地区、兵庫県地区の新世代のアドバイザーのパストガバナーの方がおみえですので、そちらの方々からご講評という形でいただきたいと思います。

まず初めに、四国地区2670地区の飯忠悟新世代アドバイザーのほうからご講評をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○飯 皆さん、本当にご苦労さまでした。今井先生、ありがとうございます。何よりも、とてもすてきな話を、もう30分といえば30分、1時間半といえば1時間半、2時間半といえば2時間半、原稿なしでこれだけびっちり続けられるアビリティ。もう90歳ですよ。化け物ですね、本当に(笑)。2年前に僕に「飯君、だめや。最近、固有名詞が飛び出した」って。「先生、今ごろ言うてもろうたら困るんです。僕、45歳ぐらいから固有名詞が飛んでいます」。顔がもうはっきり分かって職業も何もかも分かっているのに、名前がしゃべっている途中でぽっと消えるんですね。今井先生は素晴らしい。本当にありがとうございます。とても参考になったと思います。生徒の皆さんもとてもいい勉強をなさいました。リーダーシップは、皆さん方の肩にかかる、これからの日本、これからの世界

を皆さん方が背負っていかなければならない。本当に今、今の震災の危機的なクリティカルシチュエーションの中で一番必要とされるものはリーダーです。ですから皆さん方がそれぞれのリーダーとなって今後の世界を支えていただきたい、本当にそのように考えます。

それからもう一つ。カウンセラーの方々、お立ちいただけますか。あの方々は単なるカウンセラーではありません。あなた方のお父さんやお母さんだと僕は思っています。

皆さん、どうぞ、あの人たちに、カウンセラーの皆さまに、あなた方のご両親に、立ち上がって拍手を送りましょう。

(拍手)

はい、ご苦労さまでした。カウンセラーは今年も来年も、あなた方が食事を済ませた後もカウンセラーミーティングを開いて、ずっと担当のいろいろな問題について討議し合って、次の日の対策をいつも立てておられました。カウンセラーの声をちらっと横から聞いたら、今年の子はよかった、もう手が掛らなかった、安心だったという声を聞きました。皆さん方に対する最大の称賛だというふうに思っています。ぜひこの結果を持って帰って、そしていずれ結婚してお子さまができたなら、夏休みにでもこの余島に家族で帰ってきてくださることをお願いしまして、僕のあいさつに代えます。以上です。

閉講のあいさつ

パストガバナー(2680地区)
新世代アドバイザー

橋本 一豊 (神戸須磨RC)



○徳梅 ありがとうございます。それでは続きまして2680地区の新世代アドバイザー、橋本パストガバナーです。よろしく願いいたします。

○橋本 いよいよ第33回のRYLAセミナー、終わりに近づいてまいりました。このRYLAというのはリーダーシップを学ぶところでございますけれども、今回、タイトルそのものが「リーダーシップ」でございまして、3人の素晴らしい先生方から皆さん、講義を聴かれて、そしてまた討議も重ねてまいったわけでございます。

日本の社会というのは、おみこしわっしょい、これが日本の社会だった。河合元文化庁長官は、中空均衡型の社会と、この日本の社会をこういうように表現された。中心がないと、周りで全部支えているんだと、これが日本だということでございます。ただ、組織のあるところにはやはり必ずリーダーが出てくるはずでございます。そういう意味で、昔、私の友人のお父さん、川崎重工業の社長兼商工会議所の会頭だと思いますが、砂野会頭からお話を聞いたとき、リーダーたるものは理解、判断、決断、これが大事なんだと非常に明快におっしゃいました。理解、現実を理解する、人の言うことをきちっと理解する、これがまず大事なんだと。そして上に立つ者はきちっとした判断をして決断をすべきなんだというような、こういうお話を聞いたことがあります。

イギリスの多くの人材を輩出しております

イートン校、これは自ら先頭に立って道を切り開く人材を育てるということをモットーにしておるわけですが、そのための教育の要諦は何かといいますと、自ら判断する力をつけること、よきチームプレーヤーであること、また異なる意見の持ち主に敬意を表することと。ということで、相手を尊敬して、そして判断力を学ぶ、これがイートン校のモットーだというように言われておるわけでございます。やはりそういう点では、リーダーたる条件、いろいろおっしゃっておりますけれども、共通点があるんだなというように思っております。

それと、よく引き合いに出されることでわれわれ日本人の若者の意識調査、このデータがよく引き合いに出されるわけでございますけれども、2007年の高校生の意欲に関する調査というのがありまして。それで日本の高校生とアメリカ、中国、韓国、どう違うのかということでございますが、日本の高校生は多少退屈でも平凡な生涯を送りたい、これについて、とてもそう思う、まあそう思うというこのパーセンテージが一番高いのが日本でございます。6割の方がある。それからあとアメリカでは4割弱、中国では49%というようなところで、この点では日本が一番現状に安住していると、こういう意識でございます。

それから自分の会社や店をつくりたい、こういう問いに対しまして、とてもそう思う、まあそう思うという、いわゆる会社をつくっていきたいというような意欲は、日本は33.4%、アメ

リカは70%を超している。全部中国も韓国も7割超しておるわけです。日本の高校生だけが33%というような状況でございまして、こういう点での意欲調査というのが出ておまして引き合いによく出されるわけでございます。新野先生の講義の中でポジビリティというお話がありましたね。ポジティブに積極的にやろうということでございます。

リーダーというものは周りがつくり上げているものでもなんでもないんです。自らが成長してリーダーになるわけでございます。皆さん、自ら自分が成長するという意識を持って、せっかく素晴らしいRYLAをベースにいたしまして、ポジビリティを持ってこれからの将来を頑張っていたきたいと、このようにお願いいたします。

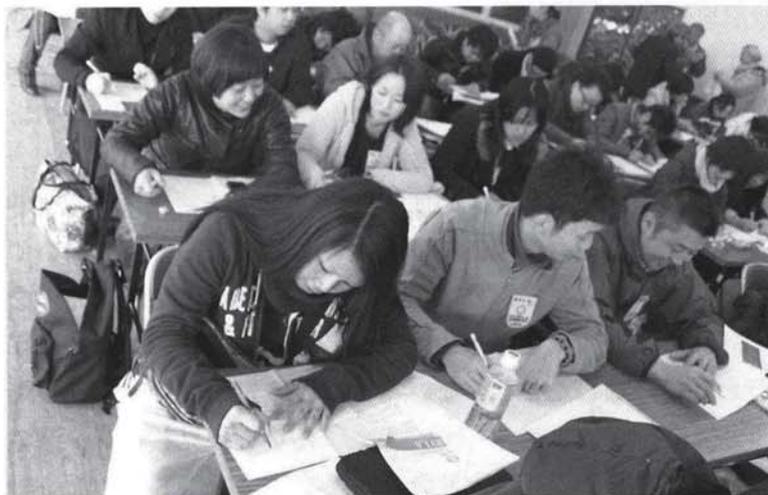
閉講にあたりまして、このロータリーの、このセミナーを支えていただきましたRYLA委員会の方々、カウンセラーの方々、本当にありがとうございました。最終日、一番春らしく、いい天気になりました。震災の地もこれで春がやってくればいいなというように念ずる次第でございます。本当に3泊4日、お疲れでござい

ました。これをもって閉講のごあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

○徳梅 どうもありがとうございました。それでは、4日間にわたるプログラムでしたがこれにて一応正式なプログラムは終了とさせていただきます。後ほど記念植樹等がございますので追って案内させていただきたいのですが、皆さま方、私も4日間、至らぬディーンで皆さま方にいろいろとご迷惑を掛けたことも多々あるかと思えますけれども、どうかお許しを願いたいと思います。

また、この余島で3泊4日間、培った友情、親睦、愛情をぜひ皆さま方のコミュニティー、地元に戻られましたら地域社会でパワーに変えていただいて、少しでも社会貢献、奉仕、サービスをしていただきたい、どんな形でも結構です。それがわれわれ4日間お手伝いしたロータリアンの願いであります。どうかよろしく願いたいと思います。それではこれで閉講式を終わらせていただきます。

思い出



セミナーの最後は感想文が待っています

■ ■ ■ A 班 ■ ■ ■



セミナーを終えて

◆カウンセラー 井本 学明

例年になく肌寒いセミナーであったが、我が班は、暑かった。

参加人数が少ないと言いつつ、例年通り緊張の連続であった。開講式での班別の呼びかけで初めて顔と名前を確認し、キャビンでの荷物整理と顔合わせを終え、ようやく笑顔が見えた時、ホッとする。

キャビンタイム、レクリエーション、バズセッション等を受講生に自治権を認め、口出しすることなく、十名全員で協力してフォーラムの準備資料を作り上げた時の顔には、自信の笑みと達成感が見て取れた。レクリエーションでは弱者を思いやり、夜の睡眠も互いに気遣い、朝には自主的に清掃が行われ、経験したことのないカウンセラーを全うすることができた。

今後は地域に帰り、ロータリーの目指す社会貢献にリーダーとして活躍してくれることを望

みたい。

A班の受講生の皆さん、感動をありがとう。

RYLAセミナーに参加させていただいて

◆カウンセラー 平井 英津子

「カウンセラーは、お父さん、お母さんとして、ただ子ども達を見守ってやってくれたらいいのよ」の言葉に背中を押されて、余島にやってまいりましたが、不安っぱいのスタートでした。しかし、セミナーが始まるや、不安は期待感に変わっていました。

セミナーの本意は、トモダチをつくること、仲良くなって、心開いて、語り合うこと。

今井先生や深川先生をはじめ、ロータリアンの皆様方が、少年のように目を輝かせて、楽しそうにセミナー準備のために奔走されておられる姿を拝見した時、深い感動を覚え、ライラの奥深さを感じました。

「次世代を担う若者達に伝えたい・・・」熱い

想いがピンピンと伝わってくるのでした。

さて、今年のテーマは「リーダーシップ」

新野先生は、「リーダーレス ジャパン」を「リバーズ」するために、今こそ本物のリーダーが求められていると話されました。

「本物のリーダーとは、どんな人？」

「私達は、どのような社会を作りあげようとしているのか？」

未曾有の大震災を経験した今、まさに国民一人一人に突きつけられているテーマです。

講義と討論、フォーラムなどを通して、熱く深く意見交換がなされました。

鍵をかけない絶対の信頼の中で、共に学び、遊び、笑い、泣き、心を開いて語り合う濃密な時間を共有することが出来ました。

この余島での出逢いの中から、これからの社会を牽引するリーダーが巣立ってくれることを願います。

私達は、遠く離れた人達のことを、どれだけ想像することが出来るだろうか？

想像する⇒共有する⇒分かちあう⇒成長する

貧弱な想像力を懸命に働かせることで、人は成長できるし、「一人一人がリーダー」との自覚を持つことが、再生へのキーワードになると思うのです。

井本お父さん、大変お世話になりました。

四男六女の子ども達、出逢ってくれてありがとう！！

この素晴らしい機会を与えて下さった皆様に心より感謝を申し上げます。

RYLAセミナーに参加して

● 池田 依利子

RYLAセミナーに参加して、協力し合っ一つのことをやり遂げる大切さを知り、自身の成長の必要性や今後の指針を見つめ直すことができました。

班単位で規則を決めて行動することは、とても久しぶりですが、これは社会の縮図であると

考えます。

十人十色の仲間と、一つのことをやり遂げることは、難しくもありますが、多くのことを学ぶことができました。

三名の先生方、またロータリアンのお話を聞き、それぞれのアプローチの仕方で、「リーダーシップ」について、「社会」について、「未来」について幅広く考えることができました。

自らが手本となり、社会に働きかけることができるように、知性や精神を向上させる探究心を持ち続けたいと思います。

このような素晴らしい機会を頂きありがとうございました。

四日間の大家族生活

● 荻野 紗奈

見ず知らずの大人十二人がある日突然、家族になりました。お父さん、お母さん、四男六女の大家族です。

お父さんとお母さんは私たち兄弟に「何をしたらいいのか、どんな風にしたらいいのか」何も口出しはしませんでした。ただただ、私たちを見守っていてくれたのです。兄弟たちの話し合いはいつの間にか役割分担が成り立っていました。誰が指示する訳でもなく、個々が自分の役割をみつけ、一つのゴールに向かって意見を出し合い、兄弟みんなの答えを導き出しました。私たち兄弟はリーダーを作りませんでした。全員がリーダーであるからです。団体の中に特別な存在“長”を作ってしまうと、個人はそれに頼ってしまうと考えたからです。少なくとも私たちはそれぞれにリーダーシップを学びに来たから頼ってしまう形になるのはふさわしくないと考えました。そして、私はこの四日間の家族生活でリーダーシップのあるべき姿を考え出しました。

リーダーシップとは必ずしもリーダーだけが身につけておくべきものではないということです。リーダーシップを身に付け、リーダーの下

で働くことは、リーダーにとって最強のサポートになると思いました。そういったサポートがあるからリーダーはリーダーとして輝いていられるのだと私は考えます。

青少年指導者育成セミナーを終えて

● 田中 良明

私は今回もセミナーで主旨がわからなく、とりあえず小豆島の余島に来たのだが、知人が誰一人とおらぬ中、班発表。初対面でのお父さん、お母さんの「私たちは家族だよ」とその言葉だけでも皆と打ち解けられることになれたはずであった。リーダーシップとの議題の中での先生方の講義はポジビリティを持つ、自身が成長することでリーダーシップは知らずと身についていくのであると。リーダーの素質として「心・技・体」その文字の通り、それぞれで自分だけでない周りを引き上げることが周りとの和につながる。メインのフォーラムでは「身近な人を大事にしていますか？」発表の為に班内で分かれ、意見を出し合うのだが、詰まることもなく、皆が意欲的に意見を出し、内容がまとまってくことは、これまでの経験的には数少ないことであったために、余計に自分がこの輪の中で何ができるのかと、何をすればよいのかと考えていた。思索の時間は、この余島の自然の中で一人の空間を持って、考えることの、思索の大切さを改めて身にしみて感じた。発表の際に誰かに押し付けることもなく、発表者やそして皆自分の役目を見つけることで他の誰よりも我が班はよかったのではないかと私は思っている。

3泊4日という短く、長くも感じる期間にこれほどまで打ち解けられる巡りあわせがあったのか、RYLAキャンプに参加させていただき、先生方の講演を聴いて自分の何かが変わったか。体験できたことの素晴らしさを心に抱え、これから私にできることをより探りたい。ありがとうございました。

RYLAセミナーについて

● 徳梅 雅子

この余島で3泊4日を大切な仲間と過ごせたことはいい思い出です。

初めはみんなと話せるか、とても不安もありました。でも班のみんなはとても明るくて、優しい人たちばかりですごくよかったです。

講義の先生からも貴重なお話を聞く事が出来て、今の社会にはこんなことが必要だと改めて感じたこともあります。班でのフォーラムの発表テーマ「あなたはとなりの人を大事にしていますか？」というテーマで班で話し合いをしたときに、班の人達も年齢がそれぞれだったので、いろんな意見がでました。それを一つにまとめてみんなの前で発表しました。私は今までにも人前で発表をしたことがあったけど、今回だけは一番落ち着いてできたのではないかと思います。

班はすごくまとまっていて、みんなすごく楽しく4日を過ごす事が出来ました。

ここで出会った仲間、これからも絆で結ばれて交流があることを願っています。このセミナーは私にとっていい経験になったと思います。この島で素敵な仲間と出会えてよかったです。

青少年指導者育成セミナー感想文

● 目本 基喜

今回の3泊4日の研修で学んだ事は、人とのつながりが大きかったように感じました。性別・年齢・職種の違う、見ず知らずの人間が集まり、何をするのもよく分からず、不安のままキャビンに入りました。そこで、緊張をほぐしたのがカウンセラーの方でした。特に真面目な話をするのではなく、今後の日程を伝えるわけでもない。

「今日からこの部屋で過ごすから」

この一言で仲間意識が強まり、自然と打ち解けました。女性陣と合流し、

「今日から家族だから」

と言われ、いい設定と感じました。皆でニックネームを決め、愛情を持って接する気持ちにもなりました。

講義内容も専門性が強く、深く、実のある内容で時間が早く経ちました。新野先生は理論的に、武田先生は実用、实际的にリーダー論を説かれました。キャンドルから最終日の今井先生の話は、実に深く、分かりやすく丁寧に、我々目線で教えて頂きました。

家族、初日は設定のつもりでしたが、その日の夜には、本当の家族になっていました。人と人の触れ合い、人のぬくもりを大変感じれて、最高の研修、体験となりました。

クソ生意気ながらも素直な後輩。静かで優しく見守る兄貴。きれいで明るかった女性達。自由に成長させてくれたパパ、ママ。そして俺、ありがとう。

RYLAを経験し

● 植松 義文

RYLA開始前は、とても不安でいっぱいだった。顔を知らない。地区も違う人達と上手くできるのか等思っていた。しかし、いざ始まると良い仲間を作る事ができた。違う職種や年齢が

違うだけで、様々な意見がでてきたりすることで、とても勉強になり面白く感じた。バズセッションやキャビンタイム等でチームワークの向上もできていた。

講義にしても、武田先生の講義が印象強く残っている。4月から新人職員の指導をすることになっており、「十を与えれば十で返るが、一を与えれば一が返ってくる」という言葉にはとても共感することができた。自分の指導の仕方次第で、良くも悪くもなると思います。この学びを新人に活かせるように努力したいと思います。

最後にリーダーシップを学び、1人が責任を負うのではなく、全員が一人ひとりを助け合うことが大切だと思います。その中で、自分が一番力を発揮できる分野では皆を引っ張り、苦手な分野では引っ張っている人を助けることが大切ではないのかと、この体験をし実感しました。

RYLAセミナーを終えて

● 薦野 彩

私がセミナーを受けて、一番変わったのはリーダーシップについての考え方です。リーダーシップというテーマを聞き、最初に思ったことは、人には向き不向きがあるのになという



ことでした。でも、講師の先生方のお話を聞き、バズセッションでみんなの話を聞くうちに、リーダーシップは各々が身に付けておくべきことなんだと考え始めました。講義では「平等のリーダーシップ」「持ち回り」という言葉が出ましたが、フォーラムの準備中、みんながそれぞれの役割を果たし、協力し合えたことが、その言葉につながるのだと思います。これなら、私にもきっとできることがあると思ったので、今後の人生に活かしていきたいと思います。

最後にA班のお父さん、お母さん、兄弟の皆さん、頼りない次女でしたがお世話になりました。ありがとうございました。

● 中村 早甫

この4日間は毎日貴重な経験をさせていただきました。最終日のフォーラムにあたっては、メンバーそれぞれが意見を出し合い、一つのものを作ることができました。講義やディスカッションの時には理解できないこともあり、自分自身がいかにも無知であるかが分かりました。

また、私たちの班は初日からすぐ仲良くなり、カウンセラーのお父さん、お母さんをはじめ、メンバーの皆にはいつも助けられました。一緒にスポーツをしたり、毎晩皆で語り合っ、まるで大家族のようで楽しかったです。

普段の生活では、ここまで深く話し合っって考えたりしないので、本当に濃密な4日間でした。このような機会を与えて下さった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

第33回RYLAセミナーに参加して

● 玉越 亜由美

この、セミナーを終えて、私は何をすべきか、自分が社会で何ができるだろうと考える機会が何度もありました。講義やフォーラム、特にフォーラムのためのバスセッションの中で、リーダーシップとは何かを話し合い、リーダー

シップは、皆が持つもの、指導力ではなく、その場、その場で変わっていてもいいのではないかという意見が出た時、自分自身が普段、職場やボランティア活動において、自分がしなければいけないと思ひこみ過ぎて、結局いい結果が生まれなかったことがあります。そして悲観主義になってしまいます。集団において1番大切な、信頼や信用関係に傷がついてしまう。しかし、リーダーシップをみんなが持つようになると、誰かひとりに責任を負わせなくていい。全員が適材適所で能力を発揮できるということは、素晴らしい集団になれるのではないか、さっそく、地域に帰って実践していきたいと思います。

悲観主義になっていた私が楽観主義になれたのは、A班の家族のおかげだと思います。すぐ信頼関係が生まれることができ、ポジティブに会話ができ、力をそれぞれが発揮できる班です。そして、私たちを見守ってくれた井本お父さん、平井お母さん、本当にありがとう！次は神戸の家族パーティで会いましょう。

第33回RYLAセミナーに参加して

● 森 一雄

「3泊4日」最初に聞いた時、「長い」と思っていたのが、今はとても短かったと感じるとともにとてもさみしさを感じます。

島に来て数分で誕生した新しい家族とのスタート。自分はこういった風に過ごせばいいのかと思っていましたが、一緒に食事、入浴、対話を深めていくうちに、自然と普通の家族形成が出来ているのには、本当に自分自身びっくりした。その中には、両親や兄弟個々がこの家族の中でしっかりと役割を考えて行動している事で必然的に信頼と安心が作り上げられたからであったと思います。家族にリーダーシップを教えられた。

今回のセミナーでは、主としてリーダーシップをテーマに講演並びに各班でのフォーラム発表でありました。自分自身の中でこれがリーダー

シップであるというようなものではありませんでしたが、色々の方の話や体験談などを聞く事によって、自分なりにもっと勉強をしなければならなかったと思いました。文章に表わすのは難しい

ですが、今後は家族とのつながりや、自分なりのリーダーシップを考え行動していきたいと思っています。

最後に家族と兄弟に感謝して感想とします。

■■■ B 班 ■■■



カウンセラー3年目の反省

◆カウンセラー 森 廣一

今回で3回目のカウンセラー、受講生の指導力養成プログラムでありながら、毎回自らも勉強させてもらっているセミナーです。初対面の受講生同士、また受講生とカウンセラーが3泊4日という短い期間において、いかに指導力養成の成果を最大限に高めていくか、そのためにカウンセラーはどのように受講生と接するか等々、毎回思いを巡らせながらセミナーに参加していました。

開講式後の班編成発表で、始めて顔を合わせた女性6名、男性5名の受講生、気さくで陽気

なアメリカ人(男性)、昆虫の研究者、古代文明を研究している大学院生など自分自身にとっても興味深い家族との共同生活がスタートしました。

カウンセラーとして心がけなければならない重要なこと、それは受講生の自主性を最大限に尊重することです。プログラムを消化する過程でよほどのことがない限り受講生に助言ができません。ところが経験が少ない受講生の行動や言動などを見守っていると親バカ感情が起こってきます。その感情を堪えるのが非常に難しいことです。

ところが、3回目という気負いと慣れからか、

カウンセラーである私がこの心の葛藤に悩まされて、家族である受講生への暖かい見守り、気配りができなかつたのではないか、受講生はこのセミナーで成長してくれただろうか、このために自分は役立ったのか等、セミナーを終えた今、反省の念に駆られています。

しかし、このセミナーで出会った受講生とは、これで終わりではなく、今後とも交際できるものであり、交際していくことにより、この反省に対する答えが出るように思います。

新しい人との出会い

◆カウンセラー 大江 与喜子

今年も充実した時間と新しい出会いをいただきました。東北関東大震災の被災地を思いやりながら、ここ遠い余島から、直接ではなくとも私たちに、隣人に対する気持ちの共有と、今後長期に亘るであろう、私達にできる支援の方法を模索しました。11人の受講生たち、それぞれ職業も年齢も国籍も異なっても時間をかけた話し合いにより、理解を深めることができることを学びました。

受講生それぞれの悩みなど共有するまでにはいけなかったことは残念でしたが、親睦を深めるはじめての一步。今後それぞれの生活へ戻っても、この余島で経験した討論、思索が毎日の生活のレベルをアップし、遠い隣人をも思う、そんな社会の実現に繋っていくだろうと信じます。カウンセラーとして一人ひとりに充分関われなかつたけれど、そこを受講生どうしで補ってくれた、みんなに感謝です。

そして、飯パストガバナーの最後のご挨拶嬉しかったです。

スタッフの皆さん、ありがとうございました。

RYLAで学んだ事

●中村 文香

とても充実した4日間を過ごす事ができました。それぞれの先生方の講義は本当に興味深く、

今の私ではすべて理解する事は難しかったけれど、これから自分の生活や職場に持ちかえり、何か考えなければならぬ時、行動をおこさないといけない時に振り返り、自分の指針として活かしていきたいです。

東北では大きな地震災害が起りましたが、そんな時にこそこのRYLAセミナーに参加することが出来て良かったと思います。興味深い講義を聞く事ができたこともその理由ですが、何よりもRYLAで出会ってできた素晴らしい友人に感謝したいです。それぞれがお互いを思い、尊重し、助け合える仲間というのは、日常生活の中で出会う事はなかなかできません。出会ったとしても、RYLAで築いたような関係になっていくのは難しいと思います。このような機会を頂いて、それぞれが助け合い、高め合う事のできる素晴らしさを改めて実感しました。ここの出会いを大切に、この関係を続けていくながら、この仲間と新しい動きを作っていければと思います。また自分の職場にも、今日の学びを持ち帰り、互いに助け合い、高め合えるチーム作りをしていきたいと思いました。ありがとうございました。

第33回RYLAセミナーを終えて

●熊野 晴毅

今回のRYLAセミナーを終えて、新野先生、武田先生、今井先生のこれからの人生に大変役立つ講義を聞くことが出来た事はもちろん、これまで生きて来た中では出会ったことのないような人達に出会えたことで、自分の中に新たなかけがえのない財産を築くことができました。

余島に到着した初日に班決めがされ、何も分からないまま始まった共同生活で、非常に不安を覚えました。自己紹介をし、時間が過ぎて行く中で、それぞれがこれまで歩んできた人生を理解し、新たな価値観を発見することができたことで、これからの人生立ち止まってしまった時に解決を導き出す新たな引き出しが増えた

ように思います。

最後に班の中では比較的高齢であった自分に戸惑うことなく接してくれた班のみんなと、4日間朝早くから夜遅くまで、誠心誠意尽くしてくれたカウンセラーの森様、大江様に「ありがとうございました」と感謝の意を残します。

第33回RYLAセミナー感想文

● 藤井 麻里奈

今回、RYLAセミナーを受講させていただいて、普通に生活している中では、絶対体験しないことを体験したり、出会うことはないだろう人と出会い、ほんとに自分自身にとって良い体験をさせていただきました。

RYLAに参加するまでの私は、今の自分が当たり前の自身だと思っていましたが、参加し、セッションやフォーラムをすることでいかに自分が無知だったかということを考えさせられました。また、普段話し合い等になった時でも、自分の意見を発言することがとても苦手だったんですが、少人数での話し合いでは、自分の思っていることを発言することが出来、発言することの大切さを学びました。講義では、リーダーとはどんな役割を持っているのか、引張っていただけがリーダーではないということ素晴らしい先生のもと、体験することができました。

これからは、しっかり自分の得意分野でのリーダーになれるよう、もう一度自分自身を見つめ直し考えてみたいと思います。

第33回RYLAセミナーを終えて

● 清瀬 みのり

私は、今回RYLAセミナーを受けさせていただいて仲間の大切さ、自分で考えること大切さについて再認識しました。

まず、仲間の大切さについてですが、生きていくうえで、人は一人では生きていけないということを考えた時に一緒に頑張っている仲間が

いることが大切だと感じました。一人ではなかなかできないことがあっても班のグループで助け合い行動することで達成できることもあるし、班で意見を出し合うことによって、自分と違った考え方も聞く事ができて自分の視野や考えの範囲も広がっていくことができると思いました。また、コミュニケーションとして相手の意見を傾聴すること、自分の意見を述べることについての大切さも実感することができました。

自分で考えること大切さについては、普段生活をしていて、あまり自分のことについて考える機会がないと思いました。このRYLAセミナーで思索の時間として一人で考えることで情報や思いの整理ができると体験して、どんなに時間に余裕がなくても一日に一回でも情報整理の意味もこめての「考える」ということが重要だと思いました。今まで、人のことを考えるときに、自分に余裕がないとできないのではないかという意見が自分では思っけなかつたことで、本当にその通りだと思ったことから気持ちなどの整理をつけるためにも「考える」ことはとても重要なことだと学ぶことができました。

このRYLAセミナーで、自分とは違う意見の仲間との話し合いによって、自分の思考パターンや他の人の意見を取り入れることによって自分を見つめ直すきっかけになったと思います。今回学んだことを、この場だけのものではなく、できることから少しずつでも実行していきたいと思ひます。

第33回RYLAセミナー感想文

● 久松 定智

この度のRYLAセミナーでは、大変貴重な経験をさせて頂き、推薦して頂いたクラブの皆様には厚くお礼申し上げます。

一番の収穫は仲間ができたことです。3泊4日の、ドミトリーで寝起きをともにした同じ班の人達とは、最初思っていたよりも親しくて、深い関係が築くことが出来ました。何よりも、

普段知り合う機会のない若者達とつながりを築くことができ本当に良かったです。

参加する前日まで、本当のことを言うと、仕事が忙しい時期なので、3泊4日という長期間職場を離れるのはつらいという思いしかありませんでした。4月上旬に出版原稿の締め切りもあり、正直なところ、セミナーに行ってしまうて大丈夫なのか、という思いしかありませんでした。ノートパソコン等、仕事道具も持ち込みました。しかし、セミナーが終了した今、参加して良かったと心から思います。いい気分転換にもなりました。これから参加を考えている方にも、是非お勧めしたいと思います。これからも、ここで築いた関係を大切にしていきたいです。

第33回RYLAセミナーを終えて

● 足立 光子

初めてこのセミナーに参加して、まずは自己紹介から始まった。3つの講義とディスカッション、フォーラム、レクリエーション等、普段の生活と遠く離れた小さな島で行なわれたこの会にはじめのうちは単純に楽しんでた。

班行動で生活し、寝食共にする仲間達とはすぐにうちとけることができ、とても有意義な時間を過ごせたように思う。

今回のテーマは「リーダーシップ」という事で、講義を聞き、自分で考えて仲間と話すうちに、自分なりの答えが出た。それは、リーダーと言えど、一人とは限らず、一人ひとりがしっかりと考えて意識づけて行動することが大切であるということ。会社では縦社会があたりまえで、社長や上司の言う事が重要で、そこまで自分が考えることもないと思っていた。しかし、ロータリーでは、いくら年長者が年齢的に年を重ねておられても、基本的には横社会で、自分と他の人の意見を尊重しつつ、話をまとめていくことが大切だということ。また、リーダーや進行してゆく人が中心となる人ばかりが目立つことなく、共に歩いていくことが最重要であるということ。そんなことを思うと、参加前に比べてだいぶ自分の視野が広がったように思う。会社には私よりも年上の部下が増えてくることに少し不安を覚えていた。でも講義の中で、上に立つ者が、まず指導する人と仲良くなるのが先決であるとあった。私の会社の社長は常に社員に気を配り、冗談をとばしてくれる。良いお手本が身近に居て下さることに気付けるきっかけをくれた。このセミナーで得た仲間や経験、気付きを大切に、今後の生活にどんどん活かしていきたい。最後にロータリーのスタッフやカ



ウンセラーやスタッフの皆さんにお礼を言いたい。ありがとうございました。ではさようならば。

第33回RYLAセミナーに参加して

● 越智 香織

今まで、リーダーシップとは「先頭に立つ」というイメージが強く、様々なタイプのリーダーを見ては来ましたが、自分に当てはめて考えることはありませんでした。

今回、RYLAセミナーに参加して、リーダーシップというものを講義で学び、同年代の同じグループの仲間と過ごしました。すると「先頭に立つ」ことだけではないな、と、少しずつ実感してきました。

同じグループの人達と過ごす中、お互いに自分の事を知りあう事が、4日間の充実につながります。同年代の社会人、学生と初対面からの共同生活は、非常に緊張し、また、とても面白いものでした。11人で話す中で、相手の考え方を知ること、自分のことを知ってもらうことを繰り返すうちに、お互いや周りのことを考えつつ、同じ目標に向かって行動する、またそれをまとめることが「リーダーシップ」の要素の一つなのだろうと感じました。それは、グループに1人のリーダーがいるのではなく、全員がリーダーシップを持って行動しようとしているように感じました。

また、同年代の他業種の方と、これ程深く話をすることはありませんので、この繋がりを大切にしたいと思います。

今回のRYLAセミナーで得たものを大切にしていこうと思います。

第33回RYLAセミナーを終えて

● 坂井 護

まず、このRYLAセミナーに来た理由が一家の大黒柱である母親の命令である。

次に私は人見知りで精神、肉体ともに非常に幼く敬語が苦手だ。

もうおわかりかと思われるが正直な所、私はこのセミナーに参加することにあまり気乗りがしていなかったのだ。実際、講義は自分にとっては難しく、班においては周りは年上ばかり、さらに外国人までいるという状況に放り込まれることとなる。しかし、いざ話してみると、みんなキャラや経歴は濃いがいい人達だということがわかった。珍しく自分のキャラがかすむ状態の4日間を終えて、感じたことは、いつもはちゃらんぼらんである彼らもいざ考えるという時には、真剣に自分なりの考えを具体的に述べることができる。その姿にメリハリというものを感じた気がするのだ。

やはり自分より、多くの経験を重ねている彼らにはこのセミナーの題であった「リーダーシップ」へ繋がる何かをみせられざるを得なかったのだ。あまり、話し込んだりすることはできなかったが、私は彼らに出会えてよかったと思う。私も経験を積み、彼らのようなメリハリがあり、コミュニケーション力のある人間になりたいものである。ただ、同窓会でまた私のキャラがかすんでしまうのを危惧していたりするのだが。まあ、チャレンジャー精神あふれるアメリカ人、タイラーの前ではどんなキャラもかすむ気がする。アメリカ人、そしてシーシェパードは思っていた程、怖くはなかった。そう思えたのも一つの収穫か。

と、いうことで私のセミナーの感想を終了とする。

第33回RYLAセミナー感想

● 工藤 貴明

1日目、緊張しながら余島につき、僕はB班のメンバーと行動を共にすることになった。

初めのうちはぎこちない挨拶と自己紹介で重い空気が漂っていたが、オープニングパーティで会話してからはすぐに皆と打ち解けることができた。その後のキャビンタイムではより一層盛り上がり、初対面にして一気に「仲間」になっ

た。

2日目には講義が二つ行われ、特に武田先生のお話はとても分かりやすく、思わず、「なるほど」と感心させられた。

午後に組まれたレクリエーションの時間はあいにくの天気。しかし、B班のメンバーは何をする時も楽しもうという気持ちが伝わってきて、皆が皆、今回のRYLA研修の意図を一番理解し、実践していると感じた。

3日目はバズセッション等を通して考えたテーマ「あなたは、隣人を大事にしているか」と真剣に向き合い、自分達が一つになって答えを出した時の喜びはひとしおだった。

4日目になり、とうとう別れの時が迫っているが、僕はこの経験を一生忘れないだろうと思う。RYLAセミナーに参加できて、とても良い友達を得ることができた。これからもこの繋がりを大事にしていきたい。

セミナーを終えて

● 辻田 明子

私は大学院で歴史を研究している。研究をするために留学を希望しており、その準備の過程でこのセミナーを知り、参加を申し込んだ。このセミナーで毎日を研究室で過ごしては出会うことのない友人たちに恵まれたことについて感謝している。

この合宿中、研究から少し離れてみて、自分がこれからどのような人間になりたいのか、どのように生きたいのか、普段考えたことのない問いについて、考えさせられた。ご自身の研究や人生で得たことを分けて下さった先生方、お忙しい仕事を休んで寝食を共にして下さったカウンセラーのお父さん、お母さん、ロータリアンの方々、困っている時にはすぐに助けてくれ、私の悩みや不安を私とは異なる目線でいとも簡単に解き、私の良いところを見つけ自身をくれた仲間たちのなかに「なりたい自分」の姿をいくつも見付けることができた。

ありがとうございました。

● Walkey Tyler

This RYLA seminar meant more to me than I can put into words. I heard about the seminar through Mr. Ise at the Tokushima Rotary Club when he invited me to come. I didn't quite understand why. My Japanese is far from fluent and I am only an English teacher. I didn't understand how I would be able to contribute to this seminar.

Upon arriving here I was immediately welcomed by all the amazing people here. I couldn't understand every word that was spoken, but I began to see the true meaning of the seminar and how I could benefit from it. While the theme of the seminar is leadership, that valuable information was not the only thing I gained from it. I was able to make true connections and friendships with not only the members in my group, but also many staff members, both YMCA and Rotary. This I feel is one of the greatest things humans can gain from life, relationships.

Living in a rather rural part of Japan, it is rare for me to feel at home, as I do in the United States. But the overwhelming amount of love and support I receive in Japan more than makes up for it. The RYLA seminar was no exception.

I had heard that each group would be presenting on a lecture topic to the entire group. I had no idea what to expect. I didn't know if I could truly participate in the discussion and had no idea I would actually be speaking during the presentation. I felt so honored to not only participate in both, but also speak about a topic that has had a fairly large impact on my life during my time here.

in Japan. (dolphin slaughter/sea shepherd)

I was very hesitant to speak about this topic because I knew it could become very heated. But my group and myself felt it fit well into the lecture on building a better society. Also, it was a chance to hear how someone out side of Japan can have a difficult point of view on a subject that affects many nations.

The response from out topic was amazing. Whether positive or negative, I felt I learned a wealth of information and learned about leadership from some people I gained true respect for.

There were many, but I will only have two. Imai sensei is easily one of the most amazing people I have ever met. He has a true understanding and empathy for the many different views and cultures that make up

our world. The last person was our 母さん, Mrs Yokiko. She was very concerned from the beginning that I was having a hard time understanding the lectures and immediately took me under her wing. Without her help my experience here would have had much less meaning.

I would just like to end by saying thank you to all the members of the Rotary Club and especially the ones I was privileged enough to meet here. I am truly sorry that this is in English, but I could have never expressed myself properly otherwise. Even in English, these words do no justice to amazing experience I had here the last four days, and for that I say thank you from the bottom of my heart.



カウンセラーの皆さん



**第33回RYLAセミナーに
カウンセラーとして参加して**

◆カウンセラー 坂東 隆弘

導けたか？引き出せたか？自問自答しながら、今井鎮雄先生のカリキュラム最後の講義を聞く。6男5女の子供たちは目を輝かせながら、熱心に誰一人居眠りもすることなし聴講している。昨晩はフォーラムの反省など、朝4時まで語り合っていた受講生達、3泊4日ではあったが、一回りも二回りも大きく成長してくれたと思う。省みて、自分はカウンセラーとして十分であったのだろうか？毎日毎日、彼らのことを考え、色々と気付かせてくれた坂東組と名付けてくれた子供たちの感謝の拍手に、つい目頭が熱くなった。

感謝をするのはどうも私のようなものである。

2011年3月27日 余島にて

RYLAセミナーを終えて

◆カウンセラー 荻田 智子

第33回青少年指導者育成セミナーが終わった。今年度は「リーダーシップ」をテーマに終始「人間はいかに生きるべきか」について討議が行われた。まず開講式では「直きを反にすれば益なり。諒を友とすべし。多聞を友とすべし」そして人間の善意がいかに大事か。人としてロータリーとしての役割とは何かについて話された。そしてセミナーにおける注意事項を本質を踏まえ、わかりやすく受講生に伝えられました。セミナーの全過程がメインと思われるが講義1と講義2、最終日の講義では「すべての人間が幸福になるために」時代の変化に対応した必要な指導力とは何か、常に何が正しいかを今ある状況の中で考え、私たちが果たせる役割を将来を見据えながら計画を立てること、バランス良く自分と他者を愛すること。思い出すまま書いていけば何もかもが、心に響き新たな発見

と驚きと感動に包まれる。

銀波浦から余島に上がった時の期待と不安は充実感と確かな未来を見据えた力強い受講生と
なって再び余島を離れることになった。

カウンセラーをさせていただいた充実感と喜びの3泊4日でした。ありがとうございました。

RYLAセミナー

● 浦辺 延輝

最高!!!

皆と別れたくない。このままもっといたい。来る前は参加したくない気持ちもあったが、今はかけがえのない仲間ができた。できた?皆はどう思って下さるかわからないが、少なくとも僕はそう思っています。出来れば一生お付き合いしていきたいです。よろしくお願いします。様々な講義、色々な体験をさせて頂いたが、正直それらがかすむ位、仲間が出来たことが嬉しかった。仲間が出来た。僕にとってのRYLAセミナーは先々で思い返してもその一言に尽きると思います。

それと同時にありがとうございました。

ロータリークラブの皆様、スタッフ様、受講生の皆様、全ての皆様のおかげでこのRYLAセミナーに参加できたことを心より感謝しております。

あとは自己発見。今まで考えもみなかった自分の可能性を発見出来たような気がする。

帰ってからの生活も楽しみだ。

第33回RYLAについて

● 中川 雄一

感謝。

東日本大震災の最中にも関わらず、未来のことを思いRYLAを開催していただき感謝致します。

皆様の気持ちに応えられるように、人生を歩んでいきます。

RYLAを受講される皆様へ

RYLAで得たもの

「60億人分の13名の仲間」

「これからの目標」

- ・人間性を一番大事にする会社・社会を創る
- ・リーダーを育てるようなリーダーになる

このようなお金では買えないコトが得られます。とても素晴らしいRYLAです。

皆様とRYLAで会える日を楽しみにしています。

RYLAセミナーに参加して

● 畑山 奈未

普段生活をしている中で、真剣に議論する機会というものの中々ないと思います。はっきりした答えがない問題をそれでも良い方向へ向かっていくためにはどうしたらいいのかと様々な意見を聴き、考えることができたこの4日間で、ほんの少しでも自分が成長できたように感じます。また私はセミナー中に体調を崩してしまったのですが、班のみんなやお父さん、お母さんに助けてもらい、無事セミナーを終えることが出来ました。会ってたった数日なのに本当の家族のように心配してくれたことが、少し申し訳なくもあり、でもそれ以上に嬉しく感じました。3泊4日という短い期間でしたが、先生方の講義を聴き、班のみんなと議論したことは、これからの私の人生でとても大事なものになると思います。出会えたみんなとこの機会を与えて下さったロータリーの皆様に大きな感謝を!

RYLAセミナーを受講して

● 岡田 加奈

今回、このセミナーを受講するに對し、余島へ来るまでも時間等を調整する事、受講への意思決定の道なりに私の中で気付きを得ることができました。

そして、余島に着き、新しい友との出会い、お世話になるカウンセラーとの出会い、お世話になるカウンセラーとの出会い、ロータリーク

ラブの皆様との出会い、講師の先生との出会い、講義やバズセッションでの討論、フォーラムでの討論、仲間とカウンセラーの方と寝食を共にする事でも様々な気付きがありました。特に仲間と共にする時間は私にとっては貴重な気付きを得る体験となりました。

また、寒い中でも自然の中での生活は忙しい毎日にゆとりを与えてくれる時間となりました。

この気付きからより深い人生が送れるように今後、精進してまいりたいと決意を新たにすることができました。

ロータリークラブの皆様、C班の仲間、カウンセラー様に深く心より感謝致します。

RYLA

● 佐藤 佑樹

3月24日～27日まで、本当に濃い時間になった。講義もとても面白かったし、濃かったが、それ以上にみんなと会えて話ができ過ごせたのが一番の収穫だと思う。今までにこんなに深く話しをする事がなかったし、深く相手の話を聞くこともしていなかったと思う。今回のセミナーで、本当の意味での、人の話を聞くと言うことがどういうものか、少しだけ分かった気がする。言葉で書けば、なんとでもきれいな言葉で書けるが、そういったものではなく、心の中にあるもので表現するようものが生まれたと思う。頭で理解するというのと、心で理解するというのを今までずっと同じように見ていたのだと感じた。

なんとなく分かっててもこれをやっていくのは難しいと感じた。C班の“結”を心にとめて、忘れて行動していた時は、この4日間を思い出するために使おうと思う。

この4日間は言葉じゃない、文ではかけないものがいっぱいだった。

RYLAセミナーに参加して

● 井内 亜紀

RYLAセミナーに参加して、普段生活する中で話す事のない職業の方や年齢の方と接することができた。私は人見知りというタイプじゃないけど、初対面の方と話をしたり、一緒に何かをやるという事が「すごく面倒だあ」って思っていた。

けど、RYLAセミナーでC班の人達と話をすることでその気持ちが少しずつ変わっていくのもわかったし、もっともっとたくさんの人と話をする事が「自分の成長にも繋がるんだ!!」と思えることができた。

この4日間で自分が感じたことを仕事や友達・生活に活かしたい。あまり難しい話とかはチンプンカンプンになったけど、素敵なお父さん・お母さん・C班のみんなに出会えて良かったです。

RYLAセミナーに参加して

● 岡部 亜希

今回セミナーに参加して、学びの多い4日間になった。人との出会いがあり、親睦を深め、様々な話を聴き考える、普通の生活とはまた違う刺激や学びが数多くあった。また、自分自身、考えたり、悩んだり、笑ったりと様々な感情と向き合う事ができたと感じる。今回のセミナーでは、「リーダーシップ」がテーマであったが、講義の内容はもちろん学びの多いものであったが、同じグループ（家族）から学ぶことがとても多くあった。人を思いやる優しさ、相手の心を受け入れる心の広さ、自分の意見をしっかり表現できる強さ、みんな平等に接してくれる温かさ、言い表せないくらいみんなから、たくさんの愛をもらった。

「ありがとう」

また今回のセミナーに来て、今自分がすべきことが、はっきりしたように感じる。松ぼっくりの中に入れた決意を、夢を現実に行けるよう

に、日々努力していきたいと強く思う。

RYLAセミナーを終えて

● 谷村 昌俊

恥ずかしい話RYLAセミナーに参加するまで、ロータリーとライオンズクラブの違い、もっと言うと二つの組織があることすら知らなかった。普段は高校教員という仕事に就いていながら、リーダーという自覚がまったくと言っていいほど欠落していた。

しかし、開講セミナーを聴いて少しずつRYLAの存在、リーダーというものが想像上の話ではないことがわかってきた。

2日目に入ると、昼食をはさんで2人の先生の講演、夜はキャビンタイムにバズセッションも行われ、私の眠っていた脳も徐々に動き始めてきた。午前中の新野先生の講演では今回の東日本大震災を受けて、被災者の支援・街の復興の後に新しい国・世界を築きあげないといけないという話をされた。ここでいう新しい～というのは、日本という視点だと、地方自治、国民主権という国づくり、世界という視点だと、異なる文化や伝統を認め合う組織作りということだ。夜のバズセッションでは、隣の人を大切にしているのか、どういう社会を造りたいのかと

いう議題であった。どれもこれも私の思考世界を超えるまさに宇宙のような話だと思った。でも、よく聴いているうちに、決して飛躍した話ではなく、ごくごく当たり前のことだとわかってきた。

そしてC班のメンバーに巡り会えたこと。奇跡的なことだけど縁があったんだろうなあ。人との出会い、新しい考え方の出会い、本当に私にとって貴重な体験になったと思う。頭の中もすっきり整理されてきたし、非常に感謝の気持ちで一杯である。

この第33回RYLAセミナーで出会った人、関わってくれた方すべてにこの言葉を贈りたい。

「有難うございます」

やはり日本は素晴らしい国だな（笑）

第33回RYLAセミナー

● 石田 真崇

今回のセミナーに参加させていただき、心から感謝申し上げます。今回、私は自分自身の心の中身についての発見成長がありました。参加する前は、正直、プレッシャーで、何とか何か持って帰らないと、しっかり勉強しないと考えるあまり、セミナーには前向きになれていませんでした。しかし、この余島へ



渡った時からこうしないといけない、こうすべきだという指導や指示はまったくなく、また、結果を出すということや、良くすべきというプレッシャーがなかったのです。それはRYLA委員会の方々、特に今回私達の班のカウンセラーの方々が、その、前にすすめない足枷をとろうという大きな心で、私達に接して下さったからです。初日から父役の方は、兄貴として心を開いてくださったし、母役の方は私達の行動を、話を一歩ひいてちゃんと聞いてくださり、これが良いタイミングで、良いことを言ってくださって、おかんかな？と思ってしまいました。一番、私が成長したと実感したことは班です。私は36歳、班の年少は20歳、16歳も違う仲間がいたこと、まだ男女一緒、年もまちまち、でも、仕事でなく、また、地域の上下関係もない仲間（班）がいたことです。色々なことを話しました。あえて、一つ印象に残ったことをあげると、バズセッション、フォーラムです。具体的にしますと、我々のチームが目指した事があります。今回この話し合いで、心に飾らず置けるもの、帰って一歩踏み出すきっかけになるよう、“フツ”と思わせる思い出の言葉を生み出そうと決めたことです。評価や見た目は気にせず、またかっこつけず、シンプルによりシンプルに…。私達はつながりを笑顔でつなげ、相手、家族、友人、同僚、上司、部下、近所の方に一歩近づくきっかけに「心を結ぶ」心の中で心を結んでみようと「結（ゆい）」という言葉をつくりました。みんながです。20歳の仲間もです。我班はこの言葉を心にお土産として帰ります。必ず役に立ちます。心を温かく満たされました。あまりうまくまとまりませんでしたが、今回セミナーでこれから自分の未来が楽しみになり本当によかったです。ありがとうございました。

RYLAセミナーを終えて

● 泰泉寺 雄三

余島に渡り4日間、ありがたい講義、同じグループとなった仲間との語らいは大変良い刺激となりました。就職して後、ほぼ毎日同じ場所、同じ仲間、同僚と会う毎日でした。私事ですが2月終わりに職場での配置変えにより、外部の方とお話させていただく機会も増えまして戸惑っています。その中で今回のRYLAセミナーでは、他業種、他県の人とじっくり語り合うことは中々できることではありませんし、良い経験です。

私自身人見知り激しく、カウンセラーの親父さんにはすぐに見抜かれてしまいました。しかし3泊4日という時間、アルコール類の助けもあり、私としては頑張れたのではないかと思います。当然良き仲間恵まれたということが大きいのですが。寝食を共にしたことは凄く大きいことでした。

バズセッションや講義は始めにも書きましたが非常に勉強になったものでした。しかし私の考えと違うということは当然あります。仲間ともですが、講師の先生とも違う意見ありました。ああでも言えない。引っ込み思案な私の悪い癖です。それが良い方向に向かうこともあるのでしょうが、しかし、自らの信念が口から出せず人を引っ張ることなど出来ないのでしょうか。仲間とは多少の衝突ができたかな？と思っています。主にアルコールエンジン駆動でした。講義の時にも一杯ひっかけておくべきでしたが、今後の目標はアルコールを一切使わないエコな自分の意見を発信することです。案外その難しさに困ってしまいました。

先生の方々、カウンセラーの親父、お袋さん、またYMCAのスタッフの方、最後に一緒に過ごした仲間にお礼を言いたいと思います。

少しずつ、少しずつ、リーダーというものになれたらと思います。

RYLAセミナー

● 毛谷 友紀

幼い頃から、宇宙にはこの地球以外に何者かは特定できないが、人間のような生き物がどこかの星で生息していると考えている。私は死ぬまでに若しくは死んだ後にも彼らと出会い友達になりたい。彼らはきっと地球を揶揄し嘲笑っているのでは？と日々感じている。政治、経済、環境等、その他においても多くの問題で充満している地球人にアドバイス、或いは叱責する日が来るのでは…？

こんな非現実な話を誰が面と向かって話を聞いてくれるのかと疑問を抱いていたが、このセミナーで出会ったこの仲間になら、羞恥心を抱くことなく話ができるなと感じた。

前文の例がわかりにくいとは思いますが、ここで仲間は、私の事をすごく大事に想ってくれている。私の軽率な行動や発言、全てにおいて助言をくれたり、優しい手を差し伸べてくれた。

カウンセラーであるお父さんとお母さんは二人ともベテランでお話、一つ一つが身にしみて人生勉強となった。

今までは夢を語ることに抵抗があったがこの仲間たちには、自身を持って自分のやりたいこと、思想を伝えることができる。たった3泊4日だったけれど、このロータリーのキャンプで得たもの、感じたものは数知れない。

このような素晴らしい青少年キャンプを小豆島の余島を舞台に開催されていることは地元民としてはとても喜ばしい。しかし、この活動が33回目だと云うことにショックを感じた。地元民である私がこの活動を知ったのはほんの数ヶ月前で、どんな活動かも想像できず、現に参加するとこの称賛ぶり。笑。

ロータリアンはもっともっとこの素晴らしさを伝えていくべきである。しかしその役目は私たちライラリアンであることも感じている。



参加者の皆さん



◆カウンセラー 米山 徹太

今回初めてRYLAセミナーに参加致しました。それもカウンセラーという立場です。余島へ向かう道中は、正直申し上げてネガティブでしたが、テーマ「リーダーシップ」という事を知り、現在の弊社の状況、東日本大震災等を鑑み、絶対に会得し、持ち帰るものがあると思ひ、取り組む決意をしました。

実際にプログラムに入ると、受講生、女性カウンセラー（お母さん）と班を組み、全ての行事に取り組みます。素晴らしいシステムです。1日目から「ハマリ」ました。20代～30代の男女受講生でしたが、皆、個性豊かでカウンセラーは私なのか、彼らなのか判らない状況になりました。そこで頼りになるのが吉岡お母さんです。お母さん、本当にお世話になりました。また、講義は全て素晴らしく、当初のネガティブな心情がポジティブに変わったことが実感できました。受講生の私も初日と最終日は顔つきが

変わったと思います。来てよかった。絶対そう思っているはずです。

最終日の記念撮影写真の顔を見ると判ります。

終わりになりますが、D班の受講生をはじめとする全ての受講生、吉岡お母さんをはじめとする全てのカウンセラーの皆様、今井先生、深川先生をはじめとする関係各ロータリアンの皆様、本当にありがとうございました。

私、本当にこのセミナーに「ハマリ」ました。

第33回RYLAセミナーを終えて

◆カウンセラー 吉岡 喜久子

経済力が大きく低下し、政治が混迷する中で起こった東北・関東大震災。未曾有を被害が出た被災地だけでなく日本全体が悲しみに沈み、大変な負の変化を強いられる不安な中で第33回RYLAセミナーが開催されました。暗いニュースばかりを耳にし、気持ちが沈みがちな

折りに10名の若者と余島の自然の中で過ごした4日間は心苦しさを覚えながらも充実した幸せな日々でした。6度目のカウンセラーというのに今年も不安と緊張の中で足を踏み入れた余島。私と同様に固い表情のD班の人々も時間とともに和み、交流が深まっていきました。新野先生からはかつての経済大国としての姿を失い世界の中で存在感すら危ぶまれる日本の現状とこの危機を乗り越える鍵となるLEADERSHIPの在り方を学びました。武田先生の講義ではスポーツのコーチングスタイルを通してLEADERは何をなすべきかをしっかり考える機会を得ました。そして今井先生からはお互いを知り、思いやりを持って行動し、一人一人がリーダーであることを忘れず意識と責任を高く持つことを教えていただきました。今回のRYLAのテーマ“リーダーシップ”ほど現在の日本にふさわしく、真剣に考えなければならない課題はないかと思われまます。バズセッションで10名の仲間一人一人が深く話し合い学び合った姿はフォーラムの発表に表れており、胸を熱くしました。暗闇の中で行われたキャンドルサービスの中で見た炎の輪の美しさに感動し、つなぎ合った隣の人の手の温もりに和の大切さを実感しました。今厳しい現実立たされている我々ですが日本が世界のリーディングカントリーとして再び存在しえるか否かは21世紀を支える若者の肩にかかっています。この大変な時に次世代を担う10名の素晴らしい若者に触れあえたことは私にとって貴重なものでした。ライラセミナーを通して学んだことをぜひ将来に生かしてください。そして輝きのある美しい日本を再興する指導者として活躍してください。あなたの隣にいる人としっかり手をつないで、、、。それだからこそこのような有事の中で開催されたRYLAの意義があるのです。近い将来さらに大きく成長されたD班の皆様と再会できる日を楽しみにしています。本当にありがとうございました。

RYLAを終えて

● 松本 雄宗

私は、このセミナーに全く来るつもりはありませんでした。なぜなら友達が一人もいない場所に行きたくなかったのと、父に無理矢理行けと言われたからです。しかし来てみると、ロータリーができた話を聞いたことにより、イメージがあちよっと変わっていきました。なぜなら友達をつくるということが、ロータリーの最初の目的だったからです。一番心に残ったのは、KGの武田先生の話でした。私は高校、大学と7年間アメリカンフットボールをしていたので、とても楽しく、理解しやすい内容でした。アメフトは特にリーダーシップが1人1人に求められるスポーツであることを改めて感じました。講義の後、武田先生に挨拶に行くと、なぜ関学に来んかってん！！と言われました。どう考えても無理だと思います。あの先生は素晴らしいです。武田先生の下でプレイしたいと本当に思ったRYLAでした。

第33回RYLAに参加して

● 長田 圭史

社会人となり、年月を重ね、自分の価値観はほぼ固定されたと考えていました。日常の中、新しい友人が増える事もほとんどありませんし、会社を含め、毎日顔を合わす人も変わり映えしません。

今回、第33回RYLAセミナーというコミュニティに参加させて頂き、新しく素晴らしい友人達との真剣な語り合い、または雑談の中にも、たくさんの刺激と人生のヒントを受けました。それこそ、価値観が徐々に変わっていくのが実感できる程でした。これは日常の中では、到底経験できない大変貴重なことだと思います。

明日から日常に戻り、今回経験したことを形としてすぐに活かせるのかどうかはわかりませんが、自分の人生の糧となったことは間違いありません。

最後にこのような素晴らしいRYLAセミナーを満喫させて頂いた、D班の仲間、カウンセラーのお二人方、そしてキッカケを下さった西宮恵美寿ロータリークラブの関係者の皆様に心から深く感謝致します。ありがとうございました。

RYLAセミナーを終えて

● 丹生 兼嗣

まずもってこの素晴らしいRYLAセミナーを開催し、参加させて頂きましたロータリアンの方々にお礼申し上げます。

私はRYLA研修の存在を2年前より知っており、ライラリアン諸先輩方より、RYLAの素晴らしさ、楽しさを聞いていました。実際このRYLA研修に参加することになり、不安は一切なく、ただ胸の高鳴りが抑えきれませんでした。

まったく面識のない男女10人で1つのテーマに沿って話し合い、様々な手法をこらしてまとめ発表する。発表した後は、今までに味わったことのない様な達成感を味わうことが出来ました。また、リーダーシップをテーマとする素晴らしい講義、今後経営活動を行っていく私にとって大変心に残る講義でした。

最後のこの4日間仲良くして頂いたD班のメンバー及びカウンセラーの米山さん、吉岡

さん本当にありがとうございました。このセミナーに参加できた事、一生忘れることはないと思います。

● 和田 英之

RYLAセミナーに参加させて頂き、初めはとても不安がありました。初めて会う人達と3泊4日を共に生活していく中で、心を開き友達を作ることができるのだろうかと思いましたが、大自然の余島で新しい仲間と出会い、時間を共有することで時間が過ぎるのがとても速く感じていました。

バズセッションでは、テーマを仲間と一緒に考え、語り合うことで有意義なものとなりました。

また、今回のRYLAのテーマであるリーダーシップを考えていく中で講師の方のお話を聴かせて頂き、リーダーの条件やアプローチ手法、取り組みなど様々なことを学ぶことができました。この素晴らしいRYLAセミナーの体験を島から離れても忘れることなく実践して行きたいと思います。

今回RYLAセミナーを終えて、仲間と過ごす時間の楽しさや大切さを実感することができました。



RYLAに参加して

● 塔尾 麻以

RYLAセミナーに参加することが決まって、参加するまで正直どんなことをするのか、また、どんな人たちと過ごすのか、不安でいっぱいでした。幸い私は、多くのロータリアンの方と来る前に同行し、色々聞かせてもらって良かったです。

1番不安だったのは、3泊4日を一緒に過ごす班のメンバーでしたが、実際メンバーが決まって1人1人と話してみると、みんな考え方もしっかりしていて、面白くて、年長者の私が頼ってしまうほどでした。カウンセラーのお父さん、お母さんともとても親身になって下さる方でした。

このプログラムでとても有意義だったのはバズセッションとフォーラムで、みんなそれぞれ意見を出し合って発表したことですごく達成感を味わうことができたと思います。他の班の発表を見ていると、それぞれにいろんな考え、工夫があり、同じテーマでもこんなに違った形になるのかと驚きました。

もう1つ、講義の中で、私は武田先生の話をととても興味深く聞かせて頂いたのが印象に残っています。今回のリーダーシップというテーマはもちろん、人間関係をよりスムーズにしていける方法を分かりやすく話されたので、今後の生活にととても参考になりました。

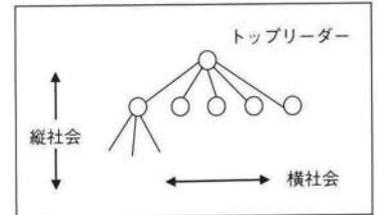
この小豆島のセミナーの中で、本当にじっくり考える時間と、仲間と話す機会を与えて頂きました。何より、それを支えて下さったカウンセラーのお母さん、お父さん、そして優しく接して下さったロータリアンの皆さん、本当にありがとうございました。

今後、この経験を活かし、社会で役立つリーダーになれるよう頑張ります。

● 土屋 由衣

私はリーダーシップをテーマにした今回のRYLAセミナーに参加するなかで「リーダー」の本質がリーダーシップを司ると共にリーダーシップを広めることにあるということ学びました。

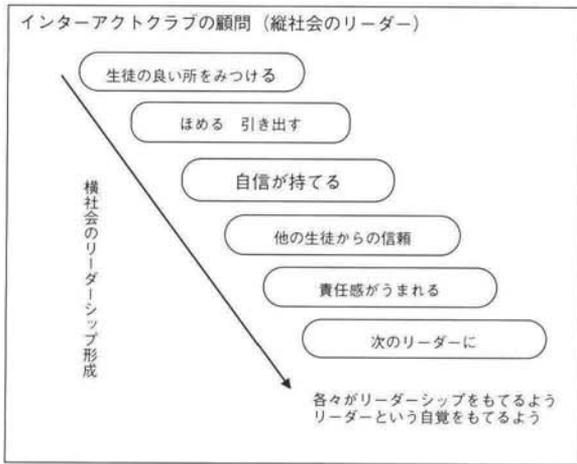
肩書だけのリーダーでは社会では務まりません。サブテーマに「時代の変化と必要な指



導力」とあるように、社会ではいわゆるトップとしてのリーダーが持つべく縦社会のリーダーシップと一人ひとりが資質として持つべく横社会のリーダーシップがあると考えました。そしてその2つのリーダーシップをつなぐ必要があるのだと思います。つまり縦社会のリーダーがリーダーシップを確立し、次につながる一人一人が各々横社会のリーダーを務める、枝分かれに広がっていくという仕組みです。これをうまく築いていくことができれば「リーダーシップ」は繋がっていくものとなるのだと思います。そしてこの途絶えさせることなく、一人一人がリーダーシップを身につけられるように働きかけることが「リーダーの本質」であると考えます。

私はインターアクトクラブの顧問をしています。部活動指導の中で私は、生徒一人一人の良い点を見つけ、引き出すことを意識してきました。今回様々な講義を受けるなかで、今まで意識していたことが具現化され、それがリーダーシップ形成の一つの役割を担っていたように思いました。また、自分の中でより明確に理想とするリーダーそしてリーダーシップをあげることができたと思います。それが下図です。これは今回学びとったほんの一例だと思っています。けれども今後の指導や関わりの中でとても大切なことを得たと思います。

今回得たことを忘れず活かし、私自身がリー



ダーという自覚を持ち続け、これからも常に自分なりに「リーダーシップとは」という問いかけをしていきたいと思っています。

ありがとうございました。

● 今村 千浩

3泊4日間のRYLAセミナーはとても勉強になりました。講義やバズセッション、フォーラム、キャビンタイムなど色々な人の考えや思いを聞いて自分には出てこなかったこともたくさんあり、知らなかったこともありました。職種が様々だったので、このセミナーに参加して多くの話を聞くことができ、貴重な時間でした。また、人との出会いを大切にしたいという気持ちが以前よりも大きくなりました。初めは誰も知っている人もいなく、話そうと思ってもなかなか自分から話しかけることも出来ませんでした。けれど、相手から話しかけてくれてとても嬉しかったです。班の人も気楽に話しかけてくれたので、私自身も気楽に話すことができました。この班に出会えたことにとても感謝したいです。もちろん、きくちゃんママと米山お父さんが、私たちD班のカウンセラーでとても良かったです。私はこのRYLAセミナーに参加することができて良かったと思っています。ここで学んだことを大学での生活やボランティア活動に活かしていきたいです。

RYLAで立ち止まって向き合う4日間

● 大石 寛子

私は国際理解に興味があり、高校生の時もインターアクトクラブに参加し、外国から日本を訪れた高校生に地域を紹介して交流したり、アフリカの国々に送るために校内で靴を集めるなどのボランティア活動をしていた。現在では、高校教員として働く中で、インターアクトクラブの顧問をさせていただいており、生徒と一緒に地域のイベント等においてボランティア活動や国際理解教育を行っている。そのため、今回のRYLAでリーダーシップについて学ばせていただけることは素晴らしい機会となった。本校の先輩教員も毎年1名ずつ参加しているため、先輩方にどのようなものだったかを聞いてみたところ「小豆島という豊かな自然の中、日頃の慌ただしい生活から離れて、立ち止まって物事についてじっくりと考え、語り合うことができ、人生観や考え方が変わる」とおっしゃっていました。4日間で、時代の変化の本質に迫るハイレベルな講義を受け、フォーラムテーマについて友と語り合う中で、立ち止まって自分自身とじっくり向き合い、考えを深めることの大切さを実感しました。忙しい毎日の中で、本当に大切なものが何かを忘れがちであることに気付けたこと、良きリーダーを目指して、社会の諸問題についての様々な意見や価値観を知り、自らの建設的な意見を持ちたいと強く感じたことは私自身を大きく成長させてくれたと思っています。同じ班で寝食を共にした年齢も性別も職業も異なる友人達、いつの温かく本当の両親のように見守って下さった喜久ちゃんママとよねパパに心から感謝するとともに、これからも連絡を取り合ったり同窓会を開いて会えることを楽しみにしています。

● 田口 裕実子

私はこの3日間のRYLAセミナーを受講するまで、身の周りの人々にとって良いことをする

自信がありませんでした。なぜかといいますと、その場その場で相手を楽しませて笑顔にするだけで、相手が今の考え方、振る舞い方を続けられようかについて考えず、何もしないことは、相手に何ももたらさないのと同じことだと思っていたからです。且つ、例えば友人関係のように親しい仲であっても、相手の考えていることが手に取るように分かる訳ではないので、相手の行く先について直接的か間接的に関わらず助言をすることは、例え相手が年下であっても出過ぎた行為だと思っていました。相手の人生は、結局は相手本人が動かすしかない、というのは事実でもあり、私が他人に対して出来ることは余りにも微々たるもので、ないに等しいのだと思っていました。しかし、RYLAセミナーで同じ班の友人達とのバズセッションを通して、自分が「他人に何が出来るか」を考える時に、周りの人々の置かれた状況を知ろうとする前に、ひたすら自分の内側にこもって「正しい」行動をもやもやと考えていたのだと知りました。それと同時に、私は周囲の人々との日常的なちょっとした会話から、相手の今の気分、体調、日常生活のよくある場面に対して、他のたいいていの人にも抱く感想等から、相手の状態を知ることを軽視していたのだと知りました。今ある状況からは自分がどうするのが「正しい」ことなのかあまり深く考えられない、というのは周りの環境に対して甘えているだけなのだと分かりました。これは今回のRYLAセミナーで得られた「氷山の一角」に過ぎませんが、この

ことが知れただけでも参加できて良かったです。東日本大震災の直後の時期であるにも関わらず、第33回RYLAセミナーの続行を決めて下さったロータリアンの皆様、この素晴らしい企画を立ち上げ、プログラムを考案し、実現のために奔走して下さいました。この場を借りて深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

RYLAに参加して

● 松岡 洋一

会社から「RYLAに参加してみてもどうか？」と勧められた時は、正直に言うと3泊4日でさらに土日が潰れることもあって少し、行きたくないと考えていた。しかしながら、セミナーが終了した今、そのことを振り返ってみるとそれは、心配する必要がなかったと実感する。RYLAに参加することで、ロータリークラブやリーダーシップのことについて学ぶことが出来た。しかしながら、それよりももっと貴重な友人との出会いがあった。RYLAに参加しなければ、異業種の同年代の男女と生活を共にできる経験はできなかったと感じる。D班の中の友人達と、夜遅くまでたわいもない話から真剣な話までできたことは、今後心の中の宝物になるはずである。この感想文を書き終わると、共に過ごした友達とも別れる時がくる。鳥を出ると、涙を流さずに「さよなら」とD班の皆に言いたい。「ありがとう、そしてさよなら、D班のみんな」

思い出



4日間お世話になった講義室

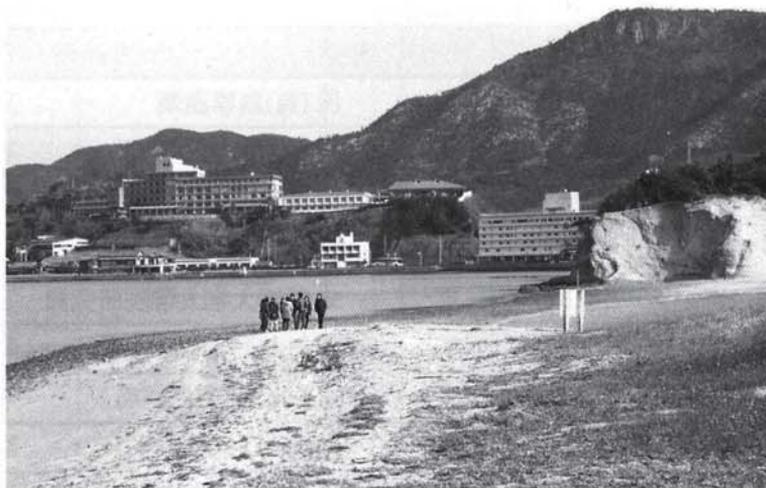


穏やかな余島の海



海岸から見た食堂

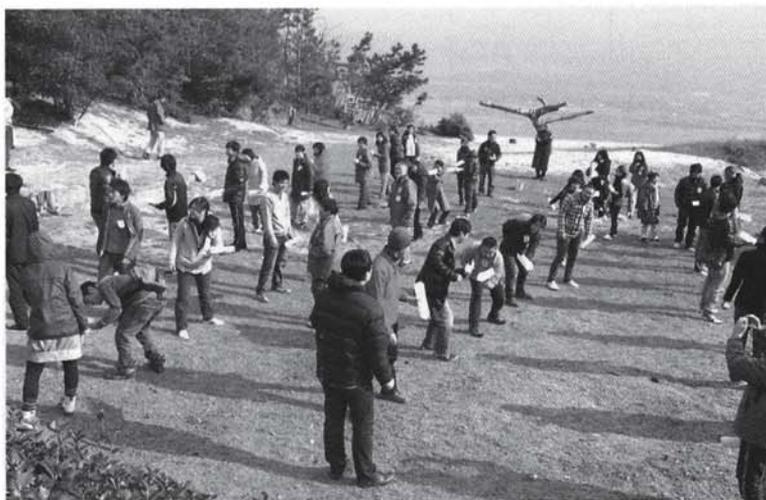
思い出



歩いて小豆島へ…エンジェルロード



松ぼっくりはこのあたりで調達



班の協力が不可欠な真剣勝負

2670地区

NO.	氏名	推薦RC	性別	班	勤務先・在籍校
1	森 一雄	美馬	男	A	(有)森事務所
2	田中 良明	今治	男		日本大学法学部
3	中村 早甫	高知東	女		特定医療法人久会久病院
4	Walkey Tyler	鴨島	男	B	La Pacifica 英会話スクール
5	久松 定智	松山	男		愛媛大学大学院研究員
6	工藤 貴明	高松G	男		丸八商工(株)
7	越智 香織	今治	女		重松建設(株)
8	秦泉寺 雄三	高知南	男	C	(株)垣内
9	中川 雄一	大洲	男		(有)中川食品
10	谷村 昌俊	高松	男		高松中央高等学校
11	毛谷 友紀	小豆島	女		関西学院大学法学部
12	松岡 洋一	高知西	男	D	ニッポン高度紙工業(株) 管理部
13	丹生 兼嗣	小豆島	男		(株)トミウン
14	大石 寛子	今治南	女		今治工業高等学校

● カウンセラー

A班 平井 英津子

B班 森 廣一

C班 荻田 智子

D班 米山 徹太



2680地区

NO.	氏名	推薦RC	性別	班	勤務先・在籍校
1	植松 義文	津名	男	A	特別養護老人ホーム ゆうらぎ・介護職員
2	目木基喜	赤穂	男		特別養護老人ホーム瀬戸内ホーム
3	玉越 亜由美	三田	女		公益財団法人 兵庫県青少年本部
4	池田 依利子	神戸	女		(株)神戸ポートピアホテル
5	薦野 彩	篠山	女		篠山市商工会
6	荻野 紗奈	柏原	女		インテリアコーディネーター・(株)吉住工務店
7	徳梅 雅子	あわじ中央	女		南あわじ市教育委員会
8	坂井 護	高砂	男	B	大阪芸術大学放送部
9	熊野 晴毅	篠山	男		篠山市商工会
10	足立 光子	柏原	女		(株)オカバヤシ
11	中村 文香	神戸西	女		社会福祉法人 光朔会オリンピック兵庫
12	清瀬 みのり	津名	女		関西看護医療大学
13	藤井 麻里奈	あわじ中央	女		特別養護老人ホーム 緑風館
14	辻田 明子	姫路西	女		京都大学大学院 文学研究科
15	浦辺 延輝	明石西	男	C	(有)メディカルネット 介護支援専門員
16	石田 真崇	相生	男		石原新聞舗相生 ステーションホテル事業部
17	佐藤 佑樹	神戸西	男		神戸医療福祉専門学校三田校
18	岡部 亜希	津名	女		関西看護医療大学
19	岡田 加奈	加古川	女		自営小売業
20	井内 亜紀	洲本	女		特別養護老人ホーム 緑風館
21	畑山 奈未	神戸須磨	女		神戸女子大学
22	長田 圭史	西宮恵美寿	男	D	医療法人財団樹徳会 上ヶ原病院
23	松本 雄宗	伊丹	男		大阪学院大学
24	和田 英之	神戸北	男		社会福祉法人 光朔会利光アザラジ
25	今村 千浩	三田南	女		
26	田口 裕美子	相生	女		神戸女学院大学文学部 総合文化学科
27	土屋 由衣	神戸垂水	女		神戸国際大学付属 高等学校養護教諭
28	塔尾 麻以	神崎	女		塔尾税理士事務所

● カウンセラー

A班 井本 学明

B班 大江 与喜子

C班 坂東 隆弘

D班 吉岡 喜久子

第33回RYLAセミナー運営委員会

ガバナー 亀井 義弘 (第2670地区 松山RC)
柴田 整宏 (第2680地区 西宮夙川RC)

顧問 三宅 洋三 (第2670地区PG 高松RC)
今井 鎮雄 (元RI理事・第2680地区PG 神戸西RC)
深川 純一 (第2680地区PG 伊丹RC)

アドバイザー 飯 忠悟 (第2670地区PG 今治RC)
橋本 一豊 (第2680地区PG 神戸須磨RC)

■新世代活動委員会 (第2670地区)

委員長 河内 広志 (松山RC)

■新世代委員会 (第2680地区)

委員長 安行 英文 (三田RC)

副委員長 常次 佳丈 (神崎RC)

■RYLA委員会

(第2670地区)

委員長 深見 邦芳 (松山RC)

委員 森 廣一 (美馬RC) カウンセラー兼任

伊勢 英利 (鴨島RC)

吉原 良一 (坂出東RC)

森田 康子 (高知東RC)

別役 重具 (高知東RC)

篠原 成行 (北条RC)

猪野 恵一郎 (松山南RC)

三原 英人 (松山RC)

阿部 弘治 (松山南RC)

萩田 智子 (美馬RC) カウンセラー兼任

カウンセラー 米山 徹太 (松山RC)

平井 英津子 (高松北RCロータリアン夫人)

(第2680地区)

委員長 徳梅 明彦 (あわじ中央RC)

委員 秋山 紀史 (神崎RC)

井本 学明 (赤穂RC) カウンセラー兼任

井奥 寛泰 (姫路南RC)

黒田 建一 (西宮夙川RC)

三木 明 (姫路RC)

大江 与喜子 (西宮恵美寿RC) カウンセラー兼任

白井 良夫 (伊丹RC)

滝澤 功治 (神戸須磨RC)

安平 和彦 (姫路RC)

カウンセラー 坂東 隆弘 (柏原RC)

吉岡 喜久子 (伊丹RCロータリアン夫人)

■RYLA学友会 (第2680地区)

事務局長 山口 徹 (元神戸YMCA総主事)



2010-2011年度

国際ロータリー第2670地区ガバナー事務所

〒790-0911

松山市桑原5-8-50

TEL 089-993-6674 FAX 089-993-6675

国際ロータリー第2680地区ガバナー事務所

〒650-0046

神戸市中央区港島中町6-10-1

神戸ポートピアホテル 722号室

TEL 078-304-2680 FAX 078-304-2681